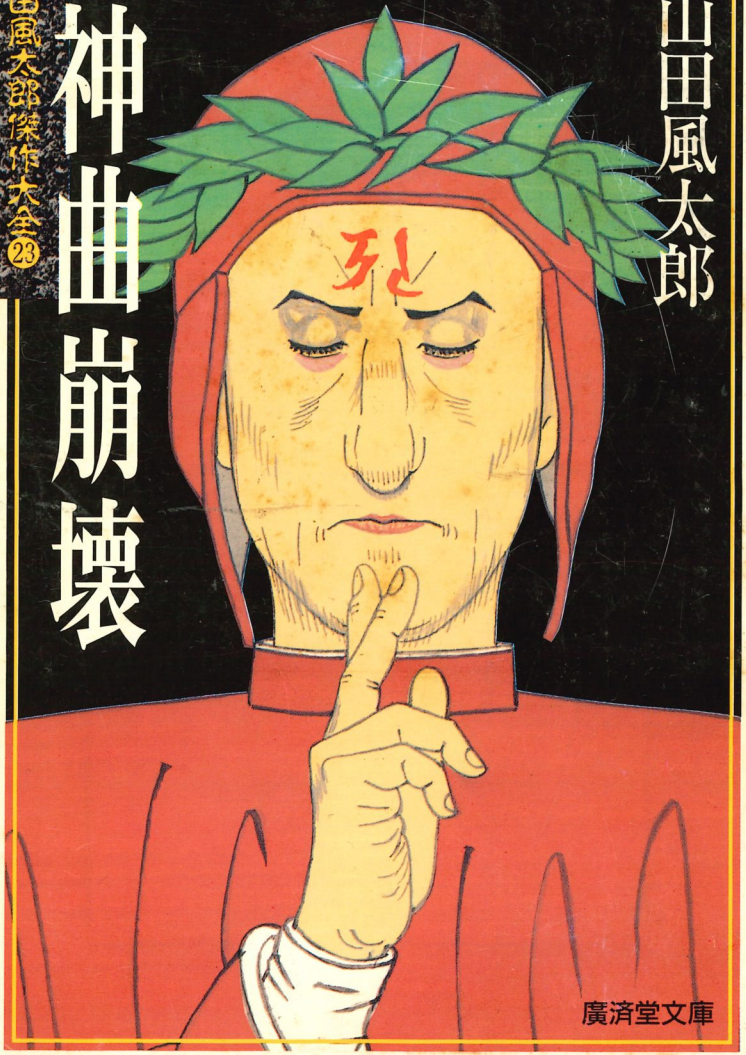
山田風太郎傑作大全㉓

神曲崩壊

山田風太郎



廣済堂文庫

廣済堂文庫絶賛発売中!

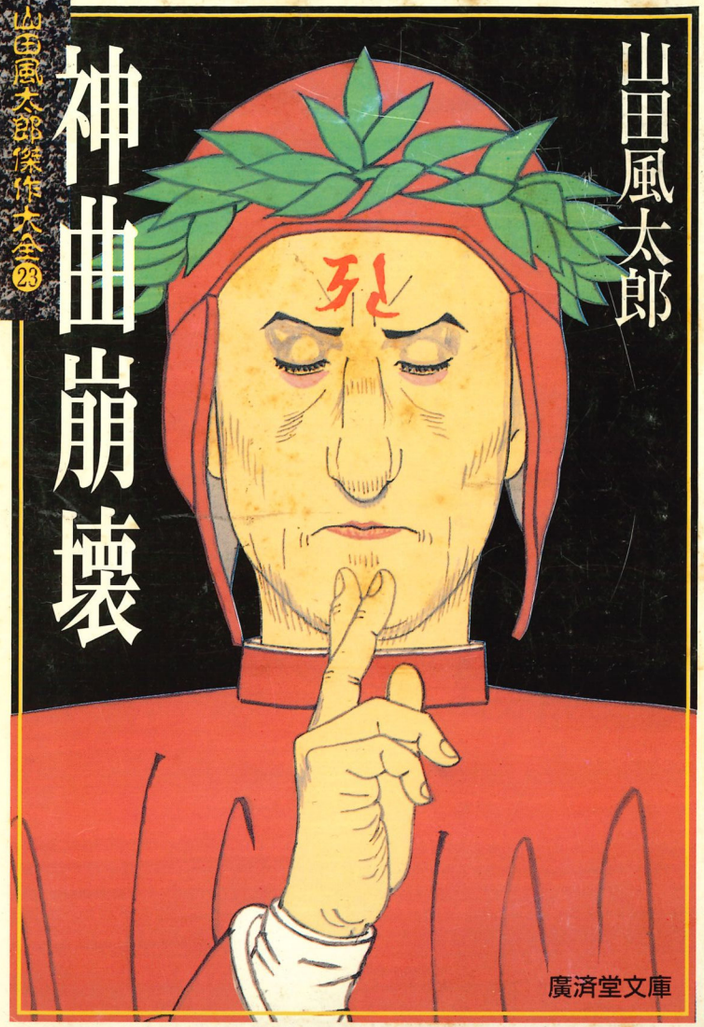
妖異金瓶梅——山田風太郎傑作大全①
十三角関係——山田風太郎傑作大全②
修羅維新牢——山田風太郎傑作大全③
誰にもできる殺人—山田風太郎傑作大全④
売色使徒行伝——山田風太郎傑作大全⑤
天国荘奇譚——山田風太郎傑作大全⑥
叛旗兵——山田風太郎傑作大全⑦
夜よりほかに聴くものもなし—山田風太郎傑作大全⑧
剣鬼と遊女——山田風太郎傑作大全⑨
青春探偵団——山田風太郎傑作大全⑩
切腹禁止令——山田風太郎傑作大全⑪
赤い蠟人形——山田風太郎傑作大会⑫
いだ天百里——山田風太郎傑作大全⑬
長脇差枯野抄——山田風太郎傑作大全⑭
旅人 国定龍次㊤—山田風太郎傑作大全⑮
旅人 国定龍次㊦—山田風太郎傑作大全⑯
死なない剣豪——山田風太郎傑作大全⑰
魔群の通過——山田風太郎傑作大全⑱
ヤマトフの逃亡——山田風太郎傑作大全⑲
八犬傳㊤——山田風太郎傑作大全⑳
八犬傳㊦——山田風太郎傑作大全㉑
江戸にいる私——山田風太郎傑作大全㉒
神曲崩壊——山田風太郎傑作大全㉓
太陽黒点——山田風太郎傑作大全㉔

カバーイラスト=安里英晴
カバーデザイン=原田幸生

山田風太郎傑作大全㉓

神曲崩壊

山田風太郎



廣済堂文庫

661
や7-23
667

山田風太郎 神曲崩壊 山田風太郎傑作大全㉓

廣済堂文庫

ISBN4-331-60662-7
C0193 ¥667E

9784331606629

1920193006674

定価 本体667円 ＋税

私がダンテの神曲・地獄篇を読んでいた19××年2月30日正午ごろ、人類は戦争をはじめ地球が崩壊し人類は滅亡した。爆風の煽りを受けダンテの創造した地獄世界も崩壊。意識を失い暗い虚空に浮かんでいた私は、気がつくとダンテに迎えられ、ガラスの霊柩車で崩壊した地獄巡りのツアーに誘われた。馬車が行くのは6つの地獄。そこで私が目にしたのは滑稽、ワイザツ、摩訶不思議な地獄的風景。歴史上有名なあの人が…。

ミステリー&ハードヘルス

廣済堂文庫

山田風太郎

やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した「達磨峠の事件」がデビュー作。昭和23年「眼中の悪魔」で第2回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

神曲崩壊
定価 本体667円 ＋税
平成10年6月1日 初 版
平成10年10月30日 2 刷
著 者 山田風太郎
発行所 廣済堂出版

ミステリー
&
ハードノベルス

山田風太郎傑作大全 23

神曲崩壊

山田風太郎

廣済堂文庫

ミステリー
ハードノベルス

山田風太郎　神曲崩壊

廣済堂文庫

ミステリー
ハードノベルス

2230①

ミステリー
&
ハートノベルス

山田風太郎傑作大全 23

神曲崩壊

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

泡雪三千大千世界　5
我は入る　歎きの町へ　19
飢餓(はらぺこ)のインヘルノの地獄　31
飽食(くいすぎ)のインヘルノの地獄　81
酩酊(へべれけ)のインヘルノの地獄　123
愛欲(おいろけ)のインヘルノの地獄　193
嫉妬(くろこげ)のインヘルノの地獄　263
憤激(むかっぱら)のインヘルノの地獄　311
ここは何処(ここはどこ)　ここはインヘルノ　ここは地獄　361
解説・細谷正充

泡雪三千
大千世界

忘れもしない、

一九××年二月三十日の正午ごろであった。

それまで私は、暖房のよくきいた書斎の椅子に身を沈めて、ダンテの「神曲」を拾い読みしていた。内容は、特に「地獄篇」は恐怖的だが、むろん架空話だから、私は興味深く——ただし七面倒くさい註などはところどころ飛ばして読んで、ひとあくびしたとき時計を見たら、ちょうど十二時になろうとしていた。

私は読書の幸福に心をゆだねたまま立ち上がり、食事のために居間にゆこうとして、ちょっと窓の外を見た。ガラスの向こうは朝からの雪であった。それが、天地の間をうずめながらすぐにも消えそうなあえかな泡雪であることも、その日私をまた別な幸福感につつんでいた原因であった。

ふと私の頭に、良寛の歌が浮かんだ。

泡雪の中に立ちたる三千大千世界　またその中に泡雪ぞ降る

意味もよくわからないのに、私はこの歌が大好きで、その歌を口ずさみながら、つと歩き出したとたん——突然私は意識を失った。

気がつくと、私は暗い虚空に浮かんでいた。

私はどうしたのだ？

私は自分が、首が腹にくっつくほど身体をまるくしていることを知って、手足をのばそうとしたが、全身はなかばとろけたように動かなかった。

ただ首だけは亀の子みたいに何とか動くようだ。で、首をねじまわして、私は異様な風景を見た。

あれは何だろう。大空を無数の泡のようなものが飛んでいるのだ。大きなものもあれば、小さなものもある。まるでシャボン玉を風に吹き散らしたようだが、それが何千か何万か、数も知れないほどのおびただしさだ。

近いやつに眼を凝らして——その泡の中に人間が、子宮の中の胎児そっくりにまるくなって浮かんでいるのを私は見た。それから、ひときわ大きく見えるのは、その泡がいくつか、あるいは七つ八つ、いや、何千何百かがくっついて塊になっているのだ、と私は気がついた。

それは無限の大空をうずめるほどの数であった。そして無数の泡を容れてなお果てのない大空であった。

私は聖書の知識はほとんどないけれど、そのとき頭に「創世記」冒頭の「はじめに神天地を創造たまえり。地は形なく曠空くして黒暗淵の面にあり、神の霊、水の面を覆いたりき」という言葉が卒然と浮かんだ。もっともそこにあったのは地ではなくて空であり、覆っていたのは神の霊にしてはあまりにもえたいの知れない泡の大群であったけれど。——

いま思い出してもふしぎなのは、そこに光があったという印象はまったくないのに、その泡

の壮観がありありと見えたことだ。さらに、それらが飛んでいる物凄い速度までが。

このとき私は、私自身も薄い球体の膜につつまれていることを知った。その球体はただ浮かんでいるように感じられたが、近くを流れる泡の状態から判断すると、私を運ぶ泡も同じ速度で飛んでいたに相違ない。

私はなぜか永劫という時間の感覚にとらえられた。

と、いつのまにか、四界をながれていたほかの泡が見えなくなった。私の泡は暗い空をただ一個になって飛んでいた。

どれほどの時がたったかわからない。ゆくてに何か見えて来た。

森のように見える。その森がみるみる近づき、私の泡がその森に流れこもうとしたとき、泡がぱっと破れたような感じで、私は投げ出された。

ここに地上はあったのだ。やがて、私は立ちあがった。背はまっすぐになり、手足ものばすことができたのである。が、見まわすとまわりは、果てしのない暗い森であった。

その印象は、私が読んだ寿岳文章氏の「神曲」の翻訳によれば、「ああ、その森のすごさ、こごしさ、荒涼ぶりを、語ることはげに難い。思いかえすだけでも、その時の恐ろしさがもどってくる」という表現そっくりのものであった。

どれほど森の中をさまよったのか、それもわからない。

ついに私はその森を出た。

私は茫然と立ちすくんだ。そこには荒野がひろがっていた。荒野というよりは廃墟だ。

それを何と形容したらよかろうか。かつて私は、愚かな戦争のために廃墟と化した東京を一望したことがあるが、その凄惨さはこの景観にははるかに及ばない。もとは何であったか見当もつかない物が、焼け、砕け、倒れて地平線のかなたにまでつづいている。その至るところから、黒煙が立ちのぼっている。

しかし、私は長くそれを見わたしていることができなかった。その中に私は、一人の人間を見いだしたからだ。目路のかぎり、ほかに人影はない。

その人物は廃墟の中に腰を下ろしていた。が、私が気づくより先に、私のほうをじっと見つめていたようであった。

私は吸われるように歩いていった。

近づいて、私はひるんだ。どうやら日本人ではないようだ。明らかに西洋人だが、それも現代の西洋ではない。黒い帽子をかぶり、黒いガウンを着ているが、どう見てもルネッサンス時代の——いや、もっと古い時代の絵で見た風俗に見える。

その男は、坐っていた平たい大きな石から立ちあがった。私には、外観だけから西洋人の年齢はよくわからないけれど、皺のよった額、やや長目の顔に高い鷲鼻、とがったあごの印象では、まず五十代後半と見え、何よりその全身をふちどっている森厳深刻の気は、私からまず問いかける勇気を失わせた。

「私は君の来るのを待っていた」

と、彼のほうから口を切った。挨拶の笑顔はない。

「あなたは……どちらさまでしょうか」
と、私はやっといった。彼は答えた。
「ダンテ・アリギエーリ」
「ダ、ダンテ？」

私はあっけにとられた。

「ダンテ、というと……あの、神曲のダンテ……さん、ですか」
「その通り」
私は、これは夢を見ているのだ、と考えた。
だいいち、この人物は、むろんあちらの言葉でしゃべっている。イタリア語にちがいない。私はイタリア語なんか知らない。それなのに私には、日本語みたいによくわかるのだ。そして相手もまた、私のしゃべる日本語をたちどころに解するらしい。しかし、そんな馬鹿なことがあるはずがない。——
かつて夢の中で、これは夢ではあるまいな、と何度か眉に唾をつけた記憶を持つ私は、自分に念をおすようにつぶやいた。
「私は夢を見ているのか知らん？」
「夢ではない」

と、ダンテと名乗った人物は首をふって、
「君は、ほんとうにここにいるのだ」
と、手をあげて指さした。そこにはさっきまで彼が腰を下ろしていた平たい石があった。見わたすかぎり砕けたものの散乱している中に、倒れた巨大な門のかたちをしたものがあり、それは門の上部あたりにとりつけられていた銘文の石盤らしかった。——文字が彫られていたからだ。イタリア語らしい文字であったが、これまた摩訶不思議にも私には読めたのである。

「我をくぐりて汝（なんじ）は入る、歎きの町へ
我をくぐりて汝は入る、永劫の苦患（くげん）に
我をくぐりて汝は入る、絶望の民へ」

それから二、三行、石がひび割れて読めない文章がつづいて、

「永遠のほか、これより先に創（つく）られしものなく
われは永遠にここに立つ
この門を入る者、一切の望みを捨てよ」

と、ある。——それはまさしく「神曲」の地獄の門に刻まれていた文字と同様であった。

そのとき、どこかで馬のいななきが聞こえたような気がしたが、馬の影はどこにも見えない。だいいち私は、地上のその怖ろしい文字に眼を吸われている。

「ここは地獄の門――地獄の門が存在したところだ」

と、ダンテは妙な言い方をしたが、私はそのときはそれに気づく余裕もなかった。

「すると、私は死んだのですか」

「そうだ、君は死んだのだ」

と、ダンテはうなずいた。

私の頭に、早春の書斎の静謐なひとときがかすめ、私は笑い出した。それから、それにつづく奇々怪々な悪夢のような泡の大群が頭によみがえり、私は笑いをとめてしまったが。――あれは夢だ。そしてこれも夢の中の出来事にちがいない。

それにしても、この夢は面白い。もう少し見ていたい。――

――ここでおことわりしておきますが、元来、生前の私は何か物語を書くのに、その物語そのものをラストになってあれはみんな夢でありました、と逃げる黄粱一炊式の手法を、言語道断、安易無責任の極であるとタブーとしている作家であった。従っていま書いているこの「記録」も決して夢物語で終わらせるつもりはないことを、ここでお約束しておきますが――ただ、この場合にかぎっては、これは夢ではないかと思いつつ、そのいきさつを語ることを許していただきたい。

――どうかこの夢よ、さめないでくれ！　と、むしろ祈りながら私は訊いた。

「すると、ダンテ先生。……地獄はやはりあったんですね」

「あった」

「しかし、中世は知らず、二十世紀の地球では、そんなものはない――現世で消滅したものが、別世界で存在し得るわけがない、というのが常識ですが」

「私は、私たちよりあとで人類が考え出したあらゆる思想の中で、地獄はない、という思想ほど地獄的なものはない、と考えている」

と、ダンテは憤ろしげにいった。

「それはあくまでも、二十世紀の人間の脳細胞が生み出した判断の範囲内のものだ。限りある有機物質から成り立っているに過ぎない人間の脳細胞、それが作り出す思考などはたかが知れている」

「しかし、現存者にとって、死者は過去の世界に遠ざかったものでしょう。過去は、現在にとって無の世界である、というのは、人間の脳髄の判断とは無関係な自然の真理だと思われるんですがねえ」

「自然の真理か。――その現存者なるものに、現世はなぜあるか、と訊いても、おそらくだれも答えられないように、私も、地獄や天国はこの通りあるからある、と答えるよりほかはないが――なぜ地獄が存在するか、ということについて、一応私なりに説明してみよう」

と、ダンテはいった。

「いいか、聞きたまえ。――太陽の光が地球にとどくのに約八分かかるそうだ。ということは、

われわれは八分前の太陽を見ていることになる。八分前の太陽は過去の世界の太陽のはずだが、われわれはそれを見ているわけだ」

「……」

「太陽と地球ならそれくらいの時間差だが、これが一光年の距離のある星なら、一年前の星を見ていることになる。百光年としてもまた同じ。百年前の星は実際にはもう存在していないはずだが、地球上の人間はいま存在しているものとして見るはずだ」

「……」

「逆にその星から地球を見れば、もう存在していない百年前の地球を見ることになる。それどころか、宇宙始まって以来、時間の数だけ過去の世界があるわけだ」

「その理屈はその通りかも知れませんが……」

と、私はいった。

「それが地獄が存在するということと、どうつながるんですか」

「いや、私は、存在とか消滅とかはかくのごとく不確かなものだ。君のいうように、現世で消滅したものが別世界で存在し得るわけがない、とか、過去は現在にとって無の世界である、なんていえないことをいったまでで……この理論だけからは、それがどうして地獄が存在するか、という説明は、実は私にも不可能なのだが」

ダンテは肩をすくめた。

「とにかく地獄は存在する。私が神曲に書いた通りだ」

「……？」

「次にその地獄のありかたについてだが、その後、私は詳しいことを知らされた。私の知った地獄は、無数の地獄の中の一つに過ぎないと」

「……？」

「いや、私の紹介した第一圏とか第三環とかいうさまざまな地獄のことではない。それらをふくめた神曲・地獄篇の全体が一つの泡であり、そんな泡が無数に存在するのだと。この無数は文字通りの無数である。——ちょうど星が無数であり、星雲が無数であるように」

「……？」

「私の記録したのは、一三〇〇年におけるイタリア人の地獄だった。しかし、イタリアにも時々刻々に別の地獄があった。イタリアに限らず、どこの国にも、どの人間にも、時々刻々に無数の地獄がある。それらが無数の泡状の地獄世界を生み出して来たのだ」

「……？」

「人間は——あらゆる生物は——見えない泡につつまれているのだ。ただ現在の個体だけではない。その泡の中に、彼の全生涯、彼の全過去がつつまれている。この泡は、愛と憎しみ、相似と欲望によってたがいに吸着して、そこにまた新しい泡を作る。恋、戦い、家庭、社会、国家、それらがすべて密着し、融合した泡だ。地球はその例の一つだ。地球そのものが巨大な泡に過ぎない」

「……？」

「個体が死ぬと、それをつつむ泡は、彼の全生涯も容れたまま、無限の空間と一瞬の時間の中を、いわゆる過去の世界へ流れてゆく。そこでほかの泡と新しい密着と融合がはじまる。その世界がすなわち天国とか地獄とか呼ばれるものだ」

「……？」

「私は、そういう天国や地獄の大構造を、ベアトリーチェから教えられた」

と、ダンテは深い声でつぶやいた。

ベアトリーチェ——それこそはダンテの初恋の美女で、「神曲」でダンテを地獄界から至高天まで導いた天使であることを私も知っている。

が、なぜかこのとき私の頭に浮かんだのは、ここに来る前、書斎の窓の外に降っていた限りない泡雪を眺めて口ずさんでいた、日本の良寛の神秘的な歌であった。

泡雪の中に立ちたる三千大千世界　またその中に泡雪ぞ降る

「けれども、泡の大集積体ながら、冥界には神の意思による秩序があった。地上に生きていたころの人の信仰と罪を経とし、時間の流れを緯とする大いなる秩序の世界があった。——ところが、それが突然崩壊したのだ」

彼は名状しがたい暗い眼で、まわりの廃墟を見わたして、

「その結果が、あの怖ろしい光景だ」

と、いった。

それでも私はわけがわからず、とにかく、

「なぜ崩壊したのですか」

と、訊いてみた。ダンテは答えた。

「地球が無くなったからだ」

我は入る
歎きの町へ

「実に下らない

原因から、人類は戦争をはじめ、この二月三十日、何千発かの核爆発を起こし、それだけならまだいいが、そのことによって何百個かの原子炉が炉心溶融（メルトダウン）を起こして無限沈下を始め、地球を蜂の巣状態にした結果、地球全体が崩壊し、粉々（こなごな）になって消滅してしまった。原体の大爆風の煽りを受けて、この大冥界も崩壊してしまったのだ」

と、ダンテ師はいった。

私は茫然とした。

「全人類は死んだ」

では、あの窓外に美しい泡雪の降っていた幸福な真昼、地球は消滅し、私は死んだのか。それに値（あたい）する苦痛は何も感じなかったけれど、それは衝撃があまりに巨大であったせいか。

そしてまた私は、闇黒の天を渦まきつつ飛んでいた無数の泡を思い出した。あれは地球消滅によって運命を共にした人類が冥界へ急ぐ姿であったのか。

しかし、どうして私だけが一人、ここにいるのだろう。

「ダンテ先生。……先生はさっき、私を迎えに来たとおっしゃいましたね」

私はそのことを思い出した。

「なぜ、私のようなものを、特別に――」

「それは、地球が消滅したときに、私の神曲を読んでくれていた人間が、人類の中で君一人だったからだ。――で、その縁で、至高天にいるベアトリーチェが、君を案内するようにと私にいった」

「はあ、神曲を――そ、それにしても――」

「君は作家だってね」

「ま、まあ、曲がりなりにもね」

「だから、君も、君の神曲を書くように、とのことだ」

「……？」

「それでいま、天国から煉獄、そして地獄へと通って来たが、いやはや実に驚いた。いまいったように、何もかも崩壊している。そもそも、地獄の門でさえ、この始末だ。君以外の全人類の亡霊たちは、どこから地獄へはいったろう？」

「……？」

「とにかく、ゆこう。……私がベアトリーチェに呼ばれてはじめて地獄を訪れたとき、理性の象徴ともいうべきローマ時代の大詩人ヴェルギリウスに導かれて各地獄を経めぐったのだが、それと同様に私が君にとっていい案内者であるかどうか、疑問だがね」

「……？」

「さっきいったように、かつての冥界にはそれなりの神学的な秩序があった。それが崩壊してメチャメチャになってしまったようだ。むろん以前の通り、同じ罪を犯した人間は同じ泡の世界に、という原型はある。が、それらから形成される巨大な泡の世界全体が崩壊して、ちょう

ど異なる銀河系の星がいりまじったようにゴチャゴチャになり、昔の地獄ならとうていあり得ない、すっとんきょうな新しい世界を作り出している例もあるようだ。とにかくそれらを出来るだけ君に見せてやれと、天使ベアトリーチェはいうのだ。では、ゆこうか」

「ま、待って下さい」

私は狼狽した。

「神曲・地獄篇」を読んだばかりの私は、ダンテの地獄に、怖ろしい牙をむき、蛇のように長い尾を持ち、亡者を見るとその尾でみずからを巻いて、その環の数で亡者の落ちる地獄の圏数を示す冥官ミノスや、三つの犬頭を持ち、鉤のような爪で亡者を八つ裂きにする怪犬チェルベロや、人頭牛体の魔獣ミノタウロスや、女面鳥体の妖鳥アルピアなどが待っていることを知っている。

「そこには、チェルベロやミノタウロスなどがいるのですか？」

「それが、さっき見たところでは、みんないないようだ。例の爆発で、何もかも吹き飛ばされたにちがいない。……とにかく、地獄は私の地獄とは一変してしまったのだ。そして私は、無数の地獄の中で、君が興味を持てるように、主として君が知っている人々——出来るだけ日本人たちが形作っているさまざまな地獄へ案内しようと思う。君だって、過去に死んだ人々、また君といっしょに死んだ人々が、どんな地獄に住んでいるか、知りたいだろう？」

「そりゃ……ちょっとは知りたいですが」

「それじゃ……おういい」

ダンテ師は呼んだ。

すると、馬のいななく声がして、廃墟の中に一部残っていた石の壁の向こうから、二頭立ての馬車が現れた。どちらも大きな、真っ黒な馬だ。

そういえば、先刻馬のいななきを聞いたが、そんなものがそこにいようとは夢にも思わなかったので、私が眼を見張っていると、馬車は近づいて来て、その中から、また駅者台から、二人の男が下りて来た。

どちらも異国人だ。

しかも、これも現代の服装ではない。異国の昔の服装のことはよく知らないけれど、一人はニュートンみたいにかつらをかぶり、白いレースの襟飾りをつけた、七十近い貴族風の人物で、駅者のほうは、赤ちゃけた髪を蓬々と垂れ、まばらな赤ひげをはやし、粗末な僧衣風の衣服をまとった四十半ばの人物であった。

「さっき、天国から煉獄を通り、向こう側からの地獄の入口に着いたが、何もかもわけのわからない状態になっているようだ。ちょっと途方にくれているとこの馬車が近づいて来て、崩壊後の地獄の案内ならどうぞこの馬車で、というのでここへ連れて来てもらったわけだ」

と、ダンテはいった。

「こちらが馬車の所有者、フランスのラ・ロシュフコー公爵。地獄のガイドをやってくれるそうだ」

と、かつらの老貴族を指さし、

「そちらがロシアのラスプーチン師。名は御存知だろう。僧侶だが馬喰育ちだから駆者をやっているということだ」

と、もう一人を指さした。

名はまさに知っているが、私はいよいよめんくらって、しばし挨拶の口もきけなかった。

「ラ・ロシュフコー公爵は十七世紀のフランスの大貴族でいられるが、戦争で顔を負傷されてから自分の城にとじこもり、神さえもあざ笑う辛辣皮肉な——しかし人間の本性を道破した箴言集を残された。中でも、人間は太陽と死を直視出来ない、という言葉は有名だ。私は君のいい案内人になれるかどうか自信がないが、最良の地獄の案内者を得たと思う。

ラスプーチン師のほうは、シベリアの馬喰育ちだがロシア宮廷の聖妖僧と呼ばれる存在となり、刺客から何度も狙われて、短刀で腹を刺され、青酸カリをのまされ、ピストルで撃たれても死ななかったという魔人だ。ま、最後は凍った河に沈められてお陀仏にはなったそうだがね」

ダンテにこんな紹介をされても、二人はうす笑いして私を見つめている。

ラ・ロシュフコー公爵は、貴族風の衣裳はともかく、右頬はえぐれて変形し、ラスプーチンのおちくぼんだ眼は異様に赤い。どちらも闇の精のような印象であった。

「人間は死を直視出来ない、といった人物と、何度殺しても死なないような人物が、地獄の案内人と駆者になるとは面白いね。……さあ、乗り給え」

うながされて、夢遊病者のようにふらふらと馬車に近づいて——私はその馬車が、いわゆるふつうの箱馬車でないことに気がついた。

霊柩車なのである。

屋根は例のものものしくも滑稽な——まあキッチュの見本のような唐破風をのせている。それでは日本風かというと、まわりは総ガラス張りだ。そういえば、外国の霊柩車はみなガラス張りになっているそうだが——つまり和洋混淆だ。しかも、ともかくも霊柩自動車風なのに、前部に駆者台がくっついていて、動くのは馬によるらしい。

「これは日本風とヨーロッパ風、馬車時代と現代の混合ですね。こんな霊柩車ははじめて見た」

「ああ、この屋根は日本風なのか。公爵はどこからこんなものを手に入れたのか知らん」

ラ・ロシュフコー公爵は、ちょっと離れたところでラスプーチンに何やら指図している。ふと私は、地獄で霊柩車の必要があるのか知らん？　と首をひねった。

公爵は引き返してきて、後部のガラス戸をあけ、「さあ、どうぞ」と優雅に片手をのべた。駆者台にはラスプーチンが上って腰を下ろした。

「では」

馬車の中に這い上ると、内部には寝棺が一つおかれていた。

それに遠慮なくダンテ先生とラ・ロシュフコー公爵が腰かけたので、私も公爵の横にならんで坐った。

前方のガラス越しにラスプーチンが手綱をあやつるのが見え、馬車は静かに動き出した。

キイクル……キイクル……

キイクル……という音が足もとからひびきはじめたのは、車輪のきしむ音らしい。

ふと私は、若いころ見た「幻の馬車」というジュリアン・デュヴィヴィエの映画を思い出した。

「昔見たフランス映画に——ストーリーは忘れてしまいましたが、何でも死者を迎えに来る馬車があって、それはほかの者には見えないけれど、死の近づいた人間だけにはその馬車の音が聞こえる、というのがありましたが。……」

「それはフランスの伝説から作ったものだろう」

と、ラ・ロシュフコー公爵がうなずいた。

「以前存在した地上で、死に近い状態から甦った人間がときどきあった。それらの人間がひとしくいうことは、自分が死んだあと、それをとりかこむ人々を自分は上から見下ろし、彼らの言葉も聞こえ、ふるまいもよく見えるのだが、何を叫んでも彼らには見えず、聞こえないらしかった、と告白しているが、——それと同様に」

と、公爵はいった。

「この馬車も、これからゆく世界に棲む人々には見えず、またこちらから話しかけても声は通じないのだ。そのつもりで、ただ静かに見てい給え」

ガラスの霊柩車はようやく走り出した。私たちの身体ははげしく上下動した。

倒壊した地獄の門は、はやうしろに遠く去って、周囲はさっき見た通り、広茫たる廃墟だ。馬車の通行にさしつかえはないが、大地にはあちこちひびがはいっている。黒煙はそのひびの底からたちのぼっていた。

と、ゆくにつれて、いつのまにかその煙が白くなり、遠目だが霧のようなものに変わって来たことに私は気がついた。

——はて、ダンテ先生の「神曲」では、地獄の門のあと最初の地獄は何だったっけ？

私は記憶細胞をゆすった。そうだ、門をはいってまもなく、星のない夜空に、歎きと叫び声がつむじ風のようにどよもしている世界があった。やがて、無数の裸の群衆の行進が現れて来る。彼らは、ひとりではどこへいっていいかわからない日本人の海外旅行集団みたいに、先頭に旗を立てているが、ただ頭上からまつわりつく虻や蜂、地上を埋めるいやらしい虫に刺されて、血を流しながら歩いている。

それは、恥もなく誇りもなく、神を信ぜず、またさからいもせず、ただ凡々と生きた——実は生きたことのない傍観者、すなわち人間の屑のむれのはずであった。

しかし、いま、ここにそんな亡者たちの姿は見えない。

「見たまえ、流れているのは霧じゃない」

と、ダンテ先生がいった。

馬車が霧の中にはいったと見えて、ガラス近く流れるのを見ると、なるほど霧より大粒な、

小指の先くらいの球体で、フワフワと渦巻いている。なおよく見ると、それは例の泡のようだ。

「これで見てごらん」

と、ラ・ロシュフコーがいって、どこからか直径三十センチくらいある天眼鏡をさし出した。

このときやっと気がついたことだが、むろん彼はフランス語をしゃべっている。ところが、それがフランス語を知らない私にもよくわかる。

私は天眼鏡をガラスにおしあてた。——すると、泡のいくつかが拡大され、その中に胎児みたいな人間がはいっているのが見えた。それはまさしく私が地獄の門へ到達するまで暗い天を飛んでいた泡と同じものであった。あれはいちじ見えなくなっていたが、やっぱりここまで来たやつもあったらしい。

しかし、何という小ささだろう。また何というおびただしい数だろう。

「このあたりは、以前は、天国も地獄も受けいれることに難色を示す『無益者』たちの通路だった」

と、ダンテ師がいった。

「人間の大半は、生きていることも死ぬこともまったく無意義の連中なのだ。ただ、死なないから生き、死なないわけにはゆかないから死ぬだけだ」

と、公爵がいった。

「まだ泡の中にはいっているが、あの泡の連中がそうなのだ」

そのとき私は、あっとばかりに天眼鏡に眼をおしつけた。近くを馬車と同方向に流れる泡の

中の人間に、自分の知っている人々を何人か認めたからだ。

「知人がいたかね」

と、公爵がそちらへ顔をむけていった。

「この団塊はちょうど日本のほうから流れて来たものだからね」

何人かの知人、どころではない。いま渦巻いてゆく泡の中にいる人間は、すべて私の知人ではないかと思われた。

「ああ、これはどうしたことだ。こんなところで泡になって——彼らはみなまだ生きているはずなのに——」

「いや、地球は消滅したのだよ。地球上の人間は、一人残らずこっちへ来たんだよ」

ああ、そうだった、と、私は改めてそのことに気がついた。

公爵はいう。

「そして、この先のアケロンテの河を——日本でいう三途の河だね——白髪に炭火のような眼を持つ船頭カロンの舟で渡って、冥官ミノスの点検を受けるのだが、何しろ全人類がいっぺんにこっちに来たので処理がつかず——というより、崩壊によってミノスがどこへいったのかわからないありさまなので、みなああやって、まだ泡の状態でおし合いへし合いしているのだ」

「あれはみんな『無益者』ですか」

私は嘆声を発した。

「それなら私も——私も、どころじゃない。私こそだれよりあの中にいるのがまっとうな気が

しますが」

「そうかも知れないが、とにかく君はあの刹那、このダンテ先生の神曲を読んだせいで、そのおかげで特別待遇で地獄見物ができることになったわけだ。まあ、それが倖せかどうかわからないがね」

と、ラ・ロシュフコー公爵はうす笑いを浮かべていった。

そのうち次第に泡はまばらになり、うすい霧状になり、消え、ただ夜明け前のような仄明るさがつつんで来た。

馬車は河にはいった。広い河だが、水は少ないらしい。二頭の黒馬はしぶきを散らし、しかしひづめを沈める程度で渡ってゆく。

「船頭カロンはいないが、ここがもとアケロンテの河だ。——ここを渡ると、いよいよ地獄にはいる」

と、ダンテ師がいった。

飢餓の地獄（このインヘルノ）

怪僧ラスプーチンを

馭者とするガラスの霊柩車は、河を渡って対岸についた。

蒼い微光の中に、渺茫とひろがっている荒野であった。——と、ゆくての地平線の空に、ぼうっと朝焼けのような赤みがさしているのが見えた。

「おや、車の下が砂まじりになったようだ」

と、ラ・ロシュフコー公爵が首をかしげた。なるほど車輪の音がちょっとちがって来たようだ。

彼は馬車の中にかけてあったマイクのようなものをとって、

「おうい、ラスプーチン、方角がちがうぞ」

と、呼びかけた。馭者台とマイクが通じるらしい。

「そっちはアフリカじゃないか」

「ほい、まちがえた」

と、ラスプーチンのしゃがれた返事がひびいて来た。私は尋ねた。

「あっちにアフリカがあるんですか」

「ああ、旱魃で飢えて死んだ人々のね」

「その現世の飢餓地獄が……この地獄までつづいているんですか」

「いや、それがおかしいのだ」

と、ダンテ先生は首をひねって、

「むろんこんどの大崩壊以前に死んだ人々だが……彼らはみんな天国へいっていた。それがこっちへ吹き飛ばされて来たらしい」

といい、それから、

「もういちどことわっておくが、これからゆく先々の地獄やそこにいる人々の中に、天国や煉獄に存在していたはずなのが、その泡の世界が吹き飛ばされて、こっちに混じりこんでしまったものが少なくないようだ。変だと首をかしげる例があったら、そういうわけだと思ってもらいたい」

「わかりました」

馬車は方角を変えたようだが、

「ところで、そのアフリカの災難だが」

と、ダンテ先生はそれまでの話をつづける。

「あれは、冥府に来るまでもない地獄だった。しかも、人間が作った——」

「そりゃ支配者の政治のまずさもあったでしょうが、最大の原因は旱魃という天災でしょう」

「一度目はそうだった。それで三百万人が死んだ。そこで外国から大変な食糧援助が行われた。難民はこれで救われ、再生のため、林を切りひらいてトーモロコシや落花生の種をまき、草原に羊や山羊を放った。それで林も草原もなくなって、また砂漠がひろがり、二度目には五百万人が餓死するという始末になった。——」

はて、いつのアフリカの災難のことをいってるのか知らん？

さっきとはちがう地平線のゆくてに、またぼうっと赤い雲が見えて来た。

「善意がさらに大きな地獄を生んだのだ。これは私に、善行について深刻な疑問をいだかせる現象だった」

「元来、人間の善行がしばしば愚行となるのは、相手のことを考えないで、ただ自己満足のために行うことが多いせいである」

と、ラ・ロシュフコー公爵はいった。

「しかし、日本のように――一九四五年日本が敗北したあと、何百万人か餓死すべきところを、アメリカの食糧援助で救われたという例もありますが」

と、私がいうと、公爵は、

「そのおかげで立ち直った日本のために、あとでアメリカはまたいやというほど悩まされることになったのだ。アメリカばかりじゃない、全世界が、日本が無くなったらどれほど世界が安楽になるだろうと溜息をついた。――これも善意が災いをもたらした例じゃないかね」

と、笑った。

「しかしまあ、人間の作り出す地獄で、戦争にまさるものはない」

はるかかなたの赤い雲が、空からではなく地上からさす光によるものらしいと気がついたとき、馬車が近づくというより、そちらから流れ寄って来た感じで、あっというまに私たちの馬車は、雲ひとつない蒼空の下にいた。

見わたすかぎり

バラックの店や縁台がならび、その間の迷路に数かぎりもない人々が流れていた。

男はみな戦闘帽をかぶり、肩から布製の袋をかけ、ゲートルを着けている。あきらかに復員兵と見える姿も多い。女は筒袖にモンペをはいている。埃で真っ白な髪ぼうぼうの浮浪児もいれば、ボロを着て口を四角にして泣き叫んでいる迷子も見える。

ギラギラする光の下に、みんな汗をひからせて、大河のように流れている。

はじめ夏かと思ったが、しかしこれは明らかに真冬の風の中であった。黄塵がもうもうとあがっている。さっき見た地平線の赤味は、この砂塵と熱気の竜巻のせいらしい。

私は眼をこすった。これは一九四五年敗戦の年の冬の闇市ではないか。――

実は若い日、私もその群衆の中の一人であった。青春の想い出はみな懐かしいというけれど、いまそれが再現したのを見て、私は白日の下で背に悪寒の這うのをおぼえた。あの青春の日には二度ともどりたくない。

が、すぐに私は、その光景がかつての闇市とは異なっていることに気がついた。

見えるかぎり、その人々は何か食べていた。それも大半はサツマ芋、干魚、蜜柑、林檎のたぐいらしかったが、それを両手かわるがわるで口に運んでいる。みんな痩せこけて――復員兵のごときはシャリコーベに近いのに、狂気のように口を動かしている。

「あれも、あの大崩壊で来た人々ではない」
と、ダンテ先生がいった。
「君も察したろうが、これは日本が戦争に負けたとき、飢えて死んだ人々の世界だ」
彼はひざの上に、黒い厚い書物のようなものをひろげて、それに眼を落としていた。一見聖書風に見えたが、これが東洋風にいえば「閻魔帳」にあたるものであったことを、のちに私は知った。
「あの戦争で死んだ日本軍の兵士は二百三十万、しかしその半分以上は、弾丸のためではなく、餓死だったようだ。そして、兵士以外の一般住民の戦災による死者は八十万。しかし、直接の戦災以外に栄養失調などで死んだ者も、ほぼそれに匹敵したという――あれはその人々だ」
私たちの馬車はその中を通りぬけてゆく。最初にいわれた通り、彼らにはこの馬車は触れず、見えもしないらしい。
「大いなる神の慈悲により、彼らはここであの通り食物を与えられた」
「食べているのは、芋か干魚か果物ばかりのようですが」
「彼らは食物といえば、あれしか知らないのだ。彼らが息をひきとるとき、その頭にある御馳走はあれだった。……それを彼らはむさぼり食っている。しかも、いくら食っても飽きるということはない。見る通り、彼らは無限に食べつづけている。……」
彼らは食物といえばあれしか知らないのだ、と、いま聞いた。が、それは戦争のあの飢餓時代のせいともいえないのではないか、と、ふっと私は考えた。

田山花袋は、明治のころの古本屋の小僧時代を想い出して、「豆腐の煮やっこか油揚げの焼いたのかがある時は、それでも御馳走であった」と書いている。私はまた昭和前期、大家族の農家の夕食のおかずがただ沢庵だけであった風景を見ている。彼らはそれを当然の食事のように食べていた。それどころか、小学校の友達の中に弁当を持ってこられない子供たちがたくさんあったことをおぼえている。「豊葦原瑞穂の国に生まれ来て米が食えぬとは嘘のような話」と歌われたのはすでに戦前のことだったのである。
それでいて日本は、日露戦争を戦い、太平洋戦争を戦ったのだ。
当時は気がつかなかったが、あれは一種の地獄ではなかったか。――地獄とは気づかない地獄が、すでに地上に存在したのであるまいか。――
ダンテ師は公爵に声をかけた。
「隣にゆくように、馭者にいって下さい」
公爵はマイクに口をあてて何かいった。
「あの青空を見る通り、ここはこれで一つの宇宙だが、やはり一つの泡の中なのだ。それと相似た世界の泡が、隣に存在している。眼には見えないが、われわれの馬車はその膜を破って、隣の泡の中にはいることになる。――」

いつのまにか

馬車のガラスの外は、へんに寂寞とした風景に変わった。船の影も見えない海がひろがり、さびしい音をたてて白い波が寄せている。

人っ子一人いない砂浜を通ってゆくと、何軒かの家があちこちかたまった部落にはいった。みな古びて、小さいけれど、どこか風雅な感じのする家々だ。

「ここを見よう、ここにはいってくれたまえ」

と、ダンテ師がいい、公爵はラスプーチンにこれを伝えた。

幻の馬車は、ある一軒の戸や壁を音もなく通りぬけた。

庭むきの座敷に、一人の男が蒲団に横たわっていた。枕もとには、一人の青年と老若二人の女が坐っていた。

青年は原稿を読んでいた。それを牀上の、いがくり頭——というより、ボヤボヤと髪を生やし、ぶしょうひげだらけの男が、眼をつぶって聞いている。

軒先に、へちまがいくつかぶらさがっているへちま棚があるので、部屋が青く沈んでいるせいかも知れないが、牀上の男はあきらかに末期と見えた。

青年は声を出して読んだ。

「十月廿六日。

朝。粥ニ牛乳カケテ三椀、佃煮、奈良漬。

午。鶏鍋、卵二ツ、飯一椀、味噌汁、実ハ薩摩芋。柿三ツ。奈良漬。

晩。鶏肉タヽキ、サシミ、ヌク飯二椀、柿ナド。

夜。ビスケット、渋茶」

私は息をのんだ。——これは正岡子規ではないか！

「そうだ」

と、私の胸中の叫びを聞いたかのようにダンテがささやいた。書物を見つつ、

「若い男は弟子の高浜虚子で、女性は子規氏の老母と妹の律だ。——」

虚子は読みつづける。

「次ニ、此頃ノ容体。

病気ハサシタル変動ハナイガ、次第ニ体ガ衰ヘテユクコトハ争ハレヌ。膿ノ出ル口ハ次第ニフエル。寝返リハ次第ニムツカシクナル。腸骨ノ側ニ新タニ膿ノ口ガ出来テ、右ヘ向クモ左ヘ向クモ仰向ケニナルモ、咳ヲシテモヒゞキ、泣イテモヒゞク。

繃帯ハ毎日一度取リ換ヘル。コレハ律ノ役ナリ。尻ノサキ最モ痛ク僅ニ綿ヲ以テ拭フスラ疼痛ヲ感ズル。ソレユエ繃帯取リ換ヘハ余ニトツテモ律ニトツテモ毎日ノ一大難事デアル。

コノ際ニ便通アル例デ、都合四十分乃至一時間ヲ要スル。肛門ノ開閉ガ尻ノ痛所ヲ刺戟スルノデ、便通ガ催サレタ時、コレヲ猶豫スル力モナケレバ、奥ノ方ニアル糞ヲリキミ出ス力モナイ。タダソノ出ルニ任スルノデアルカラ日ニ幾度アルカモ知レヌ。

食事ハ相変ハラズ唯一ノ楽シミデアルガ、モウ思フヤウニ食ハレヌ。食フタモノハ少シモ消化セズ肛門ニ出ル。小便ニハ黄色ノ混ジリモノアルコト多シ。……」

これは子規の「仰臥漫録」だ、と私は知った。

そして、この子規の病牀記に、毎日毎日丹念に記録してあるその日その日の食事の献立を想い出した。

いま虚子が読みあげた部分など、本人もモウ思フヤウニ食ハレヌといっているようにまだ小食の例のほうで、他のほとんどが、死をすぐ前にひかえた——いま聞いたような惨澹たる病状の人間の食事とは思われない量であるのに驚嘆したことを想い出した。

さて、よく見ると寝床のそばに妙な仕掛けがあった。一つは麻縄の輪がたたみにとりつけてあり、一つは風変わりな書見台のようなものだ。あとで考えると、前者は子規が寝返りするときつかむためのもので、後者は仰向けになったまま文字を書くためのものであったらしい。

そして、いまの文章もその仕掛けで書いたもので、むろんそんな姿勢で書いたから他人に読めるかどうか、虚子に読んでもらったところらしい。

どこかでカナリヤの鳴く声がした。

私はまた、子規が苦痛のために絶叫号泣し、これほど世話をさせた妹の律を同情のない女だと怒罵し、律がふだん一時間も二時間もカナリヤの籠の前に坐っているという記述に、その日常は律にとっても子規にまさるとも劣らぬ地獄であったろうと同情したことを想い出した。

それからまた私は、子規が死んだとき、その母が「サア、もいっぺん、痛いというてお見」といって涙を流したことを想い出した。……

「お前、帰りに夏目のところにお寄りか」

と、子規はかすれた声でいい、虚子がうなずくと、

「私の状態は以上の通りだと伝えておくれんかな」

と、いった。

やがて虚子が出てゆくと、子規はそれまでのがまんが切れたようなうなり声をあげながら、

「きょうの晩飯は何を食わせるぞなもし」

と、母と妹に食いつくように尋ねた。……

「あの人物の食欲は、肉体より精神的な飢餓地獄から発したものだ」

と、ダンテはあわれむようにつぶやき、

「夏目という家へゆくようにいって下さい」

と、いった。

幻の霊柩車は動き出した。

「夏目、というと夏目漱石のことでしょうが、漱石がいまこの近くにいるんですか？」

それまで茫然としていた私は、われに返った。

「子規の病気が重くなったころは、漱石はロンドンに留学中だったはずですが」

「それはかつてあった地上のことだ。ここは時空を超越した世界なのだよ」

ああ、そうか。——そうと承知していても、この混乱はこのときのみならず、このあといつも私の判断を震撼させた。

「たとえば、いまそこにいた虚子氏の本来の地獄は別にあるが、とにかく一個の人間にも無数の地獄がある。それが集合した冥界は無辺際だ。それでも、前にはその無辺際の冥界に秩序が

あったのだが、それがムチャクチャに混在してしまったのだ」
「すると漱石も、この地獄――どうやらこの餓鬼地獄にいるんですね」
「左様。ただしこのあたりは、飢えたる高士の世界だ」
と、ダンテがいうと、ラ・ロシュフコー公爵が、
「高士――フランスでいうオネートムというやつですかな」
と、首をかしげ、
「しかし、人間の性と食と死はすべて平等だ。その快楽と苦しみは善悪賢愚を問わない。……しからば人間は、それ以外に何の平等を求める必要があるだろうか？」
と、うすきみ悪い笑顔でつぶやいた。

馬車は村の白い路をゆく。

路には閑散ながら、歩いている人影が見える。顔を見ると、みんなひげをはやして高雅だが、どの人も痩せこけて、ヒョロヒョロしている。風態から見ると、みな明治以前の――少なくとも、大戦以前の人々に見える。昭和末期のふとっちょ人間はいないようだ。
白い帽子にカスリの着物を尻っからげにし、それに靴をはいてステッキをついて急ぐ虚子を、途中で追いぬいた。
「とまれ。ここだが――」

と、ラ・ロシュフコー公爵がマイクでいった。
「何か、騒ぎが起こっているようだね」
なるほど、その家の格子戸のあたり、人々がざわざわと出入りし、ただごとではないようすだ。
その家の中へ、私たちははいっていった。――
すると、壁にそって洋書や漢籍のならぶ書斎らしい一室に、大勢の人々がつめかけていた。大半は若い顔だがみな不安そうに、中には中腰になり、あるいはのびあがって一方を眺めている。
その隣の和室に蒲団を敷いて横たわっているのは、まさしく写真で知っている漱石先生であった！
そばについているのは夫人と、医者と看護婦だ。障子ぞいに女の子四人、男の子二人が、心細げに、切なそうにならんで、ちんまりと坐っていた。
漱石が大正五年十一月下旬、東大仏文を出たばかりの辰野隆の、築地精養軒でひらかれた結婚披露宴に出て、その翌日から持病の胃潰瘍が悪化して床につき、朝日新聞連載中の「明暗」の次回分の189という文字を原稿用紙に残したまま、十二月九日についに死んだことは私も知っているが。――
ああしかし、その漱石の死なんとする姿を、いままざまざとここに見ようとは。
何たることだ、漱石先生は下半身をむかれ、お尻の下に座蒲団をかさねられて、そのはしか

ら宙に浮いた肛門にゴム管を挿入されているのであった。

そのゴム管は、看護婦が高く支えたガラスのイルリガートルでつながっている。イルリガートルの中には淡黄色の液体がはいっていて、徐々に徐々に減ってゆく。

はじめ私は、排便のための浣腸かと思ったが、浣腸は浣腸でも、滋養浣腸というやつであったらしい。患者に栄養を与えなければならないが、胃がそれを受けつけないとき、現代では例の点滴という法を用いるが、当時ではこうして肛門から注入しなければならなかったのである。

漱石の口ひげの下から、苦しげなうなり声がもれた。

「饅頭は食つたと雁に言伝よ。……」

「え、何ですと？」

と、医者が訊いた。

「ああ、それは悪くなる前、知り合いの若いお坊さんから、お饅頭を送っていただいたので、お礼に送った俳句です」

と、そばから夫人がいった。

「先生、わかりますか、先生」

と、医者が呼んだ。おそらくこれは、かつて松山時代に漱石の教え子であった真鍋嘉一郎という医学博士にちがいない。意識はあるか、と訊いたのだろう。

が、漱石はそれには答えず、また何かつぶやいた。

「煮て食ふかはた焼いて食ふか春の魚。……」

「ああ、それもそのころ朝日の渋川玄耳さんにさしあげた色紙の句ですわ」

「そうですか、何か食い物の句ばかりですな」

と、医者がいった。

「そういえば五、六年前、修善寺の大患のあと、腸に春滴るや粥の味、という名句がありますね」

「ほんとうに食いしん坊なんです。あれからだって毎年、一年の半分は胃病で寝てるというのに……精養軒でも私がいくらとめても塩煎りの南京豆をとめどなく食べて……その翌る日もゲーゲーいいながら、到来物のツグミの粕漬を骨ごと次から次へと……まったく自業自得ですわ！」

と、夫人は、ききわけのない夫を憎んでいるかのような眼つきであった。もっとも彼女自身は、痩せ衰えた夫に対し料亭のおかみみたいにたっぷりふとっている。

しかし、いまそこにならんでいる六人の子供たちを見ると、たしかこのほかにも女の子が一人赤ん坊のうちに亡くなっているはずだし、胃病で寝たり起きたりというありさまで、しかも病んでも高雅な風韻を失わない漱石先生が、この料亭のおかみさんみたいな夫人との間に、よくまあ子供だけは芋の子ほど生んだものだと妙なことに感心する。

その漱石の声が、はろばろとまた聞こえた。

「眼耳雙つながら忘れて身も亦失ひ

空中に独り唱ふ白雲の吟。……」

これなら漱石先生らしい、と納得していると、

「あ、いかん！」

と、医者が叫んだ。浣腸中の漱石の肛門から、赤い血が噴き出しはじめたのだ。

それまで、無意識のうわごとか、苦痛のあまりのうめきか判然しなかった漱石が、急に両手で寝巻の襟をかきひろげ、

「おいっ、水をかけてくれ、ここへ水をかけてくれ、死ぬと困るから」

というなり、白い眼をむいてのけぞってしまった。気を失ったようだ。

私にことわりもなく、馬車は動き出した。

隣室では、病室の異変が伝わったらしく、詰めかけた弟子たちが騒然となっていた。そのおびえたような顔、顔の中に——あとで想い出すと、写真で知っている森田草平や内田百閒や久米正雄の顔がちらっと見えたような気がする。寺田寅彦、小宮豊隆、鈴木三重吉、野上彌生子もいたかも知れない。

そのほかで、厠の中に下半身を落として騒いでいる男があった。座敷のほうのどよめきを聞いて、あわてて出ようとして足を踏みはずしたらしい。

「あれは岩波茂雄という人ですね」

憮然として私はいった。内田百閒の随筆でこの珍事件のことを知っているのだ。

「漱石氏の最後の言葉を知っているかね」

と、ダンテ師が黒い閻魔帳をのぞきこみながら訊いた。

「いまの……死ぬと困るから、じゃありませんか」

「いや、あそこにもいた息子の伸六君によると、何か食わせてくれ、だったそうだ」

と、ダンテ師はいい、

「正岡氏と夏目氏は親友だそうだが、一方は肺病、一方は胃潰瘍というのに、最後まで食い気に執着して死んだというのがふしぎだね。しかし、これで両人が同じ冥界にいるのがわかったろう」

夏目家を出て、しばらくゆくと、路上で立ち話をしている二人があった。一人は高浜虚子で、いまやっとそこへ来たらしい。

「芥川君、夏目さんはどうだ」

「いまちょっと小康を保っていられるところで……」

と、相手は答えた。角帽をかぶった大学生だ。彼は漱石の急変直前に夏目家を出たらしい。

——芥川龍之介だ！　と私は気がついた。漱石晩年の一番弟子である。が、写真でよく見た痩身の芥川を、さらにたてに半分に割ったようで、頬は河童みたいに青くこけている。

私は芥川が俳号「我鬼」と称したことを思い出した。あれはむろん餓鬼から来たのだろう。

……

「そうか、それはよかった。ところで君はどこへゆくんだ」

と、虚子が訊く。芥川は答えた。

「石川啄木ってえひとのところへ」

「ああ、あの歌人の――」
「何でも肺病で、ここ数日にもあぶないと新聞に出たそうでしてね。その歌には先生も感心してられるし、朝日の校正係だそうですが、とにかく同じ社に俸を得ている縁で、お見舞金を持ってけと、けさ先生がおっしゃったとかで、奥さんにいわれてそれをとどけにゆくんです」
「そうか、夏目さんは親切なひとだからね。それじゃ」
と虚子は、とっていた帽子をかぶって歩き出し、芥川は反対の方向へ歩き出す。
「その石川家へ――」
と、ダンテ師がいった。

それはいまにも

崩れ落ちそうな三軒長屋であった。
その一軒で私たちは、「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」の詩人とその家族を見た。――
家財道具らしいものは何もない部屋に、まさしく石川啄木は横たわり、そばに老人と老婆、そして若い女がうなだれてならんでいた。おそらく啄木の両親と細君だろう。そして入口近いところに、一人の男が坐って、心配そうに啄木を眺めていた。
「しんとして幅広き街の

秋の夜の
玉蜀黍の焼くるにほひよ」
と、その男はしみじみとした調子でつぶやき、
「君の歌は、アイヌにおけるユーカラのごとく、日本人に永遠に愛唱されるよ、それは僕が保証する」
と、首をふりふりいった。
「金田一の保証なんかあてになるものか。腹の足しにもならん」
横たわったまま啄木は、嘲笑的にいった。相手は頭をかいた。
ああ、これは啄木と同郷同窓の親友で、アイヌ語学者の金田一京助だ、と私は思い当たった。
「永遠の生に愛唱してくれたって何の役に立つものか。それどころか、近く僕の死んだあとで、僕の『一握の砂』や『悲しき玩具』など買ってくれる者がかりにあったとしても、僕はその連中を憎む。明日の百円より、僕はきょうの十円が欲しいのだ！」
啄木の死に顔を見た若山牧水が、「安らかに眠れという言葉があるが、啄木の死に顔はそれに遠いものだった」という意味のことをいったようにおぼえているが、まさにこのときの啄木の呪いにひきつった顔はその死に顔を思わせた。すでに、シャリコーベさながらだ。
金田一は困惑し、話をそらそうとするように、
「しかし、いい匂いがして来るね」
と、鼻をピクつかせた。さっき玉蜀黍の歌など吟じたのは、そのせいだったかも知れない。

「隣の永井さんが炊事しているんだ。しかも、こっちにその匂いをかがせようとして、いつもわざと庭でやるんだ」

と、啄木は息を切りながらいった。憤慨というより、切なさのきわみ、といった声であった。

金田一はいった。

「君、死ぬなんていわないで、君も少しでも滋養物をとって生き抜かなくっちゃ……」

「滋養物をとるどころか、お米を買う金もないの」

と、啄木は口を洞穴みたいにあけて、声もたてず笑った。細君が両手を顔にあてて泣き出した。

金田一は混乱の表情でそれを見まもっていたが、

「待ってな、僕が何とかして来る」

と、立ちあがり、家を飛び出していった。金の工面のためだろう。——そのあとで啄木は、枕もとの金だらいに、がぼがぼと血を吐きはじめた。……

——私の知るところによると、底ぬけに好人物の金田一京助は、それまでも数知れずこういう場面に立ちあわされて、啄木を疫病神と呼んでいる家人の制止もきかず、乏しい自分の生活費までかき集めてひき返して来るのを常としたのだが。……

「馬車を裏へ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

あまりの悲惨さに、頭もしびれている私を乗せて、馬車は動いた。

いま話に出た通り、草だらけの狭い庭の竹垣の向こうで、一人の老人が、煤けた素焼きの七輪に土鍋をかけて、団扇でバタバタあおいでいた。

足もとには、すでに焼いた玉蜀黍が一本と、何にするのかボストンバッグが一つ置かれている。

そばには大学生の芥川龍之介が立っていた。

「はあ、石川さんのお宅はそこですか」

と芥川はうなずき、しげしげと老人を見やって、

「つかぬことをうかがいますが……永井荷風先生ではありませんか」

と、ふしぎそうに訊いた。

「永井ですが……」

と、老人は答えたが、無愛想で不機嫌きわまる顔つきをしている。

「ああ、やっぱり永井先生ですか。それにしても、あの『ふらんす物語』や『新帰朝者日記』をお書きになった荷風先生が……」

と、芥川は自分が信じられないように、相手を見あげ、見下ろした。

荷風は黒いベレ帽、まるい眼鏡、下駄ばきにズボンといういでたちで、そのズボンはバンドではなく、布紐で結んであった。

荷風は落ち着かない眼を足もとのボストンバッグに投げて、

「君、君は石川家へゆくんでしょう。それなら早くゆきなさい」

と、いらだたしそうにいった。が、大学生がわれに返ったように、一礼してゆきかかると、

「あ、ちょっと待って……何用があって君は石川家へゆくんですかい。あそこは一家肺病だらけですぜ。……」

「いや、夏目漱石先生からのお見舞金をおとどけに――」

「夏目漱石先生？」

狷介という文字を人間にしたような荷風も、これには少々狼狽したようだ。が、すぐに妙な笑顔になって、

「夏目先生からのお見舞金というと、どれほどですかい？」

と、声をひそめて訊いた。芥川はちょっと考えて、

「永井先生ですから申しあげるんですが、どうやら十円らしいです」

「へえ、十円。――」

荷風は軽蔑的にいって、何思ったかしゃがみこみ、足もとのボストンバッグの口をあけた。すると、中に怖ろしいほどの札束がギッシリつまっているのが見えた。

「二千三百万円あります。へへへへ」

と荷風は、前歯が二本欠けて、空洞のような口をあけて笑った。そして、ボストンバッグをしめた。

別に、自分のも持ってゆけと見舞金を出すつもりはないらしい。心事不可解である。

そのとき、土鍋から湯気が噴き出したので、荷風はあわててふたをとって、杓子でドロドロ

ひっかきまわした。汚らしい色をした粥の中に、黄色いものがぐつぐつ動いている。

「芋粥ですが……君、よかったら食べてゆきませんか」

荷風が珍しくそんなお愛想をいったのは、それでも漱石先生の使いにいささかの敬意を表そうとしたのだろう。

「サツマ芋ですな」

と、芥川龍之介は眉をひそめ、妙なことをつぶやいた。

「いえ、僕の食べたい芋粥は、山芋を切りこんで、それを甘葛の汁で煮たやつなんで……」

芥川は、どうやらさっきから気になっていたらしい長屋の裏側の縁の下に、またちらっと眼をやった。そこには大量のサツマ芋が俵からこぼれ、中には腐れかかっているやつもあるのを見ていたのである。

荷風の芋粥の勧めは、やっぱり心にもないお愛想だったのか、彼は芥川にはかまわず、地面にしゃがみこんで、杓子で茶碗にしゃくいこんだ粥を、ホウホウいいながらすすっている。

芥川は憮然としてそれを眺めて、

「たしか先生は、『新帰朝者日記』だかに、自分はもう一日も日本在来の食い物に満足できない身体になってしまったのが悲しい、というようなことを書かれてましたが……」

「いや、人間年がよって、しかも独り身だと、食い物は面倒がないのが一番でね」

「しかし先生、こういうお食事ばかりされてると、お身体にさわりゃしませんか」

荷風はまた熱い芋粥を口にいれ、

「ホウホウ……なに、今はもう日記と春本を書く元気さえありゃいいんです」
と、ニヤリとした。
「春本を……」
「前に『四畳半襖の下張』ってえのを書いたんですが、まあ公然とは出せないからそばに置いてたところ、麻布で偏奇館といっしょに焼いちまいました。ああいうものは、どうも座右に一冊ないと私はさびしいんですが、ありきたりの春本はとうてい気にいらないから、私が書くよりしようがない。で、ホウホウ……今『濡れずろ草紙』ってえやつを書いてます。……ホウホウ」
芥川は判断に戸惑った顔でしばらく黙っていたが、ふとボストンバッグに眼を落として、
「それはともかく永井先生、大金をこんなところに持ち出されて大丈夫ですか？」
「いや、このあたりは、一刻でも眼を離すと全財産もあぶないところなんでね」
と、荷風は茶碗と箸を持ったまま立ちあがり、縁の下を眺めて、
「たとえばあの芋でも——野良犬か泥棒猫かがくわえてゆくのか、知らないまにだんだん減ってゆくんでさあ」
と、大声をはりあげた。
長屋ぜんぶに聞こえよ、といわんばかりのかん高い声であったが、すぐ近くから腹立たしそうな反響があった。
「へん、このあたりの犬や猫が、あんな腐れ芋を食うもんか。あんな腐れ芋を食うのは、あけてもくれてもイヤガラセかアテコスリばかりいってる、しわん坊の爺いばかりだよ」
ふり返ると、垣根の外に六十ばかりの婆さんが立って、こちらをにらんでいた。
どう見ても、ありきたりの長屋の婆さんと、文豪荷風はハッタとばかりにらみ合った。どうやらこの御両人は、日ごろからの好敵手らしい。
と、みるみる荷風の顔色が蒼白に変わり、急に上半身を長い釘みたいにまげてしまった。
「先生、どうなさったんですか？」
芥川が声をかけたとき、荷風は土鍋の上に顔をよせ、ふたをとったままま煮えている芋粥の中に、ゲーゲーといま食ったものを吐きはじめた。ぎょっとして芥川は棒立ちになる。
「ほうっときなよ、そいつをあとでまた食うクソ爺いさ、心配ないよ」
悪たれをきいて婆さんがスタコラ逃げ出すと、芥川も手巾で口をおおって、これも逃げ出した。……
荷風の吐物に、血がまじり出したようだ。
——荷風が孤身独居の深夜、胃潰瘍で死んだとき、火鉢に前日食った大衆食堂のカツ丼を血といっしょに吐いていた、ということを私は思い出したが、これはその前兆の姿であったろうか。
「ここは飢えた高士の世界だといわれましたが」
私は暗然として思わず口に出した。
「あれでもやっぱり高士なんでしょうか？」

「だれかに好かれようなんて、まるで考えていないところが高士さ」
と、ラ・ロシュフコー公爵が微笑していった。
ガラスで隔てているので何も匂ってはこなかったけれど、それでもこちらも鼻口をおおいたいような気持で、私が顔をそむけたとき、どこかでわっという声がした。
石川家のほうだ。
「馬車をもどせ」
と、公爵がいった。

霊柩車は

また石川家にもどった。
すると、入口のところに石川啄木が立っていた。しかも、五、六歳の女の子の手をひいて。
——そういえばその女の子は、さっき家の外の路上で、石で地面に何か描いて遊んでいたようだ。
「俥を呼んで下さい！」
と、彼は叫んでいた。
「クロポトキンの本と原稿用紙を買いにゆくんだ！」
高熱に浮かされたような顔であった。事実彼は高熱に浮かされていたにちがいない。とにかく先刻まで息絶え絶えに横たわっていた男が、よれよれの寝巻を骸骨にまとったような姿でどこかへ出かけようとしているのだ。

「あなた、そのいただいた十円は、お米と薬代にあてなくっちゃあ」
と、妻の節子がしがみついた。
そのとき、便所のほうから、老父にささえられた老母がヨタヨタと出て来て、
「一——夏目先生の奥さまはそんなものを買えと、その十円を下すったんじゃないよ！　それなのに、親をつき飛ばしてまで——お前、十円で気でもちがったのか！」
と、叫んだ。その口からあごに血がしたたっている。
どうやら啄木はいま「軽きに泣いた」母親をつき飛ばし、老母は血を吐き——彼の母もまた肺病なのだ——便所で始末して来たところらしい。
「いや、ゆく。それからこの子に、おもちゃと木村屋のアンパンを買って来てやるんだ。さあ、京子もいっしょにゆこう。ここはなせ！」
と、妻をふりはなしたとたん、節子もまた喀血しはじめたらしく、口にあてた両掌のあいだから血がゴボゴボとあふれ出した。
それもふりかえらず、啄木は足ずりして、
「君、すまんが、人力俥を探して来て——」
命じられた芥川は、真っ白な顔色になって、もつれる長い足でどこかへ駈け出した。駈けながら、彼がつぶやくのが聞こえた。

「人生は地獄より地獄的である。……」
「私のお株をとってはいかん」
と、ラ・ロシュフコー公爵が苦笑していった。
「こんどはあの家にゆこう」
と、ダンテ師がいった。
それでわかったらしく、公爵は低声で駅者にそれを伝えた。

馬車はこんどは表側の道を、

永井家を通りすぎて、その向こうの家にはいっていった。
すると、ここにもたった一人、ゴザに破れ蒲団を敷いて、四十年配の男が横たわっていた。
——どこへいっても横たわった人間ばかりだが、高士が飢えると、どうしてもこういう姿になるとみえる。
そこへちょうど、裏口から老婆が、お盆にふかしたサツマ芋を二本ばかりのせてはいって来た。見ると、驚いたことにさっき荷風先生とやり合った婆さんである。
「入れものが無い。両手で受ける」
と、せんべい蒲団の上の人は、細い両手で盆を受けとろうとしたが、たちまち取り落として、芋はゴザの上にころがった。二本の芋をささえる力もないらしい。

「尾崎放哉（ほうさい）という人だ」
と、ダンテ師がいった。
「へえ、これが。……」
イタリア人に教えられてはじめて知ったというのもおかしいが、尾崎放哉という人の写真の印象には、豊頬の美男で、しかも先代市川猿之助すなわち猿翁を思わせる豪快さの記憶があった。それがいま見る放哉はまったく別人で、ひげだらけのシャリコーベさながらだ。おそらく写真は彼が世を捨てる以前のもので、それ以後の写真はないのだろう。
もっとも私は、それ以後のこの俳人の人生を本で知っている。人生というより、人生を捨てた人生を。
放哉は、一高で漱石の講義を聞き、東大法学部を出て、一流保険会社のエリートコースに乗りながら、三十代の終わり、突然その地位も美しい妻も捨て、あちこちのお寺の寺男として転々と流れ歩き、最後は小豆島（しょうど）のお寺の奥の院の堂守として、四十二歳で終わる人生をみずから選んだ。ただ無季自由律の俳句だけを杖として。
その透明で虚無的な俳句のいくつかは私もおぼえている。
「底が抜けた柄杓（ひしゃく）で水を呑まうとした」
「淋しいぞ一人五本のゆびを開いて見る」
「一日物云はず蝶の影さす」
人間が生きるための世の中との妥協や自我の欲望をとことんまで捨てて、人間外の世界へ逃

れたこの大正期の俳人は、後年ふしぎにある種の人々からの憧憬のまととなった。

いまその尾崎放哉が、婆さんと話している。

「婆さん、せっかくじゃが、わしはもう芋も食えんようになった」

「それでもこれは、腐れたところのねえ芋をとって来てむしてあげましたから」

と、ころがった芋をひろいながら、婆さんはいう。——はてな、この婆さんは、やっぱり永井家の縁の下から失敬して来たのか知らん。

「いや、芋を食うだけ、あごを動かす力がないんじゃ。こないだ銭湯へいって鏡を見て、イヤ、痩セタリナ痩セタリナ、十貫もなかろうと思うた」

十貫は三十七・五キロだ。——東大にいたころはボート部の選手で、食堂では飯を十杯食ったという豪傑の放哉が、である。

「ほんとにお気の毒で……御飯を持って来てあげたいんでござんすが、ごうつくばりの亭主が、腹がへりゃ釣竿で魚でも釣りゃいいに、それもやらん。人間何も働かんけりゃ、米が食えんのは当たりまえじゃっちゅうて……」

と、婆さんはわびる。

どうやら彼女は、放哉がやとっているのではなく、近所の老婆で、親切からときどき放哉の世話をしに来るらしい。永井家の裏庭で荷風とやり合ったときとは別人のように善良な顔で、

「先生、お死になさるなら電報打ってあげますから、お知り合いをおいいなさいませ」

と、いう。

「いやいや、わしには死んでもだれも知らせる者はおらんのじゃ。わしはひとりで死ぬるんじゃ」

と、放哉はいったかと思うと、はげしく咳をしはじめた。彼は喉頭結核にかかっていたのである。

「あの人は、ただ死を望んでいるのです。方法は餓死という消極的なものですが、意欲だけはどんな自殺より強烈に」

と、私はいった。

「だから、食うものも、掌ほどの焼米と煎り豆だけ」

「なぜあの人物はそれほど死を望むのか。前半生、むしろ常人より恵まれていた運命なのに」

と、ダンテ師が首をひねった。

「さあ？　失恋とか酒の失敗とかもあったようですが……根本はあの人が、人間界に暮らせない、人間界から逃避したい、つまり徹底的に孤独を望む性格だったからだと思います」

私も首をひねりながら答えたが、実は私にも同様の願望が人一倍あるという自覚があるだけに、この人物には同情同感を禁じ得ないものがあった。

ただ私には、焼米と煎り豆に水だけ飲んでみずから餓死するなんて勇気はない。尾崎放哉は、あらゆる生きんがための努力を放棄するという最弱の人間であるとともに最強の人間だったと思う。

——もっとも放哉の場合は、お堂のお賽銭が一日平均十四銭弱、いくら大正の末でもそれで

は焼米と煎り豆しか食えなかったのだが。……

「いい匂いがするが、永井さんかな」

咳がとまると、あえぐように放哉はいった。

「スキヤキをやってるのかな」

「とんでもない、ありゃスキヤキどころか……」

と、いいかけて婆さんは眼を白黒させ、

「あんなもの、御近所がみんな飢えていなさると知って、わざと庭先で煮炊きしてみせるクソ爺いの意地悪に惑わされねえで……それに先生は、芋を食う力もねえとおっしゃったのに、スキヤキの肉が食えますかいな」

「スキヤキなら食えるんじゃ。グツグツと煮える牛肉、葱、春菊、豆腐。……」

尾崎放哉はたたみをバリバリかきむしり、あえぐように、

「ああ、いまだれかスキヤキを食わしてくれりゃ、わしは死ぬのをやめてもいいんじゃが……そんな者はおらん！」

と、いって、それからまた、息に血の霧がまじっているような咳をしはじめた。

「ゆこう、次へ。……」

ダンテ師がいった。

動き出した馬車のうしろで、咳とともに悲痛な声が聞こえた。

「コホーン、コホーン……咳をしてもひとり……コホーン、コホーン！」

ラ・ロシュフコー公爵がつぶやいた。

「人間は孤独で生きるにも食わねばならん。……食わんがためには働かなくてはならん。働けば孤独ではあり得ない。……あの人物の悲劇はこの論理のメカニズムを破ったところから来たもので、いたしかたがないですね」

キイクル……キイクル……軋みの音をたてて馬車はゆく。この音がこの世界の人々の耳には聞こえないというのがふしぎだ。

路上には依然痩せ衰えた人々がフラフラとゆききしている。——と、その中に、垢だらけの単衣の着流しに編笠をかぶり、尺八を持って歩いている小男があった。

これが歩きながら、路傍の木の葉や草っぱをひきむしっては口の中へ運んでいる。

「あれは大正ダダイズムで鳴らした辻潤という男だ」

ダンテ師がいった。

「在来のあらゆる芸術や道徳の枠組みを徹底的に破壊しようという主義を日本で鼓吹した人物で、その一方で、実は自分ながら何が面白くって生きているかわからない。この世でほんとうに自分がやりたい仕事は一つもない、おれは白痴浄土の亡者だと正直に白状したような男で……そのあげくの果てがあの姿だ」

乞食としか見えない辻潤は、編笠の下でこがらしみたいな声はりあげて歌っていた。

「おれは毎日水をガブガブと呑んで
その辺の野原から雑草をひきぬいて

ナマでムシヤムシヤ食つてゐるのだが
別段クタバリもしない
一度や二度飯が食へないと
もうふるへあがりやがつて
黄色いシナビタ声を張りあげやがつて
ナンダカンダと抜かしやがる
スツトコドツコイのトンキチ野郎のヒヨツトコめ！」

公爵がいった。

「あのスットコドッコイのタンカで、あの人物は無益者の世界から、この飢えたる高士の仲間にいれられたのだろう」

白い道は、

やがて森の多い地域にはいった。——その中に一軒、まるで昔の小学校の木造校舎みたいな建物があった。

その玄関の石段の横に、勲章を胸にいっぱいつけた正装の老軍人と、白襟の黒のうちかけに袴をはいた初老の女性が立って、代わる代わる写真をとってもらっていた。夕日が前庭に森の影を倒している。

写真屋が、頭からかぶった黒地の——裏の赤い布をとると、軍人は、

「うまくとれたかの。これはきょうの御大葬に御参列においでになった英国のコンノート殿下の御所望で、殿下にさしあげる写真じゃから、うまくとってくれんと困るぞ」

と、きげんよくいった。

その口は白いひげにつつまれている。

乃木将軍だ！　と私は直感し、眼を見張った。女性は静子夫人に相違ない。

写真屋が挨拶してどこかへ去ったあと、将軍は、少し離れたところでこの撮影風景を見ていた馬丁に、

「ちょっと……台所にあるカステラとまんじゅうをここへ」

と、命じた。

「ぜんぶじゃ、箱はいらん。女中に手伝わせて、中身を出して持って来てくれ」

「ぜんぶでございますか」

馬丁は驚いた顔をし、しかしすぐに家の中へはいっていったが、やがて両手に把手のついた大だらいを一つずつ持ち出して来た。

一方には黄色いカステラの山、一方には真っ白なまんじゅうの山が盛りあげられている。

「これを？」

けげんな顔をむける夫人に、

「乃木に食わせるんだ」

と、乃木はいって、馬丁をうながして裏の厩のほうへ歩き出した。何とも解せない表情で夫人もあとに従う。

屋敷の一隅に厩がある。その向こうに長屋風の建物があるが、それより厩のほうがりっぱだ。そこに一頭のアラビア馬がいて、マグサ桶に首をつっこんでいたが、将軍たちを見ると、うれしげに鼻づらを寄せて来た。

「おう、乃木、乃木……可愛いのう」

乃木はその鼻づらをなんども撫でて、

「おい、そのカステラとまんじゅうをやってくれ」

と、馬丁に命じた。

この馬は、旅順で戦ったステッセル将軍が降伏時に贈ってくれたアラビア馬の仔にあたる。これに乃木は乃木号という名を与えたのである。

しかし馬の乃木は、馬丁がまんじゅうのたらいと、カステラのたらいを押しつけても、長い舌でベロリと一、二回ずつなめただけで、あとはまたマグサ桶のほうにとりかかり、それを食うのに余念もない風であった。

二十分ばかりして、乃木はついにあきらめたように、

「どうしても食わなかったら、それを河上さんにあげてくれ」

といって、厩を離れた。馬がなめたなどということには放心の態に見えた。

先をゆく乃木のあとを静子夫人が追って、くすくす笑い出した。

「乃木家では、人間はだれもあんなにたくさんのおまんじゅうやカステラを食べたことがないので、馬も遠慮したのでございましょう」

乃木家では、ふだん飯は稗飯、お菜はかぼちゃか芋の一点張りであった。客があるときだけ七色汁を加えたというが、七色汁とはどんな汁か知らない。とにかく客は乃木家の食事につき合わされることにみんな怖れをなしたという。

「馬より、私のほうがいただきとうございましたわ。でも、どうしてきょう、あんな御馳走を馬に？」

「あれは最後の大盤ふるまいだ」

と、乃木はいった。

「最後の――」

夫人は立ちどまった。

「それはどういう意味でございます？」

乃木はそれには答えず、

「お前、ふしぎなことに、陛下が崩御あそばされてから、妙に浮き浮きしておるように見えるな」

彼は妻のこの変化が奇怪にたえないといった態に見えた。夫人はちょっと当惑した表情を見せたが、すぐに微笑して答えた。

「ああ、あなたはお叱りになるでしょうが、その通りでございます。それは陛下の崩御は悲し

ゅうございますけれど、一方で、あなたを呪縛していたものが消えたようで、これからは、ふつうの人間らしい生き方が出来るとほっとしていたのでございます」

こういう言葉自体が、それまで夫に呪縛されて、自分の心情など打ち明けることのなかった静子夫人の口からはじめて出るものであったらしく、乃木は白いひげの中で口をパクパクさせている。

「それより、馬にカステラをやったのが最後の御馳走だとはどういうことでございますか」

「わしは今夜殉死しようと思う」

「えっ、殉死？」

さすがに夫人は、はっとしたように夫を見まもった。乃木はいった。

「だから、お前もいっしょに死んでくれ」

一分ばかりの沈黙ののち、夫人はいった。

「あなたが殉死を思い立たれたのは、私にもわかります。……けれど、私が殉死するいわれはわかりません。女が殉死したなどいう話は、昔から聞いたこともありません」

「しかし、わしが死ねば――」

と、乃木はいった。

「勝典、保典は二百三高地で死んだ。もはやお前は、生きながらえてもひとりぼっちじゃ。それがわしにはふびんなのじゃ。老いて、ひとりぼっちで、生きていて何のたのしみがある？」

「ございます。さっきも申しあげたように、私たちは先帝さまの呪縛から解かれて、これから

人間らしい生き方が出来ると考えておりました。それはかりにあなたが殉死なすって私一人になっても変わりません。旅もしたい、芝居も見たい、花も作りたい……」

夫人の眼に、涙が浮かんだ。

「若い勝典、保典が戦死したとき、私の胸を何よりしめつけたのは、あの子たちが生きているとき、一日でもラクな日を過ごさせてやりたかった、一食でもおいしいものを食べさせてやりたかった、ということでございました。あの子たちが戦死したこともふくめて、いままで一度でも愉しい思いをしたことのない私が、残り少ない余生にそんな望みを持ったとしても、先帝さまに申しわけないとは私は思いません」

「それはならん」

乃木は押し殺したような低い声でいった。

「わが家は一家をあげて、あとに一人一物も残さず陛下に捧げまつってこそ、乃木家誠忠の構図は完成されるのじゃ」

白いあごひげをなでて、

「ま、この話は食事をしながらしよう」

と、いった。

二人は邸にはいり、夕食をとった。食べ物は、女中が作った蒸しパンと梅干だけであった。

「馬にはカステラを食べさせて……これがあなたの最後の御食事でございますか」

と、夫人がいった。相手の呪縛にかかるのを、必死にふり払おうともがいているような語調

であった。

「わしの最後の？　お前もだ」

乃木は鉄のごとくいった。夫人は首をふって、

「私の望みは、こんな食事はもうやめて、ふつうの家庭のような、人間並みの、たのしい食事をすることも……そうでございました」

「辞世を作った」

乃木はとり合わず、

「わし用のとお前用のとだ。お前のは——出でましてかへります日のなしときく、けふの御幸に逢ふぞかなしき——というのじゃが、字はお前の手で書いてもらわんけりゃならん。来い」

といって、立ちあがった。そして、二階の自室への階段を上っていった。

すると、夫人はまるで見えない糸にひかれるあやつり人形みたいに、そのあとを追っていった。……

二人を入れて、その部屋のドアがしまった。やがてその中から、「今夜だけは……」という夫人の高い声が聞こえ、何が起こったかわからないがただならぬ物音がし、それからぞっとするような静寂が落ちた。……

「ゆこう」

と、ダンテ師がいった。

「あのドアの中はのぞくまい。——日本国民の神話のために」

動き出す馬車の中で、私は戦慄して訊いた。

「今夜だけは……と聞こえましたが」

「いつか死ぬことはわかっている、と人間はみんないう、ただ、今死にたくないのだ、と——」

ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「その今の意味でしょう」

乃木家の

厩につづく二軒長屋だ。

「もとは乃木家の馬丁や書生が住んでたらしいが、古くなって空家になっていたままなのを、頼まれて長州関係の人に貸すことになったらしい」

と、公爵がいった。

馬車はその一軒にはいった。

太陽はいつしか落ちていたが、外はまだ薄明るいのに、家の中はもう暗い。そこにせんべい蒲団を敷きっぱなしにして、七十近い一人の老人が、粗末な机によって、手紙らしいものを外光にすかして読んでいる。同じ便箋が机の上にのっているところを見ると、どうやらいま自分が書いた手紙を読みなおしているらしい。

「……お目にかゝつた当時とちがひ、今ではすつかり老衰の境に追ひこまれ、辛うじて最後の一線に踏み留まつてゐる処です。食糧が愈々不自由になり、四人世帯で二日目に鼠のシツポのやうな大根一つ、おろして小皿にやつと一杯、それが六度分の副食物ですが、それすらない日があり、自家耕作の体力も空地もなく、買出しにゆく人手もなく、法外の闇を漁る金力もなき老生如きは、餓死の外ないのですが、……」

そこまで読んで、気力つき果てたかのように老人は机の上に突っ伏した。

「河上肇博士だ」

と、ダンテ師がいった。

「ああ、これが――」

私は、河上肇博士について知る断片を想い出した。

――すでに明治半ば、本郷の公会堂で、義人田中正造の足尾鉱害救済の演説が行われたとき、被害農民のためのカンパの籠がまわされた。聴衆がみな応分の寄付金を提出した中に、一人の帝大生が昂奮のあまり、金はおろか自分の着ている外套も羽織も襟巻もぬいでこれに投じたが、それが若き日の河上肇であった。

この純情熱血の河上は、やがてマルクス経済学者、京大教授として盛名を得ている初老期に至ってみずからを実践運動に捧げるため、あえて共産党に入党して逮捕され、入獄した。

いわゆる十五年戦争はすでに始まっており、凶暴無比の弾圧の嵐の中に、これは客観的にはみずから死地に赴くような行為であったが、こういうところは長州人の中で、吉田松陰、乃木

希典の系譜をついでいる。

心情的にはつながっているけれど、天皇に殉死するほどの乃木将軍が、どうしてマルクス学者の河上肇に家を貸しているのか、見当がつかない――と、うっかり首をひねり、あ、またやった、と私は頭をかきむしった。ここは冥界、しかも大崩壊によってこんがらがった地獄なのだ。

――将棋倒しのように同志みな転向する中に、ついに屈せず四年の刑期をすませて彼が出獄した年は日中戦争が始まった年であった。以後太平洋戦争につながる暴風期に、屈指の論客たる河上も、生きながら殺されているような沈黙の生活をまぬがれなかった。

やがて日本が敗戦の日を迎えたとき、それを歓喜する資格を持っていた日本人の第一人者は、清節不屈の河上肇であったろう。

――私はそのときの彼の歌を知っている。

「あなうれしとにもかくにも生きのびて戦やめるけふの日にあふ」

――が、しかしいま、彼は机から顔をあげて、自分の手紙を細々と読んでいる。

「なんでも書ける世の中になり乍ら、なんにもよう書かぬ老耄さ、残念ですが致方ありません。今ははや再び起たむ望みなしいざやしづかに死を迎へなむ。……」

栄養失調のためにちがいない。

しばらくして、彼は異様な哀切きわまる声をあげはじめた。

「大きなる饅頭蒸してほほばりて茶をのむ時もやがて来るらむ」

「ふるさとの焼き饅頭の黒餡のにほひこほしむ老病の身」
「もしも天われに許さば蒸したての熱き饅頭食べて死なまし」
「死ぬる日と饅頭らくに買へる日と二ついづれか先きに来るらむ」
「われ死なば花を供へよ大きなる饅頭盆に盛りて供へよ」
いまやこの高潔清冽の思想家の全身をわしづかみにしてふるえさせているのは、マルクス主義でもなければ祖国の運命でもなく、あかん坊に帰ったような——ただ饅頭を食いたいという欲望だけであるのは明らかだ。
「河上先生」
と、呼んで、そのとき庭先からはいって来た者がある。
「まんじゅうを持って来ただが、おあがんなさるかね」
乃木家の馬丁であった。
「天皇さまが亡くなられたんで、宮中から葬式まんじゅうを下賜されたとかで、乃木閣下がお裾分けにこちらへ持ってけとおっしゃったんで……」
いいかげんなことをいう。が、見て、河上の眼はとび出さんばかりになった。
「ああら、そんなにたくさん！　……こは夢か幻か！」
馬丁は左右の手にカステラとまんじゅうを盛りあげた大きなお盆を捧げていた。
——馬はついに食わなかったようだ。とはいえ、なめるだけはなめたカステラとまんじゅうは、馬丁も敬遠してここへ持って来たと見える。

河上は両膝で這っていって、それを受けとろうとして、
「いや、富の独占はマルクスに反する。馬丁さん、このカステラは隣の難波さんにまわして……わたしゃ、このまんじゅうだけで大満足じゃて」
と、いった。
馬丁がカステラを持って去ると、河上はさっそくまんじゅうにかぶりつこうとして、何思ったかそれを盆に戻し、また膝で這っていって、小さな電気コンロのヤカンで湯をわかすのにかかった。お茶を出して、悲歌に歌ったまんじゅうを最高の味覚で食おうというつもりらしい。
やがて、わいた茶を一口すすり、改めてまんじゅうに手をのばしたとき——隣の庭のほうで鋭い声があがった。
「このカステラは何だ」
それに対して、馬丁が何やらゴニョゴニョいう声がしたかと思うと、
「なに、乃木閣下から？　それならいよいよけしからん！　乃木閣下であろうが軍神であろうが、食糧統制法に違反するとあれば、断乎として検挙する！」
という声がひびいて来た。
河上博士の手はとまってしまった。
馬車は動き出した。
長屋の隣の庭に移動してみると、そこにカステラのお盆を捧げたまま馬丁がうなだれ、その前に三十半ばの、これまたガイコツのような男が、そのカステラに、飛び出すような眼をそそ

いで叱咤している。

「悪法といえども、法は法として護らんけりゃならん。法律違反をしなけりゃ餓死する時代に、義人善人たる資格は飢えて死ぬことであると本職は信じる」

悲壮な声であった。

「ましてやここに謹慎しているのは、大逆の子の罪を背負ってみずから餓死せんとしておる人物だ。その心情を無視して食糧統制法違反のカステラを供給しようとは、法律違反以上の大罪だと本職は信じる！」

私は声をひそめて訊いた。

「あれはだれです？」

ダンテ師が答えた。

「東京地裁の山口良忠という判事だ」

「ああ、戦後の闇米時代に、闇を拒否して栄養失調で死んだ裁判官――」

それから私は、山口判事の背後の、庭に面した長屋の裏側に、青竹が矢来に組まれているのを見た。その向こうは闇黒であった。

「あの中に、だれかいるのですか？」

「義人善人といえるかどうか疑問だが――あれは、虎ノ門で摂政宮殿下をステッキ銃で狙撃した難波大助というテロリストの父親で、山口県会議員までやっていた難波作之進という男だ。――大助がその大逆を起こしてから、みずから竹矢来を組み、食を断った。山口判事はその取り調べに来たのだ」

と、ダンテ師がいった。

「難波君は河上博士の遠縁にあたり、大助は河上のロシア革命についての文章を読んで天皇狙撃を思い立ったという」

闇黒の中で、けもののあえぐような声が聞こえた。

「……聞けばあなたは食事も碌に取れず、精神に異常を呈するほどやつれて居る由――これを聞いてさえ私は冷然として涙一滴落とさない。……」

「息子の大助が獄中から父へ送って来た手紙だ。その文句は父の脳髄を焼きただらし、うわごととなって彼の口から吐き出されているのだ」

と、ダンテ師がいった。

「あの父は、子の兄弟の中で大助をいちばん出来の悪い子として、徹底的に差別して育てた。少なくともそう思いこんで成長した息子はそれに逆襲したのだ。摂政宮の車に撃ちこんだ弾は、父へ撃った弾でもあった。もちろん父は、この大罪を犯した子を許さない。世に呪われた仲の父と子は多いが、これほど地獄的な父子は珍しい」

「男の子の七〇パーセントばかりは、いちどは父を殺害する夢を見るものだ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「父に讃歌を捧げる娘は多いが、父の讃歌を歌う息子はほとんどない」

「で、難波大助はここにはいないのですか？」

「あれは別の地獄にいる」
と、答えてから、ダンテ師は、
「まだいろいろあるがこの飢餓地獄はここらでやめて、次の泡の宇宙へゆこう。ここと同じく、小さな泡が集合して一つの地獄を作っている大きな泡の世界があるのだ。次へいってくれ給え」
と、公爵に命じた。

馬車はいつしか

海のなぎさにそって走っていた。
と、うすい霧がかかって茫々とけぶる灰色の波の向こうに、ごく小さいけれど、まるで妙義山みたいなかたちの島が見えた。
「遠眼鏡を貸そうか」
と、公爵がいった。
この霊柩車には、いろいろな道具がそなえつけてあると見える。私はそれを借りた。
その島の嶮しい岩山のあちこちに、ぽつぽつと洞穴があき、その中に一人ずつ人影らしいものが見えた。
「あれこそ、高士中の高士だ。高士というより宗教者だが」

と、帳面を見ながらダンテ師がいった。
「あの中には、天国から吹き流されて来た人々も少なくないが……たとえば、それ、右上部の穴で、十字架にもたれかかっているのが、ナチスのアウシュヴィッツ強制収容所で、見知らぬ囚人に代わって飢餓室で殉教したコルベ神父だ。……」
「ほう」
「まんなかあたりの穴の中で、糸車をまわしている老人が、断食で英国に抵抗したインドのマハトマ・ガンジー……」
「ははあ」
「下左のほうで、大きな桶の上に坐っているのが日本の沢庵和尚……あれは漬物樽であの禅僧はあの穴の中でタクアンという日本のピクルスばかりかじっておる」
「へへえ」
「それから、その上のほう――」
そのとき私は、島の岩だらけの磯に走り出して来て、両手をふりまわしている影を見た。
髪はいばらをかぶったようで、ボロボロの衣服をまとい、手に海藻ようのものをぶらさげて、よろめきよろめき走りながら、こちらに手をふっている。
「あれは……あの人はこちらが見えるのですか」
と、私は訊いた。
「いや、見えるはずはない。あれはいつもああして、磯を右へ左へと走りながら、おーい、お

ーいと呼ばわって、海に手をふっているのだ」
と、ダンテ師は答えた。
「俊寛という坊主だそうだが——あの島へもいってみるかね？」
「いえ、空腹の人間はもう結構です」
と、こんどは私のほうが手をふった。

飽食の地獄（くいすぎのインヘルノ）

われわれの馬車は、

いつのまにか海を離れて丘に上る道にかかった。

そして丘の上でゆくてを見下ろしたとたん、私は思わず、「ああ」と嘆声を発した。

眼下には、町があって、かつての東京そっくりの——いや、超高層などはなく、せいぜい五階どまり、その大半は二階建てだが、道路はもっと広く、それが縦横に地の果てまでつづいている。それより私の眼を見張らせたのは、その道を埋めている群衆の壮観であった。

やがて丘を下って、その群衆の中にはいって、私はいよいよ茫然とした。

群衆の壮観だけは、前に見た「飢餓地獄」の闇市に似ている。それどころか、みなが何か食べているのもおんなじだ。

が、食べているものがちがう。彼らの肉体がちがう。両側の店構えがちがう。

闇市の戦闘帽にゲートル姿と異なり、みんなしゃれた、あるいはゴージャスな衣服で、男女ともに少なくとも百キロはあろうと見えるほど肥満している。明らかに昭和末期以降の日本人だ。

ただ奇妙なのは、彼ら彼女らがことごとくズボンやスカートをつけず、裸の足にブーツをはいて、前部に力士の化粧まわしみたいなものをぶら下げていることであった。力士の化粧まわしに文字があるとすれば、みな本人のシコ名か座右の銘みたいな文字にきまっているが、いま見るここの住人の化粧まわしは、Tシャツにあるような英語ばかりだ。ちらりと見ると

「BUM」（お尻）とか、「RAPE」（強姦）とか、「BIG BOX」（巨大な陰部）なんて、本人も意味を知らないとしか思えない文字を刺繍したものをぶらさげて、平然たる男女も見えた。

両側は、ことごとく食堂か料理屋かレストラン、喫茶店、スナック——つまり、食い物屋ばかりだ。私が生前に見た盛り場のいわゆる「味の町」や「グルメ街」などと同様だが、はるかに店構えは豪華で、大規模である。中には全館ガラス張りで、空高く飲み食いしている大集団も見える。

そして、街路をひしめき歩く連中も、ことごとく何か食ったり飲んだりしていた。

湯気のたつ豚肉入り饅頭を頬ばっている老人、栗おこわのおにぎりをかじっている老女、みるからに香り高いフランスパンやミートパイにくらいついている中年の男女、コカコーラをラッパ飲みしている青年、アイスクリームをなめている娘、ケーキのクリームを口のまわりにいっぱいつけている子供たち。……

「この大半は、こんどの大崩壊で来た日本人だ」

と、ダンテ師がいった。

「あの飢餓の世界にいたのは、特別悲惨な人々ではない。大戦争以前から日本はハングリーな国だった。だから西洋人の猿真似をした異国の征服が嫌悪されたのだ。……それが一転して、地球上にもまれな大飽食国を作った。他国人は入れないという島国根性はそのままにして、食物だけは野放図もなくインターナショナルだ。日本人は食道楽の一つの宇宙を創造した。あそこにいるのは、テレビの料理番組のフランス料理を見ながら中華料理を食い、うまい店がある

といえば血相変えて殺到し、うまいもの案内の本を手にして一日に五軒も六軒もまわることをいとわない連中だ」

ほんとうに何万とも何十万とも知れない大群であった。

「行為そのものは前の闇市に似ているが、ちがうのは、彼らが希求しているのが美食だということだ。彼らはすべてグルマンだが、それが日本人にあれだけある」

ふと私は、ダンテ先生の「神曲」で、貪食者たちの投げいれられる地獄は、闇黒の空から雨と雹とよごれた雪がたえまなく降って地上はぬかるみと化し、その中で三つの犬頭を持ち蛇尾を持つ怪獣チェルベロが、亡者をひっつかみ生皮を剝ぎ、八つ裂きにするものであったことを思い出した。——

そばにダンテ先生は坐っておられるけれど、「神曲」の地獄はほとんどどれもこれと大同小異の設定が多い。私は何となくダンテ先生の空想の単調さに舌を出したくなるのをおぼえた。

それはそれとして飽食者は、飽食で有名なイタリアでも、右のような地獄に堕とされるほど、昔からやはり罪だったわけだが、いま見るこの飽食者の世界は——大崩壊によって冥界はメチャメチャになり、以前にはあり得なかったすっとんきょうなものが出来てしまったとはいうけれど——何とまあ魅力的なことだろう。

「ちょっとうかがいますが……」

と、私は疑問を口にした。

「ここは地獄なんですか」

「地獄だ」

「どこが地獄？」

「彼らの下半身を見るがいい」

私はもういちど、しげしげと眺めて、

「そういえば、彼らは前に何やら妙なものをぶら下げていますね。あれは何ですか」

「あれは排泄に便利なための新工夫によるコスチュームだ」

と、公爵がいった。

「ごらん、みんな糞便はたれながしだ。糞便は押し出し式になっているのだから、あれだけひっきりなしに食えば、ひっきりなしに糞をせざるを得ない」

「へーっ」

いわれて、眼を皿のようにすると、まさしく彼ら彼女らのお尻からは、黄色い液体がたえまなくながれ落ちていて、地上はぬかるみ状態になっている。彼らがみなブーツをはいているのはそのためらしいが、中にはあちこち、すべってころんでいるやつもある。

「彼らは食べたものを消化するいとまもない。それでも彼らは食べつづけずにはいられないのだ」

公爵はいった。

「彼らを支配しているのは、脳髄ではない。腸管です。そもそも人間は、胎内に肉塊として生じたとき、最初に両端に一つずつの穴が——のちの口と肛門が出来、次にそれをつなぐ管が

――のちの腸管が発生するのだから、あの腸に手足をはやしたような連中こそ、人間の原体ともいえる」

あふれ落ちる黄色の液体を見つつ、私はガラスの箱の中にいることを改めて感謝した。

「ただし腸管自体にウマ味を感じる能力はない。味覚を司るのは大脳です。従って彼らは何のウマ味も感じることは出来ない」

それでは御馳走はなんの快楽でもないのみか、かえって疲労こんぱい、苦のたねか。

が、そう教えられても、ここは何という大饗宴の町であろう。だいたい料理によって街区が分かれているらしいが、どの街区もどの店も満員状態だ。

ちらちらと見えるだけでも。――

鯛のあら煮や海老（えび）の鬼ガラ焼きを食わせる店や、スキヤキ屋、うなぎ屋、それに天ぷら、とんかつ、そば、うどんなどののれんをひるがえす日本料理店街。

とろけるような豚の角煮、鴨（かも）の皮を餅でつつんだ焼き鴨、熱いフカヒレスープ、燕（つばめ）の巣スープ、ほかほかのシューマイや油のギタギタしているラーメンなどの店のつらなる中華料理店街。

フォアグラ入りのテリーヌや、赤ワインで煮た牛肉、ぐつぐつ煮えているオニオン・スープ、きらめくワインの瓶などがみえるフランス料理店街。

パスタ、マカロニ、スパゲティを山盛りにしたイタリア料理店街、キャビアとボルシチのロシア料理店街、その他、じゃが芋とソーセージのドイツ料理店、パエリアのスペイン料理店、フォンデュのスイス料理店、カレーのインド料理店。……

果てしもない、町自体が豪華な御馳走のあふれる巨大な食卓であった。これで何の味もないと信じられようか。

「いや、たれながしでもいい。私もこの霊柩車から飛び出して御相伴（おしょうばん）にあずかりたいですな」

たまりかねて、私はよだれをながしてうめき出したほどであったが、そのとき私は街路の一角に奇妙なものを見た。

五階建てのビルの一つだが、全館がガラス張りだ。それが、どの階にも五彩の花がそよいでいる――と見えたのは錯覚であった。

やがて私は、それがレオタードを着た女性だということに気がついた。さらにその女性たちはみな大肥満体で、それが全館に充ち満ちて、くねり、もつれ合い、ノタ打ちまわっていることを知った。

そうと知ってつくづく眺めれば、箱にギューギュー詰めこまれた腸詰といおうか、いや生きて動いているのだから、トラックに充満した豚の大群といおうか。――それがどうやら空間もないほど詰めこまれすぎて、苦しまぎれにもがいているのではなく、全体としての印象だがなぜか恍惚とした感じで、ヌラリヌラリと流動しているのであった。

「あれはエアロビクスの学校だ」

と、公爵が教えてくれた。

「女性たちがダイエットしようとエアロビクスをやっていたのだが、その運動でいよいよ食欲が旺盛になり、ますます肥満して、とうとうあの五階の建物に充満してしまった。しかも彼女

たちはまだあの通り髪ふりみだし歯がみして、必死にエアロビクスを続けているのです」

どこが髪なんだか歯なんだか、よくわからない。

「この飽食の世界でも、腸管だけにならず、やはり脳は持っている人々もいる」

と、ダンテ師がいった。

「そこへ行って見よう」

大通りをそれ、

幻の馬車は横町にはいった。そこは、日本料理でも京料理風の料亭が延々とならぶ路地であったが、これも何百軒とも知れない数で、そしてやがて、ここにこんなところがあったか、と眼を見はるような宏大な林の中へはいっていった。

自然の林ではない。あきらかに人工的な庭園で、途中石橋で渡った小川も人工の流れにちがいなかった。

その向こうに風雅な棟門があって、そこに岩緑青を流しこんだ隷書風とも篆書風ともつかぬ「星岡茶寮」という額がかかっていた。

そこをくぐると、豪壮きわまる大料亭があった。

玄関をはいると、そろいの紫紺無地の着物に金茶の帯を太鼓にむすんだ美しい女中たちが、盆をささげて往来していたが、どうやら廊下は鶯張りになっているらしい。多くは日本間であったが、暖炉をつけた重厚なイギリス風の洋間もあった。

馬車はその日本間の一つにはいりこんだ。

そこには、四人の男がテーブルを中に向かいあい、二人の男が庭向きの縁の上で、何かに腰かけてこれも向かいあっていた。庭にはせせらぎの音が聞こえた。

座敷のテーブルに向かった四人が、ぶつぶつとつぶやいている。

「ずいぶん時間がかかるな……」

「やはり、いざとなると大変なんだろう、とにかくこちらの注文がばらばらだからね」

「しかも、うるさい客ぞろいだからな。あはは」

「しかし、それぞれこちらが第一級と思ってる味には決して負けないものを出すと豪語してるんだから。——」

ダンテ師が帳面をのぞいていった。

「あれは食通で有名な人々だ。小島政二郎、檀一雄、吉田健一、山本嘉次郎の諸氏だ。注文した料理が出て来るのを待っているところだ」

なるほど、白いテーブルクロスをかけた大きな食卓には、まだ何も出ていない。ただその食卓は、ふつうのテーブルと座卓の中間くらいの奇妙な高さの食卓であった。

しばらくして、小島政二郎がひとりごとのようにしゃべり出した。——

小島が——いや、私以前にこっちへ来た人々はみな「歴史的人物」と認めて、この文中敬称は略させていただいているけれど、私と同時に来た人々を呼び捨てにするのは、どうも具合が

悪い。——常識とは逆だが、この場合は同期生には氏をつけることにしよう。

小島氏が「人妻椿」とか「三百六十五夜」などという大衆小説の大家である一方、「食いしん坊」という味覚の名随筆の著者であることは私も知っている。

「鰻はね、小満津がいちばんです。蒸し加減がなんともいえず、お皿に載って出て来る時は、きれいで色もよく、形一つ崩れていない。それでいて舌に載せると皮までなんの抵抗もなく淡雪のように溶けてゆく。……」

なんだか発声が、鰻を食ったようにレロレロしている。

「私のように歯が一本もなく、歯茎だけで食べている人間には、何といっても鰻は小満津に限ります。……」

吉田健一がしゃべり出した。

この大宰相の御曹子に生まれながら、全然父の威光とは無関係に一流の英文学者となった人にも、「舌鼓ところどころ」などというグルメの好随筆がある。

「御馳走を食べてはお腹を壊すのを繰り返しているうちに、胃も次第に鍛えられて、雨にも風にも、雪にも夏の暑さにも負けない、したたかものの消化器官が出来上がったとも考えられるが……我々は余り欲を出してはならないので、鰻丼のあとで親子丼を食べて、それでもどことなくもの足りないから、鴨南蛮を一つ頼む程度の胃ならば、それで満足すべきです。……」

檀一雄がしゃべり出した。——

この「火宅の人」が、火宅の台所に入りびたって煮炊きするのが大好きな作家であったことは私も知っている。

「僕の料理好きはね、十の年に実の母親が家出をしたからなんです。妹たちは半分飢えている。それを見て僕は、自分たちの食うものは自分たちで探し、作らなければならないと思い立ちまして、さて町ばかりではなく山野を歩いてみると、ワラビ、ユリノネ、キノコ、山の芋……と、数々の食物がこの地上のどこにも充ち満ちていることを知りました。これを知り、これを料理する法をおぼえてから私の放浪癖は始まったんです。……」

山本嘉次郎がしゃべり出した。——

この映画監督が黒沢明を育て、数々のエノケンの喜劇映画を生み出した半面、有名な食道楽であったことは私も知っている。

「親子丼というのはね、僕のおやじが発明したものなんです。おやじは明治のころ、例の岩谷天狗タバコの支配人をしてたんですが……このおやじの子として、僕はほんものの親子丼というものを食わなくちゃ死んでも死に切れない。……」

以下。——

「天ぷらといえば、天民の天ぷら。コロモが頃合に揚がって、プンプンいい油の匂いをさせている。中の海老は前歯に当てるとコロリと折れる。いや、私に歯はないが、海老の方が折れてくれる。……」

「我々が胃を強くしたければ、腹八分で止めたり、野菜を山ほど食べたりするよりも、何でも構わないから腹を空かせて、せめて一度だけでも豚カツを食べ……」

「親子丼の海苔は、二、三十年くらい前に東京湾でとれた海苔じゃないといけない。米は上山の酸川米、鶏は三十年ほど前の秋田の比内鶏。……」

「何がうまいといって、イソギンチャクの味噌いため、これにまさるものはない。あのヌルヌル、ネバネバ、これぞ人間の飲食の極限。……」

「それでいて海老の新鮮な匂い、いちばんうまいネットリした舌ざわり、自分の持っているうま味を全部出していて……私は天民ほどうまい天ぷらは、ほかでは一度も口にしたことはない。……」

「醤油は、これも今はなくなった上州沼田の大豆から作ったやつ……これを復活させないとほんものの親子丼は出来ないのだから、私はまだまだ二十年や三十年は死ねない。……」

「それから、マンボウの肝炊き、クニャクニャした肉を肝にまぶした味噌鍋は、まるで大海原を漂流しているような味で……」

「牛を一頭丸焼きにして、その中に坐って、こんがり焼きあがった肝臓や腎臓をナイフで切って食べてから死にたい、と思うことが何より大切です。……」

いやもう、だれが何をしゃべっているのかわからない。

が、彼らはそれぞれ、あるいは眼をとじ、あるいはじっと宙に眼をすえ、恍惚としてしゃべっている。——自分だけの味覚の無何有境にひたっているのだろう。

この人々はしかし、どんなものを注文したのか、その料理はまだ出て来ない。食卓の上は真っ白なクロスだけであった。

「彼らの

坐っている姿勢を妙だとは思いませんか？」

と、ラ・ロシュフコー公爵が訊いた。

「へえ、坐ってる姿勢。——」

と、私はまばたきをしたが、実は最初から少し変だと思っていたのである。

低いテーブルに合わせ、彼らも坐っているが、椅子ではないようだ。そういわれてよく見ると、何だか便器に腰かけているような姿勢に見える。

「彼らはみな下痢患者なのだ」

と、公爵はいった。

「とにかく彼らは、好物となると、次から次へと際限もなく食べる。ここの住民は洗練された味覚を持つ人々で、どうしても老人が多い。そこで消化が追いつかなくなって下痢をする」

「ああ、さっきの大通りの連中と同じように——」

「いや、ここにいるのは選ばれた人々だから、あんなにたれながしはしない。それぞれ肉体的便器を具えている」

「肉体的便器？」

「ズボンや着物でうまく覆うように仕立ててはあるが、彼らはお尻の下の肉体の一部として、

みな便器を持っているのだ。ほら、君はゴリラやオランウータンの肛門が、肉の腰掛けになっているのを見たことはないかね」

「ああ、あの植木鉢みたいな――」

と、私は叫んだ。

「類人猿はただ肛門が発達して一種の胼胝になったに過ぎないが、この世界の人々は、内部が嚢状になっていて、あそこに一応下痢を溜めることになっているのだ」

「へへえ」

「そして満杯になれば、トイレその他適当な場所で流す。まあビルの地下汚水槽みたいなもんだな」

私はしげしげと四人の大グルメ人に眼をそそいだが、テーブルに隠れて、どういう案配になっているのかよく見えない。

ふと、私は首をひねった。

「しかし、あの中の小島先生など、お亡くなりになったなど私は生前聞いたことがない。おそらく例の大崩壊で私といっしょにこちらに来られたものと思いますが、もうお尻にタコが出来たのですか」

「地上の一瞬は、冥界では永劫だ」

と、ダンテ師がいった。

「また地上の永劫が、ここでは一瞬であることもある」

わかったようでわからない。私は眼を移して縁側のほうを見た。

なるほどそこに相対している二人の人物のお尻の下には、黒ずんだ植木鉢みたいなものが見える。

「あれはどなたで？」

「獅子文六と子母沢寛という小説家だ」

「ああ、そうでしたか！」

と、私は叫んだ。

あの「大番」の作家と「座頭市」の作家が、この美食地獄にいるのもふしぎではない。前者の「飲み食いの話」、後者の「味覚極楽」は、日本の味覚随筆の双璧だと私は考えている。

馬車がそちらに近づいた。

談論風発気味のこちらの四人にくらべて、この御両人は、庭の岩かげに作られたせせらぎに眼をやりながら、閑々たる雰囲気でこんなことを話していた。

「増上寺の道重大僧正のお話でございますがね」

と、「座頭市」の先生がいう。

「飯じゃがね、これは冷たいに限る。炊きたては歯にもよくないし、食道にもよくない。おまけに飯そのものの味もない。本当に飯の味が知りたいなら、冬すこし凍っているくらいの冷飯へ水をかけて、ゆっくりゆっくりと沢庵で食べて見ることじゃ――と、こうでござんす。

この話を聞いて試してみたのが病みつきで、私なんざゃ三十年来、飯は冷飯です。寒中冷飯

に水をかけて沢庵で、なんて境地まではゆかないが、絶対熱い飯は食いません。その代わり、少しかための冷飯に、よくだしのきいた、舌の焼けるような味噌汁、それも何も実のはいってない空汁、これが私の一番の好物でござんす。およしなさいよ、熱い飯。……」

「いや、寒中、水をかけた冷飯、それはたしかに飯の味の極北でしょう」

と、「大番」の先生がいう。

「大和の山の中の寺でね、夏、水飯というものを食う。最も上質の米を選び、うまく炊き上げ、直ちに、清流のもとに運ぶ。この清流が、非常に冷たいのだそうですが、熱い飯をザルに入れて、たんねんに水でサラす。これは、小坊主の役らしい。飯粒が米にかえったように固く、透明になります。同時に、手オケに清流の水を充たし、ザルとともに、寺へ持ち帰る。それをすぐ食べる。冷たくなった飯に、冷たい水をかけて、食うだけのことです。オカズは、ナスのつけ物に限る。それ以外に、何か食うと、水飯がまずくなるといいます。これ以上に清浄な、もしくは厭世的な食物は、絶無でしょう。

で、私は、炊きたての飯とナスのつけ物を注文してるんだが、来たら、すぐにあそこの流れで冷やさせて見るつもりなんで。——」

と、あごで庭をさした。

「ここまで来ると、飢餓地獄のだれかに近いんじゃありませんか」

と、公爵がいった。

「いや、ちがう」

ダンテ師が首をふった。

「あの飢餓地獄——たとえば正岡子規氏など異常に大食だが、客観的に見れば量だけの粗食だった。ここはちがう。ここは美食の果てだからね。……ただ、しかし、あのせせらぎが……」

「なんです」

と、訊いたのは私である。

「みなの汚物を処理した下水なんだが……」

牡丹亭豊雄獅子文六居士が口ずさんだ。

「食道のトドのつまりは水の飯、かね。……」

そのとき、樹立の向こうを、酔歩まんさん、といった足どりで歩いてゆく影があった。陶然と口ずさむ声が聞こえた。

「湯豆腐やいのちのはてのうすあかり。……」

「久保田万太郎宗匠じゃありませんか」

と、私は腰をのばした。その一代の名句と作者の名は私も知っていたのだ。

「では、彼のゆくほうへいってみるかね？」

と、ダンテ師がいい、霊柩車はまた動きはじめて庭へ出た。

いつのまにか、星岡茶寮には灯がともりはじめている。

ふとい、美しい松の生えそろった庭を、馬車はただよって、いくつかの座敷の前を通った。どの座敷にも何十人かの客が詰めて、けんめいに食べている。

その中で「……ウマイ！」「……ウマイ！」と、ひときわかん高い奇声を発している一室を、馬車をとめてのぞきこむと——電線の雀みたいにならんで坐った男女のむれが、一口食っては眼をつぶり、感にたえないようにいっせいに首をふり、やがてあけた眼をグルグルまわし、何とかのひとつおぼえのように「ウマイ！」と絶叫しているのであった。

テーブルの上には、日本料理、西洋料理、中華料理がゴミタメみたいに散乱してならんでいる。それをあれこれと見さかいもなく口に運んでいるのだが——その顔を見ると、みなテレビの料理番組に出てくるタレントの人々であった。

「彼らを笑うわけにはゆかない。性交と食欲の表現は、千篇一律にならざるを得ないからね」

と、公爵が皮肉に口をまげてつぶやいた。

その隅に、これは小さいテーブルを囲んでいる数人も見えたが、いずれも口ひげをたらし、怖ろしい仏頂面で、皿の上のものを、さもイヤそうに、ちょっと箸でつまんだり、スプーンで一匙なめたりしている。どうやらこれは世に料理評論家といわれる人々らしかった。

つと、その中の二人ばかりが庭に出て来て、そこにもあるせせらぎの上に腰を下ろした。あの植木鉢ようの器官を使ってである。

するとそこからの流れの黄色がひときわ濃くなった。これがあの大グルメ人たちのほうへ流れてゆくのにちがいない。「大番」の先生と「座頭市」の先生は、あれで水飯を食うつもりか知らん。

——その部屋だけは

中国風であった。しかも横浜南京街のいちばん上等な一室を、それだけ運んで来たような室内に——画集か何かで私も見たおぼえのある絵がかけられて、その下の朱色の円卓に、ここにも四人の人々が坐っていた。ああ、あれは梅原龍三郎の「北京秋天」だ。……

そして、その四人のうち、二人は老人であったが、その顔を見て私は驚いた。一人はその絵をかいた梅原龍三郎画伯で、向かい合っているのは谷崎潤一郎ではないか。そして、あと二人の初老の客は、たしかに松山善三・高峰秀子夫妻にちがいない。

二老人は背丈こそ差はあるが、どちらも堂々たる体格の持ち主だ。しかしさすがに老衰の影はおおいがたい。

谷崎老人がつぶやいている。

「こんな風に、いつも小便のカテーテルをとりつけられて、大便のほうは下痢ばかりしているような情けない身体になって、もう生きていてもしようがない。僕は小説が書けなければ、生きてもしようがないんだ。……」

「けれど、とにかくここへ牡丹ハモを食べにいらしたんですから、まだまだお元気ですわ。……」

と、高峰秀子女史がいたましそうに、が、励ますように、いう。

この御夫妻はそれこそまったくの御相伴である。地獄への御相伴とはお気の毒だが、御両人

ともグルメで知られ、かつ秀子女史に至ってはこの気むずかしい二人の偉大な老人お気に入りの女優として、死後これくらいのおつき合いはいたしかたないとあきらめていただこう。

「ああ、そうだ。牡丹ハモを食べに来たんだねえ」

谷崎はここへ来た目的を忘れていたと見える。が、眼をつむって、

「かつて僕は〝食べる名人〟と豪語したものだが、このごろは、食べるより食べることについて考えているほうが愉しいんだ。たとえばハモの吸い物でも……僕は、吸い物を前にして、椀が微かに耳の奥へ沁みこむようにジイと鳴っている、あの遠い虫の音のようなおとを聴きつつ、これから食べるものの味わいに思いをひそめるとき、いつも自分が三昧境に惹き入れられるのを覚える」

と、いった。

「日本の料理は食うものでなく見るものだといわれるが、こういう場合、僕は見るものである以上に瞑想するものであるといおう。……」

このとき、物凄い下痢の音がした。梅原画伯の腰掛けの下からであった。

腰掛けではない。御両人のお尻の下に、例の肉便器が存在していることにやっと私は注目した。植木鉢どころではない。それはよくある円筒形の陶製の庭椅子のごとく巨大なものであったから、かえってそれまで私は気がつかなかったのである。

大音響を発しつつ、しかし画伯は平然とタバコをくわえていた。灰が崩れて卓上に散っても意に介する風もない。といって、谷崎の言葉を聞いているようでもない。恍惚として、どこか

空中の幻影を凝視しているような感じであった。

と、彼は突然いった。

「パレットをよこしなさい。この二匹のウナギは……ウナギの位置を変えてくれ。早く、絵具を……」

松山夫妻がキョロキョロしているところへ、数人の女中がお盆を捧げてしずしずと現れた。谷崎の前には五個の大ぶりなお椀がおかれ、梅原の前には三個の重箱がおかれた。まんなかには、握り鮨を盛りあげた大桶がどんと鎮座した。ウイスキーやシャンペンもならべられた。

松山夫妻の前にはお椀と重箱が一個ずつおかれたが、二老人はちらっとそれに眼をやって、子供みたいにいかにもそれが気になる眼つきをした。

二老人はそれぞれのふたをとった。その表情と身体に、別人のような精気がよみがえった。

両人が特に注文したもので、谷崎は牡丹ハモの吸い物、梅原はウナギのかばやきであった。

――この茶寮では何でも出来るらしい。

二人ののどの奥から「うわう」というようなうなり声が発せられた。むろん梅原の口から火のついたままのタバコが床に落ちた。まさしく獲物に飛びかかる猛獣みたいに、二老人はそれぞれの食い物に飛びかかった。

牡丹ハモとは、ハモの肉に二十五筋庖丁をいれて骨切りしたものに葛粉を叩きこみ、おつゆの実にしたもので、椀の中に白い牡丹の花が咲いたような豊潤豪華な料理だ。谷崎は箸を回転させるように口に運び、音たてて汁を吸った。ハモの身を飛ばし、汁を散らした。吸い物の

おとに耳をすまし、三昧境にひたって瞑想するどころではない。

あばれ食いといった食い方は、ウナギの梅原も劣らない。生のままのウイスキーをキューッとあおると、これまた重箱の中へ鼻の先をつっこむようにして、タレを縦横むじんにはね飛ばしてむさぼり食った。

この両巨人は、芸術の世界ばかりではなく食の世界でも、節制もバランスもあらばこそ、ただ当人がうまいと思うものだけを無際限に食って長命した人物だが、その壮観を私は見た。

まさに百獣の王の食事である。——ただそのお尻の下の大きな肉便器には、盛大な下痢の音がドラムのごとくとどろいている。

みるみる谷崎は五椀の牡丹ハモを、梅原は三人前のかばやきをたいらげ、それぞれシャンペンとウイスキーで一息つくと、ついでまんなかの鮨にハッタと眼をそそぎ、猛然とこれをつまみ始めた。……

と、そのとき、そこへ、千鳥足ではいって来た者がある。

さっき庭で口ずさむ声を聞いた——あれからどこを逍遥していたのか、まさしく久保田万太郎宗匠である。

「やあ、これは思いがけない組み合わせで——美食会ですか」

と、万太郎は眼をパチパチさせた。

「ああ、久保田君か。……いや、これはうまい」

梅原はふり返りながら、鮨をまた口に放りこんで、

「久保田君、この赤貝を一つ食べて見たまえ」

と、いった。

万太郎はややひるんだ顔で、

「いや、私はどういうものか、赤貝はだめなんで……」

「これはそこらの赤貝とちがう。梅原が推薦する赤貝だ。是非食べて見たまえ」

梅原龍三郎は圧服的にいった。

久保田万太郎はおずおずとやって来て、「それでは」といいながら赤貝の鮨を一つ口にいれたが、数秒後、「ぐおっ」というような怪音を発し、あわててハンケチをとり出して口をおおい、廊下へ駈け出した。

あっけにとられたようにこれを見ていた松山夫妻が、悲鳴をあげて立ちあがり、これを追っかけた。

久保田万太郎宗匠は

ハンケチを口にあてたまま、鶯張りの廊下を幾曲がりか駈け、あげくの果てに縁側からずでんどうところがり落ちた。

「先生……先生！」

「どうなすったんですか！」

ようやく追いついた松山夫妻に抱き起こされた宗匠は、口から泡を吹き、しかし介抱の手をふりはらうと、立ちあがり、ふらふらと庭の向こうへよろめいていった。

松山夫妻は茫然と立ちつくして、見送っている。

「君は知っていると思うが……あの人は、赤貝が気管に貼りついて窒息を起こしたのだ」

と、帳面を見下ろして、ダンテ師がいった。

貝で死ぬこと嘘でなき五月闇（さつきやみ）……ガラにもなく私に追悼の一句が浮かんだが、宗匠が聞いたら、もういちどのどをつまらせるかも知れない。

「あそこは食い物で死んだ人々の世界だ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

こんな一画が、こんな豪華な大料亭のすぐ裏側に存在していたとは奇怪だ。万太郎宗匠が消えたかなたに、どこか荒廃したような感じの大きな建物が浮かんでいた。

私の幼いころ、伝染病患者を収容する「避病院」というものが、村から遠いうらさびしい山中に作られて、すでにあの世の存在のように見えてうそ寒い感じに襲われたものだが、それと同じ印象であった。

そのまわりを、夕闇というより、薄い銀光をはなつ靄（もや）のようなものがつつんでいた。松山夫妻を立ちすくませたものは、あるいはその建物と靄のかもす凄惨の気であったかも知れない。万太郎宗匠はどこへいったかわからない。

しかし馬車はこともなげに、靄を通りぬけてその建物の中へはいっていった。

すると、こちらといれちがいに、白い海坊主みたいな大男が、両手に赤と青の大きなポリバケツをぶら下げて、酔っぱらいみたいな足どりで出ていった。

白い海坊主というのは、全身白ずくめの上に、顔まで真っ白に見えたからだ。そして、その足もとから、黄色いような液体がヌルヌルと地上に筋をひいてゆく。

「あれは？」

「あれは、ここの主人だが……肝臓ジストマで慢性下痢をやっているのだ」

と、ダンテ師が答えたが、このときは私はよく意味がわからなかった。

「ここは別館になっている。客は食い物の中毒や、食い過ぎや、美食による糖尿病で死んだ人々が多いが、何かのはずみで料理屋で死んだ人々もいる。とりあえず、君が名を知っていると思う人々のところをのぞいて見ようか」

ラ・ロシュフコー公爵が意を体した風で、うなずいて駅者に伝えた。

外見は荒れ果てた感じなのに、内部はここも、各種の料理を食わせる部屋がつらなって、それぞれ料理がならび、客が食っているが——しかし、至るところ倒れている人影があった。しかも、廊下をはじめ一帯、嘔吐物でぬかるみ状になっている。

その中で客たちは、みんな平気で、かつ夢中のていで食事をしているのであった。あたかも屍山血河の戦場に数十日暮らしている兵士たちが、まわりの屍体や血に無感覚で飯を食い、排泄しているようなものだ。

——と、ある洋風の一室で、老人と中年の女性が向かい合い、そばに机をおいて三人の男女

がならんでいた。

「ほんとに大宅さん、遅いわねえ」

と、中年の女性がいった。

「こっちは正確に時間通りに来たのに何だというんだ」

と、相手の老人が、腕時計をのぞきこんで、憤然としていった。怖ろしくあごの角ばった人物だ。

「女性は小説家の林芙美子女史で、老人は漫画家の近藤日出造氏だ」

と、ダンテ師が帳面から顔をあげていった。

「ある雑誌社の『食前食後の食について』という座談会に来たのだ。ほかの男女はその雑誌社の記者や速記者だ」

漫画のみならず、辛辣な人物評で知られた近藤日出造が、口をとがらせていう。

「実は僕は大変なんだ。僕が主宰している『漫画』という雑誌がうまくゆかなくなって、借金だらけになって飯ものどを通らないところへ、こないだ息子がまだ二十五というのに、新宿のレストランでビフテキをのどにつめて窒息死した。……食前食後の食どころじゃないんだが、それでも約束だから来たというのに……」

「あらあら、それはそれは……そうなんですか。はじめて聞きました。私も朝日の『めし』の連載が始まったばかりで、ほかにも主婦之友も中央公論も婦人公論も連載があるし、そこへもって来て、きょうは『私の食べ歩き』という読み物の取材で、銀座の『いわしや』で鰯料理一

式を食べ、深川の『みやがわ』で鰻重を食べ、その足でこちらに向かって来たというのに……」

と、林芙美子女史がいった。

「大宅さん、どうしたかしらねえ。……」

「きょう午後五時東京着の汽車で、講演旅行からお帰りの予定だと聞いたんですが……ちょっと御自宅のほうへお電話してみましょうか」

と、記者の一人が急ぎ足で出ていった数分後に、

「やあやあ、お待たせ」

と、待っていた人物が、フーフーいいながらはいって来た。どういうわけか、南洋の酋長の衣裳をつけている。

百キロ近いのではないかと思われる肥満漢だが、両手に折詰様のものを十数個ずついれた網袋をぶら下げている。——まさしく評論家の大宅壮一だ。

「各駅停車の汽車に乗ったもんだから」

「あらまあ、どうして？」

「駅弁が買いたくてね」

大宅壮一は、二つの網袋をドサリと食卓の上においた。

「駅弁を……いくつ買ったのです」

と、近藤日出造が訊いた。

「一駅一個ずつ……三十個くらいかな。五つばかり食ってみたが、残りがこれだ。ここで食事しながら、食うことにしよう。いや、家に持って帰ると、家内にとりあげられるんでねえ。こりゃ食前食後じゃない。食中食だが……あははは」

そのとき、さっき出ていった記者が、息を切らせながら戻って来て、

「やあ、やはりこちらに直接お越しでしたか。ところでいま奥さまにきびしく申し渡されたのですが、先生はきっと駅弁を山ほど買いこんでるはずだから、絶対一個も食べさせないように、ほうっておくと体重が百キロを超えて命取りになるからって……」

といい、そこにある網袋を両手でおさえた。

大宅壮一はお菓子をとりあげられたダダッ子みたいな表情になった。彼は有名な恐妻家であった。

「では、そろそろ、お食事をしていただきながらお願いいたします」

と、女性記者がいった。

やがてそこへ、洋酒とビフテキの皿が運ばれて来た。——が、大宅壮一の前に出た皿には、山盛りの真っ黒なコンニャクだけであった。

「大宅先生、申しわけございませんが、これも奥さまのおきびしい御命令で……」

と、女性記者が頭を下げた。

大宅壮一はますますベソをかいた顔をした。

「お気の毒さま」

林芙美子女史は高笑いして、グイとビールを飲み、厚いビフテキをナイフで切って、大きな口にほうりこんだ。鰯料理を食べ、鰻を食べて来たというのに、そんなことを想像もさせない健啖ぶりだ。

「大宅先生はコンニャク、僕はコニャックを一杯。……コンニャクの感にたえませんが」

と、近藤日出造がダジャレをいいながら、コニャックを飲み、これもビフテキを頬ばり、角ばったあごで二度ばかり噛んだ。……そのとたん、彼はうっとうめいてナイフを取り落とし、どうと椅子からころがり落ちた。……と見えたが、これも実は例の肉便器の所有者で、それが横倒しになったのだ。

「まあ、どうしたの？」

林芙美子女史が立ちあがり、のぞきこんだとたん、いきなり胸をおさえて、これもドサドサと崩れ落ちた。そして床に何か吐きはじめた。

吐きながら、

「花のいのちはみじかくて……苦しきことのみ多かりき……」

と、声をしぼり出すのが聞こえた。

憮然としてコンニャクをくわえたまま大宅壮一は、かっと眼をむいて、この大異変を見ていたが、ふいにその顔色が変わって来ると、これまた家鳴震動させてころがった。

「近藤日出造画伯は

脳溢血だが、ひょっとしたらビフテキを口にいれたとたん、肉で窒息死した息子のことが頭をかすめたのかも知れない。林芙美子女史は心臓弁膜症の発作だが、あきらかに働きすぎの食いすぎだ。大宅壮一氏は動脈硬化による心不全だが、栄養失調による心不全といえるかも知れない。あんなに肥満していてもね。煎じつめると、これも食いすぎによる反動だ」

と、ダンテ師はいい、

「もひとつ、あっちの部屋をのぞいて見よう」

と、いった。

と、見る——たちまち、大広間にズラリと客と芸者がならんでいるのが見えた。

客は十人余りいたろう。芸者をひざに抱きあげている組もある。ここにこんな盛大な一画があるとは思いもよらなかった。三味線をひき唄を歌っている芸者もいるようなのにその音がまったく聞こえなかったのはふしぎだ。

座敷の入口に、

「汚食の間」

と、書いた標札がかかっている。

しげしげとのぞいてみると、客の前の高足のお膳には、それぞれお銚子と盃、あるいはビールとコップなどが見えるが、御馳走らしいものは何ものっていないようだ。

「みんな、汚食の来るのを待ちかねているのだ」

と、ダンテ師がいった。

「汚食？」

「やがてわかる」

「汚食とはしかし、どうもキタナイ感じですが——そんな食い物があるのですか」

「君の国には豆腐とか貴腐ワインとか、キタナイ感じの文字を食い物の名に使ってるじゃないか。人間は馴れればどんなことにも平気になるものだ。平気どころか、豆腐、貴腐ワインのように、その文字あってこそかえって美味な感じを与える」

と、ラ・ロシュフコー公爵が面白そうにいった。

「あの連中には汚食という文字が、文字を見ただけでヨダレが出て来るほど食欲をそそるのだ」

「あの連中は何ですか」

「日本の代議士たちさ」

馬車はそこを通りぬけた。

すると、その向こうに、これもこの建物にこんな一室があったかと首をひねるような、荘重古雅な間があった。

そこのいわゆる上段の間に、ふとり気味の老人が坐り、手前にこれまた老人が、きわめて恭敬のおももちで向かい合っていた。

後者は洋服にネクタイというあたりまえの服装だが、驚いたことに前者は、白髪をチンマリとマゲにゆっている。

「なかなか料理が来ぬな。さすがの荘八も、はじめての南蛮料理ゆえ、思うようには参らぬと見える」

と、上座の老人がいった。

「ま、わしは鳴くまで待とうをもう一つの人生の要諦としておるから、待つには馴れておるが、何しろけさから鷹狩りに出ておったゆえ、ひとしお空腹での」

「私も待ちの政治を信条として参りました」

と、下座の老人がいった。

「徳川家康公と佐藤栄作元首相だ」

ダンテ師がささやいた。——私は、あっけにとられて、声もない。

「さればよ、それでわしはそちを、あの諸侯の中から特に呼んだのじゃ」

なおダンテ師が帳面を見ながらささやくところによると——どうやらいままで、この御両人は、民というものは生かさず殺さずが政治の妙諦だ、ということで大いに共鳴し、さてその線で税金をしぼりあげる手段と限界について語り合い、こんこんとして興味がつきなかったらしい。——ダンテ・ノートには、ここに住む人物の数分前の会話も書かれていると見える。

家康は栄作に、親愛の情のこもった眼を投げて、

「わしの世代は鷹狩りじゃが、そちの世代はゴルフじゃな。やっとるか」

「は、やっております。私のあとをついだ田中角栄君ほど熱心ではありませんが」

「ああ、闇の太閤とかいわれた男。——似ても似つかぬと、ほんものの太閤が怒っておったぞ。……天下を司るものは、趣味はほどほどでなければならぬ。度を過ごすと、北条高時の田楽闘犬のたぐいとなる」

家康は首をふり、

「わしなどは、鷹狩りを趣味道楽と考えてはおらぬ。筋骨を使い、空腹を招くためじゃ。筋骨を使えば快眠し、従って閨房のことにも遠ざかることになる。空腹に至っては、最大の美味のもとじゃ。——ところで、まだ荘八の料理は来んか？」

そこへ、徳川家出入りの豪商山岡屋荘八が、侍数人に、待ちに待った料理を運ばせて現れた。それはここの調理場を借りて、甘鯛をカラアゲして、それにニンニクを擦ったものをかけた料理であった。

「おう、これはうまい！」

家康は舌鼓を打った。この人物が、これほど大声をあげるのは珍しい。

「荘八、まだあとがあるか？　あるならここな栄作めにも相伴させてつかわせ。ううむ、これはうまい！」

佐藤栄作の前にも膳が出された。

「なるほどこれはたまらん味でござりまする。新喜楽どころではござりませぬ！」

口ひげをなでて大満足のていの山岡屋荘八の眼前で、家康と栄作は夢中になって鯛のカラアゲをむさぼり食った。

と、家康が五匹目の鯛に、佐藤栄作が三匹目の鯛にとりかかったとき——突如栄作が箸を落

とし、そのまま右こぶしで、がんと膳をたたいた。割れた皿から鯛がはねあがった。
「これ佐藤どの、御乱心なされたか！」
と山岡屋荘八がさけび、武士たちが片ひざたてて刀のつかに手をかけたとき、栄作はどさっと右方向へ倒れた。
が、すぐに首をもたげ、
「ちええ、かかる料亭で落命するとは、政治家として一期の不覚」
と、団十郎のごとく大目玉をむいて起ちあがろうとしたが、またどさっとこんどは左方向へ倒れた。
山岡屋荘八があわててかけよって抱き上げ、
「佐藤どの、佐藤どの、いかがなされたか！」
と、ゆさぶったとき、上段の間で、さすがにめんくらった表情でこれを見ていた家康が声をかけた。
「股ぐらに手をあてて見よ。濡れておらぬなら心筋梗塞、垂れておるなら脳溢血じゃ」
「あ……濡れております！」
「それなら、脳溢血じゃ。しかもその目玉がどこを見ておるかわからんところを見ると、そら、もういかんな」
と、保健学の大家でもある家康は的確な診断を下し、
「しかし、元亀天正あるいは慶長元和の大将なら知らず、昭和の政治家なら、高級料理屋で

死ぬことはまことに死所を得たというべきではないか？」
と、いって、あとは神色自若として五匹目のカラアゲにとりかかった。
侍臣たちが佐藤栄作の遺骸を運び去り、家康が六匹目のカラアゲを口にくわえたとき——しかし彼は、左手で腹をおさえた。
「はて、腹中が面妖であるぞ」
と、かしげた首が、みるみる赤くなり、青くなり、たちまち、
「アイタタ、アイタタタ」
いったかと思うと、膳の上にげえと盛大に吐瀉した。
「あっ、これは天下の一大事。いかが遊ばした、大御所さま！」
山岡屋荘八や侍臣たちが、ころがるようにかけよったとき、家康はあおむけにひっくり返り、亀の子のように手足をちぢめてもがいていた。……
「こんどはこの茶寮本館の厨房へいって見よう」
と、ダンテ師がいった。

これは私の知っている

ホテルやレストランの——いつかテレビで見た——キッチン風景ではない。
しかし、同様に壮観ではある。

広大といっていい調理場の二面をつぶした棚には、ガラスを通して皿や銀器がきらめいている。気が遠くなるほどの量の膳椀の漆器が重ねられている。一面には冷蔵庫がズラリとならんでいる。また一面の一部には、天井から壁泉のように水がながれ落ちている。

その中に右往左往している料理人は、五十人くらいあろうか。魚を裂いている者、野菜を煮ている者、飯を炊いている者——肉を解体している者は壁泉の下だ。菓子まで作っている者もある。

その服装が、帽子、上衣、ズボン、みな白一色で、おまけに白足袋をはいている。床はタイルの上に簀の子をしいてあるが、足袋ならすべらず、音をたてず、床が汚れていれば足袋でわかるからだろう。

その一段高いところに、曲彔みたいなものに坐って大音声を発している者があった。

これまた白ずくめの大入道で、これがいちいち名を呼んで叱咤するたびに、調理人全体が機のように動く。まるで料理オーケストラの指揮者のようだ。

「北大路魯山人という人物だ」

と、ダンテ師がいった。

「パリのトゥール・ダルジャンのシェフも、これほどの権威は見せないだろう」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「もっともムッシュー・ロサンジンは、トゥール・ダルジャン名代の家鴨の血煮を注文し、あそこの自慢の鴨を煮つめたソースを拒否して、日本から持参したソイ・ソースとワサビを持ち

出し、二本の箸で食べたという豪傑だそうな」

おや、さっき別館から出てきたのは彼ではないか。あのときは何だか酔っぱらったみたいにフラフラしていたようだが、いま見る魯山人は魔王さながらだ。

分厚いべっこうぶちの眼鏡と耳の大きさがまず目立つが、顔の造作それぞれが大きく、そのすべてを動員して怒号しているのだから、大怪物といった印象である。

「あれは天才の相貌だ」

と、ダンテ師がいった。

「まさに天才だったらしいです」

と、私は答えた。ラ・ロシュフコー公爵がいう。

「日本人に天才はいないという話だが……」

「まあ、天才の芽を持って生まれて来る人間もいないわけじゃないでしょうが、日本人は外側からその芽をむしりとってしまうんです。そんなものは一族ひいては民族の『和』にさしさわりを来たすんでね。アイヌを除けば島国の単一民族だから、それで和を保つことが可能で、かつ和を保つのに最も有効な方法なのです」

「天才は強烈な独創力と、非妥協的な個性の混合物だからね」

「同じ理由から、かりに天才であっても天才らしくふるまうことは許されない。……その中で、北大路魯山人は珍しく、その日本的呪縛をひきちぎって天才らしくふるまった天才的人物だったようです」

と、私はいった。

「篆刻と料理と陶芸……はじめ看板書き看板彫りから出発して、その仕事で料理屋に出入りするようになってから料理に興味を持ちはじめ、その食器を自分で作るようになった。……実は私はこれらの芸に不案内なので、彼がどこまで天才であったかよくわからんのですが、とにかくこの、つながっているようで飛躍した軌跡だけでも、ただものではありません」

それらの芸には暗いが、魯山人という人間は興味があって、私も彼の伝記は二、三読んだことがある。

「世間一般には一流芸術と認められなかったそれらの芸に、天才を発揮したということも独創的です。そして、そのそれぞれに、たとえば料理でも、味もさることながらその材料、組み合わせ、盛りつけに放胆無比の独創ぶりを発揮して人々の眼と胃袋を驚かせた」

「トゥール・ダルジャンの鴨とワサビ醤油もそれだね」

と、公爵が笑う。

「そうです、そうです。しかも彼は、同業者はもとより、いわゆる一流芸術家と目されている作家、書道家、陶芸家、建築家、造園家などを罵倒した。どんなに世にもてはやされている人物でも、彼が買ってない相手には、眼の前でそっぽをむいた。そればかりか、自分の都合次第で妻も子も友人も、冷酷無惨に放り出してかえりみなかった。……」

「つまり、天才の天才らしさというやつか」

「死に方も独創的だね」

と、ダンテ師がいった。

——はて、死に方？　そういえば魯山人も、何か食い物の食当たりで命を落としたというようなこと知っていたが、それ以上の詳しい知識は私にもあいまいであった。

「彼は、田螺という日本人もあまり珍重しない沼の中の巻貝や鮒をむさぼりくらい、肝臓ジストマという寄生虫の病気にかかり、病院へはいってもしばしば看護婦に平手打ちをくわせ、血尿血便のたれ放題という状態で死んだのだ」

「ああ、そうでしたか」

——いま、その魯山人のところへは、さっきからしきりに入れ替わり立ち替わり、女中がかけつけては何か訴えていた。

「やかましい、あんな寄生虫どもはあとまわしだ」

と、魯山人はどなる。

幻の馬車は近づいた。

女中とのやりとりから判断すると、どうやらさっき別館でちらと見た、「汚食の間」の代議士たちの督促が急らしい。しかも、ここで、椅子テーブル式ではなく、日本式にあぐらをかいて、トゥール・ダルジャン以上の鴨料理を食わせるという魯山人の豪語でやって来たもので、早くその鴨を出せといっているようだ。

「えい、うるさい。それなら作ってやろう」

と、魯山人は舌打ちし、すぐうしろの壁沿いにおいてあった大きなポリバケツをとって、そ

の内容をいくつか手づかみでしゃくいあげて、そばの台にのせた。

黄褐色に、赤いものや黒いものがいりまじった泥のようなものだ。

これをいくつかにちぎり、たっぷりと厚く赤い掌でこねあげ、ヘラでかたちを整える。その頬は紅潮し、ひたいからは汗がながれ落ち、鼻からはフイゴのような鼻息がもれる。

もとから存在していた色彩を利用して、みるみるそこに焼いた家鴨としか見えないかたちと色つやをおびた肉塊が幾つも出来あがってゆく。

一方で調理人に赤いポリバケツの内容を煮立てることを命じた。これはドロドロしたソースようのものであった。

やがてそれに胡椒(こしょう)その他の調味料を幾種類か入れ、スプーンでひとさじすってみて、

「材料のヘドとクソはそれぞれよく吟味してあるから、いい味が出ている。とくにきょうは血便のいいのがあったから、これで血の煮こごりを作れば、トゥール・ダルジャンもはだしで逃げ出すだろう。あそこの客たちに食わせるのは惜しい」

と、舌打ちだか舌鼓だかわからない音を立てた。

やがてその肉塊ようのものや血の煮こごりようのものを銀器にのせ、銀の鍋やアルコールランプなどといっしょに、美しい女中たちが次々に運んでいった。

私は息をのんで——いや息をとめてこの光景を見ていた。あのポリバケツは、魯山人みずから別館から運んで来たものに相違ない。ダンテ師が「汚食の意味はやがてわかる」といった言葉を思い出して、こちらも胃の粘膜が波打ちはじめた。……

「次へ——」

と、ダンテ師が命じた。

酩酊の地獄

（へべれけのインヘルノ）

霊柩車はまた町へ出た。

いつのまにかまた昼になり、大通りには、依然として化粧まわしだけの大群衆が、ひたすら食いつつ、ひたすら垂れつつ、雑踏して歩いていた。

それに逆行して町の外へ向かい、大きな河のほとりに出た。

黄色くにごった河であった。見ると下水さながらの汚物まじりの流れだ。が、悪臭というより、かいだだけでも頭がふらりとするくらいアルコールの匂いが鼻をつく。

「これは、いまのあの飽食地獄から流れて来たものですか」

と、私は訊いた。

「それもあるが……」

と、ダンテ師が答えた。

「酒樽山からも流れて来るので、こんな匂いがしているのだ」

「酒樽山？」

「この河を境に酩酊地獄にはいる。——見えなかったろうが、いま別の泡世界にはいった。ほら、向こうに見えるのがそれだ」

馬車は、いつのまにか茫々たる大平原にはいっていた。

その果てに、小さく——しかし中腹に漠々たる灰色の雲までたなびかせているから、あきらかに相当な高さを持った山影が見えた。その山のかたちが、なるほど見ようによってはビヤ樽みたいに見える。そして、それが薄い蒸気のようなものを立ちのぼらせていた。

「あの山がね、見る角度によって、ウイスキーの樽ともワイン樽とも、あるいは日本の酒樽のようにも見えるのだ」

と、ダンテ師が笑いながらいった。

「それが実に奇妙な山で、山頂に大きな火口があって、そこから熔岩を四方に溢れさせているのだが、やがて冷えた熔岩が不断の雨に溶かされて地中にしみこむ。それが地下水となって移動する間に、地質と温度のせいでアルコールに変わってしまうのだ」

「ほほう」

なるほど温泉にも硫黄泉とか炭酸泉とかアルカリ泉とかあるのだから、アルコール泉なんてものがあってもおかしくないかも知れない。

「しかも流れる方向によって、ワインそっくり、ウイスキーそっくり、ウオツカそっくり、サケそっくりの味を持ち、それが地上に現れると無数の大河小河となる。——その地帯の水はすべてがいわゆる酒なのだ」

「へへえ、それでもそこは地獄になるんですか。聖書で、乳と蜜の流るる郷、という文句を見たおぼえがありますが、そこも、それ以上の天国じゃありませんか」

「事実、天国から来た酒仙のような人々もいる。例の大崩壊で混じりこんでしまったのだ」

と、近来の地獄に詳しいラ・ロシュフコー公爵がいった。

「そこは、地上からの蒸気が雲を作るせいか、降る雨さえもアルコール気をおびている」

「天国か地獄か、要するに酒で一生を、あるいは生命をすら支配された人々の棲むところだ」

と、ダンテ師がいった。

そのとき私は、地平線の果てにつづく黒い線を見た。しばらくして、どうやら人間の行列らしい、と気がついた。

「これはいかん」

公爵はマイクをとって、

「おうい待て、そっちはロシア人の方角だ」

と、駅者のラスプーチンに注意を喚起した。

「なに、久しぶりにウオツカが飲みたい？　いや、あっちはウオツカがあるだろうが、飲ませてくれるのはコップ一杯だけだよ。日本之部へいったってウオツカはあるだろう。そっちのほうがたっぷり飲めるよ」

と、マイクで話してから、

「あの行列はねえ、一九八〇年代、あんまりロシア人がウオツカを飲みすぎてノルマの成績が悪いってんで、制限された時代の連中だ。あちらにウオツカの小さな湖があるんだが、この地獄にも自動小銃を持つＫＧＢがいて、一人コップに一杯ずつという制限つきで飲ませてるんです」

「ほう」

「そのまた向こうへゆくと、一九二〇年代の禁酒法時代、アルコールの禁断症状のままこの世

を去ったアメリカ人の行列がある。そこはアル・カポネやその一党のギャングたちが、二挺拳銃で支配してるんですが」

といってから、公爵は嘆声を発した。

「しかし、酒を禁じたり制限したり……アメリカという国とロシアという国は、国家としてよくまあそんな突拍子もない法度を作ったものですなあ。正気の沙汰とは思われない。……そんな狂気を内在させた国民が世界を支配しようとは怖ろしい。……アルコールを一切禁じたイスラムに至ってはいうも愚かなり、そんな戒律に従う国家が現存するとは、これこそ現存するインヘルノですね、ねえ先生」

「まったく同感だ。それにしても神は、どうして飲み助の地獄を作り給うたのか。……」

ダンテ師も嘆息した。

いうまでもなくラ・ロシュフコー公爵とダンテ師は、ワインを水代わりに飲むフランスとイタリアの人である。

ダンテ師は浮かぬ顔でいった。

「ま、イタリア人とフランス人の酩酊地獄はあるが、いまはこの日本人を案内するための巡行だ。日本人のほうへゆこう」

馬車は徐々に方向を変え、疾走した。

それにしても冥界は、全体として見れば無数の泡状の世界から構成されているということだが、その泡のひと粒の広大さよ。

いつのまにか

まわりはぬかるみの大地に変わっていた。そして、いちじビヤ樽のように、あるいはウイスキーの樽のように見えたこともある酒樽山が、だんだん大きくなるにつれて、まさしく日本の四斗樽みたいな山容を見せて来た。

巨大な四斗樽の頂上から、もうもうと琥珀色の蒸気がたちのぼっているのが見えたのもしばし、われわれの頭上にはどんよりとした雲がたれこめ、やがて山形は見えなくなった。

と、窓の外に何やら飛んでいるものがある。どうやら蛾、蠅、蝶、その他昆虫のむれのようだ。それがただごとでない、おびただしい数だ。中に、煙のようにヒラヒラしているのは蝙蝠らしい。

——これはどうしたことだ?

と、なおガラスに眼をこすりつけた私が、この怪異を訊こうとしたとき、公爵がいった。

「着いた」

馬車は一つの町にはいろうとしていた。

うらさびれた町の通りの片側に、延々と行列がならんでいる。

それを見て、私の背に、反射的にいやあな感じが走った。ちょうど飢餓地獄で、戦後の闇市を見たときのように。

ならんでいるのは、ほとんど中年男ばかりだ。やはり戦闘帽をかぶり、くたびれた草色の国民服にゲートルを巻いている。みな馬車のゆく方向をむいてならんでいるので、先に何があるのかわからない。

数分おきに前から駈けて来て、また行列のうしろにくっつく男たちがあるが、手には何も持っていない。

そして、行列のあちこちには、巡査や憲兵らしい者が立って見張っていた。

「行列で、ロシア人を笑えませんね」

と、公爵がいった。

「これは何の行列ですか」

「国民酒場というやつだそうだ」

「あっ、なるほど——」

思い出した。思い出した。まさしくこれは戦争中の国民酒場の行列だ。

戦争中、日本人は実によく行列した。最も多いのは、むろん何かを買うための行列であった。行列と見れば、とにかく一刻を争ってならばなければ買いはぐれるおそれがある。だから何を売っているのか知らないでならぶものだから、葬式にくっついてしばらく気がつかなかったなどという話がある。

タバコを買うにも、朝暗いうちから、女房たちはおろか小学生までがならんでいた。亭主やお父さんのためだが、その女房連がタバコの味をおぼえて、パッパッと吹かしながら行列して

いたのは可笑しい。

その行列の中で、いちばん目ざましかったのが、町のあちこちに設けられた国民酒場と称するものへの行列であった。

酒場とはいうものの、コップ一杯の酒を飲ましてもらえるだけだ。闇で買う金と手蔓のないかぎり、もう世に酒というものがない時勢に、どうしても飲みたい人間はこれに行列してありつくほかはなかった。——日本にも、事実上の禁酒法にちかい時代があったのだ。

夕刻五時から店をひらくというのに、二時、三時ごろからもうならんでいる。

コップ一杯飲んでまだ足りないやつは、全速力で駈けてまた最後尾にくっつく。ところどころケンカが起こる。騒ぎをふせぐために巡査が、また流言蜚語を聞くために憲兵が立って、それがにくにくしげに舌打ちする。

「ガダルカナルでは兵隊が、あと一つニギリメシがあったらと、からっぽの腹をかかえて戦っているというのに……」

「このヤロードモ、こうまでして酒が飲みたいのか！」

夕暮れの中にそれをどこ吹く風と聞きながしている行列の顔は、すべてうら枯れた中年男ばかりであった。

当時まだそれほど酒を必要としなかった青年の私は、通りすがりにそんな警官の罵声を聞いて、実はいささか同感であった。

しかし、同時に私は、彼らを亡者のむれのように眺め、これは一種の地獄風景だと感じていたが——いま、ダンテ師は哀れみをこめていう。

「ここにいるのは、生きているうちにコップ酒を、せめてもう二杯、三杯飲みたいものだと夢にまで見ながら、その後栄養失調や大空襲で死んだ男たちだ。……ここへ来ても彼らは、こんな酒の飲み方しか知らないのだ。ちょうど飢餓地獄の闇市でサツマイモにかじりついていた連中と同じように」

後年、スコッチを三日に一瓶はあける酒飲みとなった私は、いまにして彼らへの申しわけなさにひたらずにはいられなかった。

「次へ」

と、ダンテ師は命じた。

この地獄めぐりの

霊柩車の駈ける時間と距離はよくわからない。

またたく間に何千キロか走るような感覚があるが、こんどはすぐ、背中合わせになっている町へはいったようだ。

夕暮れか、雲がひくくたれこめているせいか——ここにも空中におびただしく飛んでいる虫のむれを通して、向こうに赤い灯のつらなりが見えた。

私はそれが赤ぢょうちんであることに気がついた。

「地球が消滅する前、日本人はいろいろな町を作った。日本人は先天的に都市を作る能力を欠いていると見えて、その多くは西洋の猿まねで、ろくでもない町ばかりだったが——ただ面白いことに、どんな形態の町でも、どこかに必ずあの赤いちょうちんをつらねた飲み屋の一画を作った」

と、ダンテ師が笑いながらいった。

「あれがないと、日本人は神経衰弱になるらしい。げんに赤ぢょうちんのない近代的な新都市を建設したら、たちまち自殺者が続出したというじゃないか」

私は、戦争が終わったあとの焼け野原に、まず作られたのが、闇市と赤ぢょうちんの飲み屋街であったことを思い出した。

私がそれを思い出したというのは、いま見る赤ぢょうちんの小路がそれにそっくりだったからだ。

馬車はその中へ入ってゆく。どの店もほぼ満員にちかいのに、その小路には何かしらんもの哀しさがただよっていた。それに、依然として虫が多い。

果たせるかな、ダンテ師がいった。

「ここは、日本の敗戦後、悪い酒を飲んで死んだ人々の地獄だ」

蜂の巣みたいに小さな店々は、店ともいえないバラック建てばかりであったが、赤ぢょうちんの光の中で、男たちがコップ酒をあおっている。二十代三十代の男ばかりで、それがみんな泣きながら飲んでいる。

けんけんごうごう、しかもみんな泣きわめいているので何をいっているのかわからないが、ただいたるところ、これだけはひときわかん高く、「アプレゲール」だの、「レジスタンス」だの、「コミュニズム」だの、「サルトル」だのいう声が聞こえるので、

「まるでパリのサロンのようですな」

と、ラ・ロシュフコー公爵が笑った。

「いや、滑稽なようですが、いまにして思えばあれこそが、戦後の日本の文化の火だねだったのです」

「おや、あの中には、赤ワインを飲んでいる人々もあるようですが」

私はのぞいて、苦笑した。

「なに、あれは梅割りショーチューといって、ショーチューという日本産ブランデーに梅のジュースを混合させたものです」

梅割りなどはまだいいほうだ。私は当時こういうところでは、芋焼酎（しょうちゅう）のカスのカスからとったカストリという酒や、カストリにエチール・アルコールを入れたバクダンと称する怖るべき酒が常態であったことを知っている。それならまだしも、ときには、飲めば眼がつぶれ、心臓をとめてしまうメチール・アルコール入りの酒まで。

実は白状すると、戦後になると私も、カストリ、バクダンの愛用者であったのみならず、医療用のアルコール、はては苦味（くみ）チンキまでちょいちょい飲んだ。酔っぱらえるものであれば、何んでもよかったのだ。

あとになって、よくまあ死にもせずにすんだもんだ、と、ぞっとすることがあったが、なんだって？　ここにいるのはそのころ悪酒を飲んで死んだ連中だって？　見たところ当時の私と同世代の人間が多いようだが、それがこんなにたくさんいたのか？

直接の毒物のように即座に死ぬわけではないから、新聞にも出なかったろうが、せっかく戦争で生きのびた若者でありながら、あのころ悪酒で身体をこわし命を落とした人間は、たしかにこれくらいいたにちがいない。そして、それ以後に到来した飲み食いの天国を思うと、彼らが地獄で泣きわめいているのも無理はない。

——と、突然、しゃがれた声が流れて来た。

「黒死館はどの方向だ？」

そのほうへ顔をむけると、赤ぢょうちんのつらなる路地を、それに不似合いな異国の僧正（そうじょう）みたいな男が歩いている。

とがった黒い頭巾をかぶり、黒い長いマントのようなものを羽織っていたが、そのいずれもがあちこち裂けていた。——頭巾の中の顔は、しかしあきらかに日本人で、やせた、鋭い顔に眼鏡をかけていた。それが、

「だれか、黒死館へゆく道を教えてくれ。……」

と、もつれる舌でまた叫んだ。

足のよろめきかげんから見ると、赤ぢょうちんの一軒で飲んでいたにちがいないが、あの酔客の中では珍しく四十半ばの男であった。

が、ただ酔いのせいばかりでなく、何か眼が見えないようなあんばいである。かきさぐるように宙に泳がせる手が赤ぢょうちんの一つにぶつかり、蛾や蝙蝠（こうもり）のむれがぱっと飛び散った。

彼の姿をあとに、赤ぢょうちんのつらなりは次第にまばらになった。

「黒死館はどこだ？」

うしろで悲痛な声がまた聞こえた。

ダンテ師が帳面を見ながらいった。

「あれは『黒死館殺人事件』を書いた小栗虫太郎という作家だ。江戸川乱歩が、非ユークリッドの世界をユークリッドの言葉で表現した、と評したくらいで、ふつう人にはだれも理解できないが、とにかく傑作だということだ。……敗戦直後、メチール・アルコールが殺した、最も惜しい日本の天才の一人だった。……」

夜が

明けて来たような感じで、右手に巨大な山腹が見えて来た。あれがいわゆる酒樽山だろう。

方角によって、ビヤ樽ともウイスキー樽とも四斗樽とも見えると聞いたが、その岩だらけの山肌はありありと見えるのに、中腹以上は雲がかかっていて、頂上はまったく見えない。

繰り返すようだが、この馬車の走る時間と距離というのが時空を超越した感覚でよくわからないけれど、この場合は赤ぢょうちん街からほんの数分であったと思う。われわれは山麓のま

た新しい町にはいっていった。

ここの大通りにも、無数の人々が群れ歩いていた。それがみんな真っ赤な顔をし、千鳥足だ。いや、四、五人に一人は、ビール瓶やウイスキー瓶をラッパ飲みしながら歩いている。

大半が呵々大笑し、高歌放吟し、中には踊りまくっている者もある。むやみにころんでいる者もあれば、あちこち殴り合いしている連中もある。

ただ奇怪なのは、彼らの足もとにはかぎりもない虫がうごめいて、道そのものが動いているように見え、またその頭上にも無数の虫が飛び交わしていることであった。

そういえば、さっきの赤ぢょうちん街にも馬鹿に虫が多かったような気がするが、ここは、それどころではない、彼らの顔にも手にも、黒豆のように虫がとまっている。

「彼らはみんなアル中だが——それも無理はない。ここの河も水道も、区域によって種類がちがうが、ことごとくアルコールだ。降る雨さえも酒だ。ここには真水というものがない」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

私はちらっとまた酒樽山の下半身に眼をやった。そこから出て来る地下水がみなアルコールに変わる、とさっき聞いたことを思い出したのだ。

「さきほど見たのは、酒にかつえて死に、また悪酒を飲んで死んだ人々の地獄だが、ここは美酒に酔いしれて一生を誤り、または終止符を打った人々の地獄です」

と、公爵は説明した。

「水道をひねれば、水ではなくて酒が出る。どの家にも蛇口によって、数種のアルコール飲料

が出る。パンも酒で練り、飯も酒で炊く。料理はことごとく酒で煮る。風呂も酒、シャワーも酒だ」

「ううん、実は私も酒は飲みますが、そこまでゆくと、ちとどうも」

と、さすがの私も辟易した。

「排泄のほうも、小便はすべて糖尿かアルコール尿、大便は酒麹様か、酒粕様のものだ。——もっとも、たいていはいつも下痢しているがね」

「この虫は何ですか？」

「アル中の幻覚は虫だらけの世界だが——この地獄ではそれが現実のものとなっている。とにかく、下水も水たまりも、どこもかしこも糖尿とアルコールなんだから、虫も異常発生するのだろう」

こう話している間も、馬車のガラスには、無数の蠅や蛾や、はては蝙蝠までがうすい羽根をペタリと貼りつかせて、外界の光景がよく見えなくなるほどだ。

「そんなにみんな酔っぱらって、大丈夫なんですか」

「みんな酔っぱらってるのだから、大丈夫なのだ。ケンカしようが事故を起こそうが、加害者も被害者もことごとく正気じゃないんだから」

と、公爵が笑った。——私は嘆声をもらした。

「そういうことになりますか。それなら、これは一つの天国じゃありませんか。……」

「天国か、どうか」

と、ダンテ師が声をかけた。

「この人が知っている人々がいそうな店へ連れてってやりたまえ」

われわれの馬車は、大寺院のような唐破風のついた大きな建物の中へはいっていった。

それは巨大な

音響の空間であった。

何十本かの豪華な円柱の林立した中に、無数のテーブルがあって、そこで人々がさまざまの洋酒を飲んでいる。その外側にはズラリと風雅な和風の店がならんで、ここでは日本酒を飲んでいる。

その間を、あるいはボーイたちが銀盆にグラスを、または両手に大ジョッキを、あるいは紺のお仕着せに紅い帯をしめた娘たちがお銚子をお盆にのせて、忙しげにゆきかいしている。

そして中央には、百メートル四方くらいの広さの大プールがあって、いくつかの大噴水や円柱の下で、人々が湯につかっている。

壁の一面は舞台になっていて、そこではバンドが演奏している。いや、テーブルの客、温泉の中の客のすべてが口をあけて、それぞれ歌いまくっているのだ。

私の頭を、ふと、ミュンヘンの有名な大ビアホール、豪壮なホーフ・ブロイハウスと、イギリスの古都バースの、ローマ時代の遺跡の華麗な大浴場がかすめて消えた。……消えたのは、

ただここの空間には例の蝙蝠や虫の大群が充満していて、やはりふつうの歓楽の館ではないという印象を受けたからだ。

「まず温泉を見よう」

と、ダンテ師がいった。

馬車はプールの中へはいっていったが、むろんだれも気がつかない。

「あの噴水群は、それぞれ、酒、ワイン、ウイスキー、ブランデー、ウオツカ、その他ありとあらゆるアルコール飲料にわかれている」

と、ラ・ロシュフコー公爵が指さしながら説明した。

「あそこにあるのが日本酒の噴水だ」

その方角の噴水の下で、口ひげをはやした四十過ぎの男が朗々と吟じていた。

「白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり。……」

――あっ、若山牧水だ、と私は気がついた。同時にその顔はさくら色に染まっているのに、唇だけが水死人みたいに白くふやけているのにも気がついた。

「あの詩人は、若いころから一日一升、ないし一升五合の酒を絶やさぬ酒豪だったが、そこへもって来て詩の雑誌の失敗で借金だらけになり、その心配を忘れるためにいよいよ酒を飲みつづけている。だから、胃、腸、舌、唇、つまりあらゆる粘膜が白くただれているのだ」

と、ダンテ師が帳面を見ながらいった。

「肝硬変で死床についても酒を欲しがり、医者もあきらめておしまいにはもう飲み放題に飲ま

せた。……大変な残暑の中で死んだのだが、身体じゅうにしみこんだ酒のため、三日のちの葬式まで死に立ての鮮度を保っていたそうだ」

牧水はまた歌った。

「かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の夏のゆふぐれ。……」

考えて飲みはじめたとは思えない状況だが、酔うほどに前世の名歌が口をついて出るのだろう。そういえば、彼の歌の大半が朗唱向きであるのみならず、彼自身朗唱の名人であったと何かで読んだことがある。

「へへえ、そうでしたか。それはえらいもんですな」

といったが、人間だけは死んでからいくら鮮度を保ってもどうしようもないな、と思う。

「一方で彼は——人妻と恋し、失恋して苦悩のどん底に落ち、ついで純情素朴な処女を、彼にとってのマリアを見つけ出したように妻としながら、新婚早々、彼女が生活のためにけんめいに近所の遊廓の女たちの着物を縫うという内職に励んでいるのに、自分は相州の港町へ逃げ出して、そこの遊女を買い——うら若き越後生れのおいらんの冷たき肌を愛づる朝かな——なんて、いい気な歌を作っている」

「彼はその背信だけでもここへ堕ちる資格がありますね」

と、公爵がいった。

「といいたいところだが、しかし人間は、ことさらの企みより、心の弱さで裏切ることが多いものだ」

牧水はまた恍惚と歌った。

「ただ二日我慢してゐしこの酒のこのうまさはと胸暗うなる。……」

すると、すぐ近くの水面が——いや、酒の表面がブクブクと波紋をひろげて、にゅっと大入道の頭が現れた。

つんつるてんの頭から

ザーッと酒が流れ落ちると、彼は幾百千のしずくを散らして首をふり、まず大風呂のふちをそっと見た。湯から出て来たというのに、大きな黒ぶちの眼鏡をかけている。

そこには、四、五人の男たちがビールのジョッキ片手にチェアに腰を下ろして、酒の噴水を眺めていたが、浮いて来た海坊主を見ても特別の反応は見せない。

彼は安心したように、若山牧水のほうに顔をむけて、

「さっきから聞いていたが……お前さんの歌は御詠歌だ。ゲ、ゲーイ！」

と、にくまれ口をきいた。

「そんな歌は詩じゃない。詩というものはな、ゲーイ、こういうもんだ！」

といって、彼もまた朗吟しはじめた。

「ある晩　唄をうたひながら歩いてゐると　井戸へ落ちた

HELP! HELP!　と叫ぶと　たれかが綱を下ろしてくれた

自分は片手にぶら下げてゐた飲みさしのブランディびんの口から匍ひ出してきた」

はてな、あの詩は何だっけ？　あの男はだれだっけ？

「あれは佐藤春夫という文豪から、アラビアンナイトの荒唐無稽をまんまと一本のシガレットの中に封じ込めた詩人、と評されたイナガキ・タルホという作家で、いまの詩は彼の『一千一秒物語』という散文詩だ」

と、ダンテ師は帳面をのぞいていった。——ああ、そうであったのか。

「文豪からそんな讃辞を受けた人物だが、彼はアル中のため三十代のはじめにはもうほとんど何も書けなくなっていた。何もしないで、ただ自分の著作だけを手垢でスリ切れるほど愛読し、ほかの作家を罵倒して生きているだけだった。……漱石鷗外は書生文学で、川端康成は千代紙細工で、小林秀雄は夜店のアセチレン燈で、永井荷風は三味線ひきで、三島由紀夫は生きているときから生首だったといってのけた。自分を賞揚してくれた佐藤春夫に対しても、天国や地獄も玄関払いするマヤカシモンだと悪たれ口をきいて、佐藤春夫から玄関払いを食わされるに至った。……」

「わっ、そうでしたか。そりゃ、ソートーなもんですな」

「それでもなんとか五十くらいまで生きて、あわや窮死の状態にあった彼を救ったのは、京都のお寺の少女保護施設の主任をやっていた女性だった。彼女は、少女五十人を救うより、このアル中の老天才を救ったほうが意義がある、とある人にいわれて彼を夫とした。……」

酒場の中で、海坊主は飛びめぐる蝙蝠や虫をはらいながらどなっていた。

「なにが幾山河越え去りゆかば寂しさの、だ。越え去りゆかば酒と女、果てなむ国ぞけふも旅ゆく、だろう、ゲ、ゲーイ！」

牧水はこれも虫や蝙蝠をかきはらいながら、多幸症みたいな顔で朗吟していた。

「白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ。……」

ダンテ師はつづける。

「この慈愛にみちた妻は、飲んだくれの夫に幼児のような魂を認めて、至れりつくせりの面倒を見た。それなのに夫のほうは、彼女を無知だ、低級だと罵倒した。のみならずやがて彼女が子宮ガンで入院すると、顔を見ると酒がまずくなるといっていちども見舞いにゆかなかった。そして妻の棺桶を横目で見ながら、このエゴイズムの肉塊のような男は、あれは人の心を少しもわからん女だった、と舌打ちしながら酒を飲んでいた。……」

「これも一つの背信ですね」

と、公爵がいった。

「そのくせあの男は、シラフではじめての人間に逢うのを異常にこわがるのだ。特に、出版社の編集者を恐怖した。どうしても彼らに会わなければならない用が出来ると、その数日前から酒を飲みはじめ、その飲みっぷりは凄惨壮絶をきわめ、相手が現れたときは半死半生のていになっていた。……事実彼は、泥酔の極、危篤状態で何度も病院へかつぎこまれたことがある。……」

するとそのとき、また波音をとどろかせて、酒風呂の中から立ちあがった者がある。

浴場というのに、なんと網代笠に墨染めの衣という雲水姿だ。眼鏡をかけ山羊ひげをはやした六十年輩の男であったが、

「お前のうなったのは、あれは詩か。カッカカ」

と、笑った。

「ほんとうの詩はこういうものだ。聞いておけ」

と、いって、彼は呂律のまわらぬ舌で、しかし大威張りで、

「酔うてこほろぎと寝てゐたよ」

と、吟じた。吟声であったが、詩だか俳句だかわからない。

さすがの稲垣足穂も毒気をぬかれた態で、キョトンとこれを見ていたが、すぐに、

「お前はだれだ」

と、どなった。雲水は答えた。

「おれか。おれは種田山頭火という俳人だ」

これも名は知っている。一生、ひたすら飲んだくれて漂泊の旅をつづけた俳人だ。「分け入つても分け入つても青い山」「うしろすがたのしぐれてゆくか」「鉄鉢の中へも霰」「この旅、果もない旅のつくつくぼうし」などの無季自由律の句もいくつか知っている。

その山頭火は、

「ちんぽこもおそそも湧いてあふれる湯。……ゲェップ！」

と、また吟じて、ちんぽこあたりの湯を——酒を、手にしていた鉄鉢でしゃくって、ざあっ

と足穂の頭からかけた。

「何するか、この乞食坊主！」

と、稲垣足穂が狂乱状態でつかみかかると、

「やるかっ、酔っぱらって線路に寝ころんで、チンチン電車もとめた山頭火を知らないかっ」

と、雲水はわめき、酒風呂の中で両人は凄まじい酒煙をあげて大喧嘩をはじめた。

もっとも両人とも酔っぱらって、変にグニャグニャしているので、人間というより前世紀の爬虫類の格闘のようにシマリがない。

それでも数分ののち、稲垣足穂はやっと相手の網代笠を押し沈めて、

「ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム！」

と、意味不明ながら勝利の怪声を発して、浴場のふちの見物人のほうに顔をふりむけたが、突然別の何かを見たように、ざぶっと酒煙をあげて、自分もまた酒風呂の底へ、海坊主みたいな頭を沈めてしまった。

「はてな、編集者の匂いでもかぎつけたのでしょうか」

と、公爵がいった。

なるほど

浴場の向こうのふちに、二、三人の若い男たちが立って、酒風呂の光景を見渡していた。が、

浴場はひろく、しかもほかにも騒いでいる浴客は多いので、いまの喧嘩も眼にはいらなかったらしく、すぐに離れて大酒場の一画へ歩いていった。

そこの大きなテーブルをとりかこんで、一団の人々がウイスキーやビールを飲んでいた。その中央あたりの席で、ウイスキーの水割りを飲んでいた四十半ばのふとい黒ぶち眼鏡の人物が、

「じゃあ、おれはこれからちょっと香港へいって来るから」

と、ニコニコしながら立ちあがり、

「ここの支払いは帰ってからおれがする。三、四日のことだ。見送りなんかしなくてもいい。そのままゆっくり飲んでってくれたまえ」

と、いって、となりの女性をうながした。手には小さなカバンをぶら下げただけだ。

「あれは……」

と、私は眼をまるくした。死んだのは私より前だが、同時代人で私よりまだ若い人であったから知っていたのだ。

「梶山季之という作家だそうだ」

と、ダンテ師がいった。

唖然としているうち、梶山は五、六歩いってから、ふり返り、

「あ、もし女房から何かのアクシデントがあって電話で問い合わせがあったら——まあ、そんなことはないと思うけど——おれは伊豆にいってることになってるんだから、うまく話を合わ

せといてね」

と、もつれる舌でいって、片目をつむって見せてから、出口のほうへ歩いていった。足はむろん千鳥足だ。同伴者は、どこかのバーのマダムらしい女性であった。

「バイバイ、いってらっしゃーい」

と、編集者たちは拍手で見送った。

「梶山は、朝六時から夕刻六時まで十二時間、お茶代わりにビールを飲みながらぶっ通しに、毎日少なくとも五十枚は、豪快無比の悪漢小説の原稿を書き、そのあと銀座のバーに出かけて午前零時まで飲むのを習いとした」

と、ダンテ師は帳面をのぞいていった。

「それも一人では飲まず、必ず編集者を呼び集めたが、それが年に延べ二千人は超えたろうという。依頼された原稿は、どんな大量の、あるいはどんな急場の注文であろうとぜんぶ引き受け、必ず間に合わせる。その上、飲ませるだけでなく、知り合った人間には底なしの善意とサーヴィスのかぎりをつくした。日本の作家で、編集者に好かれた作家の随一だそうな」

「ああ、私の知ってるかぎりでも、編集者の評判はずいぶんよかったですね。——それにくらべると、私なんぞクソミソで」

と、私は頭をかいた。ダンテ師はつづける。

「きょうは出かけるとき、夫人が、ホテル？　それとも伊豆？　と訊いたのに対し、さあ、どこをさまようか、さすらいの旅に……なんて笑ってごまかしたが、夫人はむろんどこかのホテ

ルか伊豆にある別荘にいって仕事するつもりだろう、と思っている。あにはからんや、あんな美しい同伴者を連れて飛行機で香港なんかへ飛んでゆこうとは」

「これもやっぱり一つの背信ですね」

と、公爵が笑いながらいった。

私は訊いた。

「ここに、香港があるんですか？」

「香港どころか、ロシアもアフリカもある。地獄は無限だ。……梶山はすでに肺に大きな空洞のあいている身体だったが、このかりそめの浮気の旅先香港で、飲み過ぎによる肝硬変から食道静脈瘤破裂をひき起こして急死するのだ」

「しかし」

と、私は鼻を鳴らした。

「いま公爵が、背信とか何とかいわれたようですが、そんなかりそめの浮気で地獄へ堕とされるんですか？　その程度の背信ならそこらじゅう……」

「背信は、大いなる背信でも許されるものがあり、小さな背信でも許されないものがある」

と、公爵はしたり顔でいったが、

「いや、彼らはその罪によってここへ来たのではない。ここはあくまで、飲み過ぎで、何らかの形で人生を失った人たちの来るところだ」

と、ダンテ師はいった。

そのとき——そのときはじめて浮かんだことではなく、前から首をひねっていたことだが——私は重大な疑問を口にする気になった。

「ちょっとうかがいますが、この地獄で死んだ人はどこへゆくのですか？」

「それは」

と、ダンテ師はちょっと考えて、

「やがて君自身が身をもって知ることになるだろう」

と、うす気味悪いことをいった。

そして私がなお尋ねようとしたとき、ラ・ロシュフコー公爵が口を出した。

「わが国の哲学者モンテーニュがいった。あなた方は死に方など知らなくても、少しも案ずることはない。自然がその場で、あますところなく充分に教えてくれるだろう、とね」

あとになって考えると、

この大酒場のだれかれの言葉が、それだけの言語として聞こえたのがふしぎである。

それらの声は、駁者台とつながるマイクで馬車の中へ伝わって来たのだが、ガラスを透して見るかぎり、そこに波打つ酔漢たちは、みなあらんかぎり口をあけて、何かどなったり笑ったりしていたからだ。

が、馬車が動くと、それらの騒音がいっせいに耳にはいって来た。「月が出た出たァ」と歌

っているやつがある。「バンザーイ」と叫んでいるやつがある。ちょうど舞台になっているところの前のテーブルの数十人だ。

「あれは日本の代議士連中だ。だれかの激励会をひらいているらしい」

と、公爵がいった。

「や、代議士連はここにもいるのですか」

と、私はウンザリし、すぐに、

「いや、いてもおかしくはない。彼らはどこの地獄に出現してもふしぎではないが……ただ、酔っぱらって歌うと、いつまでも月が出た出たァだけじゃ困るな」

と、歎いた。

すると、その大雑音がすうっと消えた。そして、それとはまったく別世界のきれいな女の歌声が流れて来た。——その歌声にみな耳をとられて、彼らが静かになってしまったらしい。

「好きでお酒を飲んじゃいないわ
家にひとり帰る時がこわい私よ
あのドアを開けてみたって、あなたはいない
暗い闇が私を待ってるだけよ……」

正面に作られた舞台で、女性歌手が歌っていた。濃い化粧をしているが、四十半ばだろう。

「あっ、江利チエミだ！」

と、私は叫んだ。

そして私は、彼女の右手にきらめくものを見て、それがマイクじゃなくて、琥珀色の液体を満たした大きなグラスであることに気がついた。

チエミは、歌でひと息つく代わりに、グイとそれを飲んでは歌いつづける。声はマイクなしでも充分通る声量であった。

そしてまた私は、彼女が聴衆の中の一つの方角に眼をむけていることにも気がついた。

そこに一つぽつんと離れたテーブルに、一人の男が、ビール一本だけおいて坐っているのを見た。

「高倉健ですね」

と、私はつぶやいた。

「何ですか、それは？」

これはダンテ先生も御存知なかったらしい。まだ閻魔帳にのっていなかったと見える。

「元江利チエミの夫だった俳優です。ああ、そういえば江利チエミがあんまり大酒を飲むのが離婚の原因の一つだったという話を聞いたことがあります」

私はふとまた疑問をおぼえた。

「しかし、それが原因で離婚したくらいだから、高倉健が大酒飲みだとは聞いたことがありませんが……彼もまたここにいるんですか」

「ああ、それは……前にいったように、人間は死ぬと自分の個体のみならず、彼ないし彼女の全生涯、全過去を一つの泡につつんで冥界へ来るのだ。従って、その全生涯全過去の世界に存

在していた関係者もまたいっしょにひっぱって来られざるを得ない」
と、ダンテ師は説明した。
「これまでの地獄にもそんな人々が何人か登場したろう。しかしそれは影の登場であって、彼の本来の地獄ないし天国は別にあるのだ」
「はあ、すると一人の人間が、同時に別の地獄やあるいは天国に存在しているのですね」
「そうだ。ただ本来の存在と影の存在の差はあるがね」
ラ・ロシュフコー公爵がつぶやいた。
「かつての地球上の世界にも、まったく存在感のない、影としか思われない人間たちはウヨウヨいたじゃないか……彼らの本来生存すべき世界は別にあったのだ」
江利チエミは歌っていた。
「どうぞお店が終わるときまで
ここにおいて、ひとりだけで飲んでいるから
死ぬこともできず、今でもあなたを想い、
今日もひとり酒場で、泣いてる私……」
そしてまた、手のグラスをあおった。マネジャーらしき男が、かけつけて新しいウイスキーのグラスととりかえた。
彼女の眼がむけられている方角に、ようやくみんなも気がついたようだ。ざわめく声が起こり、二、三人がそのほうへ駈けていった。

「高倉君だろう。きみもひとつ何か歌ってくれ」
「カラジシボタンを一つ」
影の高倉健氏は首をふって、
「……不器用ですから」
と、ぶっきらぼうにことわった。
江利チエミは哀切の声をふりしぼって歌った。
「また長い夜を、どうしてすごしましょう
愛の香りも、消えたあの部屋……」
そして、ウイスキーをまたぐいとあおって、ひと息——突如、その顔がゆがむと、口から何かあふれ出した。と見るまに、身体を前に折り、姿勢を立て直そうと上半身をふりあげたとたん、こんどはあおむけにドターンと倒れた。
その口からなお吐物があふれ、頬から流れ落ちるのが見えたかと思うと、彼女は「シシカバブー……」というような声をもらし、全身をけいれんさせた。それも数分、やがて動かなくなった。
あまりにも思いがけないアクシデントに、一帯はしいんとした。
が、動かなくなった江利チエミの顔に、蛾のむれが舞い下りて来たのを見ると、いっせいに騒然としはじめた。
だれか、高倉健氏のほうをふりむいて叫んだ。

「どうしたんだろう、高倉君——見てやってくれ。君、ダーリンだろう」
「……不器用ですから」
と、影の高倉健氏はいって立ちあがり、孤独なうしろ姿を見せてそこを立ち去った。
ふいにしらけた静寂の空間となった舞台に、そのときドスドスと上っていった者がある。
「みなさん」
こちらを向いた顔を見て、私はぎゃっと叫びたくなった。それはまがうかたなき闇将軍田中角栄氏であった。
いまにして思えば、これはこの政治家を激励するパーティーで、江利チエミはその余興として出たものであったらしい。
「ロッキード以来、私に政治を、しきりにやめろやめろというむきもありますが……みなさん」
ダミ声の舌が、少々もつれている。これも片手にウイスキーの水割りらしいコップをつかんでいる。それをガーッと飲んで、
「私はやめないっ」
と、吼えた。あから顔がてらてらあぶらびかりして、
「ただいまの突発事を見てもわかるように、ゲェップ！　人間、ほうっておいても、天に召されるときは天に召されるっ」
眼がらんらんとひかり、凄まじい形相で、またガーッとあおり、

「召されない以上、たとえいくらまわりで石油罐をガンガン叩こうと、断じて角栄はやめないっ」
怒号したかと思うと、ふいに満面が朱に染まり、口から泡が吹き出し、コップを床にほうり出すと、これまたドターンと大音響たててあおむけにひっくり返ってしまった。
まわりで、ぱあっと薄い渦のようなものが巻いたのは、蝙蝠のむれらしかった。
「あの人物も、ロッキード裁判以来、飲み過ぎだとまわりから心配されていたのだ」
と、ダンテ師がいった。
「あれも本来の地獄は別にあるのだが……」
「へえ、するとあれは影の田中角栄ですか」
「影といっていいか、彼の場合、どの地獄へいっても存在感があるね」
と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。
舞台前面のテーブルに坐っていた代議士たちは、狂乱状態になって、なだれを打ってこの大椿事の場のほうへ殺到したので、あとはがらがらになった。それで、そこへ残ったきわめて異風の二人がこちらの眼にとまることになった。

どちらも羽織はかま姿だ。

一人はでっぷりふとって、ふといひげをはやし、頭はむろん刈っているが、腰に刀を差してい

る。もう一人はやせぎみで、細面で、いかにも知識人風な洗練された人物であったが、ただ頭にチョンマゲをゆっている。そのテーブルに札が立てられていて、「来賓席」とあるのを私は読んだ。

「こりゃただごとじゃなかな」

と、オンザロックのコップを宙にとめたまま、舞台の騒ぎのほうを見ていたひげの人物が心配そうにいった。

「おいと同じ……ありゃ脳溢血かも知れんぞ」

と、立ちあがろうとしてよろめいて、そばの椅子の一つを蹴倒した。

「およしなされ、そう御酩酊ではどうにもならぬ、黒田どの」

と、チョンマゲの老紳士があわてて、その袖をつかんだ。

「あれは明治の総理大臣黒田清隆と、江戸幕府の老中田沼意次だ」

と、ダンテ師がいった。

「ははあ。……」

はじめめんくらい、ついで私は首をひねった。

「黒田清隆と田沼意次が田中角栄を激励する会に来賓として来るというのは、まあわからんでもありませんが、それがこの酩酊地獄だとは……黒田はともかく、田沼意次がそんな大酒飲みだったとは知りませんでしたね。……あれも影の田沼ですか？」

「まあ、半分影だ。プライムミニスター・タヌマは、プライムミニスター・クロダほど大酒豪ではないが、あれでなかなか美酒の愛好家で、特にオランダ渡りの酒を好むそうだ。……それに彼がここに来たのは、ほかにも用がある」

田沼は黒田をとめてから、

「では、拙者、ほかにも用がござれば、これで失礼する」

と、席を離れて歩き出した。

黒田清隆はなお舞台のほうを見ていたが、

「あ、そうでごわすか。それじゃ、おいもいっしょにおいとま申そう。ウ、ウーイ」

と、そのあとを、千鳥足で追った。

「おい、いってくれ」

ラ・ロシュフコー公爵が、マイクで呼んだが返事がない。

ガラスの前面を見ると、いつもそこに坐っている駅者のうしろ姿が見えない。——と、二、三分して、彼がそこに這い上って坐るのが見えた。

「なに、いままでウオツカの噴水のところへいってたって？」

と、公爵が受話器を耳にあてていった。

「そりゃいいが、大丈夫かね？　大丈夫か、それならいまの二人を追っかけてくれ給え」

駅者が、プーッと口からアルコールの虹を噴くのが見えた。

ウワーンとこだまする大酒場の建物を出ると、雨がざんざん降っている。

出るとすぐ、田沼意次には中間らしい男が蛇ノ目を、黒田清隆には従僕らしい男が蝙蝠傘

をさしかけた。

気がつくと、田沼は高足駄だが、黒田は袴に靴をはいている。

外も、広い通りをへだてて、居酒屋がならんでいる。ただし赤ぢょうちんではなく、みな立派な——白壁に黒い柱、掛けあんどんといった重厚な作りか、あるいは西洋式のバー風で、ただのれんの向こうやガラス窓を通して、中で飲んでいる客が見えるから飲み屋だとわかるのだ。

「この雨が酒だ」

と、ダンテ師がいった。

「へへえ、これがみんな酒」

ここに降る雨も酒とはさきほど聞いていたが、屋根にも路上にもしぶく雨がことごとくアルコールとは、いくら酒飲みの私でも恐怖を感じざるを得ない。霊柩車のガラス全面に流れているのがみんな酒だと思うと、馬車は完全密封らしいが、こちらまで酔っぱらいそうな気がする。

「場所により時により、サケであったりワインであったりウイスキーであったりするが、とにかくアルコールの雨だ」

いま降っているのは、どうやら日本酒の雨らしい。

「雨が天から降って来るなら、酒場なんかへゆく必要はないじゃありませんか」

「なに、地球の上でも、特に日本など、自然にうまい水があるのに、わざわざミネラルを飲んでる者がうんとあったじゃないか」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「しかし——」

と、私はまた別の疑問を呈した。

「それにしても——そりゃ、ケンカしたり吼えまくったりしている連中もあるけど——意外にみなマトモじゃありませんか。他人の生命にかかわるような事故もないようだし」

「うん、それが何ともおかしな世界でね、みんなアル中だから、アル中の特性として、酒が切れると半病人になるが、アルコールがはいると元気になるのだ」

と、ダンテ師が苦笑した。

「だから私は、神がこういうかたちの飲み助の地獄を作られたことに疑問をいだいているのだが……」

と、いってから、首をふり、

「そうはいうものの、酩酊のインヘルノはある。いま君は、他人の生命にかかわるような事故もないようだが、といったが、やはりそれはあるのだ」

と、いった。

その眼は、往来をゆく黒田清隆と田沼意次にそそがれていた。

「黒田どの、実はこの店に待たせてある者がござるゆえ、それがしはここで」

と、田沼が立ちどまった。

「生蕎麦修羅場」

と、紺のれんに染め出した店の前だ。はてな、「砂場」なら聞いたことがあるが。——

「や、そばやでごわすか」

黒田清隆はそののれんをしばらく見ていたが、

「いや、それではおいどんも、しょ、相伴しもそ」

と、いった。

「あ……実はそれがしの用は、そばを食うことではござらんが」

「はあ、そうでごわすか。いや、おいどんは食う。いままでの、け、毛唐の酒は腸に沁みぬ。に、日本の酒で口直しせんとおさまらん。ことに、そばで一杯、とは、す、すこぶるオツなものでごわすぞ。ウーイ」

黒田は先に立って、のれんをかきわけた。田沼も、当惑した表情ながら、あとに従う。

馬車もはいっていった。

土間があって、一段高くたたみの大座敷になっている。そこではたくさんの客が坐って、そばを食い、酒を飲んでいた。その間を、赤いたすきをかけた女中たちが、四角なお盆に注文の品をのせて、いそがしげにゆきかいしていた。客はチョンマゲあり、ザンギリあり、江戸時代か明治時代かよくわからない。ただその頭上には、ここにも虫や蝙蝠が渦を巻いている。

「お、あそこがあいとる」

黒田清隆は、ついたての立っている一隅を指さした。

「まさか、かような入れこみの場所で」

ためらう田沼を、

「なに、おいどんはこげな庶民的なところが好きなんじゃ。き、貴公もつき合いなされ。ウーイ」

「いや、拙者は奥に用が——」

「よ、用なんぞ、あとになされ。それより先刻の、度しがたい新聞とやら瓦版とやらについての慨嘆、おいもほとほと同感じゃて。ゲエップ！　あ、あれについて、もっと談じもそ。さあ、おいでなされ」

酔っぱらい特有のしつこさで、田沼の袖をつかみ、しかし黒田清隆は酒を飲んでいる庶民風の連中の中を、

「ごめんなったもんし、ごめんなったもんし」

と、手で会釈しながら通ってゆく。薩摩で、西郷、大久保につぐといわれる大人物にしては意外な腰のひくさだ。

「あの男は、酔っぱらうと腰がひくくなる。限界に近づくといよいよひくくなる。その限界を越えると、突如大酒乱に変身するそうだ」

と、ダンテ師がささやいた。

「そろそろ限界らしいぞ」

黒田清隆と田沼意次は、ついたての向こうに刀を投げ出し、よろよろと坐った。

となりの席に、五十過ぎの、りっぱなひげをはやして、でっぷりふとった男が二人いたが、

膳の上に数十本の大徳利が林立し、大酔の果てか二人とも壁にもたれて眼をつぶり、大きく腹を波打たせているばかりであった。

女中が来ると、

黒田は、ザル二つと熱燗十本ほど持って来いと命じ、田沼は少し考えて、奥の何とかの間にいる伜の意知に、自分がここにいることを伝えてくれ、といった。

やがて女中が、注文のものを運んで来た。

このときはじめて気がついたが、ザルの上にのっているものが、ゾロゾロ動いているようだ——と、眼をこらすと、そばは灰色のみみずで、海苔は黒い毛虫で、ワサビは青虫をちぎってなすりつけたものであった。

が、それを見ても怪しむ風もなく、清隆はそばの猪口に熱燗の酒をドクドクそそぎ、ガボガボとたてつづけに、五、六杯空にして、

「おいが、し、私欲のために、北海道開拓の施設一切を、お、同じ薩閥の実業家に払い下げしようとしちょると？　ゲーッ」

と、すぐにわめき出した。

「いやしくも宰相の器を持つ人間が、て、天下国家以外のために動くとすりゃ、そりゃ糞ひりだけじゃ。ゲーッ、角栄どんがロッキードからワイロをもらったとしても、そりゃ必ず天下国家のためじゃろ、ゲーッ、それを国家経営の苦労を知らん下司どもが、いやしきかんぐりをもって鶏のごとく騒ぎ立てるとは——おいどんはきゃつらを、な、なで斬りにぶった斬ってやりたか！」

「いやまったく、ど、同感でござる」

むりに酒席にひっぱって来られた案配の田沼だが、この話になると昂奮を禁じ得ないらしく、

「私なども早くから蝦夷開拓の必要には心づき——それにつけても日本の、き、き、近代化を急がねばならんと、そのための事業費、人材養成費の捻出に苦労いたしたが、それを知らぬ、ば、馬鹿者どもが、やはり蛙のごとく騒ぎ立て……」

と、声ふるわせていい出した。

「それどころか、保守本流とか称する、ま、松平定信一派など、なんとか私を失脚させようと、たえず私の動静をうかがっておる。そ、それで、必要な会談場所も秘密に設定せねばならんようなわけで、きょ、きょうなどもこのそばやを借り、奥に伜の意知を待たせ、すきを見て、いまの、か、か、角栄どのの激励会に参ったような次第でござる」

「うむ、うむ」

うなずきながら、黒田が田沼の猪口にそそぐと、田沼は反射的にぐいとあおり、

「おお、そうだ、き、貴殿に紹介したい人物がある。いま奥で伜意知と要談中の男でござるが——平賀源内と申す男で——」

「おう、おう、ガフッ」

「要談とは――実は意知、いま若年寄の職にあるが、わが伜ながら、か、金作りの知慧にかけては父の私をしのぐばかりで――も、もっとも、きゃつ、ふしぎに酔っぱらってはじめて出て来る着想の一つでござるが――最近の吉原の繁昌ぶりを見て、こんど官営遊廓という、て、天のが、その、ひ、平賀源内と申す男で」

「ほ、ほう、ゲーッ」

「な、何でも和蘭の遊廓は、日本の遊廓の紅格子などとは趣を異にして、か、か、飾り窓とやら申すギヤマンの中で遊女を見せ、その他シャボン風呂やら回転寝台やら、さまざまな奇異なるしかけがある由、それらの設計図を持参して見せるという約束でござったが」

「ふむ、ふむ、ゲーッ」

「さて、先刻それがしも、ちょ、ちょっと会ったのでござるが、いかにせしや源内め、来たときからべろべろに酔いしれておって、かいもく話が通ぜぬ。そ、それできゃつの醒めるのを待って、それがし中座していまの激励会に出席したようなわけでござる」

「なるほど、なるほど、ガフッ」

「それはともかく、その源内という男、よ、酔っぱらうとすぐ刀をぬく酒乱でござるが――」

「なに、酔っぱらうと、すぐ刀をぬく、しゅ、酒乱――」

「それがシラフにもどれば、は、八面六臂の大才物、なかんずく物産学、鉱山学の大家でござれば、そ、その蝦夷開拓の事業などにはもっとも適任であると存ずる、ぜ、是非、使ってみて

下され」

「ふむ、な、なるほど面白か男のごたる。そ、そりゃ会うてみよ、ゲーイ」

と、黒田がまた猪口をさかしまにし、田沼が、

「も、もはや源内めも、そろそろ、正気にもどったころあいでござろう」

と、奥のほうをふりむいたとき、わっという騒ぎの声があがり、蝙蝠が渦まき飛んだ。

その向こうの襖がひらいて、一人の男が遠慮会釈もなく客を踏み散らして、踊りながら現れたのだ。

三十半ばの、長芋のように長い顔で、それが真っ赤になって、ゲラゲラ笑いながら、片手に紙をとじたものをふりかざしていた。

「意知――どういたしたか」

と、意次が叫んだ。

が、その男、田沼意知は稲妻型によろめきながら、手の紙を眼の前にかざして、怪しげな呂律で読みあげる。

「みんな聞け……面白いから聞いてくれ。いいか。……天に日月あれば人に両眼あり、地に松茸あれば股にかの物あり。その父を屁といひ、母をおならといふ。……よって字をヘノコといふ。男たる人ごとにこの物のあらざるはなし、その形大なるあり小なるあり、長きあり短きあり、白マラあれば黒マラあり、イボマラあれば皮かむりあり、そのさま同じからざることは人の面の異なるごとし。……アーッハッハッハ！」

彼は歩いて来る。踏み散らされながら、客たちはあっけにとられている。

「事なきときは首をたれて麑のごとく、事あるに臨んでは強きこと金鉄のごとく、熱きこと火炎のごとし。ぼぼの広きに入りて迷はず、尻のせまきを窮屈とせず、変化きはまりなきことあたかも竜のごとし。……イーヒッヒッヒ！」

「意知――な、なんじゃ、このアホダラ経のごときものは」

と、また意次が叫んだが、

「いや、これは源内めが、じょ、女郎屋設計図とまちがえて持って来たものでござる。酔いつぶれて、何としても起きぬゆえ、彼が持参した風呂敷をひらいて調べてみたら、こんな書きものが出て来た次第で――まさに抱腹絶倒の天下の奇文、まさに平賀源内ならではの天才の作でござるわ！」

意知は読みつづける。

「かの西行の、捨て果てて身はなきものと思へども雪の降る日はしたくこそあれ。……ウーフッフッフ！　春も立ちまた夏も立ち秋も立ち冬も立つ間に萎えるムダマラ……エーヘッヘッヘ！」

そのとき、

「女郎屋設計図はどこへいった？」

という声が聞こえた。

あいたままの襖のところに、刀を鞘のままぶら下げて、ふらりと一人の浪人風の男が立って

いた。

「あ、源内、やっと正気に戻ったか」

と、意知はいったが、

「そんな絵図面などはどうでもいい、こっちのほうが面白い」

と、また書きものを眼の前にかかげて、

「ああマラ骨の強き、カリの高きもボボとケツとに逢はざれば、すなはちいたづらに一本のセンズリをかくのみ。その起きんよりむしろ萎えんには。ナエマラの時義大なるかな！　オーホッホッホ！」

と、身体をくの字なりにして笑った。

「しゃあっ、女郎屋の絵図面を返せ！」

源内は駈け寄って来た。

五十あまりの、これも面長のしゃくれた顔を持つ男であったが、意知の人参みたいに赤い顔をしているのに対し、これは胡瓜のように青い。が、あきらかに酩酊の青さだ。

いちど客のだれかにつまずいてころんだが、立ちあがったときには、手にしていた刀をひっこぬいていた。

わっと叫んで、まわりの客たちは這いながら逃げようとする。

眼のすわった平賀源内は、その刀を高くかざして、

「ガフッ、日本武尊、東夷の糞マラどもをことごとく薙ぎ散らしたまひしより、ガフッ、こ

の剣マラ臭ければとて、糞薙ぎの剣と名づけたまふ、ガフガフッ」

正気にもどったどころではない、ますます乱酔の極の相だ。

そして、これまた酔っぱらってくの字なりに身体を泳がせながら笑っている意知のところへ近づくと、バッサリこれに斬りつけた。意知は血けむりあびて、四つン這いになった。

「あっ、刃傷じゃっ、殿中刃傷じゃっ」

絶叫したのはこちらの父親の田沼意次だ。眼をむいて立ちあがったとき——こんどは入口のほうから、まろぶように駆けこんで来たものがある。

「あなた——こんなところにいらしたのですか！」

黒田清隆は酔眼をむけて、

「おはんか」

と、いった。この混乱の中に、馬鹿に泰然として、

「どげんしたか」

「いまそこまで俥で駈けつけたところ、与平がこの店の入口に立っているのを見て——」

あえぎあえぎ、女はいう。まだ若く、大変な美人だが、どうやら黒田夫人らしい。与平とは、ここについて来た黒田従僕だろう。

「大変でございます。北海道官有物払い下げの件で、大隈派の人、四、五人が邸のほうへおしかけて来て——やがてこっちへ来ます。ピストルを持っている人もいます」

「なに、大隈派の刺客が？」

と、黒田はそばの刀を左手でひっつかんだが、尻はどしんとすえられたままで、右手でまた徳利をつかんで、こんどはドクドクとラッパ飲みをした。

黒田夫人はいざり寄った。

「いえ、刺客かどうか存じませんが、あなた、逃げて下さいまし、早く、早く」

夫人はまだ二十代に見えたが、のちに私が知ったところによると、彼女は元旗本の息女だが、あまりの美貌に、まだ十四、五歳のころ、江戸に進駐した薩将黒田が、強引に妻とした人であったという。

それを見すえて、

「し、刺客を案内して来たのは、おはんじゃろ？」

と、黒田はいった。

その眼は炎となり、はだけた胸のあたりも仁王のごとく染まっている。あきらかに「限界」を越えた相貌であった。

「だいたいな、おはんが、か、姦通しちょる事は、おいはちゃあんと知っちょるぞ。ゲーッ」

「ま！　何をおっしゃるんです」

「おはんが、おいの、し、し、死ぬ事を望んどる事も知っちょる。ゲ、ゲ、ゲーッ」

怒号すると彼は、はじめてぬうと起ち上がり、刀をひっこぬいて、なんたる錯乱か、いきなり袈裟がけに美しい夫人を斬り下げた。ここにも血けむりが、ぱあっと立った。

「ええ、どいつもこいつもおいを、しゅ、酒乱の無能漢扱いにしくさって——おいが、西郷、

大久保につぐ、だ、だ、大人物じゃちゅう事を認めんのか！　そ、そげなたわけども、みんなぶった斬ってくれるぞ！」

そのとき、足もとで、ガーッという音がした。

黒田は血走った眼で見下ろして、

「やっ……おはんは三菱の岩崎彌太郎じゃな？」

と、叫んだ。

そこにならんで、

眼をつぶったまま壁にもたれかかっていた二人の男のうち、手前の一人だ。紋付を着ているが、その猛烈に立派な口ひげのせいもあるが、清隆と瓜二つの顔をしていた。ただ、物凄い太鼓腹をして、それが波打っている。——

呼びかけられて、うすく眼をあけた岩崎彌太郎に、

「きさま、大隈の金蔓じゃが——こ、こげなところで、きさまもおいを見張っちょったか！　き、き、斬っちゃるぞ！」

と、血刀をふりあげた。

と、岩崎彌太郎は動きもせず、またガーッという怪音を発した。同時にその口から液体が奔騰して、黒田清隆の顔面にしぶきをあげた。

酒か、胃液か、吐物か、人間の口から出て来たとは信じられない、バケツ一杯くらいの量に見えたが、これをもろに顔面にあびせかけられ、よろめいたはずみに黒田はずでんどうと尻もちをついた。起き上がろうとして、吐物のぬかるみに足をとられ、こんどは刀を放り出して、また盛大に尻もちをついた。

「おう、せいせいした」

と、彌太郎はべんべんたる腹をなで、

「東洋の男児、われ岩崎彌太郎、ああ、成せるはいまだ胸中にあるものの二、三、しかも胃ガンに冒さるるとは天なるか、命なるか！」

と、鯨の遠吠えのごとくうめいた。

向こうでは源内が、ひょろつきながら、呂律のまわらぬ舌で、

「お、おれは平賀源内じゃない。貧家銭内だ！　ゲブッ、植物学から鉱物学、電気から天文学、西洋絵画から工芸品、浄瑠璃からポルノに至るまで、ゆ、ゆくとして可ならざるなき独創的大天才、ゲブゲブ、そ、それが夜も昼も、に、西へ東へ駈けずりまわっているのも、た、た、ただ貧乏のせいだ。あまつさえ、じょ、じょ、女郎屋の建物まで手がけなけりゃならんことになったのも、ただひたすら銭がないせいだ！　ゲゲブのゲブゲブ！」

悲痛そのものの詠嘆を張りあげていたが、その血走った眼がこちらにむけられると、

「やあ、いかにそこなる田沼意次、デデン、デンデン、そもそもナエマラの源内に、事もあろうに女郎屋の建築とや、かかる恥辱を与えたる、遺恨はらさでおくべきか、ゲーッ」

と、血刀ふるって突進して来た。

いま黒田の凶行を見たばかりの田沼意次は、さっきから腰をぬかしてもがいている。

そのとき、そのそばで、またガーッという声がした。

岩崎彌太郎とならんで壁にもたれていた、浪人風の人物だ。これまた力士のような太鼓腹を波打たせると天を仰ぎ、壮美な口ひげ、あごひげにつつまれた口をかっとひらくと、そこから吐物がほとばしり出た。

それはまるで消防ポンプの水のように、数メートルも噴出して、その距離まで迫っていた源内の顔面に飛び散った。

「ぶっ、ぶるるっ」

この眼つぶしに、客につまずいてころんだ源内は、これも吐物のぬかるみに尻もちをつく。

「おう」

こちらの人間ポンプは大息をついて、太鼓腹をなでて、

「剣禅一如とはこの境地か」

と、つぶやいた。

と、そのとき座敷の中で、カア、カア……と、鴉の鳴き声がした。見まわすと、驚いたことに、蝙蝠にまじって鴉が二、三羽飛んでいる。死の匂いをかぎつけて飛びこんで来たのかも知れない。

その人物は、眼をつぶったままつぶやいた。

「腹いたや苦しき中に明けがらす。……」

以上のめちゃめちゃな騒ぎを、馬車の中で私は茫然として見まもっている。——酒乱の狂態も、ここまで来るとまさに地獄だ。

「あれは山岡鉄舟だ」

と、ダンテ師がささやいた。

「見るがいい、あれはただ坐っているのではない。ザゼンを組んでおる。彼は、毎晩一升酒を欠かさなかったが、そのせいか胃ガンになり、さらに胃穿孔を起こしたが、最後まで横にならず、蒲団にもたれてザゼンしたまま死んだ男だという」

「ははあ、そうでしたか、さすがは鉄舟ですな」

「一方の岩崎彌太郎も、同様に斗酒なお辞せぬ豪傑で、これまた胃ガンにかかって、おしまいには一日百回も吐き、死んだあとでもまだ三、四升の吐物が口から流れ出すような最期をとげたという」

「ほほう、それでよく三菱を……」

と、いいかけたが私は、

「それで一体全体、この場はこれからどうなるのです？」

と、尋ねずにはいられなかった。

「さて、どうなるのかな」

と、ダンテ師は甚だ無責任な返事をして、また帳面をのぞきこみ、

「うん平賀源内は牢にぶちこまれて一ト月もたたないうちに牢死し、田沼意次は老中を罷免されて二年も経たないうちに病死することになるが……」

「それにしても人間は、酩酊すると心中のコンプレックスが手のつけようもないほど拡大して出て来るものだ。いまの黒田や平賀がそのいい例だな」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

私の訊きたいのは、今日ただいまこの場のなりゆきであったが、そのとき店の外でも、まるで戦争でも始まったような凄まじい音響と叫喚があがり出した。

「馬車を戻せ」

と、公爵が命じた。

こちらの「修羅場」を捨てて、幻の馬車は外へ出た。——

依然として雨は降りしきっている。そこに、それまでの修羅場どころではない、戦場のような光景がくりひろげられていた。

往来は、屍体の河だ。顔はつぶされ、胴体は切断され、手足はねじ切られ、臓腑ははね飛んだ、惨憺たる屍骸で埋まっている。

と、向かいの店々、たしかさっき居酒屋やバーだと見た店々ののれんや扉がいっせいにひらくと、中から人間のかたまりが飛び出して来た。殴られたか、蹴り出されたか、そんな感じであったが、それはあきらかにへべれけの集団であった。

それが、足もとの屍体につまずいてよろめき、起きつ倒れつしているところへ、向こうに轟音が起こると、車のむれが疾駆して来たからたまらない。——その数、何十台とも知れず、それがその酔漢たちを、片っぱしからはね飛ばし、タイヤに血と肉のドーラン化粧をしてゆく。

その車群が走り過ぎたあと数分して、また酔いどれの集団が吐き出され、こんどは先にいった車の大群がひき返して来て、これらも血と肉と臓腑のぬかるみに変えてしまった。

かっと眼をむいたまま、私は声も出ない。

「轢かれているのは、酔っぱらい運転で人を轢き殺した連中だ」

と、ダンテ師がいった。

「あの車に乗っているのは？」

「あれは酔っぱらいの車で轢き殺された人々だ」

この酸鼻な復讐レースの上に、雨はざんざんと降りしぶく。血の匂いをまじえた酒の雨が。

「先生、同じ酩酊の地獄でも、気分を変えてマルロメ城のほうへいって見ましょうか」

と、公爵が声をかけた。

「そうして見るかね」

馬車は血とヘドと酒の町を離れはじめた。

町を離れても、

酒の雨はますます強くなり、馬車のガラスをどうどうと洗って、しばらく外界はまったく見えなかった。

その酒の豪雨も、やがて次第に小降りになって来た。

雨は茫々とけぶり、野には陰鬱な、寂莫とした気がひろがっている。季節はわからないが、どうも秋の黄昏のような気がする。

その野を、トボトボとゆく馬上の人があった。

近づくと、鍔広の帽子をかぶり、黒い長いマントを羽織った、四十歳ばかりの、白皙というより蒼白な顔にチョビひげをはやした、病身らしい西洋人であった。

それが、手綱をとったまま、ひっきりなしにポケットから酒瓶をとり出して、口に運んでいる。奇怪なことに、帽子の上に一匹の黒猫が坐っていて、その黒猫の片目はえぐられて赤い穴をあけていた。

「ポーだ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「えっ？」

「やはりアルコール中毒で、最後は旅先の町の酒場の外で、ゆき倒れのように死んだエドガー・アラン・ポーだ」

ゆくてに河があった。その手前の岸に、二人の男女が佇んでいるのが見えた。

ポーはそれに馬を近づけると、空になった酒瓶を地に捨てて、

「あれがアッシャー家ですか？」

と、声をかけ、鞭で河の向こうをさした。

河は三十メートルほどの幅だが、流れている水は赤く透明にきらめいている。暗い雨天の下に、そのかがやきは美しく、また妖しかった。その上を、何十羽か、高く低く大鴉が飛びかわしていた。

「いや、ロートレック城だが」

と、訊かれた男は答えた。

これも手に酒瓶をぶら下げている。禿頭に蓬々たるひげ、眉が逆立ち、ひたいが飛び出し、頬骨高く、ちょっとオランウータンに似ている。体型までがそれに似て、それにボロボロの半外套をひっかけている。

河の向こうに、なるほど城――というのは大げさだが、小さいけれど塔のようなものもある、蔦とひびのはいった石作りの、古怪といった感じの建物が見えた。

「アッシャー家はこのあたりにある――前に聞いたそのたたずまいにそっくりだが……」

と、ポーは首をひねった。

「君、馬があるなら、あそこへ連れてってくれんかね」

と、禿頭にひげの男はいった。

「私が？」
ポーは河の上下を見まわして、
「連れてゆくったって、橋もないようですが」
「あったんだが、だいぶ前落ちてしまったんだ。その石の橋が河に沈んで、膝の下くらいひたすだけで渡れる道になっている。私は渡れるが、この女がいるんでね。この女を乗せてってやってくれんか」
女も男も同じ五十前後で、うらぶれ果てた顔と姿をしていた。
「これはワインの河だ」
と、男は河を見ながら、しかし自分の酒瓶を口にあてて飲み、
「だが、私はこれじゃないとだめなのさ」
と、唇にくっついた緑色の泡をおしぬぐって、照れたように笑った。
「それはアブサンの匂いですね」
ポーの眼はかがやいた。アブサンはアルコール七〇パーセントの緑色の魔酒だ。
「一口、私にもいただけませんか？　それなら馬を貸しますが」
「残念ながら、もうからっぽだ」
男は瓶をほうり出して、
「しかし、ロートレック伯爵家へゆけば、酒蔵に海ほどもある。飲み助大歓迎だ。ゆかんかね？」

「私が訪ねる家じゃないが……ゆきましょう！」
ポーは馬から飛び下りた。帽子の上の黒猫は肩まですべり落ちて、赤い口をあけて一声鳴いたが、またそこに止まった。
彼は女を鞍に抱きあげ、その手綱をひいて、禿頭の男に教えられながら河を渡り出した。なるほど水中の橋のおかげで、水にひざを洗わせながら何とか歩いてゆけるようだ。
河のまんなかあたりで、禿頭の男がしゃがれた声で口ずさむ歌が流れて来た。
「巷（ちまた）に酒の降るごとく、
わが心にも涙ふる。……」
「あれはわがフランスの詩人、ポール・ヴェルレーヌだ」
と、公爵がいった。
「彼は晩年詩想も涸（か）れ、ただ魔酒アブサンを飲んだくれた果てに関節水腫にかかり、あちこちの無料の施療病院を渡り歩き、それでも安カフェでアブサンをあおることをやめず、最後はベッド一つの貸間で老売春婦ユージェニーと寝ていて、ベッドからころがり落ちて死んだ。……あの女が、そのユージェニーだ」
「それはそうと」
と、ダンテ師がいった。
「あのロートレック城は、ほんとうはマルロメ城というのだが、画家ロートレックが住んでいる」

「はあ。……」

「君も知っているだろうが、ロートレックは伯爵の家に生まれながら、少年のときに箒に左足をひっかけてころび、骨折した。数カ月後、びっこをひきながら散歩中、溝に落ちてこんどは右足を骨折した。そのために彼の両足の成長がとまって、上半身は大人で下半身は常人の半分という奇怪な身体になった。その体型で彼は、山高帽に鼻めがねをつけ、モンマルトルの娼家や酒場にいりびたり、酒をあおりつつ娼婦や踊り子の石版画を描いた。そのあげくアル中になってあのマルロメの城に帰ったが、ステッキにもラム酒を仕込んで、それを飲みながら短い足で散歩するという始末だ」

「はあ。……」

「ここにいま、たしか二人の画家が客に来てるはずだ」

「だれですか」

「ゴッホとユトリロだ」

「へへえ！」

「ゴッホは、酒を飲むと危険人物になるといって、アルルの町から追放されたような人物だ。ユトリロはまた、なんと少年時代からアル中で、彼が絵をかき出したのも酒以外に精神を向けさせるために、母が絵筆を与えたのがもとだった。しかし大画家になっても彼は、アル中のために何度も警察の留置場や精神病院に出入りした。いまも鉄格子のはまった特別室で、飲みながらかいている」

「そうでしたか。しかし、そう聞くと、アル中が生んだ芸術が、いかに人類を酔わせたか、驚くに足りますね。……」

「二人はロートレック城の居候で、いまもあそこで、彼らはアブサンやラム酒びたりになって絵をかいているはずだが、そこにまた大アル中のポーとヴェルレーヌが加わるのだ。もっともヴェルレーヌはここの試飲会に合格して、以前から参加資格を得ているが――」

「試飲会というのはね」

と、公爵がいった。

「ここの地下の酒蔵にはフランスの美酒悪酒がぎっしり貯蔵されているが、ここを訪れる客で、もしロートレックのすすめる酒を、ロートレックの求める量だけ飲まないと、その客はゴッホに耳を切られ、ロートレックに松葉杖で足をへし折られることになっている」

「わっ、そりゃたまらん」

「ここにポーが加わったら、飲まないやつは床の台に縛りつけられて、天井から降りて来る巨大な振子の鎌で、シュッシュッと胴体を一ミリずつ斬られてゆくことになるかも知れない。あはは」

「客といえば、あそこにはもう一人、これはそんな条件をつけられない、特別扱いの偉大な居候がいる」

と、ダンテ師がいった。

「だれが……」

「カントだ。ほら、あそこに塔が一つ見えるだろう。あのてっぺんに住んでおる」
「へーぇ？」
私は眼をまるくして、霧雨にけぶる小さな塔を眺めた。
「へえ、大哲学者のカントも大酒飲みだったんですか。それは知らなかった」
「いや、彼は毎日、栄養のある食事は昼だけで、朝と夜はワインと水だけですませた。が、特に酒飲みというわけではなく、日常すべて時計じかけのように規律を守ったのと同様に、そのワインも目盛りして飲むという摂生ぶりで、そのおかげで筋骨薄弱、一メートル五〇センチの小男でありながら、八十までの長命を保ったといわれる人物だが、ただ死ぬにあたって最後にワインを一杯飲んで、エス・イスト・グート——いい味してるねえ！　といって死んだ」
「ああ、そういえば、カントのその言葉がへんに哲学的にかんちがいして伝えられたこともありましたね」
「その一言を、わが党の士だとロートレックもかんちがいしてここにひきとったんだ」
「ほほう。……」
「彼はいま、毎日ワインを飲みながらあの塔の上で、『純粋酒精批判』という著作にふけっておる」
「いってみるかね？」
と、ラ・ロシュフコー公爵がふりむいた。
「いや」

私はあわてて手をふった。
「私など、とうてい……試飲会で不合格になって、耳を切られたり足をへし折られたり、振子で胴体を斬られたりしちゃかなわない」
「そうですか」
公爵は笑って、
「それじゃ、次のインヘルノへいってみますか」
「こんどは何の地獄です」
「酒の次は女だ。女にとっては男だが——つまり、愛欲の地獄」
公爵は声をかけた。
「馭者ラスプーチン、聞いてるね？　そっちへいってくれ」
地を這うようなしゃがれ声が返って来た。
「河口のほうへゆくと、山がないので、そっちへ回ります」
どんな場所でも透明につきぬける幻の馬車でも、やはり山のないほうがいいらしい。

霧雨は

いつのまにかあがり、四界は明るくなっていた。しかし中空（なかぞら）に浮かんでいるのは、太陽ではなく白いまんまるい月だ。どうやら夕暮れらしいが、まわりの野に青味がひろがり、菜の花や桃

や杏の花さえありありと見える明るい地上であった。

さっきはたしか秋のようだったのに、ここはまさしくうららかな春だ。地獄にこんな美しい眺めがあるとは意外であった。

しかるに、ダンテやラ・ロシュフコーも妙な顔をして、

「はてな、ここらはこんな風景だったかな」

と、ダンテ師が首をかしげると、公爵も、

「大崩壊以来、私もこのあたりに来たのははじめてなんですが——大崩壊で、ここも地形や気象が変化したのでしょうか」

と、いった。

河はいよいよ広くなり、満々とながれている。ロートレック城あたりは赤かった色がいつしか琥珀色に変わっている。ゆくてに遠く海が見え、ふりかえると例の酒樽山が四斗樽のかたちで遠くかすんで見えた。

と、その広い河面に、一艘の舟が浮かんでいた。昔風の日本の舟で、三人の男が乗っていた。ほかに船頭が船尾に坐っているが、櫂は置いたままなのに、舟はほとんど流れもせず、悠々とただよっている。

「あっ、あれは煉獄にいた舟だ」

と、ダンテ師が手を打ち、

「すると、大崩壊でこんなところに流れて来たものでしょうか」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

そして彼は、私に双眼鏡と補聴器のようなものをよこした。私はそれを眼にあて、耳にさしこんだ。

舟の上の三人は、一人は黒紋付に髪をうしろになでつけ、ふとい口ひげをはやした老人で、一人は魚釣り姿の、ただし入道あたまの、眼鏡をかけた福々しい老人だ。その顔に、どちらも見おぼえがある。

「や、横山大観と、井伏鱒二……翁だ！」

と、私は叫んだ。

もう一人は——日本人ではない。六十年配と思われるが、黒の冠をつけ、どじょうひげとやぎひげをはやした、明らかに中国の人で、よくわからないが何だか唐のころの人物に見える。

「李白という詩人だ。李太白ともいうそうだね」

と、ダンテ師が帳面を見ていった。

三人は、ひょうたんから竹を切った筒に酒をついで汲みかわしている。

「コノサカヅキヲ受ケテクレ

ドウゾナミナミツガシテオクレ」

と、井伏翁がいって、その通りなみなみついだ竹筒をさし出した。李太白はそれを受けてこちよげに飲みほし、空にかかっているまるい夕月を仰いで、朗々と歌い出した。

「李白は一斗　詩百篇

長安市上　酒家に眠る
天子呼び来れども　船に上らず
みづから称す　臣はこれ酒中の仙と。ウイ、ウーイ」

渡された竹筒にひょうたんから酒を満たしてもらうと、大観先生がこれも歌い出した。

「谷中鶯　初音の血に染む紅梅花
堂々男子は死んでもよい
奇骨俠骨　開落栄枯は何のその、ウイ、ウーイ
堂々男子は死んでもよい」

李太白が、酔っぱらって、玄宗皇帝や楊貴妃の前で、寵臣高力士に沓をぬがせて官吏をクビになり、遊俠の徒に混ったという話や、大観先生が、九十歳近くなっても酒を米のエキスと称して酒以外はほとんど口にせず、死病にかかっても酒を飲んで生き返ったという話や、井伏鱒二翁が、これまた九十近いころ「日本酒は、うますぎていけないね。ウイスキーも、うますぎて困る。酒好きで、身をホロぼした」と語ったことなどが、次々に私の頭に浮かんで来た。

いまダンテ師とラ・ロシュフコー公爵が、煉獄から流れて来たといったが——どうも天国とはゆかないようだ——それはほんとうの話にちがいない。遠目で見たところでは、李白みずから称したごとく、まさに桃源郷の三酒仙の図だ。

やや空の色が濃くなり、春月がいよいよ鮮やかに浮かびあがって来た。

すると、それとは別に、ぶつぶつとつぶやくような声が、補聴器にはいって来た。

「……ええ、御酒というものは、ほどほどに召し上がっておれば百薬の長と申しましてお薬にもなるものだそうでございますが、ウーイ、どうもお好きな方になりますと、はなはちょっと一口とおぼしめしても、ウイウイ、召し上がってみると、ありったけ平らげないと気がすまないものだそうで……」

ベロベロに酔っぱらった声だが、はてな、この声はいつか聞いたことがあるぞ。……

それが、舟の艫に坐っている船頭のものであることに私は気がついた。向こうむきになっているが、ねじりはちまき、ふんどし一本の、大きな入道頭のじいさんだ。

彼が櫂などほうり出してそこにあぐらをかいているのはさっきから知っていたが、よくみると彼は釣り竿を握っている。のみならず、そばの手桶から茶碗で汲み出したものをちょいちょい口に運んでいる。いや、その手桶の液体がちょうどなくなったとみえて、釣り竿の手を持ちかえて、その手桶を河につけて、なみなみとまた汲みいれた。

——あ、あれは古今亭志ん生だ！

と、私は気がついた。

「ありったけ平らげるったって、河ぜんぶが酒じゃあ、エヘヘ、いくらあたしだってどうしようもないやね、ウイウイ、とにかくあたしゃ、八十四になるんだから……八十四ってば、こりゃもうおじいちゃんですからね。……ウイ、ウーイ」

そういいながら、新しい茶碗酒を実にうまそうに飲む。

私は、この天衣無縫の落語の名人が、朝五合、昼五合、夜五合飲み、また若いころは熱い飯

に熱い焼酎をかけて食う超飲んべえだったとかいう話を思い出した。……

「これじゃあ百まで飲んでもでえじょぶだな。エヘヘヘ、それにしても、これでうめえサカナでも釣れりゃもっとありがてえんだが、ウーイ、なにしろ酒の河なんだから、ウワバミなんかが釣れても困る。……おっとっとっと！　なんかひっかかりやがったぜ」

なるほど、竿がまるくなるほどたわんでいる。そして河から水をしたたらせながら、真っ黒な怪異な生物が釣り針にぶら下がって現れた。

志ん生は眼をまんまるくして、

「こ、こ、こりゃなんでえ？　変なものが釣れやがったぜ。なんだかおいらに似た顔をしてやがらあ。……」

「あ。……それはうちの山椒魚（さんしょううお）だ！」

と、井伏翁が叫んで、四つン這いにそっちへ這っていった。

そして、糸の先の山椒魚をおさえつけて、首実検のようにつくづくとその顔に見いった。

「そうか、お前、こんなところを遊泳しておったのか」

「あんたのうちの山椒魚なんて、よくわかりますな」

と、向こうで大観先生がのびあがって、感心したように訊いた。

「いやね、私のうちの池の岩に円い穴がありまして、そこが外界との通路ですが、ウッフーイ！　山椒魚のほうが大きくて出られません。ところがある日、少々ほろ酔いで池を眺めているうち、ふとその穴の円いのが気にくわなくなって、トンカチを持ち出して三角にしたら、

いつのまにかニョロリと脱走してしまったらしいんですが、この顔は忘れようにも忘れることはできません。ウッフーイ！」

と、井伏翁が山椒魚の頭をなでて、志ん生の手桶にそれをほうりこんだとき、こちらではまた別の大きな水音があがった。

「あっ、李白先生が落ちた！」

大観先生が身体を泳がせていた。なるほど、いままでそばにいた李太白の姿がない。

「ど、どうしたのですか？」

と、井伏翁が叫んだ。

「あの月がここにうつっている――と李白先生がいった。ウーイ」

大観先生は空と水を相ついで指さして、

「その水月をつかまえる、と手をのばしたとたん、河へさかさまに落ちてしまったんじゃ。ウイウイ……どこへ沈んでしまったか、もう見えぬ。ああ、どうしよう？」

井伏翁はしばらく水の上をあちこち眺めていたが、

「ウーイ、それじゃ李白先生は、山椒魚と交替してしまわれたのかも知れませんですね。とにかく、サヨナラダケガ人生ダ、ウッフーイ！」

と、いった。

すると老大観は、ぐいと竹筒の酒をあおり、片手を高く宙にのばして、

「生々流転！　生々流転！　ウーイ、堂々男子は死んでもよい！」

と、叫んだ。

——そういえば李太白は、揚子江に舟を浮かべて飲んでいて、酒興のあまり水中の月をとらえようとして誤って溺れ死んだという話を聞いたことがある。それは伝説だと思っていたが、やはりほんとうのことであったのか。……

そんな騒ぎを起こしながら、依然ただよって動かない舟をあとに、流れより早く馬車は下流へ飛ぶ。そして、右手の対岸がかすかに見えるほど幅広い河口に出た。

馬車はそれを渡りはじめた。ふしぎなことにこれが浅瀬になっていると見えて、馬車の馬はひざのあたりを沈める程度で駈けてゆく。

「酒の河はここまでだ。左手の海はふつうの海だ」

と、ダンテ師がいった。

河岸が——そしてその向こうにある町が、流れるように近づいて来た。やはりその空にはドンヨリ雲がかかっている。

「こんどは愛欲のインヘルノだといわれましたね」

と、私は訊いた。

「それが、あれですか。こんどは何だか面白そうですね」

「面白いか、どうか。——ここは地獄だよ」

ダンテ師はむずかしい顔で注意をうながし、

「この至高天から拝受して来たノートには、あらゆる人間の人生のあらゆる罪が書いてあるが、およそこの愛欲の罪状ほど不明瞭なものはない、と、ただし書きがついている」

「おそらく、そもそもそれが罪であるかどうか見分けがたい性質をもっている行為だからでしょう」

と、ラ・ロシュフコー公爵が口をさしはさみ、微笑していう。

「特に天使には不可解な分野ですからな」

ダンテ師は帳面を二、三枚めくりながら、

「しかしそれが外界にまで現れるようになると——また、みずかられいれいしくその罪を誇示するようになると、罪となる。その罪びとたちが住んでいるのがあの町だ」

愛欲の地獄

（おいろけのインヘルノ）

河を渡って、

私たちはまた「歎きの町」へ来た。——

が、これが歎きの町だろうか。

空は水っぽい雲に覆われて、地上からはかげろうか湯気のようなものが立ちのぼっているが、そこにある町は、さあ、かつて存在した東京の日比谷の劇場街と、新宿の遊興街をもっと豪華にして、もっと大規模にしたような感じ、といってよかろうか。

それらしい建物の間には、ちょっとした公園風の空間もあって、そこに男女のむれが散歩したり、ベンチに坐ったり、芝生に寝そべったりしている風景が見える。

馬車のマイクを通して、音楽が流れて来る。——それ以外にも町は騒音にみちている。また活気にもみちている。

よく見ると、それらの男女はことごとく踊っているようだ。また笑い、歌っているようだ。騒音と活気の印象はそのせいであった。

そこの大通りを通ってゆく馬車の中で、

「これが愛欲のインヘルノですか。みんな、馬鹿に愉しそうですが」

と、私は訊いた。

「もっとよく見てみたまえ」

と、ダンテ師が答えた。

私はもういちど観察して、街頭の男女が踊っているのではないことに気がついた。彼らは手を動かしてはいない。飛びはねてもいない。ただ腰を振っているだけだ。また笑っているのでも歌っているのでもない。どうやらみんな、夏の日の犬のごとく、はあはあえいでいるのだ。その腰の振り方が、なみのスピードではない。まず一秒に一回という割合だろう。——芝生に寝そべっているように見えた連中も同様に、お尻を持ちあげ、地面にたたきつけ、気の狂った尺取虫（しゃくとりむし）みたいな運動をつづけている。

「ここは好色の罪びとのインヘルノだ」

と、ダンテ師はいった。

「好色の罪、といったって、それが罪なら人類すべてが罪人になりますが——」

と、私は首をひねった。

「むしろ、その欲望がなけりゃ、人類は滅亡してしまう」

「人類を滅ぼさないためには、人間はまあ三人くらいの子供を作ればいいのだ。従って、その欲望はそれだけの子供を生む程度内で必要かつ充分のはずだ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「あらゆる生物が、その趣旨で——子孫を残すだけの目的でやっておる。しかるに人間は——人間だけが、その目的から逸脱しておる。人間だけが生物学的目的からはずれてもいいと考えるのは、神を無視した不遜の所業だ」

冷徹なラ・ロシュフコー公爵が、珍しくいささか昂奮しているようだ。

私はこの人物が、戦争で受けた顔の傷や、あまりに人間の本性を皮肉った警句のために、貴婦人たちにあまり好かれなかったらしい、ということを思い出した。

「特に、ここにいるのは、その限界から度はずれに大きく逸脱した連中だ。――彼らの陰嚢と大陰唇は――発生学的には同じものだが――たえず激しくふくれあがったり、縮んだりして波を打っておる。その刺戟で彼らは、あんな風に猛烈に腰を振らずにはいられないのだ」

と、公爵はうす笑いした。

「見たまえ、しかも男たちの腰はすべて前後に振られ、女たちの腰はすべて左右に振られておる。彼ら彼女らは、あのように情欲にあえぎながら、その運動を合致させることが出来ないのだ」

私は、同じように腰を前後に、ついで左右に振ってみて、「なるほど」といった。なるほど、これは地獄だ。

もういちど霊柩車のガラスの外を見ると、ちょうど公園で、地面の上を尺取虫みたいに腰を上下させながら這っている幾人かの男たちが見えた。

「あれは何をしてるんです」

「あれは生前ノゾキ専門の連中だった」

公爵は苦笑した。

「他人の性行為を盗み見るのを人生の快楽とする男たち――彼らがここに落とされたのは当然だが、あれではノゾキも不可能だろう」

「それにしても、私が最初に見たころの、愛欲にふけった肉の罪びとたちのインヘルノは、こんなものではなかったが……」

と、ダンテ師はいい、口ずさんだ。

「そこは一切の光、黙しかき消え、攻め合う風に打ちまくられる嵐の海のように、ただもうおどろおどろと鳴りとどろくところ。やむいとまもなく吹きすさぶ地獄の業風が、亡者たちをひっとらえ、追い立て、打ちまくり、投げ散らし、責めのかぎりをつくす。……」

そして、公爵をふりむいて、

「それがこんな風にさま変わりしたのは、もう大崩壊以前からのことだったね？」

「ええ、それくらいの地獄では、淫らな人間どもはとうていコリないことがわかりましたから……それに、愛欲にふけったといっても、いろいろなタイプがありますから、それに対する罰もずいぶんキメ細かくなりました」

と、公爵が答えた。

「あそこにはいってみよう。いま、どんな面々がいるか――」

ダンテ師が指さしたのは、大通りに面した日本風の黒い門のかなたの、古風でエキゾチックな二階建ての煉瓦の建物であった。

はてな、と私は首をひねり、やあ、あれは鹿鳴館じゃないか、と気がついたとき、馬車は黒門をつきぬけ、その前庭から玄関をはいっていった。

「ここは愛欲の

インヘルノの第一環、先天的ドンファンの来る場所だ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「先天的というのは、本人の外形的素質のみならず、そうなるべき境遇もふくんでいる」

そこは、シャンデリアは吊り下がっているようだが灯ははいらず、正面の大階段、三方の壁にとりつけられた燭台に蠟燭がユラユラと燃えているばかりであった。窓はすべて垂れ幕でふさがれ、照明といえば、数はともあれ遠い蠟燭のつらなりだけだから、残照のただよう黄昏のような暗さだ。「美しく青きドナウ」の奏楽がながれていた。

その底にゆれている数十人の影のむれを見わたして——はじめ、これは仮装舞踏会かと思った。

なぜかというと、そこに踊っている影の中には、燕尾服の男性、明治風の夜会服の女性もあったが、どうみても江戸時代はおろか、緋おどしの鎧武者、衣冠束帯、女のほうは、おすべらかしに裲襠、十二単なんて姿も少なからず見えたからだ。

ついで私は、仮面舞踏会かと思った。

なぜかというと、舞踏者の半分くらいはお面をつけていたからだ。半分くらい、ではない。やがて知ったことだが、それは正確に半分であった。つまり、女性はことごとく能面、しかも女面をつけていた。

さて、その舞踏だが——いま街頭で目撃したほどではないが——男たちがゆるやかに腰を前後に振り、女性たちがなまめかしく腰を左右に振っていることに変わりはない。

「あれを、だれだと思うかね？」

と、ラ・ロシュフコー公爵が指さしたのは、かぶとに緋おどしの鎧を着た武者であった。彼は立烏帽子に水干をつけた女性と組んで踊っていた。もっとも女性のほうは女面をつけている。鎧かぶとでワルツを踊っているのも妙なものだが——やや小柄ながら、そして少々出ッ歯のきみはあるが、かぶとの中の顔は、暗い照明でもまあ美男といっていいだろう。むろん、私はその顔に見おぼえはない。

「あれは源義経という武将だそうだ」

と、公爵がいった。

「へーっ？」

私は眼をむいた。

すると、相手の白拍子は？

「静御前ですか！」

「そういうことになるかね」

ラ・ロシュフコー公爵は、崩壊後の地獄の道案内を買って出たくらいだから、何回かこのあたりにも来て、ある程度の知識を得たようだが、しかしあいまいなところもあるらしい。

「ヨシツーネ・ダ・ミナモトーノ、か」

ダンテ師は忙しく帳面をめくって、
「ふうん、義経という人物は、平家の女王建礼門院をどうとかしたという風評があり、壇ノ浦から京都へ凱旋したあと、貴族の娘など二十四人を愛妾にしたという話もあり、吉野山で最愛の静と別れたが、死んだときは正妻の北の方といっしょだったし、こりゃ相当なもんだね」
と、いった。
「兄の頼朝が彼を始末しなけりゃならんと思い立った理由はいくつかあるが、義経の野放図もないプレイボーイぶりもその一つだった、と書いてあるがね」
「なるほど」
公爵が指さした。
「その向こうにいるのが光源氏という人だ」
「えっ、光源氏が？」
公爵の指の向こうには、衣冠束帯の貴人風の人物と、おすべらかしに十二単の官女が抱き合って、エレガントにステップを踏んでいた。
「いや、光源氏のモデルとなった藤原道長という人物だそうだ」
「ああ、この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることのなしと思へば、と詠んだ――」
私は、能面をつけた相手の官女に眼を移して、
「では、あれが紫式部……？」
と、根拠もなく口走ったが、公爵はさらにあいまいな顔をして、

「さあ、だれかね？」
と、いった。
「さらに、その向こうにいる中国風の貴人は玄宗皇帝……」
「わっ、ここにゃ唐の皇帝までいるのですか？」
「この一帯は日本之部だが、例の大崩壊でよその泡から飛んで来た人々もいる」
「すると、あの相手は、楊貴妃？」
その女性のかぶっているのは、能面ではない。妖異な伎楽面みたいな仮面だ。きらびやかな衣裳のすそからチラチラ見えるのは、掌にはいるような小さな小さな沓であった。そのため彼女はひとりで立っていることさえ難しく、相手の玄宗に抱かれて宙に浮いているようにさえ見えたところからすると、あの白楽天に「侍児扶け起こせども嬌として力なし」と歌われた女人に相違ない。
「まあ、そういうことになるが……」
と、公爵は何だか歯切れが悪かったが。――
ともあれ、源義経と藤原道長と大唐の玄宗皇帝が、いっしょに「美しく青きドナウ」のワルツを踊っているのは奇絶怪絶といわなければならない。
「ここにいる男は、本人が特別に異常に女好きだったというわけではないが……」
と、公爵がいった。こんどはニガニガしげな口調だ。
「とにかく、自動的に艶福家だった人々のインヘルノだ」

「つまり……女性に不足しないように生まれついためんめんですね」
「そういうわけだ。この暗い照明ではいちいち指摘することは出来ないが、ここには、生前何十人もの愛妾を持った日本の将軍や大名や貴族たち、次から次へと浮名を流した役者やスターやタレントたち、また有名無名を問わず世にドンファンと自他共に許した人々がいるはずだ」
「ははあ。……それがここで生前の愛人と踊ってるのですか。それは結構な地獄じゃありませんか」
しかし、私は首をかしげた。
「いま、彼らは特別異常に女好きだったというわけじゃない、自動的な艶福家だとおっしゃいましたね」
「その通り」
「それでも、ともかくも地獄と呼ばれる場所へ落とされるんですか？」
「彼らまたは彼女らは、やはり罪ふかき人々だ」
「なぜ？」
「たとえばあの玄宗皇帝だが、楊貴妃があらわれるまでは三千の美女を後宮に擁したという。その一人ずつの美女にあこがれた男たちは、少なくとも十人ずつはいたろう。すると彼は、三万人以上の男を悲しませた——悲しむどころではない、首でも吊りたくなるほどの地獄に落としたにちがいない。ほかのめんめんも事情は同じだ。美人を独占するブルジョワジーだ。これはマルクス主義的にもやはり罪悪じゃないかね」

「なるほど」
「しかもだ。たとえ特別多情のドンファンじゃなくても、多くの女性の心と肉体を思いのままにもてあそんだということは愉しくないはずはない。また愉しい想い出でないはずはない。——だから彼らはここへやって来る。かつて愛した女たちを求めて——なんど驚愕し、戦慄しても、コリることなくこの舞踏会へ」
「えっ、驚愕し戦慄しても、ですって？」
そのとき、円舞曲が変わった。ジャジャジャ、ジャーン、あれは運命交響曲じゃないか！と思ったとき、消えていた天井のシャンデリアが一つずつ、しかし急速にともっていった。
大広間は、あきらかに驚愕と戦慄のために凍りついたようであった。
その中で、まず人語として聞こえたのは、
「しわやしわしわのおだまきくりのばし、昔を今になすよしもがな」
という女の歌声であった。
みると——義経と踊っていた相手の女面はとり払われて、白髪を背に垂れた老女の顔があらわれていた。
「義経死後の静御前のなれの果てだ」
と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。
私はその向こうの藤原道長のほうを見た。これも相手は皺とシミだらけの老婆の形相で、
「大臣の君、駿馬の骨を買いたまわずや」

と、叫んだ。

道長の大臣は尻餅をついた。

「紫式部じゃない、清少納言女史だ」

と、公爵がささやいた。

「もっとも老いたるムッシュー光源氏は、重症の糖尿病をわずらってるそうだから、駿馬の骨も肉も買えないだろうがね」

見わたすと、男たちの相手はことごとく老婆であった。まぶしいばかりのシャンデリアの下に、その衣裳が華やかなだけに、舞踏会は突如として妖気どころか、凄惨の気にみちたものとなった。

「ここにいる女性たちは、いずれもかつては美女ばかりだった。しかし、生前にみんな老婆になった。——わがフランス映画に『舞踏会の手帖』という名作があった。あれは昔舞踏会で知り合った、しゃれ男たちのなれの果てを描いたものだったが、これは美しい女たちのなれの果てを舞踏会で知る——映画とは逆だ」

溜息をついて、公爵はいった。

「しかし、かつて存在した地球世界でも、若いときあこがれた美しい女優を何十年ぶりかでテレビで見て、驚愕と戦慄をおぼえた人々が多かったのじゃないか。これはそれと同じ現象を一堂に集めたものに過ぎない。——その驚愕と戦慄を与えただけでも、長生きした元美女はインヘルノへ落ちなければならない。……」

「やはり、

美人は薄命でなけりゃいけませんか」

と、私は嘆声を発した。

「その通りです。美人が婆さんになることは、人道上許されない」

しばらく黙っていたのち、

「かつての美人の最大の滑稽事は、彼女がもう昔の自分ではないことに気づかないことである——と私は、箴言集に書いたが、このインヘルノではあの通りみな知っているがね。だからインヘルノなのだ」

と、ラ・ロシュフコー公爵は森厳きわまる表情でいった。

「いや、婆さんならまだいい。あれを見るがいい」

指さしたのは、玄宗皇帝のカップルであった。

「彼は、ひとたび笑えば百媚生じる楊貴妃に溺れて、安禄山のクーデターをひき起こし、都落ちする途中こんどは護衛兵の叛乱のため、楊貴妃がくびり殺されるのを、文字通り見殺しにしなければならない羽目になった。……」

かつて後宮三千の美女顔色なしと詠われた楊貴妃は、シャリコーベであった。カタカタと歯が鳴って、

「天長地久、時ありて尽くるとも、この恨みはめんめんとして尽くる時なし……」
と、いった。
シャリコーベなのに、その穴のような口と鼻孔から血がしたたっていた。
それまで、凍りついていた大ホールが、どうっと驚愕と戦慄の息をどよめかし、混乱に移りかけたとき——また声が聞こえた。
「おのおの方」
大階段のまんなかあたりに、一人の男が立っていた。黒い着物をすそっからげにして、足は股引、頭から手拭いを頬かぶりして、鼻の下で結んでいる。
「お聞きになって下せえ。女の心と面のきれいさほど、あてにならねえものはござんせん」
どう見ても江戸時代の盗賊としか思えない姿で、腰を前後に振りながら、
「あっしなんざ、ふるいついて来る女は浜の真砂ほどござんしたが、これァこっちのカセギのモトだと流し目だけであしらい、おっぴらに浮名を立てられた女は一人もござんせん。あっしが大事にしたのは、前後二人の女房ばかり……」
べらんめえ調だが、上方風のなまりがある。
「その道にかけちゃあ、御同業のうちでも珍しい堅物といわれ、女房も——特に二度目の女房は貞女の鑑なんぞといわれやんしたが、その女房が死んではじめて知ったのァ、あっしのカセギを前の女房の子にやらねえで、大半自分の腹をいためた子の名にした遺言状を残してたってえことで……あっしが死に物狂いに色目をつかって稼いだのァ何のためだ。つくづく女のこわさを思い知らされやした。……」
やさしい声だが、どこか血を吐くようなひびきがあった。
「女相手に踊るのァ怖え。おいらの相手はただ一人……自分だけに限りやす」
くるっと身体を反転させると、そこには紫の野郎帽子、折鶴の紋を染め出した藤紫の羽織を着た、これも江戸期の女形の姿が浮かび出した。彼は腰を左右に振っていた。
が——その顔は皺だらけだ。
「ライト、消して！」
と、彼は女形の声で叫んで、天井を指さした。その前上方のシャンデリアが消えた。
「自分が自分に惚れりゃまちがいはございませぬ。御見物のみなさま方、闇太郎が雪之丞に惚れたらおかしうござりますかえ？」
シャンデリアはまた一つ、二つ消え、階段の壁からつき出した燭台だけが、面明りのように彼を照らし出した。
ああ、いま見た老醜の翳はどこへやら、そこに浮かびあがっているのは、とろけるような色目を使った艶然たる変化の雪之丞であった。
それがふたたび身体をまわすと怪盗闇太郎になった。また回転すると雪之丞になった。
回転はしだいに早くなり、ついには闇太郎がしっかり雪之丞を抱いているような幻影がそこに旋舞した。
「長谷川一夫だ。……」

茫然として、私はつぶやいた。

「あれは色男でも特別の人間だ」

夢からさめたように公爵がいった。

「次へゆこう。……このすぐ下の地下室だ」

「え——この鹿鳴館に、地下室があるんですか」

「ある。……しかも、浴場になっている」

公爵はマイクで命じた。

「地下の浴場へ」

馬車は、大階段の裏側のほうへ回った。

すると、薄闇の中に、六畳分くらいの床がしずかになめに沈み、そこに、それだけの大きさの口をひらいた。

どんな石の壁でも音もなく通る馬車だが、この場合は、通路に従って下りてゆく。たしかに四十五度は超える急角度だ。

「いまのは愛欲地獄第一環、先天的ドンファンのインヘルノだった。むろん女性もいるが、それは男性の相手役としての存在で、主役は男だった。こんどは女ドンファン——というのはおかしいが——のインヘルノだ」

と、公爵がいった。

つんのめりそうになるので、私は公爵の腕にしがみついた。——通路は階段になっていない。それどころか、車輪から来る感触からすると、ヌルヌルした滑走ぶりで、こんな地下室があるだろうか。下からは絶対に上っては来られないだろう。

数分で——しかし数百メートルは滑り下りたろう——私たちは、また妖しき壮観を俯瞰することになった。

はじめ、赤い炎が地底の大地から燃えあがっているのかと思った。しかし、やがてそれは蒸気だとわかった。いちめんにたちのぼる蒸気に赤い光がさしているのだ。

そして、その下に、無数の——何千とも知れない生首がころがっていた。いや、生首ではない。それはみんなあえぎ、特に女の首からはただならぬ声がもれていたから。

「ここは愛欲地獄第二環、天性の肉感的美貌を持ち、男を誘惑し、淫行することを人生最大の快楽とする女たちのインヘルノだ」

と、公爵はいった。

「へーえっ、首だけで？」

「いや、首から下は湯につかっている。ここは大浴場なのだ。が、天井からある時間をおいて、人の数だけ、また首が出るだけの穴のあいた巨大な板が下りて来て、水面にふたをし、彼ら彼女らはその穴から首を出しているのだ。首を出さなきゃ溺れ死ぬからね」

「彼ら？　やはり、男もいるのですか？」

「いる。好色な女たちの相手役としてね」
私は改めて見わたした。
まるでゲーム機の「モグラタタキ」を巨大にして、穴のぜんぶからモグラの頭を出させているみたいだ。その中に、なるほどあちこち男の首も見えるが、何だかみんな白髪やヤカン頭ばかりのようだ。
「首の穴は、おたがいに舌を出せば相手の鼻の頭を舐められるくらい接近している。だからあの板の下は——例の腰の運動はここでも同様だし、おたがいの胸はお尻にくっつき、お尻は胸にのめりこみ、手足はもつれ合うといった状態だ。しかも、その状態から逃げようがない。あの水中にはいって眺めると面白いんだが……」
と、ラ・ロシュフコー公爵は微笑したが、
「ただし、ここにいる男はね。……」
といって、言葉を切った。
馬車は、もうもうたる湯煙の上を動いてゆく。
「や、あそこにムッシュー・レセップスがいる」
と、公爵が叫んだ。
「レセップス？　あのスエズ運河を掘ったレセップスですか？」
「そうだ。そのときレセップスは六十四歳だった。一八六九年、世紀の新運河開通式をあげた数日後、彼は二十一歳の花嫁と結婚式をあげ、そのあと一ダースもの子供を生ませた豪傑だ」

「えっ、六十四以後に十二人も……」
「もっともそのあと神がかりになって、こんどはパナマ運河を掘ろうとして大失敗し、資金集めがサギ罪に問われる羽目になって禁錮五年の刑を受け、八十八歳で死んだときは失意のあまり半ボケの状態になっていたがね」
いま、白髪のレセップスは、白いカイゼルひげをふるわせて、苦しげにおめき叫んでいた。
「掘れぬ！　掘れぬ！　どうしても掘れぬ！」
「すぐそばにいる金髪の首が……」
と、公爵が教えてくれた。
「マリリン・モンローだ。アメリカのセックス・シンボル視され、ケネディ大統領をもふらふらにした女優だ」
マリリン・モンローは白い頸をくねらせ、「どうしたのよ、レセップスお爺さん！　あんたフランスのスーパーマンでしょ？」と叫んで、唇を美しい輪にした。その周囲から赤い蒸気がゆらめきのぼった。
「その向こうにおるのがヴィクトル・ユゴーで、ならんでおるのがクレオパトラだろう」
と、ダンテ師が口を出した。
「あ、やっぱりそうだ」
「へーっ、クレオパトラまでがこんな地獄に？」
「あれは私の神曲のころから愛欲のインヘルノにおった。ローマの大権力者シーザーもアント

ニウスも悩殺し、敵将のアウグスツスまで悩殺しようとした妖姫だ。——一方ユゴーは、小説の上じゃストイックな超人ジャン・ヴァルジャンを作り出したくせに、御当人は新婚初夜に九回交合したと告白し、八十三で死ぬ年にも三カ月に八回交合したと豪語したほどの、その道の剛の者だが……相手がクレオパトラではなあ」

そのとき、クレオパトラのふとい首飾りが切れて、ウネウネと宙にのびた。首飾りではなかった。それが黒いウロコをきらめかせた蛇だと気がついたとき、蛇はユゴーの首に巻きついた。ユゴーの首が、クレオパトラのほうへ少しのびたようだ。蛇がひっぱっているらしい。ユゴーは禿げあがった頭の後部に残る白髪と顔をふちどる白ひげを、獅子のごとくふりたてて、

「噫(あゝ)無情！」

と、叫んだ。

しかし、何とも大変な人物がこんなところにいるものだ。

「しかし、女性はどうやら日本の女性が多いようですが、男にも日本人のそんな豪傑がいるんですかな」

「いるさ——もともとここは日本人之部なんだからね」

と、公爵が答えたとき、下の首畑から、

「このやうな末世を櫻だらけ哉(かな)……」

と、舌のもつれた声が聞こえた。

見下ろすと、宗匠頭巾をかぶった頭が、女たちの首の中でグラグラゆれていた。

痩せてはいるがあごが張って、六十半ばの一見ごうつくばりといった顔だが、それが口の一角をダラリとたれて、よだれの糸をひいている。

「小林一茶だ」

と、ダンテ師が帳面をのぞいていった。

「彼は江戸から故郷の信州に帰って、五十過ぎてからはじめて結婚すると、毎夜三交とか五交とかを継続して、妻は四人の子供を生ませられ、憔悴して死んだ。子供たちもみんな栄養失調や発育不良で赤ん坊のうちに死んだ。彼は中風を起こし、それでも六十以後妻を二人とりかえ、六十四歳で彼が何度目かの脳溢血で死んだとき、三番目の妻は妊娠中だったという。ヨイヨイでこの奮戦ぶりは、日本人ではまあ相当の豪傑じゃないかね」

そのとき、一茶が踏みつぶされた蛙のような、しかも呂律(ろれつ)のまわらない奇声を発した。

「痩蛙(やせがへる)負けるな一茶是(これ)にあり……」

はあはあと、いまにも死にそうなあえぎ声がつづいて、

「一茶是にありと思へど痩蛙……」

私は身をのり出した。

「どうしたんですか、一茶は？」

「とりかこんでいるのは、彼に毎夜三交五交された三人の妻たちなのだが……」

ダンテ師はそういいかけて、

「や、そのうしろにいるのは、これぞユゴーに匹敵する日本の老雄だ」

と、叫んだ。

「だれですか」

「敗戦後の日本の電力業界を再編し、電力の鬼といわれた実業家松永安左エ門という人物だが……ここに彼の聞き書きがある」

帳面をのぞいて、

「私は、女は性器だと思っとる。女性を見ると、その人の生殖器の具合ばかり想像する。……七十七、八まで私は実弾を撃つことができた。このごろでも艶夢は見るけれど、さすがに夢精はありませんがね。……」

「そんなことを、いったい何歳ぐらいのときにいったのです？」

「九十歳のとき、こないだ見た大宅壮一氏に語った言葉だ。彼は九十三歳で、アスペルギルスという、皮膚や耳や眼や腋にコウジカビが生える奇病で死んだのだが……人間もカビの生えるまで長生きすれば、いうことはなかろう」

私は松永安左エ門が、晩年、たしか耳庵と称する茶人であったことを思い出した。カビが生えて死んだとは枯淡の極致のようだが、それにしても怖れいった大茶人だ。

しかしいま見ると、その耳庵翁も苦鳴を発して、白髪あたまをのけぞらしている。その顔のあたりに湯気が渦まいているせいか、カビどころか、耳からも眉からも鼻からも、白っぽい苔がたれ下がっているように見える。

「しかし、ここは女性が主役のインヘルノだとさっき聞きましたが、いま見るとヒヒジジイばかりのようで……」

「その通りだ」

と、ダンテ師はいった。

「ここにいる男性はみんな老人ばかりだ。彼らも大好色漢だっただけあって、ここはまさにインヘルノにちがいない。――」

ああ、そうであったのか、と私はやっと彼らの苦悶ぶりを了解した。

「しかし、女たちにとってはそれ以上のインヘルノだ。いかに誘惑しても、いかに挑発しても、しょせん彼らはもはや男性ではないのだ！　なまじ、元好色の元男性がいるだけに、ここで彼女たちは悶える。――」

その女たちは、だれだろう？

私はガラスの下部に眼をそそいだ。

が、視界の底に悶える女たちの首は無数で、しかもそのまわりにゆらめく蒸気は、どこからともなくさす赤い光に炎のようで、はっきりと見定めるすべもない。

それでも、まれに私の知っている顔――映画やテレビや雑誌などで見た顔、銀座や新宿のバーなどで見た顔、それから男にも老政治家や老実業家などの顔もあったような気もするが、確認はできなかった。

それに、ガラスの霊柩車なので、こっちも蒸し風呂のように熱くなって来た。

「ゆくか」

と、ダンテ師はいった。

ここではダンテ師は少々口が重い。「神曲」でも愛欲のインヘルノは比較的短かったような気がする。天上の聖女ベアトリーチェばかり見ている彼には、さして熱情を感じない地獄かも知れない。

馬車はななめ上方にあがり出した。

そしてはいって来たのとは反対の方角に、黒い空洞が突然四角な口をあけ、馬車は明るい——と見えて、あとで黄昏だとわかったが、ふたたび地上の世界に出た。

ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「こんどは愛欲地獄の第三環、女をもてあそぶことを人生最大の——後天的趣味とした男たちのインヘルノだ」

ここは

「愛欲のインヘルノ」の町のまんなかあたりにあるのか、それとも町はずれにあるのか。

よくわからないうちに、やがて馬車は極彩色の一画にはいっていた。

いつのまにか夕暮れになっていて、その通りの中央にはひとすじの桜並木が満開で、その枝に灯のはいった無数の雪洞が吊るされて、歌舞伎の舞台を見るような壮観であった。

壮観といえば、これまでもさまざまな「地獄の壮観」を見て来たが、これはまた特別だ。

歌舞伎のような、と形容したが、てんで規模がちがう。桜並木の両側の道は、ぞろぞろと歩行する女性に埋まっているが、さらにその両側には、紅格子の家がつらなって——それが目路の果てまでつづいている。

「ここが……」

と、私は首をひねりつつ尋ねた。

「これが、女をもてあそぶことを人生最大の生き甲斐とした男たちのインヘルノですか」

「そうだ」

と、ダンテ師はうなずいた。

「それはさっき見たじゃありませんか」

「いや、あれは先天的に異性に愛される素質や運命を持って生まれて来た人々のインヘルノだった。ここにいるのは、後天的にみずから意志し、奮励努力してドンファン的生活を送った人々だ。具体的には、自分の持つ権力、金力、腕力などで女性をほしいままにした男たちだ」

「男たち……その男たちは、どこにいるのです？」

幻の馬車は、往来の女たちを越えて、紅格子に近づいた。

私がはじめ歌舞伎を思いえがいたのは、その桜や紅格子が、歌舞伎に出て来る吉原の場面をほうふつさせたからであったが、その紅格子の中——つまり張見世には、たしかに花魁が坐っていた。

一つの張見世に十数人ずつ——おきまりの通り、高々とゆいあげた髷に何本かの笄をさし、

きらびやかな衲襖を羽織り、朱羅宇の長煙管をもてあそんで。

「顔を見なさい」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

白粉と紅をぬりたくり、物凄い厚化粧なので、一見したときはわからなかったが、それはみなあきらかに男性であった！

「これは野郎屋だ」

「ヤローヤ？」

「女郎屋ではない、男だから、野郎屋という。……彼らの下半身を見なさい」

この女郎たち——じゃない、野郎どもは、野郎だけあってみんな怖ろしく行儀が悪い。どれも大あぐらをかいているが、その股間から例外なく、鞘のようなものが屹立している。

鞘ではない。どうやらひょうたんで作ったものらしかったが、あのニューギニアのどこかの部族の男たちが、その威を示すために装着しているペニスケースと同様のものらしい。

格子の中に灯はない。道をへだてた桜並木の雪洞の光がさすだけだ。そのおぼろおぼろとした薄暗い中に、化粧した花魁姿の男たちが、ペニスケースを林立させて坐っている！

怪異といって、これほど怪異な景観はなかろう。しかも、その張見世が、地の果てまでつらなっている案配なのだ。

——と、その薄暗い中で、パチパチと青白い火花が散って、

「わっ」

「ぎゃっ」

「痛ててて！」

という悲鳴が起こった。

いや、いま突然に、ではない。それは以前から、あちこちで起こっている現象であり、悲鳴であった。

ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「あのペニスケースには静電気が通じていて、あれがペニス以外のものに触れると、あんな風に火花を発して、感電したようなショックをペニスに与えるのだ」

「ペニス以外のものに触れると？」

「あれを手で支えてはいけない。尖端が床にくっついてもいけない。天然自然に、かつ不断に空中に支えていなければならない」

「そ、そんな——」

「だから彼らは、自分たちをのぞきこんでいる客——あの女性たちを眺めて、たえず自分を昂揚させていなければならない」

公爵は暗然とした声で、

「その女性だが——」

その格子の中をのぞき、往来をひしめき歩いている群衆を、改めて私はつらつら見た。

そして、それがほんとうに女性ばかりであり、かついま一見したところでは、豚か河馬が化

粧したような、あるいはマントヒヒかエリマキトカゲが衣裳をかけたようなむれであることを知った。

いや、そうではない。中には人類に見える——それどころか、たしかに美人といえる女性もまじっている。が、どういうわけかそれらの美人は、あちこちの格子にむしゃぶりついて、どの女性も何か罵り声をあげているようであった。

「このヒヒジジイ！」

「はじめ、あんなうまいこと言って！」

「口さきだけの女たらし！」

「助平ヤロー！」

公爵がいった。

「客の大部分は往来を歩いているああいう女性だが、ともかく彼女たちに指名されたら、あの女郎たち——じゃない野郎どもは、それを客としなければならない。そのときだけケースがはずされ、まだその形態が保持されているうちに商売をしなければならない」

「……」

「ケースをはずすのは、日本でいうヤリテ婆あ——じゃないヤリテ爺いだが、これは生前女性と不本意に縁のなかった連中で、その手さばきはなかなか冷酷なものだそうだ」

「あの、格子にしがみついて悪口をいってる美人たちは何です」

「あれは、紅格子の中にいる野郎花魁に、かつてもてあそばれたり捨てられたりした女性たち

だが……あれは多少効果があるかも知れんね」

「ははは。……」

と、いってから私は、

「その野郎花魁たちですが」

馬車が紅格子のそばを流れてゆく先をずっと見て、

「それは後天的に、努力してドンファン的生活を送った……自分の権力、金力、腕力などで女をほしいままにした男たちだといいましたね」

「ウイ、要するに本来はそんなに女に持てないのに好色で、浮気や女道楽にふけった連中さ」

「そんな連中がこんなにいる……」

「男の半分はそうかも知れんよ」

と、公爵はいったあと、変に鼻をまげて、

「実は、大きな声ではいえんが、女性も三分の一くらいは同じかも知れんがね」

と、つぶやいた。

うす暗い格子の中では、依然としてパチパチと火花が散って、猿のような悲鳴があがりつづけている。

その閃光に照らされて、そのうち私はまた妙なことに気がついた。

さっき、高々とゆいあげた髷に何本かの笄をさして、といったが、ここにいる男の大半はハゲ頭だ。そこで紫色のハチマキをしめて、そのハチマキに笄をさしている、と見たが、さらに

よくよく見ると、それは笄ではなく、みなペニスケースであることを発見したのだ。あれには静電気が通じていないのか知らん。

首から下は裲襠をつけているのだから、まあ助六と揚巻の合体みたいだが、実際に見る彼らの姿が怪異をきわめていることはいうまでもない。

最初のうち、

張見世一つに十数人充満していた野郎花魁の数が、馬車がゆくにつれて、次第に減って来た。見世の構えがだんだん上等になって来たようだ。格子の横にある入口には、さまざまに図案化した魔羅の絵柄と、「やろうや」という文字を染め出したのれんが垂れている。のれんの色は江戸期の吉原の定式通りみな柿色であった。

と、その一軒から、三味線の音とともに、

「旅ゆけば、駿河の国に茶のかおり
名代なる東海道、名所古蹟の多いところ……」

という、うなり声が流れて来た。

文字で書けばこうなるが、実はレロレロの呂律で、ただ聞きおぼえのある節廻しだからわかったのだ。

馬車が、その前にとまった。ここにも格子に十数人の女がとりついている。

花魁姿でうなっているのは、まさに浪曲の広沢虎造だが、どういうわけか、彼は泣いている。泣きながらうなっている。

三味線をひいているのは、白いかっぽう着のふとったおばさんで、どこかで見たような顔だが、とっさに思い出せない。

「松とならんでその名を残す
海道一の親分は、清水港の次郎長の……」

ペペン、ペンペン、と、おばさんは三味線を鳴らす。その顔は、ぶっちょう面を過ぎて、陰惨にちかい表情だ。

「あれは広沢虎造という吟詠詩人だったそうだが……彼は四、五軒も妾宅を持ち、子供も十何人かあったという。晩年、中風の身体になってからは毎日泣いてばかりいるようになり、妾宅の間をめぐり歩いてはどこも追い出され、そのうちゆき倒れになったこともあるという」

と、ダンテ師は帳面をのぞいていった。

「もう一人は柳家金語楼という喜劇役者だそうだが……」

ああ、そうか。あれはテレビドラマ「おトラさん」の姿であったのか。かつらであの有名なハゲ頭がかくされているのでわからなかったのだ。

「金語楼はエノケンと日本の喜劇界を二分するほどの人気者だったが、自分の一座の女優に片っぱしから手をつけて、彼のハゲ頭にちなんで光源氏といわれ、彼女たちに生ませた子供が成長すると、これまた片っぱしから一座にいれて、金語楼一座の楽屋で石を三つ投げると、一つ

は必ず金語楼の子供に当たるとかいわれたそうだね。これは彼の息子の一人が自分でそういうのだからまちがいない」

ダンテ師から新知識を教えられる。

「年がより人気がなくなってからも、その何軒かの妾宅を養うために骨がスリ切れるまで働きづめに働き、ついに倒れたときはガンが全身に転移してもうろう状態で、入院わずか数日で死んだあと、屍体は本宅、妾宅でおしつけっことなり、焼き場の人が、こんなにスリへった骨を見たことがない、といったそうだがね」

「ははあ、それであんなに陰気な顔をしてるんですか」

「いや、あの金語楼は、舞台じゃだれもが爆笑せずにはいられないような愛嬌をふりまいたが、楽屋に戻ると恐怖王になり、家に帰ると三年通夜をしたような陰々滅々たる顔をしていたという」

いまその顔だ。かつらのせいばかりじゃない。それではじめ私は彼がだれかわからなかったのだ。

「それは金語楼がほんものの喜劇俳優であったことのあかしです」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

すると、こちらが見えるはずもなく、声が聞こえたはずもないのに、柳家金瓶梅――じゃない、柳家金語楼がこちらを見て、眼と鼻と口を顔の中央に集め、きゅーっと笑って、森厳なダンテ師が思わず笑い出したような珍面相を作った。

ペン、ペンペン！　三味線の音が高まり、それに吊られたか中風のはずの虎造の声が、もはや泣き声ではなく、それまでとは別人のような歯切れのいい名調子になった。

「その夜は休む明けの朝
早よからおきて石松は
うがい、手水に身を清め
支度をなして表に出る
またぐ敷居が死出の山
雨だれ落ちが三途の川
ソヨと吹く風、無情の風……」

ペン、ペペン、ペンペン！　金語楼が相の手をいれた。

「よっ、はっ」

見ると彼は、ペニスケースの先っぽで、三味線の絃をはじいているのであった。――彼は大の発明マニアでもあったというから、それで何か工夫していたのであろう。

「これは感電しないようですな」

と、私がいうと、公爵が、

「この妙技には神さまも感心されたのだろう」

私もしばらく感嘆したあと、首をかしげた。

「しかしね、これくらいのことで地獄に堕ちるなら、芸能人の大半は地獄に堕ちるでしょうが

……むしろこんなことは芸能人にとって……」

「ここは日本の税務署ではない。職業による特別待遇は認められないのだ」

と、ダンテ師は厳粛にいった。

「次へ――」

馬車は動き出した。

と、すぐ近くの紅格子の中から、これも聞きおぼえのある言葉が流れて来た。

「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして忘却をちかうこころの哀しさよ。……」

のぞいてみると、眼鏡をかけ、鼻下にちょっぴり口ひげをはやした小柄な花魁が、ひとりチョコナンと坐って、眼をとじてうっとりと朗唱していた。

「菊田一夫だ」

と、ダンテ師がいった。

「あれも糖尿病のくせに、一座の女優のだれかれに、いま君をおいて愛する女はこの世に一人もいない、と、くどいて次から次へと愛人にしたが、一方では、おれは死ぬとき女のバカヤローとどなって死ぬんだ、ともいってたからよほどコリるところがあったんだろうが、それでもまた、忘却とは忘れ去ることなり……と、新しい女優をくどいた。そして、死んだとき遺骸は、十五年間帰ったこともない正妻のもとへ運ばれていったという。……」

菊田一夫は、朗唱をおえると、格子にとりついている七、八人の美しい女たちにキョトンと眼をやり、

「君の名は？　君の名は？」

と訊いていた。

そこへ、うしろの戸がひらいて、一人の花魁が、もう一人の花魁を肩にかついではいって来て、

「さっきまで外の客に、やろうや、やろうや、と騒々しく呼びかけてたくせに、たった二人の客を相手にしたくらいで、だらしのねえやつだ。まだたしか還暦じゃねえか」

といって、肩にしていた花魁をドサリと投げ出した。その顔を見ると、皺だらけのようすから八十半ば過ぎに見えるが、大変な元気者である。

「川口松太郎だ」

と、ダンテ師がいった。

「八十六歳でまだ現役というのだから感心する。ここでは松の位の太夫だそうだ」

松の位の松太夫は、手にしていたケースを倒れた花魁の股間に装着しようとしたが、ケースに蓮根みたいなくびれがはいっていて、なかなかうまくゆかないようだ。

「こいつ、へんなところを縛ってやがって、はずすのもはめるのも容易じゃねえ」

と、松太夫はにが笑いして、

「おい、張見世に戻ったぜ。起きて、自分ではめな」

と、ゆさぶったが、倒れた花魁は口をポカンとあけたまま動かない。

「川上宗薫というポルノ作家だそうだ」

と、ダンテ師がいった。

川上宗薫は生前パイプカットをしていたと聞いたが、あの蓮根がそうなのだろうか。

「カーネが鳴ります、キンコンカン！」

と、忘却の太夫が声をかけたが、宗薫太夫はまだ失神したままであった。

デブとブスのひしめく

紅格子の前の通りを馬車は進む。

——と、そこから間もない場所で、爆竹のような音があがり、大叫喚が渦まいている張見世があった。しかもこれが宏大といっていい見世なのに、二軒や三軒ではない。

のぞいてみると、大騒動だ。そこにいる花魁たちはみんな中腰になって、大チャンバラをやっている。刀で、ではない。例のペニスケースでだ。

火花を散らす剣戟、という形容があるが、それは静電気の火花どころか、シューッ、パッパッ、シューッと熔接のスパークのようで、黒煙さえたちのぼっている。

この争闘をやっているのは、花魁姿に相違はないものの、大半が紫鉢巻の連中で、それに笄に代わるペニスケースを何本ずつか挿しているから、ちょっと伊賀の上野は鍵屋の辻の荒木又右衛門の趣がないでもない。

が、紫の鉢巻をしているということはハゲ頭ということで、そのハゲ頭からみな湯気をたてて、股間をペニスケースをふりまわしている。

いや、ふりまわしてはいない。——何だかその動きが風変わりである。

「いったい彼らは、何をやっているのです？」

と、私は訊いた。

「あれはたがいに、自分のペニスケースで相手のペニスケースをフォールさせようとしているのだ」

「ははあ、ペニスケースのレスリングですな。彼らは何者ですか」

「主として政治家や実業家だがね。それが、それぞれの政敵やライヴァルをやっつけようとあの悪戦ぶりだ」

「それにしても物凄い火花ですね」

「ペニスケースがやはり大きいからね」

なるほど、そういわれてみると、ここのケースはみんな野球のバットくらいの太さと長さがあった。どうやらみんな、かっぷくはいいが足は短い方々のようで、あれでは立っても尖端が床にくっつくだろう。それにしても、あれを常時宙にささえているのは、なるほど大変だ。ペニスケースで、何かを持ちあげるならまだしも、押さえつけようとするのは力学的にいよいよ大変だ。

とにかくみんな、歯をくいしばり、あぶら汗を流しての死闘の態だが、しかしこれでは何のために見世を張っているのか、わけがわからない。

ただ、中は黒煙にけぶり、その閃光で無数のハゲ頭が明滅して見えるだけで、顔がよくわからない。

それに私は、政治家や実業家の顔をよく知らないので、見おぼえのある顔は少なかったが、それでも、故人だが——といっても、このインヘルノにいるのはみんな故人だが——大デパートの創業者や、映画会社の歴史的大社長などの顔が見えたような気がした。また政治家でも、ほう、あの人物がこんなインヘルノに来たのかと憮然とさせる顔も見たような気がした。とにかく黒煙と閃光の中の判別だからさだかではない。

これが——

ざっと見たところでも、百軒くらいつづいた。

それがやっととぎれたかと思うと——また、ふしぎな張見世を見ることになった。

それは張見世とはいえないほど宏大な部屋であったが、その中に幼児が充満しているのだ。格子の下部のあたり、どのすきまからも、笑ったり泣き叫んだりしている子供の顔が見える。上方からのぞいて見ると、中に無数といっていいほどの子供がウジャウジャ動いている。

よく見ると、みんな足柄山の金太郎みたいな腹がけをして——そのまんなかに葵の紋が染めてあるようだ。いや、中には「い」だの、「は」だの、「と」だのと、江戸の火消しのマトイみたいにひらがなが一文字ずつ浮き出しているものもある。

その子供たちの海から、にゅっと出て来た首が見えた。これはハゲ頭でなく高くゆいあげた髷に笄を挿しているが、なんと下あごのない怖ろしい老人の顔であった。

「あれは明治のころ、いろは牛鍋店をひらいた木村荘平という男だが」

と、ダンテ師がいった。

「彼は東京じゅうに牛鍋店を四十八軒、ぜんぶ別々の妾に経営させようとし、みずからいろは大王と称したが、その妾たちに生ませた子供が、男十三人、女十七人、計三十人。男の子は荘太からはじまって荘六、荘七、荘八など番号順に名づけ、女の子は、久女、十女、士女、十二、十三、十四、十五、十六、十七、などとこれまた番号をもって名とした。——」

その程度のことは私も聞いたことがある。

「それより、あのあごは何です。下あごがないようですが」

「彼が六十六歳で死んだのは顎ガンによってだが、手術のために下あごをとられてしまったのだ。——死んだあとでも、また子供が生まれたという始末だ」

「ああ、あのひらがな一字の腹がけの子は、彼の子供ですか」

と、いったが私は首をひねった。

「しかし、そのうちの、たとえば木村荘八さんなんかのちに有名な画家になりましたが、その荘八さんが子供のままあそこにいるんですか」

「それがつまり、いつかいったインヘルノの影の御相伴さ」

すると、その近くでまた一つ顔が出た。

「あれは？」
「徳川慶喜公だ」
「はあ……」
「荘平は牛鍋だが、これは豚一といわれたそうだがね。あの一橋慶喜とも呼ばれた徳川最後の将軍は、トンカツが大好きだったので、豚の一橋からそんなあだ名をつけられたのだが、豚のように多産だったからと解釈したほうがいいようだ」
「ええと、いったい何人子供を作ったんです」
「男女合わせて二十一人」
「へへえ、あの瓦解の大騒動の中でねえ！　なるほどそのほうの豚一かも知れない」
そのとき、その隣でまた一つの首が出た。
「慶喜公の父親の水戸の烈公、斉昭公だ」
と、ダンテ師がいった。
「父親だけあって、これはさらに偉大だ。……慶喜公は七番目に生まれたから幼名七郎麿と呼ばれたが、十一人目からは余一麿、余二麿と名づけても、余分どころか余九でもとまらず、廿麿、廿一麿、廿二麿でやっとまった。木村荘平のナンバー名の大先達だ。女の子のほうは十五人。合計三十七人」
「へえ、あの尊皇攘夷の大将が」
——と、またうしろから、別の首が出た。

「十一代将軍家斉公だ」
ダンテ師がいった。
「これはすごい。男女合わせて五十四人」
道理で、ここにいる子供たちの腹がけの大半が、葵の紋をつけていたはずだ。あとで計算してみたら、この三人の将軍大名だけで合計百十二人となる。
「それにいろはの大将の分を加えると、百四十二人、過疎地の小学校が一つ出来ますね」
「いや、もっと多いだろう」
ダンテ師は首をふって、
「ここは特別の見世で、かつて彼らの愛した女たちしか客になれないことになっているが、それ以後このインヘルノで彼女たちが出産した子供も、ぜんぶ預かって彼らが育てなければならないのだ」
「ほう。……そりゃ大変だ」
と、いってから私は、
「ちょっとうかがいますが、たくさん子供を生むと地獄へ来なけりゃならんのですか」
「いや、そんなことはない。あのスエズ運河のレセップスだって、老年になってから若い新妻に十二人も子供を生ませ、画家のゴヤや音楽家のバッハなども二十人子供を作ったが、それはみな妻によってだった。こういう多産は罰せられるどころか、神はこれを祝福し給う」
と、ダンテ師は厳かな表情でいった。

「しかるにあの人々はそうではない。妻以外の女性によってだ。彼らの生ませた子供はここに集まっているけれど、子供を生まなかった妾はほかに何十人といる。彼らがその女性たちを精神的にも、まんべんなくみな愛したと思うかね？　そんなことは人間の能力として不可能だ。彼らはそれらの女性をただその場その場での性欲の対象、愛玩動物として扱ったにすぎない。——こういうインヘルノに堕ちざるを得ないゆえんだ」

そのとき、水戸の烈公の髷をひっつかみ、両肩に足を踏んばって立った一人の裸の男の子が、小便小僧のごとく、頭に小便をひっかけるのが見えた。……

驚いたことに、こんな子供だらけの張見世が、数十軒つづいた。

「大半は江戸期のころ、お家相続のためと称してむやみやたらに子供を作った大名や侍連中だがね」

と、ダンテ師がいった。

「思えば——」

と、ラ・ロシュフコー公爵がつぶやいた。

「地球世界で書かれた歴史は、上半身の歴史だった。下半身の歴史は、闇黒の中に沈んでいる。人類をほんとうに動かしていたのは、下半身の歴史だったかも知れないのだが」

そんな見世が

やっと切れると、黒山のような人だかりの広場があった。その奥まったところに、ちょっと歌舞伎座を思わせる屋根を、朱塗りのふとい円柱群が支えた大きな建物があった。

その円柱はやはり紅格子でつながれているが、どう見ても女郎屋——いや、野郎屋とは見えない。

「これは何ですか」

「この町の客寄せの劇場」

と、公爵が答えた。

そういえば、広場には半円形の階段がついて、人々はそれに腰を下ろしてどよめきをあげていた。

「劇場？　どんな？」

「まあ見たまえ」

馬車は格子の外へ近づいた。

すると、まるでギリシャ神殿みたいに宏壮な舞台に——その両側に、一人ずつ奇怪な人物が坐って相対しているのが、幽暗な光にもうろうと見えた。

二人とも朱塗りの曲彔（きょくろく）風の椅子に坐っているのだが、その椅子の脚が人間の背丈の倍ほどある。

一方は、いわゆる衣冠束帯姿だが、その衣（い）は体格の三倍くらいの大きさにつっぱらせたもので、冠は扇の骨をひろげたようなかたちをしていた。

「太閤秀吉だ」
と、ダンテ師がささやいた。
「へーっ」
それで私は、その人物のつけている冠が、秀吉独特のいわゆる唐冠というやつであったことを知った。
一方は——これは日本風でないので何と説明していいかわからないが、中国の、しかも古代風で、錆びてはいるが豪華な金色の冠と衣服をつけた王様であった。
「秦の始皇帝だ」
「ふあーっ」
私はむろん驚倒したが、次に、何を馬鹿げたことを、と笑いたくなって、
「始皇帝というと、たしか紀元前二百年くらいの人でしょう、そんな人でもやはりこんなところにいるのですか」
「地上では何千年でも、ここでは一瞬だ。あの人物のうしろを見るがいい」
私は始皇帝の背景を見た。そこのおぼろおぼろとした幽暗の光の中に、十数騎の騎馬兵が馬首をならべているのが見えた。やあ、あれは始皇帝陵にある兵馬俑のむれではないか。……
と、頭をめぐらすと、太閤秀吉の背景にも、千成瓢箪と五三の桐の旗指物をおしたてて、黒い桃形の兜の下に面頬をつけ、日本刀をそらした騎馬武者が鉄蹄をそろえている。……
「で、両人、何をしているのですか？」

遠目には、始皇帝と秀吉は、むかい合って太公望をきめこんでいるように見えたかも知れない。二人はおたがいに、三メートルほどの竿をつき出していたからだ。
が、釣竿にしては太い。ねもとのほうは茶筒ほどある。しかしそれは先にゆくに従って細くなり、かつ反っていって——やはり、これはペニスケースであった。そういえば、それは二人の股間から出ている。
しかし、その尖端から銀色の糸が垂れて、地上三十センチくらいのところでユラリユラリとゆれている黒褐色の袋のようなものは何だろう？
そして、その二つの袋の間に二人の男が立っていた。赤い長衣を着てどじょうひげをたらした中国人風の男と、黒い大礼服を着てあごひげをはやした日本人風の男であった。
「あの、ぶら下がっている袋は何ですか」
「あれはオットセイの睾丸だ」
「……!?」
「正しくいえば陰嚢を乾してなめしたもので、激しくゆすれば中の睾丸がカラカラと鳴る」
「……!?」
はじめて見る珍物だが、オットセイのオスは五十頭ないし百頭くらいのメスのハレムを作るというから、その珍物が氷嚢ほどの大きさがあるのも当然かも知れない。
「いったい何のためにそんなものをぶら下げてるのです？」
「見る通り、始皇帝と太閤はペニスケースであれをぶら下げているが、力尽きれば袋は床に落

ちる。その落ち方が激しければ睾丸も音高く鳴るが、ときには静かに接地する場合もある。そのときは耳をあてて、よく聴きすまさなければならない。……あの二人の男はその判定役だ」

「あれは何者ですか」

「金瓶梅の西門慶と、日本の伊藤博文だ」

「えっ、西門慶が？　……西門慶って実在した人物ですか」

「いや、たとえ虚構の人物でも、あまり著名になると作者の化身として地獄でよみがえることがある。ふしぎな現象だがね」

と、ダンテ師が首をひねると、ラ・ロシュフコー公爵が口をさしはさんだ。

「べつにふしぎじゃありません。実在の人物より虚構の人物のほうが生動している例は、地球の上でもそうでした」

「それはともかく……西門慶と伊藤博文が、どうしてそんな判定役になったのです？」

「いうまでもなく西門慶は中国名代の好色漢であり、伊藤博文も鹿鳴館で貴婦人を犯したような行状あり、人がいさめると、これがおれのただ一つのタノシミだ、ほかに何の欲もないのだからこの道楽だけは許してくれ、といったくらいの好き者だ。つまり、両人ともに日中の色事の代表的知名人だからね」

「あのオットセイの……睾丸とやらが、何の判定になるのですか」

「西門慶や伊藤博文といえども、あの曲泉で向かい合っている両巨人の前には児戯に類する。……始皇帝と豊太閤は、中国と日本の大権力者としての名にかけて、勃起持続力の対戦をしているのだ」

ダンテ師はいった。

「日本の権力者で漁色をほしいままにした者は少なくないが、秀吉ほど甚だしいものはない。彼は貴族の姫君だろうが、大名の奥方だろうが、彼の殺した敵将の娘だろうが、手当たり次第だった」

「……」

「当時日本にいた伴天連が書いている。関白はこの上もなく破廉恥にして不身持ちである。動物的な肉欲に耽溺して、諸宮殿内には二百人以上の女人を所有している。あちこちにある彼の宮殿のすべてが娼家になってしまったかと思われるほどだ」

「……」

「京や堺の美しい女で、処女といわず未亡人といわず、彼から逃れ得るものは一人もない。のみならず、彼は、美しい処女が見つかるなら、その身分を問わず諸国からこれを探し求めよ、と命ずるまでに至った……と」

「……」

「始皇帝のほうは、これはいまさら私がいうまでもなく、六国の美女ことごとくを――その数三千や五千ではきかない――集めたといわれる阿房宮の作り手だ」

そのとき、秀吉のほうのオットセイの陰嚢がスーと下がって、地上すれすれになった。

大礼服の伊藤博文と、中国服の西門慶がかけ寄り、相撲の行司が土俵ぎわの足もとの砂を見

るように、両足ひろげ、頭を地につけるようにして身体を二つに折った。
「オットットットー」
伊藤博文が叫び、あわてふためいてうしろをふり返って、手をふった。
と、煙霧たなびく背景の中から、法螺貝と陣太鼓の音とともに、十人あまりの女性が行進して出て来た。
これがあきらかに、雪白の全裸に桃山風の衲襠を羽織っただけの姿で、太閤のケースのまわりを半円にとりかこみ、なまめかしく腰をふり出した。
「セイノー！」
博文が掛け声をかけると、オットセイの陰嚢がスーと上がった。
見ると、高い椅子の上で、太閤秀吉はそり返り、猿面を真っ赤にし、汗の玉を飛ばしてりきんでいる。
「あれが床に触れると負けだ。負けると、日本の美女は阿房宮にとられる」
と、ダンテ師がいった。
と、こんどは始皇帝のほうの陰嚢がスーと下がり、伊藤博文と西門慶がそっちへかけ寄り、また身体を折りまげた。
「オットットットー」
西門慶が叫び、うしろに手をふると、胡弓や鐘や銅拍子の音がわきあがって、中国の服装をした美女の一群が、ナヨナヨと纏足の蓮歩を運んで来た。そして、始皇帝のほうへ向かって裳

をかきひらき、かきあげた。
「セイノー！」
上では始皇帝が歯をくいしばり、両肘をまげてうしろにひいてそっくり返っている。まるでひきつけの発作を起こしたような姿であり、形相であった。
こっちの陰嚢もスーと上がった。
やがて鼓舞隊は退場したが、両雄の対峙はつづいている。まるで作りつけの武者人形のように。
それでも、無為にして刻苦の時間が経過する将棋の名人戦を実見したこともある私は、ましてやこの対決の一方が日本の豊太閤ということもあって、手に汗握る思いであったが、やがてラ・ロシュフコー公爵はあくびして、
「このスポーツはたいくつですね」
と、つぶやいた。
「じゃ、ゆこうか」
と、ダンテ師もみれんなくうなずき、馬車は動き出した。
私は訊いた。
「彼らは、永遠にああやってるのですか？」
「まあ、そうだろうね」
と、公爵が答えた。

「勝負はつかないんですか？」
「いや、一日ごとにつく。負けたほうが、つまりオットセイの睾丸を接地させたほうが、そのとき応援に出てた女の子たちを、そっくり相手にとられることになっとる」
「で、結果はどうでした」
「勝ったり負けたりだが、総計においてはだいぶ太閤さんのほうの旗色が悪いようだね」
「ははあ、何といっても相手は万里の長城の親玉ですからな」
「もっとも、勝っても何の役にも立たないね。彼らはあの高い曲泉の上に坐ったきりで、あそこで仮眠、というより疲労こんぱいの極の昏睡ののち、目がさめるとまたあの勝負をつづけるのだから。……」
と、いってからラ・ロシュフコー公爵は皮肉に笑って、
「ああそうだ。この劇場の裏のほうにも無数の小劇場があって、そこでもこれと同様のショーをやってるが、出演者は、大崩壊前の日本の実業家が多いようだね。そこへもいってみるかね」
「いえ、もうこれはけっこうです」
と、私は頭を下げた。
「それじゃあ、こんどは愛欲のインヘルノ第四環をのぞいてみるかね？」
と、公爵がいった。
「異性を愛することによって破滅におちいった人々のインヘルノだ。この破滅とは落魄から死

までもふくむ」

地の果てまで

つづくかに見えた大遊廓野郎屋街から、馬車は横にそれた。
遊廓の桜並木には雪洞がともっていたというのに、日はまだ落ちない。夕暮れというより、霧にけぶる白夜のようだ。このインヘルノは、昼夜の別もお天気も季節もまったくでたらめに思われる。
するとまもなく、馬車は広い林の中にはいっていった。
これがみんな枯木で、それを透して向こうに、多摩川くらいの河が見える。またその林の中の小道を、あちこち散策しているような人影も見える。
枯木林だが、けぶっているような光のせいでけっこう美しい。
それよりも私は、その林の枝のあちこちにぶら下がっている無数の物体に眼を吸われた。一体のごとく見えるが、よく見れば抱き合った男と女だ。それはあきらかに縊死体であった！
「心中だ」
と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。
「しかも、一家心中などではない。ここにあるのは、みな愛欲の果ての心中だ」
その枯木の下は、いちめんに落葉に埋まっているようであったが、その落葉が風もないのに

いたるところぱっぱっと舞いあがるので、そこに眼をそそぐと一本の木の下に一組ずつの男女が、明らかに交合しているのが見えた。

「心中する男女は、ほとんどすべて死ぬ前に、あなたをこれほど愛しているために死ぬのだ、ということを確かめ合いたいようだね」

と公爵がいった。

すると、そのとき、通りかかった木の下で、またぱあっと枯葉が舞いあがり、歌うような男の声が聞こえた。

「この最後のいとなみ……実際私達は、たわむれつつある二人の小児にひとしい、愛の前に死がかくばかり無力なものだとは思わなかった。……」

そのうすぐらい蔭に、どういうわけか地上から燃えあがった燐光のように蒼白い光がゆらめいて、息をのむほど美しい女のあえぐ顔が浮かびあがった。

「世の常のわが恋ならばかくばかりおぞましき火に身はや焼くべき……」

その女の顔に、こういう声と黒い影がかぶさっていった。

「有島武郎という小説家と、波多野秋子という女性編集者だ」

と、ダンテ師が帳面を見ていった。

「有島は、あの通り美しい秋子と恋愛におちいったが、彼女は人妻だった。武郎は、その夫にあたる人物から、姦通罪で訴えるとおどされ、大金を要求されたが、愛を金にかえることはできないと拒絶した。拒絶はしたが、二人は心中に追いこまれた。……」

落葉の中から二人が立ちあがり、やおら頭上の枝に、しごきらしいものを投げかけるのが見え、

「おそらく私たちの屍体は腐爛して発見されるだろう」

という声が聞こえた。

「そうはいうけれど、しかしうれしそうな声だね」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。この女に好かれなかったらしいフランス貴族は、何やら不満そうだ。

馬車はゆるゆると通り過ぎた。

私は、馬車をとめろという声も出なかった。われわれは、この世界をただ眺め、ただ聞くだけで、何の影響力も持たないのである。

しかし、それにしても、何というおびただしい縊死体だろう。

そして、地上を散策しているむれと見えたのは、ほとんど男女のカップルで、あきらかに首を吊る木を物色してさまよっているのであった。

「日本人は心中が好きなようだねぇ」

と、公爵も感心したようにいった。

「外国にはありませんか」

「例がないわけじゃないが、日本人ほど多くないようだね」

そのとき、林の向こうから、太ざおの三味線の音と異様な歌声が流れて来た。

「此の世のなごり、夜もなごり、死に行く身をたとふれば、あだしが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそあはれなれ。……」

どうやら浄瑠璃らしいが、声はテノールだ。しかし美しく朗々たる声にちがいない。

林を通して、二つの影が歩いてゆくのが見えた。両人ともゾロリとした着付けに頬かぶりしている。その手拭いのかぶり方は、遠目ながら、「曽根崎心中」ではなくて「心中天網島」の紙屋治兵衛を思わせる。——

どうやら前の大男が歌い、うしろの小さい男が三味線をひいているらしい。

「あれは、われらのテナーといわれた藤原義江だ」

と、ダンテ師がいった。

「えっ、あのオペラの藤原義江がこんなとこに？　藤原義江は心中したんですか？」

「いや、あれはパーキンソン氏病という、身体の運動機能が動かなくなる病気で亡くなったのだが——ここはさっきもいったように、異性を愛することによって、落魄ないし死をふくむ破滅におちいった人々のインヘルノで、心中者ばかりじゃない」

「藤原義江は、女で破滅したんでしたっけ？」

「さあ、どう見たらいいかね。彼の——三井財閥の大番頭の令嬢で、かつ医学博士夫人の藤原あき女史との『世紀の恋』は一世の話題を生んだそうだが、彼の艶聞はそれだけじゃない。オペラのプリマに片っぱしから手をつけて、彼女たちに貢がせて一生食って、最後まで帝国ホテルでダンディーな暮らしをし、身体も動かぬ死病にかかってからは、最後の愛人にオムツの世

話までさせたんだから、女で破滅どころではない。——もし彼に燃えるようなオペラへの情熱がなかったら、ただ獅子のような混血の容貌を武器に、女を食い物にした大ドンファンの一生だったといえる」

ダンテ師はノートを見ながらいった。

このダンテ・ノートは聖書ほどの厚さだが、コンパクト・ディスクのごとく——それどころではない、あらゆる人類のあらゆる行状についての情報がはいっていると見える。

「が、また家もなく、ホテル住まいもホテル側の慈善によるもので、入院費も最後の愛人の厄介になり、それまでの多くの愛人はおろか実子からも見捨てられ——これは一生いちども父親らしいことをしてやらなかったのだからむりもない——やはり愛欲の果ての落魄の死と見たほうが順当だろうね」

歌声は、蒼くけぶる林を縫って流れる。

「あれ数ふれば暁の、七つの時が六つ鳴りて残る一つが今生の、鐘のひゞきの聞きをさめ、寂滅為楽とひゞくなり。……」

それに三味線の哀切な音が、てんめんとからまる。

「そ、それにしても藤原義江が義太夫をうなるとは……」

「まさかここで、ドンと、ドンとドンと波乗り越えて……と歌うわけにはいかんじゃないか」

と、ダンテ師は笑った。公爵がいう。

「声は美しいが——ふしぎに歌唱力だけは残っているが——しかし近づいて見ると、彼の姿は

惨憺たるものだ。いまダンテ先生がパーキンソン氏病とかいわれたが、足もとに小石でもあれば棒を倒したように転ぶ。前に木があればもろにぶつかる。しかも方向感覚がないために、永遠にこの森の中をさまよっているしかない。とにかく頭はコブだらけ、身体は傷だらけ、ヨダレも糞もたれながしというていたらくだ。介添役も大変だ」

「あの三味線ひきですか」

「そうだ。もっとも彼の場合は、罰というより、みずから望んだ罪ほろぼしの巡礼だが」

「罪ほろぼしの巡礼……だれですか」

ダンテ師が答えた。

「近松門左衛門だ」

「ひゃあ」

「さっき公爵が、日本人は心中好きだといったが、その嗜好の黒衣はあの元禄の大劇作家だ」

近松門左衛門といえば、心中物のみならず、文字通りあらゆる人間世界のドラマをえがきつくし、みずから「妓能、雑芸、滑稽の類まで知らぬ事なげに、口にまかせ筆に走らせ一生を嘯り散らし」と称しながら、しかも「今はの際に言ふべく思ふべき真の一大事は一字半言も遺き倒惑」と、大作者としてこれほど真率痛切の「最後の言葉」はあるまいと思われる述懐を残して死んだ人物だ。

それほど人間のドラマを描きながら、そのくせ本人の生涯も家族も、そして死に方さえも明らかではないという。——

「彼は自分の鎮魂歌の最もいい歌い手を見つけたのだ。相応の介添えはやむを得ないだろう」

「それは、見たいですね」

と、私は叫んだ。

「是非、近松門左衛門という人を見せて下さい」

「そうかね。たしか河の方角へいったね。それじゃ河のほうへ」

と、ダンテ師は駁者に命じた。

それで馬車はそのほうに進みはじめたが、そのうち私はふとあることに気がついた。

林の中には

無数の縊死体がぶら下がり、林の道には人々が散策しているのはさっき述べた通りで、それはみんな男女のカップルだと見ていたのだが、どうやら男一人、女一人というのもある。

一人で首を吊っているのはないようだが、木の下に一人ポツンと立っている者があり、道を一人セカセカと歩いている者もある。

いずれも、だれかを待ち受けるような切ない眼をし、あるいはだれかを探すように血走った眼をしていた。

「あれかね」

私の疑問を読んだように、ラ・ロシュフコー公爵が外に眼をやって、

「あれは、ほんとうは心中なのだが、時間的空間的にいっしょに死ねなかった——たとえば別々の場所で同時に自殺したり、一方が死んで残りがあと追い心中したりした——連中さ。それがここに来て、相手を探しているのだ」

ある場所の枯木群の下に、一本に一人ずつ、十四、五歳の少年ばかりがションボリ立っているのが見えた。

公爵がいった。

「失恋して自殺した少年たちだ。しかも、場所はちがい、時もちがうが、相手の少女も死んでいる。——それがまだ見つからないのだ」

そのとき、遠くから馬の蹄(ひづめ)の音が聞こえて来た。

と、見る、林の向こうに白馬に乗った、黒覆面、黒紋付の着流しの武士が現れた。疾風のごとく近づくのを見れば、口に一枚の紙片を二つ折りにしたものをくわえ、片手に少女を抱きかかえている。

少し離れたところに馬をとめると、彼は口の紙片をとり、

「誰々はおるか！」

と、叫んだ。少年の一人の名らしかった。

「お前の愛した娘はこれか。——この娘は似顔絵そっくりだ。まちがいなかったら受けとれ！」

と、片手で少女を地上に下ろした。一人の少年が林の中から駆け出して、二人はひしと抱き

合った。

「鞍馬天狗ではありませんか！」

と、私は叫んだ。

「あれも——あの虚構の人物も、このインヘルノでは実在しているのですか！」

「いや、あれは嵐寛寿郎という俳優だ」

と、ダンテ師は答えた。私はあっけにとられたが、このほうが当然である。

「颯爽と見えるが、近よれば彼の頭は禿げ、顔はしわだらけで、つけている覆面も着物も色あせ、馬は灰色でヨボヨボしている」

ダンテ師は、例によってダンテ・ノートをのぞきこみ、

「彼アラカーンは、日本の昭和前期隆盛をきわめたチャンバラ映画で屈指の大スターだった。特に剣(つるぎ)の紳士クラマテングを演じては天下一品、満天下の少年のヒーローで、そのギャラは天文学的なものだった。が、映画の中ではラブシーン一切御法度(ごはっと)にしたくせにこの少年たちのヒーローは、実生活ではメッタヤタラに女好きで、女優や芸者で妻にしたもの六、七人、愛人なら数知れず。本人も、この国の法律あきまへん、回教(アイアイ)よろしいなあ、一夫一婦制、人間の自然に反してるのとちがいますか、と、そらうそぶいた」

「ほう」

「それはともかく、それらの女とさよならするとなると、全財産を放り出して、裸一貫でまた次の女にとりかかるといった快男児だったそうな。快男児はいいが、あげくの果ては七十歳を

すぎて長屋住まい、四十も若い何番目かの妻がそこへ一晩親戚を呼んだといって、わびしくも浅ましい夫婦ゲンカを起こし、ついにその妻にも捨てられる始末となった。……これを女による人生破滅型の代表といわずして何ぞや」

めぐり逢った少年と少女は、しばしの抱擁ののち、一本の木の枝に喜々として縄を投げあげはじめた。

アラカンはニッコとしたようすでそれを眺め、さてまた木の下にションボリ立っている別の少年のところへ歩み寄って、少年が持っていた紙片をひろげた。

「この顔をした娘だな。よし、待っていなさい。すぐにこの鞍馬天狗のおじさんが連れて来てあげる。……お前の名は？　なに杉作？　そりゃなつかしい名前だなあ」

と、感動的な声が聞こえた。

「あの紙片に、少女の似顔絵がかいてある。その少女は、どこかわからない遠い遠い林の中で、一人ションボリ立っている。それを彼は探してやるのを仕事としているのだ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「女で人生は破滅したものの、心中までゆかなかった人間は、心中した人々に劣等感がある。それでここでは、心中した連中にいろいろサーヴィスしなけりゃならんことになっているのだよ」

鞍馬天狗は新しい紙片を口にくわえ、また馬に飛び乗り、

「杉作、待っておれよ！」

声を残し、鉄蹄にひびきをあげて、林のかなたへ駈け去っていった。……

——こういう光景を

見るのに時間をとられたので、馬車が林を通りぬけて河原へ出るまで、とうとう藤原義江と近松門左衛門の姿を見つけ出すことができなかった。

河原を見わたしても、それらしい影は見えない。

それよりも、そこで私たちはまた別のものに眼をひかれた。

林を出ると、すぐ近くに二つの行列が出来ていた。みな少年少女をふくむうら若い男女だ。

——その向こうに、それぞれ画架を立てて何か描いている画家がいた。

二つの行列といっても、一方は延々と長く、一方はチラホラ、七、八人に過ぎなかったが、いったい何をかいているのだろう。

向こうに河は流れているが、その風景を描いているようでもない。だいいち、あたりは依然銀色の霧に満ちているようで、白夜の明るさはあるけれど、とても絵をかく明るさではない。

「あれが、さっきの似顔絵のもとだよ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がささやいた。

「この行列の長いほうが、竹久夢二という画家だがね」

「あ。——」

馬車はそちらに近づいていった。

「君も知っていると思うが、竹久夢二のいわゆる夢二調の絵は、大正時代一世を風靡した。が、その流行児の間、彼はあまりにも女性関係で奔放に過ぎた。みんなそれぞれ彼の絵からぬけ出して来たような、たまき、彦乃、お葉などは有名だが、そのほかにも彼と浮名を流した美人たちの名は、いくつもいくつもある」

と、ダンテ師が帳面を見ながらいった。

「晩年彼が急速に人気を失い、窮乏のどん底におちいったのも、そのプレイボーイぶりが世のひんしゅくを買ったからだ。そして、肺病になって、これも慈善で高原療養所で病を養う身となったが、絵をかく紙もない落魄ぶりなのに、死ぬまで見舞いに来た女性は一人もなかった。……」

いかにも十九世紀風の、大きな黒蝶のようなボヘミアン・タイをしめた五十年配の竹久夢二は、いま一枚の少女の絵をかいて、蒼白い顔をした青年の一人にわたした。

夢二は次の客に——これまた少年であったが——彼の希望する少女の容貌を訊き訊き、画架に貼りつけた紙に描いてゆく。

何だかさっきの絵と同じような、例のまつげの長い、頸の細い、ナヨナヨした美少女の顔のようであったが、やがてそれを受けとると、これまた少年は喜々として駈け去った。

よくあれでアラカンの鞍馬天狗が目的の娘を探し出すものだ。

「こっちは大はやりですが、向こうはあまりはやりませんね」

と、私がいったとき、夢二もちょっとそのほうを見て、

「待てど、暮せど、来ぬ人を……」

と、声高く歌い出した。なかなかの美声だ。

「宵待草の　やるせなさ
今宵は月も　出ぬさうな」

すると、そっちの画架の画家が、突然絵筆を地面に投げ、つかつかとこちらに歩いて来た。顔は大老人だが、ラフな洋服につつまれた体軀は、ちょっとしたレスラーのようにがっしりしている。

「東郷青児画伯だ」

と、ダンテ師がいった。

「ははあ、なるほど」

「彼の『色ざんげ』にふさわしい恋愛の生涯は有名だが、彼自身はざんげなんかしない。八十を越えても、いくつになっても女とクネクネしてるのはいいもんだよ、と豪語し、晩年みずから書いた性愛日記なるものは、三十の壮者も闘志を失うほど猛烈なものだった。そして最後も九州のある町のホテルのベッドで……」

ダンテ師がそこまでいったとき、東郷画伯と竹久画伯の間で口論がはじまったようだ。

「いまの歌は、おれをあてこすったのかね」

「いまの歌？　ああ、待てど　暮せど　来ぬ人を……か。あれは、一人ぼっちで待ってる少年

や少女の心情を歌ってやったものだ」

「歌といい、絵といい——尻の青い、餓鬼にゃ受けるだろうが」

「お前さんの絵だって、洋菓子屋のケーキの包み紙みたいな絵じゃないか。頸の長いのはおれのまねをしたんだろう」

東郷画伯が怒りのあまり、竹久画伯の画架を蹴飛ばした。画架は倒れ、竹久画伯は東郷画伯に飛びかかり、二人は組んずほぐれつの格闘をはじめた。

東郷画伯は八十を越えているそうだが、体格はがんじょうで、竹久画伯は五十くらいだが、たしか肺病のはずで、いかにも弱々しい。両人は上になり下になり、勝負はなかなかつかず、そこにいた少年少女たちはこの突発事に、ただオロオロするばかりであった。

そこへ、河原の向こうから、

「オーイ、何をしておるか。早く来んか」

という、しゃがれ声が流れて来た。

と、河の岸辺に黒いゴンドラが漕ぎつけられて、ゴンドラの船頭風の西洋人がこちらを見て、口をいっぱいにあけている。

「早くこれを処理してくれ。きょうは大漁で大忙しだ！」

すると、格闘していた二人は、びっくりしたように離れ、立ちあがり、そのほうへ駈け出した。

その岸辺には大八車が一つおいてあって、ゴンドラから船頭が投げ出したものを、二人は力

を合わせてけんめいに、大八車に運んで積みはじめた。

「あれは、おたがいに身体を結びつけた心中屍体だがね」

と、公爵がいった。

「この上流に、身投げするのに実に恰好な淵があって、きょうは非常に大量の心中者があったらしい。それがここを流れ去ると下流のインヘルノから抗議が来るので、それをあそこでぜんぶしゃくいあげるのがあのゴンドラの船頭の役目で、それを車に積んで森へ運び、一組ずつ木にぶら下げるのがあの二人の絵かきの仕事だ。似顔絵をかくだけが唯一の勤めじゃない。あの両人もいろいろの奉仕を義務づけられているのだ」

「へええ。……あの船頭は西洋人のようですが」

「あれはわがヴェネチア生まれの大破戒僧、大ペテン師、大法螺吹き、天来の無道徳漢、いや何よりもただ男根一本の魔力で、あらゆる女を征服したジアコーモ・カザノヴァだ」

と、ダンテ師がいった。が、首をかしげて、

「しかし、カザノヴァがここに来てるのは知らなかったね。あれは煉獄にいると思ったんだが……」

「いや、大崩壊の余波で、最近ここに吹き飛ばされてきたんでさあ」

と、公爵が説明した。

「本人は、おれはいかなる女にも、惜しみなく快楽と金を与えた。そのあげく、男根の威力が衰えてからは、尾羽打ち枯らし、みなに軽蔑されながら田舎の図書館の司書にまで落魄した。

おれが世評のような悪党なら、そんなことにはならないはずだ……と、あの男らしい屁理屈を口にして、不平たらたらなんですがね」

水光を背に、大鴉みたいに腕をひろげて、一組の屍体を水辺に投げ落としながら、牡牛のように咆える声が聞こえた。

「女のために死ぬなんて……この途方もない大馬鹿野郎めが……その始末をしなけりゃならんおれの身にもなって見ろ！」

大八車がいちおう満載の状態になったと見えて、二人の画伯はそれを曳き、あえぎあえぎ、やがて眼前を通り過ぎてゆく。

と、その上から屍骸の一つがズリ落ちかけ、あと押しをしていた竹久画伯が叫び声をあげた。曳いていた東郷画伯は舌打ちし、二人でその屍体をおしあげるのにかかった。

どうやらその屍骸は男で、しかも首に縄が巻かれているらしかったが、東郷画伯がじゃけんにそれをひっぱると、屍体はまだ息があったと見えて、

「ギロチン、ギロチン、シュルシュルシュ」

という声を発した。

「あれは太宰治という作家だ」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「太宰はああやって、女に縄で首を絞められた姿で入水したんだ」

ダンテ師は顔をそむけ、

「ここはもうよかろう。次へゆこう。——愛欲のインヘルノ第五環へ」

と、駅者に命じた。

この掘割の水も、

やがてさっきの河へ流れこむのだろうか。われわれの馬車は、その掘割にかかる木橋の上をわたっていった。

橋のたもとはちょっとした広場になっていて、そこに出来た人だかりの輪の中に、全裸の三人の男が、三本の杭に縛られていた。

その姿が少し妙だ。三人とも風呂場の伏せた洗い桶みたいなものに腰かけているのだが、地に横たえた三尺ほどの青竹の両端に足首をゆわいつけられて足をひろげさせられている。のみならず、股間にも小さな台がおかれ、その上に男根をのせているのであった。

高札が立てられていた。われわれはそこに近づいた。

「村岡伊平次
小平義雄
大久保清

右の者ら、あるいは無数の女を誘拐し、異国に売りて春をひさがせ、あるいはあまたの女を獣欲のいけにえとせるのみならず惨殺す。真に女人の凶敵たり。よってみせしめのためここに

千日羅切の刑に処するものなり」

ダンテ師がいった。

「第五環に落とされた連中の罪状は立て札の通りだ。村岡伊平次とは、明治から昭和前期にかけて数万人の日本の娘たちをカラユキさんとして東南アジア各地の娼館へ売り飛ばした有名な人肉商人だそうだね。小平、大久保については説明するまでもない。愛欲のインヘルノ最低最悪の連中だ」

「千日羅切の刑とは何です？」

「あの台にのせた男根を、毎日いちど、場末の肉屋のハムよりもっと薄く――透き通るほど薄く、千日かけて輪切りにしてゆく刑罰だ」

と、公爵がいった。

そのとき、すぐ向こうにある小屋から、島田まげに鉢巻をしめ、たすきをかけ、大きな庖丁を持った凄艶な女が現れてそちらへ近づいていった。

「そ、それをやるのが、あの女ですか？　あれはだれです？」

「姓は阿部、名はお定」

見物人は、いまよく見ると男ばかりで、しかも逃げられないようにおたがいに鎖で足首を結びつけられていることに私は気がついた。彼らは恐怖のためどよめいた。

「あれは昭和後期、ソープランドなるものを経営したり、ポルノ映画を作ったり、エロ小説やエロ劇画をかいたり本にしたり、要するに女性の性器を食い物にして生きた最醜最下劣の男のクズどもだ」

どうもあまりフェミニストとは思えないラ・ロシュフコー公爵だが、彼らを見やって、この場合ばかりは最大の侮蔑をこめた声でつぶやいた。

「やがて彼らも、それぞれの罪状により、三日羅切、五日羅切、十日羅切などの刑に処せられるはずだが。……」

嫉妬の地獄

（くろこげのインヘルノ）

「千日羅切の

刑の光景を見るかね？」

と、ラ・ロシュフコー公爵が訊いた。

「いや、たくさん」

と、私が手をふると、ダンテ師も、

「私も、そんなけがらわしいものは見たくもない。ゆこう」

と、いった。

私はうなされたように茫然と坐っていたので、時間の経過もぼんやりしているが、しかし感覚的には一時間もたたないうちだと思う。気がつくと、馬車はまた陰鬱な世界にはいっていた。

「われわれは一つの巨大な泡世界から別の泡世界へゆくのだが、こんどは今の愛欲のインヘルノと同じ泡の中だ。やはり愛欲のインヘルノといっていいが、色気より憎しみがかっている。中には、色気ぬきの憎しみだけにあえいでいる罪びとたちもいる」

と、公爵がいい、荘重につぶやいた。

「嫉妬は恋とともに生まれるが、恋が死んでも、必ずしも嫉妬は死なない。――つまり、これは嫉妬のインヘルノだ」

ガラスの外は暗い。それは霧がたちこめているせいであったが、その霧が――ふつうの白い霧ではなくて黒ずんだ粒々であることに私は気がついた。

一つの町にはいったようだが、とにかく視界はもうろうとけぶっているので、どんな町なのかよくわからない。

それでもすぐ近くを歩いている人影が見えるが、何だか動きが変だ。むやみやたらに転んだりすべったりしている人々があるかと思うと、まるで太極拳でもやっているようにひどく動作が緩慢な人々もある。

「嫉妬は、人間が生まれながらに持っている原始の感情の一つだ」

と、ダンテ師がいった。

「赤ん坊は、乳を与えられたときよろこび、乳を与えられないときは悲しみ、それが何か別の力に奪われたと感じたときに怒り、奪ったものが自分と同類の存在であると知ったときに嫉妬する」

「おっしゃる通りです。そして、人間のなすもろもろのわざは、結局それらの原始感情から発したものが多いのだが、よろこびや悲しみや怒りはやがて何かのかたちに昇華されて消えることがあるのに、嫉妬だけは何物も生まず、ただ嫉妬の感情として残るばかりで半永久的に消えることがない」

と、公爵がつけ加えた。

「嫉妬の罪でこのインヘルノに落とされた人々は、吐く息が煤をふくんでいるように黒い。そして、彼や彼女らのしたたらす汗も排泄物もまた黒いのだ」

「へへえ！」

「君の国では、嫉妬のことを黒く焦げたモチと形容するらしいが、それはまさしく嫉妬にもだえる人間の心理や肉体の状態を適切に表現している」

公爵はつづけた。

「しかも、ここはインヘルノだから、その状態もひととおりではない。彼らの吐く息はいま見るように天日も暗くするほどの黒い霧となり、彼らの流す汗や排泄物は地上をあぶらの泥濘と変えている」

私はオーバーな形容とは思わなかった。これまでにインヘルノの大怪異は数々見て来たし、げんにいま、黒い霧の粒が、いたるところ大きく小さく、螺旋状の渦をまいているのを見ているからだ。

「嫉妬にもいろいろある。女が女への嫉妬、女が男への嫉妬、男が女への嫉妬、男が男への嫉妬——それも相手の才能とか裕福とか幸福への嫉妬など質的にもさまざまあるが、まあ、いちばん多くてドラマチックなのは、やはり男女間の葛藤による嫉妬だろう。ここが愛欲のインヘルノと同じ泡の中にあるゆえんだ」

と、ダンテ師がいった。

「それじゃ、その方面で適当なところへいって見ますか」

と、公爵はうなずいて、駁者に何か命じた。

馬車は町らしい場所をぬけて

海辺を走った。砂浜ではあるが、炭のように黒い。海もまた茫々とけぶって暗い。——と、ある場所に、ちょっとした牢獄のような建物が一つぽつんと建っていた。

馬車はとまった。灰色の塀の門の前である。

見ると、「色情狂専門瘋癲院」という標札がかかっている。

と、その向こうで、「アジアは一なり！」と叫ぶ声が聞こえた。

すると、その内側にいた二人の門衛らしい男がふらふらと歩き出して、鉄格子のような門を左右にひらいた。

中から一台の黒塗りの箱馬車が出て来た。

「五浦の六角堂へ！　アジアは一なり！」

また叫ぶ声がすると、その馬車は海辺を走り出した。どうやら中には、男女二人が乗っているようだ。

「岡倉天心だ」

と、ダンテ師が教えた。

「アジアは一なり、という言葉は、彼にとって、ゴマよひらけ！　というにひとしい呪文だ」

「女性はだれです？」

「九鬼男爵夫人波津子——」

「へえっ……岡倉天心と、その男爵夫人が、どうして色情狂癲癇院から？」
「九鬼男爵が夫人をむりにあそこに押しこんだのだ。そしておそらく、男爵がようすを見に来たときたまたま天心が見舞いに来ていて、すきを見て連れ出したのじゃないか」
「すると、男爵夫人は色情狂じゃないんですね？」
「それが、どうもあやしい」
と、ダンテ師はむずかしい顔をした。
「天心は、以前文部省の美術取調員としてアメリカへゆき、帰国する際、九鬼駐米公使夫人の波津子と同船したときから、両人の仲があやしくなった。以来彼女は夫に離婚を請求してやまず、何度も家を飛び出し、ついには堂々と天心と同棲する始末になった」
「あのころ、その身分で、そりゃ相当なもんですな」
「まさしく狂気の恋だ。一方、相手の天心のほうも正気の沙汰ではない。九鬼男爵は公使以前は文部省の高官で、美術行政の大ボスで、天心を登用してくれた上司だからね。ましてや天心には二人の子供があり、夫人のほうにも三人の子があるという年配なのに。――その九鬼家の三人の子供の一人が、のちに『「いき」の構造』で有名な哲学者九鬼周造となるのだが」
「ほほう」
「それでも九鬼男爵は不倫の妻を離縁せず、とうとう癲癇院へ閉じこめてしまった」
馬車は、いらいらするほどゆっくりと走る。
こちらは幻の馬車だから外界の影響とは無縁だが、めざす相手の馬車がなかなか進まないのだ。

向こうの駁者は、天心の怒罵の声に必死で鞭をふるっているのだが、走る砂浜がまるでオイルサンドみたいに粘っこくて、そのくせ滑って車輪をからまわりさせるからであった。
それでもそのうち、私たちは、その馬車の目的とするところに着いた。それは海につき出した断崖の上で、これが晴れているなら絶景だろうが、この黒い霧の中ではいよいよ陰鬱悽愴の景というしかない。風もここでは烈風に近い。
そこの大地にひろがる松林の中に建てられた奇妙な建物であった。屋根は瓦ぶきだが、壁も柱も朱塗りの六角形の家なのだ。そういえば天心はさっき、「六角堂へ」とかいったようだ。
「天心という人物は、むやみやたらに六角形の家を作りたがったようだが、あれは支那好みなのかな」
と、ダンテ師がいうと、
「いっそ三角形の家を作ればよかったのに」
と、ラ・ロシュフコー公爵がつぶやいた。
馬車の男女は下り立った。
大きな口ひげをはやした天心は、中国の道服のようなものを着ていて、四角形の頭巾をかぶり、同伴の九鬼波津子夫人は、面長にきれながの眼、いかにも浮世絵風の美人だが、癲癇院にいたというのに、板についた洋装だ。何年か公使夫人としてアメリカに住んでいたせいにちがいない。

二人は六角堂に近づいていったが、足どりが重い。——それは心の悩みからというより、何だか靴の底に何か粘るものがくっついているようだ。

と、二人の眼の前で、朱塗りの扉が観音びらきにひらいた。

そこには、眼を吊りあげた丸まげの女性が立っていた。

「わっ」

天心は飛びのこうとしたが、腕をぐいとつかまれた。

「きっとここに来るだろうと思っていたら、やはり来たわね」

と、その女はいった。鼻と口から黒い煙が出た。——どういうわけか、鼻から下、口、あごにかけて煤をぬったように真っ黒だ。

「別荘に色おんなを連れて来て、チンチンカモカモしようったって、そうはゆかないよ」

「天心夫人の基子だ」

と、こちらでダンテ師が、帳面を見てささやく。

「天心夫人がチンチンカモカモとは妙な言葉を知ってますね」

「もとは水茶屋の茶汲み女だった女性だ。天心がまだ東京大学に在学中に結婚したのだが、そのころチワゲンカして、天心が英語で書きあげたばかりの卒論をひきちぎって燃やしてしまったというヒステリー性のある女性だ」

「ヒステリー……それにしてはふとってますね」

「ヒステリーと体重とは関係ない。七〇キロあるそうだ。だから天心は基子と呼ばず重戸といったそうな。——」

ダンテ・ノートには、インヘルノ人の体重まで書いてあると見える。

七〇キロの夫人は、天心を六角堂の中にひきずりこもうとする。すると天心は、これまた明治人には珍しく一メートル七〇センチはある偉丈夫であったが、たまらずそちらへのめりこもうとする。

「さ、いらっしゃい！」

「だめ、だめ、だめよ！」

九鬼夫人が叫んで、天心のもう一方の手をつかんだ。

「あなたは、あたしのものよ！」

と、驚くべし、浮世絵を思わせるそのたおやかな夫人にひかれた天心が、こんどはそのほうへヨロヨロとひき出された。

天心の顔は、赤くなったり青くなったりした。二人の女は、腕のみならず天心の着ている道服もつかんだ。

道服がビリビリ裂けて、もみ合っているうち天心は裸になってしまった。どういうわけか、道服の下に天心はフンドシだけであった。二人の女は、こんどはそれをつかんでひっぱりっこしはじめた。

「エイエイオー！」

「エイエイオー！」

朱塗りの六角堂の入口で、黒髪を吹きなびかせて一人のフンドシ男を争う二人の鬼女――何だか歌舞伎の一場面じみているが、しかし修羅の景にはちがいない。

力士のマワシではないから、フンドシはみるみる両側にのびた。――

黒風黒雨の中に、天心はそれを眺め、うろたえて、

「アジアは一なり！」

と、例の呪文を唱えたが、基子夫人は黒い口をひんまげて、

「何よ、エラそうなことをいって、あなたってひとは不倫の恋をして！」

と、罵った。

天心はひげをふるわせ、天を仰いで、

「魔羅は一なり！」

と、悲壮な声をはりあげた。

すると、それが効いたのかどうか、やはり悲壮な音がピーッと鳴った。同時に基子夫人の手が離れた。

ゆるんだフンドシを手でたぐりあげつつ、天心は逃げてゆく。いや、そのフンドシを九鬼夫人がなおつかんだまま、ひっぱってゆく。

二人はいちど足がすべって尻餅をついたが、すぐはね起きて逃げのびる。

基子夫人は追わない。いや、追おうとする姿勢は見せたのだが、足が床に粘りついているようなあんばいだ。実際私は、その足もとから床へ、タールのようなものが糸をひくのを見た。

――そういえば、それまでも形相は別として、彼女の動きはどこか緩慢ではあった。

「二人とも色情狂病院へゆけえ」

彼女は見送って、呪いの言葉を吐いた。顔の下半分は真っ黒だが、そのひたいや眼のまわりは汗――汗よりももっと濃いあぶらのようなものにヌラヌラぬれひかっている。

「そして覚三は世から責められ、校長なんか、クビになり、落ちぶれ果てるがいい。波津子なんか、瘋癲院で死んじまえ！」

ピ、ピ、ピーッとまた怪音が鳴り、六角堂から黒煙がぼうと吹き出した。

覚三とは、天心の本名だ。――私は、岡倉天心が東京美術学校の校長を追われ、それから弟子の橋本雅邦や横山大観や菱田春草などと日本美術院を創立したが世に認められず、一党の窮迫その極に達したという明治美術史を思い出した。

いま天心とその愛人は、また馬車にころがりこんで、もと来た道をけんめいに逃げてゆく。

「実際に彼は、このスキャンダルのために美術学校の校長をクビになり、もう情事どころではなくなり、結局捨てられた彼女は瘋癲院の中でほんとうに発狂してひとり死んでゆくのだが――」

と、ダンテ師は帳面を見ていった。

「正夫人は、生前の怨念を、いまこのインヘルノでありったけはらしているのだ」

「呪咀がもれるのは、口ばかりではない」

と、ラ・ロシュフコー公爵がつぶやいた。

そのとき六角堂の中から、またピーッという音が聞こえた。
「あの音はなんですか」
「おならだ」
「えっ、お、おなら——夫人の、ですか」
「その通り。さっきもいったように、ここでは、嫉妬する人間は、黒こげの胸中腹中から黒い息を吐き、なお足りないでお尻からも吐く。……思うにかつて存在した地球でも、タバコものまないのに肺ガンになったり腸ガンになったりした連中は、ほんとうは嫉妬ぶかい人間じゃなかったのかね」
公爵は笑って、
「それどころか、総身から飴のごときあぶら汗を流す。それはあらゆるものを粘着させるだけでなく、自分自身の運動も粘って、まるで太極拳をやっているようになる。そのおかげで、いまは天心先生が何とか逃げられたようだが。——」
「公爵、次へまわるとしようじゃないか」
と、ダンテ師がいった。
こちらの馬車は断崖からひき返し、道に出た。天心たちの馬車はもう影もない。
そしてまた、海に沿って走り出した。
ふと私は、気になることを尋ねた。
「ここは嫉妬のインヘルノでしょ。つまり嫉妬という悪念にもだえた人々の来るところでしょう？」

「左様」
「それなのに、嫉妬された人間もここへ来るんですか？」
「そうだ」
と、ダンテ師がうなずいた。
「嫉妬は罪だが、しかし事実においては、嫉妬される側にもそれに相応する罪があることが多い。いまの天心の件もそうだが、これから見る例など、そのいい例だ」

馬車はやがて海からそれて、

ちょっとした山あいにはいっていった。
樹々の中の渓流らしいながれに沿ってゆく。おまけにそのながれは、幾段もの小さな滝になっている。
というと、なかなかいい景色の中をゆくようだが、実際また美しかるべき風景なのだが、何しろ色彩がない。それに、依然霧が渦まいている。樹々の葉からはうす黒いしずくが粘っこい糸をひいている。水墨画といいたいが、なんだか泥で描いた世界のように見える。
——それにしても、これはどこかで見たことがある景色だぞ。あっ、これは湯河原へゆく道とそっくりじゃないか！

と、私が思い当たったとき、ゆくての道に一つの影が見えた。その向こうに、温泉街のような家並が見えた。

私たちはすぐにその人影に追いついた。この霧の中にムギワラ帽をかぶり、着物をしりっからげにし、わらじをはいた青年だ。

こちらの馬車が見えるはずもないが、偶然彼はヒョイと顔をあげた。どういうわけか、左手で顔の下半分をかくしていた。

そのせいかも知れない。それは眉目清爽な若者の顔であった。というのは、あとで知ったことだが、彼の鼻から下は、黒い煤に覆われていたからだ。

ただ、その掌のあいだから、そのときもうす黒い息がもれていた。そして、その清爽なひたいのあたりも、ねっとりした汗にひかっていた。

「二十三歳の荒畑寒村だ」

と、ダンテ師がノートを見ていった。

「ほほう」

その日本社会主義草創期の大先達の名は私も知っている。——

「荒畑寒村氏もこのインヘルノにいるのですか？」

「彼は、最後まで不屈の意志と清らかな理想を持ちつづけた尊敬すべき社会主義者だったが、その情熱的な性格は若いときからのものだった。彼は当時の社会主義の指導者幸徳秋水を父のごとくあがめ、同志の管野須賀子という女性との恋に燃えた」

「はあ。……」

「たまたま彼は、社会主義者のデモ行進で警官隊と衝突し、検挙されて入獄した。その間にその恋人は師の愛人になったのだ。どちらに対してもその尊敬と恋は純粋熱烈なものであっただけに、彼は悲憤した。彼の悲憤はもっともだ」

「私もそう思います」

「彼は、日本の社会主義運動のあらゆる劇的場面に登場するけれど、彼の全身を黒こげにするほど苦悩させたのは、この秋水と須賀子の不倫であったろう。彼はその後この事件から解脱し、生涯を社会主義運動に捧げたけれど、しかし九十三歳で死ぬとき、彼の脳裏に黒煙をあげていたのは、七十年前、明治四十三年のそのときの追憶だった。……」

「ああ」

「彼は九十歳のとき、はじめてユングフラウに登って——名にしおうユングフラウの立姿わが初恋の女に似たりし——と歌ったが、それは管野須賀子の姿であったかも知れない。ともあれ荒畑寒村は、いま天国のユングフラウにいる。が、その分身は二十三歳の寒村として、いまもこの嫉妬のインヘルノを、まなじりを決して急行しつつあるのだ」

急行とはいうけれど、その若い寒村の足どりは重かった。——これもわらじから地上へ、粘っこいタールが糸をひいているようだ。

馬車はそばを通りすぎて、集落にはいっていった。なるほど、あちこちから湯気がたちのぼり、「湯河原温泉」という立て看板が立っている。

私の知っている湯河原とはちがう——はるかに寂しい温泉地だが、その中をながれる渓流だけは同じだ。これは明治四十三年の湯河原にちがいない。湯気ばかりではなく、ここにもうす黒い霧がただよっている。

その中の、往来のあちこちに、黒い制服の佩剣姿の巡査が見えた。見たところ、十人くらいもいるらしい。宿泊客のゆかた姿でない通行人が通りかかると、いちいち呼びとめて何やら訊問している。

巡査たちの見張っているのは、どうやら「天野屋」という看板をかかげた旅館らしかった。が、この厳戒ぶりでは商売にならないと見えて、その旅館はほとんど雨戸を閉じていた。

「幸徳秋水はいま愛人の管野須賀子とともに、友人の援助でこの湯河原に滞在して、社会主義とは関係のない著作をしているのだが、彼を社会主義の元凶として畏怖する当局は、あの通り監視網を張っているのだ」

と、ダンテ師はいった。

「いまや彼は、行動的にも経済的にもあらゆる点で息の根をとめられようとしている。その中で、須賀子との愛欲だけは、それゆえにいっそう灼熱的に燃えている。——ただし、須賀子のほうは愛欲だけに溺れてはいない。彼女はこの虚しき悦楽の小世界から幸徳をひきずって飛び出して、東京で天皇爆殺を敢行しようと志しておる。ところが、あの警戒ぶりだから、一歩も出るに出られないのだ」

気がつくと、旅館の入口には、空俥が二台とまっている。

そのとき、天野屋の雨戸に、バラバラと小石が投げつけられた。往来で罵る声があがった。

「社会主義の裏切り者！」

「女狂いの背徳漢！」

「ピッ、ピッ、ピーッ、プーッ」

そしてまた石が投げられた。

見ると、ゆかた姿の五、六人の男だ。彼らの鼻から黒い煙が噴き出していた。最後の音は例の放屁らしい。

ほかの宿の見物客だと思っていたらしい巡査たちは、あわてて走って来たが、それらの顔を見て、

「あっ、こいつらも主義者だ！」

と叫んで、つかまえるのにかかった。男たちは上流方向への道を一目散に逃げる。それを巡査たちが追って、天野屋の前は数瞬無人になった。

「須賀子との恋愛で、秋水は、同志たちすべてから指弾の嵐にさらされた。彼は味方からも四面楚歌の状態にある」

と、ダンテ師はいった。

「彼らの非難は正しい。しかし彼らの鼻息を見てもわかるように、彼らはその恋愛に対してすべて嫉妬しておる」

「世の正論なるものの半分以上は、嫉妬心から発しているものです」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「このインヘルノには、嫉妬者と被嫉妬者がいるが、その外見上の区別は、前者は黒い鼻息をして、そして昂奮すると猛烈に放屁する。後者はそんなことはない」

「あ」

と、私は叫んだ。

宿の入口に、二人の姿が現れたのを見たのである。一人は四十年配の、やせて小柄で、しかし悽愴の気をたたえた男であり、一人は三十くらいの——決して美人とはいえないひらべったい容貌だが、どことなく妖艶の香のたちこめた女であった。

「秋水と須賀子ですね」

「雨戸のすきから外をうかがっていたのだろう。——二人は東京へ出ようとしているのだね」

と、公爵がいった。

その通り、二人はそこに待っていた人力俥へ乗りこんだ。

俥夫は十歩ばかり走った。

すると、ゆくてからやって来た一人の青年がその前に立ちふさがった。——さっき見た荒畑寒村だ。それが、懐中からピストルをとり出して、銃口を二人に向けた。

「荒畑君、相すまん。……」

と、秋水がうめいて、頭を下げた。

「気のすむように、撃ってくれ」

鼻から黒煙を噴きながら、しかし荒畑寒村のピストルは火を噴かなかった。

「おゆき」

と、須賀子がいった。俥夫に対してである。完全に荒畑を無視して、また動き出した俥を見送って——青年寒村のお尻から、ピーッという音が鳴ったが、依然ピストルは鳴らなかった。

秋水の俥も通りすぎた。

ピッピッピッピー、物凄い放屁を連発し、苦悶の形相で見送りつつ、寒村はそこに棒立ちになったままであった。

「どうしたんですか。須賀子の黙殺に圧倒されたのですか」

と、私は尋ねた。

「いや——そうそう、もう一つ、ここでの嫉妬者の特徴がある。何度もいったが、彼らは嫉妬のあまりたえずあぶら汗をながしている。嫉妬のメートルが上がれば上がるほど、その汗の量と粘度が増す。排泄物もまた然りだ。そのためここはむやみやたらに粘っこい世界で、それは君も見て来た通りだが、その汗や排泄物を出す当人がむろんいちばん影響を受けて、すべての動作が太極拳的になる。極度に達すると、身動きもできなくなる」

と、公爵がいった。

「荒畑の指は膠着して、ひきがねもひけなくなってしまったのだ。——彼はこのあと、あのピストルを自分の頭にあてて自殺しようとするのだが、それさえ不可能となる」

「それじゃ、ここはもう終わり。——」

と、ダンテ師がうながした。
「次へゆこう」
もと来た道を、湯河原の町はずれまで来たとき、いまの秋水らの俥を、巡査のむれがとりかこんで、俥から下りることを命じている光景に出会った。
「いよいよ逮捕に踏み切ったようだね」
と、ダンテ師がいった。

馬車はまた海に沿って走り、

やがて大きな町にはいった。それまでの海辺の景色や、すぐ向こうに箱根としか思われない山影がボンヤリ見えたところから小田原ではないかと思われたが、ゆきついたところはやっぱり海で、しかもほんの眼の前に島がある。
「はてな、あれは城ケ島じゃないか知らん？　するとここは三浦半島の三崎のはずだが――箱根のすぐ下に城ケ島があるなんて……」
と、私が首をかしげると、ラ・ロシュフコー公爵が、
「何しろ例の大崩壊後だからね。あまり気にしなさんな」
と、いった。
小田原にしても三浦半島にしても、風光明媚な土地のはずだが、ここも依然雨にちかい霧が

立ちまよっている。
灰色の波が音もたてずにのたくっているその海辺に、古い大きな寺があった。馬車はその中にはいっていった。
すると広い境内の一画に、屋根も壁も草で出来た南洋の小島の小屋みたいな――あるいは童話のような家があって、その前の空地で、この霧をものともせず、何百人もの人々が緋もうせんをしいて、仕出しらしい御馳走を食べ、酒を飲んでいた。芸者の姿も十数人見える。空に万国旗をつらね、屋台店まで出ているというはなやかさだ。
「こりゃ何ですか」
「詩人北原白秋がこれから棲む『木菟（みみずく）の家』が落成したので、そのお祝いに招かれた人々だ」
と、ダンテ師が答えた。
「白秋の家……ずいぶん豪勢な落成式ですね」
「何年か前、白秋は東京で、人妻と不倫事件をひき起こした。彼は姦通罪で、その人妻とともに牢につながれる羽目となり、相手の夫に――新聞記者だったそうだが――三百円の示談金を払ってやっと釈放されたが、新聞にはたたかれ、世から責められて、いちじは自殺も考えるほどの窮地におちいった。――それから何年かたって、詩人としての彼の名声はようやく回復し、ここに新生の家を作るに至ったのだ」
「ほう、北原白秋にそんな事件があったのですか。それは知らなかった」
「その前後に、彼は有名な詩集『桐の花』を出したから、桐の花事件というそうだが」

ダンテ師はノートをのぞきつつ、
「人妻ゆゑにひとのみち
汚しはてたるわれならば
とめてとまらぬ煩悩の
罪のやみぢにふみまよふ……」
と、詠んで、
「その狂恋のさなかの彼の詩だ」
「その人妻はどうしました？」
「あそこに来た」
と、ダンテ師が指さした。
と、山門をくぐって、ひとりの女がはいって来た。
着物は着ているが、胴がきゅっとしまって、西洋の女のような姿態だ。髪を鉢割れにし、皮膚も日本人ばなれして白く、はでな顔だちをしている。もっとも着付けはどこかだらしなく、そしてうすよごれているようだ。ただ右手には小さな手桶をぶら下げて、それにあふれているのはたしかにうすむらさきの桐の花であった。
そして左手で口を覆っているが、そこからうすい黒煙がもれていた。
「あれが白秋を煩悩の闇に迷わせた松下俊子という女性だ。これも夫から離縁され、牢を出てからメチャクチャになって淪落の道をたどり、はては横浜の本牧のチャブ屋の売春婦にまで落

ちた。それを知った白秋はいよいよ詩人的な愛に燃え、そこから救い出して改めて自分の妻にした」
「ほう」
「ところがまもなく、彼女がきわめて気まぐれで、虚栄心が強く、でしゃばりで嘘つきの女であることがわかって——これは白秋の言い分だから、女のほうからすれば別の言い分があるかも知れない——深刻ないがみ合いののち、二人は別れたのだ」
松下俊子なる女性は、そこで酒を飲んでいる男の一人に、何か訊いていた。すぐにその男はあわてて立ちあがり、駈け出していった。
「白秋先生がいるね」
と、公爵が眼を投げた。
「木菟の家」の前で、カクテルらしいグラスを握っているのが、たしか写真で知っている北原白秋であった。ルパシカに赤いトルコ帽をかぶり、黒眼鏡に黒い口ひげをはやしている。
男の知らせを聞いて白秋が、グラスをとり落とすほど狼狽した風を見せたのに、そばの女がそれをおさえて何かいい、ひとり立ちあがった。「私にまかせて」といったようだ。
スラリとして、どこか優雅で、理智的な美人であった。
「いまの奥さん、章子夫人だ」
と、ダンテ師がいった。
すぐに「後妻」の章子夫人はこちらに出て来て、「前妻」の俊子と向かい合った。

数語の問答の後、

「せっかくですけれど、あなたからのお祝いを頂戴することは御遠慮いたしとうございます」

という章子夫人の声が聞こえた。

松下俊子は、それまで口をおさえていた左手をはずした。

「あんなに私をひどい貧乏で苦しめたくせに——いま、しゃあしゃあと新築の落成式をやるなんて——そんな虫のいい幸福は、私は許さないわ！」

と、彼女は叫んだ。

その口から黒煙が噴き出し、まるであぶらをかぶったように満面がぬれ、身体の下のほうから、ピッ、ピッ、ピッ、ピッ、ピーという音がほとばしった。

「こんなお祝いなんか、メチャメチャになればいい！」

そして彼女は、手にしていた手桶を宴の上へ向かって投げつけたが、桶は手に粘着してぶら下がり、桐の花は糸をひきながらも足もとに散った。

ようやくその桶を地上に落とすと、呪咀にみちた前妻は、荒々しい放屁の音をひびかせながら山門のほうへもどっていった。ただし、例のうすきみ悪い緩慢な足どりで。——

数分、しらけわたった宴の席は、

「空に真赤な雲のいろ
玻璃に真赤な酒のいろ
なんでこの身が悲しかろ

空に真赤な雲のいろ」

と、突然歌い出した白秋の大声とともに、それまでのざわめきをとり戻した。ざわめきどころか、みんなこれに手拍子打って合唱しはじめた。あっちこっち、踊り出した者もある。

もっとも真っ赤な雲などどこにも見えず、うす暗い霧たちまよう中の宴であったが。——

するとそこへ、山門のほうからまた一団の——十数人に上ろうか、こんどは男たちがドヤドヤと闖入して来て、呆れはてたようにこのどんちゃん騒ぎを見ていたが、

「こらあ、きさまら精神異常にでもなったのか」

「こんならんちき騒ぎをする権利がだれにある？」

「見れば、芸者まで呼びおって——」

「世間の眼を怖れないにもほどがある！」

と、わめき出した。口から黒煙をたてている者もある。

と、その中から、眼鏡をかけた一人の若い男がつかつかと白秋と章子夫人のそばへ歩いていって、

「兄さん、何です、この有頂天ぶりは——あなたは、あれだけの事件を起こして世から葬られた人ですぞ。あの事件に苦しんだのはあなただけじゃない。家族みんなが苦しんだ。家族だけじゃない、あの示談金三百円は、みんな知人の義俠による寄付ですぞ！」

と、詰めよった。白秋は口をモガモガさせている。

うしろから、いま来た連中が集まって、北原夫妻をとり囲んだ。

「白秋の弟鉄雄や、詩人仲間や作曲家や弟子や知人たちだ」
と、ダンテ師がいった。
その人々は鼻から黒煙をたてて、こんどは章子夫人を攻撃し出した。
「白秋さんは詩人だから、非常識なこともまだ許せる」
「奥さんがついていて、何てことです」
「ついていてどころじゃない。聞けばきょうのお祝いを思い立ったのも、そのやりかたもみんなあなたの指図だというじゃありませんか」
「あの家を作った職人たち——みんなにそろいの法被を着せて、葦簀張りの屋台まで出して、東京から芸者衆まで呼ぶとは狂気の沙汰だ」
「これまでの、周囲の苦労を何と思ってるんだ！」
「ピッピッピッ、プー、ピーッ」
物凄い屁の伴奏であった。
北原鉄雄は夫人を指さして叫んだ。
「あなたはまったく北原家の嫁としてふさわしくない人だ！　プププッ、ピーッ」
蒼白な顔の夫人は、白秋のほうに眼をむけて、
「あなた、こうまでいわれて、あなた何もおっしゃらないの？」
白秋は依然口をモガモガさせているだけだ。
すると、立ちすくんでいる章子夫人の前に、一人の若い男がつと立って、かばうように大手

をひろげて、
「奥さんの相談相手になったのはおれだ」
と、どなった。ひげをピンとはねあげた豪放な風貌の男だ。
「あれは北原家によく出入りしている池田という新聞記者だ」
と、ダンテ師がいった。
「白秋がまたあちこちの新聞雑誌に詩を載せるようになったのも彼の奔走のおかげだという。——」
池田は攻撃側を大目玉でにらんで、
「白秋先生と御結婚以来、この奥さんがどれほど苦労されたか、みんなまざまざと知ってるはずじゃないか。やっと一陽来復して、再生のお祝いの日を迎えるにあたり、せめてきょう一日だけでも羽目をはずしてもいいじゃないかと考えられたのが、何で悪い。ふつうの人の奥さんじゃない。これこそ大詩人北原白秋夫人としてあっぱれなやり方じゃないか！」
「きさま——」
と、だれかわめいた。
「きさま、奥さんと、妙なうわさがあるぞ」
「何を——この馬鹿っ」
池田が相手を張り飛ばしたのをきっかけに、そこは一場の修羅場と化した。芸者衆のけたたましい悲鳴がかけめぐった。

空もようまでみるみる暗澹の色を濃くした中に、十数人ずつが、殴り合い、はては組んずほぐれつの大喧嘩をはじめた。それはまるで泥の中の大たちまわりみたいな感じで、げんに一帯の緋もうせんは、黒いタールのようなものに塗られてゆく。

何だか文句をつけに来たほうの動作が緩慢で、旗色が悪いようだ。やがて彼らは、ほぼねじ伏せられたり、おさえつけられたりしたが、しかし一帯は惨澹たる光景と化していた。

「奥さん」

と、池田が話しかけた。

「とにかくこの場をはずしましょう。一応あと始末するまで、海のほうでもいってて下さい」

「あなた、いっしょにいってくれますか？」

と章子夫人は池田を見あげ、次に驚くべきことを口にした。

「これから先、ずっと――」

池田は愕然たる表情になって夫人を見つめていたが、やがて黙ってうなずいた。

「あなた」

こんどは夫のほうに向かって、章子夫人は呼びかけた。

「私は決心しました。私は北原家を去ります」

白秋もまた鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている。

「北原家の人々も、あなたの友人たちも、いかにもあなたのためと思っているようで、実は私を嫉妬しているのです。それに対して、あなたはちっとも私をかばってはくれませんでした。

私にはあなたの心がわからないわ。でも、このいきさつは、胸に手をあててお考えになれば、あなたが何より御存知でしょう。……いま私は決心がつきました。私はこの池田さんといっしょに、私の新しい人生に旅立ちます」

そして章子夫人は、池田の手をとって、山門のほうへ歩き出した。池田の足どりは、あやつり人形のようであった。

白秋はしかし追おうともせず、口をあけて二人を見送っている。

が、やがてその山門のほうへ――いや、その向こうの灰色の海に浮かんでいる島影に眼をやって、哀愁にみちた歌声をあげはじめた。

「雨はふるふる、城ケ島の磯に
利休鼠の　雨がふる……」

その口からは、しかしうす黒い煙がただよい出していた。

「いったい、何が起こったんですか？」

私もあっけにとられた。

「まあさ、窮迫を共にして苦闘する夫婦と見えて、やはりこれまで、それなりに両人の間にいざこざがあったんだろう。その間に夫人の心にいつのまにか池田という男がはいりこんでいたのだろう」

と、ダンテ師がいった。

「しかし、白秋を復活させたのはもっぱら自分の努力のおかげだ、といわんばかりの章子夫人

が、北原家の人々にとってはにがにがしかったのだろう。また友人たちがこの天才的詩人の復活を願っていたのは事実だが、同時にまた、こんな大々的復活宣言に不快をおぼえたのも事実だ。章子夫人がそれを嫉妬だと見ぬいたのは、当たらずといえども遠からずだ」

「賛嘆の背中にはいつも必ず嫉妬がある」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「何よりの証拠は、ごらん、彼らはいずれも例のあぶら汗を流し、口から黒煙を吐いているじゃないか」

「そしてまた白秋も吐いてますね」

と、私が気がついていった。

「いくら何でも妻を奪われてはね」

と、公爵がいった。

「それにしても白秋先生は、かつては新聞記者の妻を奪い、こんどは新聞記者に妻を奪われるとは妙な因縁だねえ。……」

ダンテ師がひとりごとのようにいった。

「いま押しかけた連中の中に、その男が混じっていたよ。顔の下半分を手でかくしてね」

「えっ、だれが？」

「最初に妻を奪われた記者さ」

私たちは

そこからまた遠くない美しい浜辺に来た。——

いや、海にすぐ迫った森と、その間の半円形の砂浜と——本来なら美しかるべき景観のはずだが、海も森も灰色の霧にけぶり、砂浜はいちめん黒いタールのようだ。

げんにその浜辺をトボトボと歩いている一人の女性の足は、まるで粘っこい糸をひいているようであった。

こちらは見えないのをいいことに、馬車を近づけてみると、粗末なメリンスの袷に木綿の羽織を着た三十歳くらいの女性であった。

束髪が乱れて逆立っているのは、海風のせいばかりではないらしい。どう見ても、鬼女の相貌だ。眼も口も大きすぎるほど大きく——その口はサロメみたいに真っ赤に口紅が塗られている——美人には遠いが、ふしぎにふつうの女性にはめったに見られない理智的、意志的な顔だちなのだが、それだけにいっそうこわい。——それどころか、その片手には短刀さえ握られている。

「もう……もう、がまんできないわ」

と、彼女がつぶやくのが聞こえた。口から黒煙が立つとともに、そのお尻がピーッと鳴った。

そして、身体をまわして反対の方向へ——まばらな家並のあるほうへ歩き出したが、いまいったように足の裏に黒こげの餅をくっつけて歩いているように見える。

「神近市子という女性新聞記者だ」

と、ダンテ師がいった。

「彼女は社会主義に同情を持つ新しい女性で、大杉栄という社会主義者に近づいた。というより、大杉栄という男自体に吸引されて社会主義に眼をひらかされたといったほうがよかろう」

「ははあ」

では、ここは葉山なのか、と思い当たった。

私も「葉山事件」のことは知っていたからだ。そうはいっても、それについては漠然たる知識しかないし、だいいちこのインヘルノでは、ここに来た人々の罪や怨念や妄執がそれぞれの世界を生み出してはいるけれど、必ずしも前世の出来事の再現ではないことはもうよく知っている。しばらく、ようすを見よう。

「この大杉という男がまた、一種の男性の象徴といえるような人物で、思想にも情事にも豪快無比の男でね。そのころの日本は、社会主義というと、あの幸徳秋水や荒畑寒村の例に見るように投獄はおろか生命をさえかけた運動だったのだが、大杉はなんど投獄されても平気な顔で屈しない」

ダンテ師はノートを見ながら、

「一方で彼は、やはり社会主義の先輩堺利彦の妹で、かつて自分の着物の裾に火をつけてまでくどいて獲得した保子という妻がありながら、神近市子に手を出し、かつまたずっと若い伊藤野枝という同志の女性にも手をつけた。――」

「四角関係ですね」

「そうだ。ところが大杉は、神近は同志で、かつえらい女だから、姉のようにすべてを許してくれるだろうと虫のいい解釈をして、彼女に金を工面させ、運動資金はおろか野枝とのあいびきに使って、ぬけぬけした顔をしていた。それがまた陽性で闊達で天衣無縫なのだ」

「フランスの伊達男にもよくありますよ。そこが女性にはいちばん魅力ある男性のタイプらしいから、女の馬鹿さかげんはたんげいを許さない」

と、ラ・ロシュフコー公爵はにがにがしげに嘆息した。

「で、いまも大杉と野枝は、神近からもらった金でこの葉山の旅館に滞在して、いい気な愛のひとときをたのしんでいる。大杉は六つになる甥を連れて来て市子の眼をごまかそうとしたが、市子はだまされず、さっきようすをうかがいに来て、野枝もいっしょだとつきとめた」

と、ダンテ師はつづける。

「市子は何度ものたうちまわって、大杉が期待するような存在であろうと悶えたが、しょせん彼女は思想的同志以前にまず女性だった。で、さっき野枝が彼女を無視して、子供を連れて風呂にはいっている間に、大杉がふてくされて寝ている蒲団の中にまでもぐりこもうとしたが、大杉は無情にそれを追い出した。そこで一応はここまで退散したものの、いまや嫉妬の鬼女となってふたたびひき返そうとしているのだ」

いまその神近市子は、黒い息を吐き、短刀をひっさげて、まさしく鬼女として、粘着する足をひきずってゆく。

やがて海に面した一軒の旅館らしい二階家についた。

つき出した玄関に、「即席料理・海水浴・御旅館日蔭の茶屋」とある。

するとそこへ、奥から六つくらいの男の子の手をひいて、甘歳ばかりの女が出て来た。丸まげにゆった、愛くるしい——そのくせ怖ろしく野性的で肉感的な女だ。

短刀を背にかくして、神近はいった。

「このドロボーネコ」

若い女はさっと顔を紅潮させ、負けずにやり返した。

「そっちのほうがドロボーネコみたいにまわりをウロウロして……だいいち保子奥さまから見れば、あなたもドロボーネコじゃありませんか」

これが伊藤野枝にちがいない。——これは死をかけた日本社会主義の黎明期のたたかいの中のジャンヌ・ダルクであった。あの管野須賀子を、決死の戦場における青い炎とするなら、これは真紅の炎であった。

が、このジャンヌ・ダルクは、いま「女」のたたかいでの凱歌に酔って、

「大杉を私からとり戻せるなら、とり戻してごらん！」

というと、子供の手をひき、神近の身体にぶつかるほどの勢いで横をすりぬけて、さっさと浜辺のほうへ歩いていった。

気圧されて身をひらいた神近市子は、頭からあぶらをかぶったような面貌となり、たちまち狂ったように放屁の音をたてつつ、宿の中へはいっていった。馬車はそれを追った。

奥まった二階の一室に、蒲団を敷いて男が一人眠っていたが、こちらを見て眼をあけた。年は三十ばかり、しゃれた口ひげをはやし、男の権化のようなせいかんな顔をしている。大杉栄にちがいない。

「また来たのか」

ウンザリしたように彼はいった。

神近市子は泣きそうな表情で、

「ね、××××××××」

と、いった。よくききとれず、

「なんといったのです？」

と、私はダンテ師のほうをふりむいた。

「何といったのかね。いや、大杉が書いた『自叙伝』にそれが書いてあるのだが、日本の内務省の役人がそれを××に変えてしまったので、私のノートにも××としか出てないんだが」

と、ダンテ師が答えた。

「いけません。拝借したお金はそのうち返します。僕はもうあなたとは他人です」

と、大杉は切り口上でいうと、蒲団の中でくるっと向こうをむいてしまった。

神近の眼がぎらっとひかると、彼女はかけより、短刀をふりかぶって、大杉の頸部に斬りつけた。

「この神近に斬りつけられたときのことを、のちに大杉栄はこう書いている。——ふと僕は、

咽喉のあたりに、熱い玉のやうなものを感じた。『やられたな』と思つて僕は目をさました」

と、ダンテ師は帳面をのぞいて、

「彼女は障子をあけて、室のそとへ出て行かうとしてゐた。『待て！』と僕は叫んだ。彼女はふり返つた。……」

と、大杉の手記らしいものを読んでから、ふしぎな顔をして、

「別のところで大杉は、奇怪なことを書いている、というのはこの事件の後遺症として、彼が伊藤野枝と同衾していると、真夜中に、必ずそのときの神近市子の姿が——自分を刺して逃げながら、部屋の出口でふり返って、『許して下さい』と叫んだときの、死人のように顔蒼ざめた姿が——繰り返し繰り返し現れて来たというのだ。そのときは神近市子は生きていたのだから、これはまったく生霊というやつだね」

「ほほう。……」

私もうす気味が悪くなった。

「日本には大昔から生霊というものがあって、たとえば源氏物語という有名な恋愛小説に、六条の御息所という、嫉妬のあまり生霊となって主人公とその愛人を苦しめる女性が出て来ますが……社会主義の新女性・神近市子はまったくその伝統をついだ女性だったのですな」

「うん、のちに裁判にかけられた神近は、動機はただ嫉妬でした、と正直に告白している。では大杉の文章を読む。……『許して下さい』彼女がふり向くと同時に発した此の言葉が僕には意外だつた。しかし、もうかなつた以上、僕は彼女を許す事が出来なかつた。少なくとも其の瞬間の僕は、何んと云ふ理屈はなしに、たゞ彼女を捕まへてそこへ叩きつけなければ已まなかつた。……」

ダンテ師が読みあげる通りに、彼と彼女は動いている。

それは彼と彼女の動きが、例のごとく粘っこく——まるで映画のスローモーションみたいに緩慢であったから、同時進行が可能であったのだ。あるいは浄瑠璃通りに動く歌舞伎のだんまりを思わせる光景といったほうがいいかも知れない。

ダンテ師の義太夫的朗読はつづいた。

スローモーションでさえなければ、両人の活劇はなかなかのものであった。宿の階段をかけ下りる市子の背中へ大杉が飛び下りたり、ある一室のちゃぶ台をめぐってグルグル追っかけっこをしたり——その上、大杉はのどから血を流しつづけているのだ。まあ歌舞伎の「女殺油地獄」を地でいったか、または逆にいった修羅場といっていい。

ついに神近市子は宿から逃げ出して、海のほうへ走っていった。大杉はそれを追った。

「ここらあたりから、このインヘルノは少しちがうがね」

と、ダンテ師は帳面を置いた。

暗澹とした砂浜を

大杉栄は駈ける。——と、その向こうに人影がけぶって見えた。

「待てえ」

大杉はのどをひいひい鳴らして呼ばわったが、もう眼もよく見分ける力を失っていたらしい。その人影がひき返して来たのを見ると、大小二つの影で、それはさっき宿を出た伊藤野枝と大杉の甥の少年であった。

「まっ、どうなすったの？」

「あっ、お前たちか。——やられた、神近に——神近はどこにいる？」

野枝ははっとしたようにまわりを見まわし、

「どこにもそれらしい影は見えないけれど——あらっ、あそこにお巡りさんらしい人影が見えるわ、訊いて見ましょう」

と、少年の手をひいて、山に沿う道のほうへ走り出した。大杉もよろめきながらそれを追う。

「あの、そこらあたりに女のひとをごらんにならなかったでしょうか！」

と、野枝は呼びかけた。

路上を歩いていた三人の警官は立ちどまった。いや、巡査ではなかった。それは眼鏡をかけた若い将校と二人の兵士であった。

将校は軍帽の下から、じいっとこちらを見て、

「お前たちは社会主義者の大杉栄と伊藤野枝だな」

と、尋ね返して来た。

「そうですが……それが？」

のどをおさえて、けげんそうに大杉がいうと、将校は、兵士とうなずき合い、

「それではちょっと憲兵隊へ来い」

と、いった。

「あなたはだれです？」

「おれは東京憲兵隊の甘粕大尉だ！」

その口から、ぼうっと黒煙が吐き出され、眼鏡が銀色にひかると、

「お前たちの探している人間は、そら、あそこに」

と、腕をあげて浜辺を指さした。それから——たしかに、放屁をした。

大杉と野枝が海のほうをふりむいたとたん、甘粕大尉は大杉の、兵士の一人は野枝のうしろにすべり寄り、腕をまわしてそれぞれの頸に巻きつけた。

これも奇妙に太極拳的動作であったが、絞扼の力は強烈と見えて、大杉も野枝も、彼らの腕をかきむしるだけでふり払うことが出来ず、そのうち両人とも鼻孔からタラタラと血をあふれさせてぐったりとなった。

「大日本帝国獅子身中の虫ケラに天誅を下す！　ピッ、ピッ、ピッ、ピイイイッ」

と、甘粕大尉がうなるようにいった。最後は屁の音である。

甘粕大尉たちが手を離すと、二人はどたりと路上に倒れた。それまで恐怖の眼を見張っていた少年が、わっと泣き出した。

「あとでしゃべられるとまずい」

甘粕はつぶやき、少年の前へいって、これは両腕をのばして絞め殺した。——実に人間とは思われぬ惨虐無比の行為であった。

馬車の中で見ていて、私は全身の毛が逆立つばかりで声も出なかった。

「甘粕大尉は、以前から大杉栄に目をつけていたのだ。大胆不敵、怖れげもなく大日本帝国に挑戦するあの社会主義者を、真に国賊だと憎悪していたのだ」

と、ダンテ師がいった。これも少し声がふるえている。

「口から黒煙を吐き、はげしく放屁していますね」

と、私はいった。

「左様、その甘粕なりの愛国的信念に偽りはないが、しかし彼の心理の深層には、大杉に対する私的な嫉妬があった」

「え、憲兵大尉が、社会主義者に私的な嫉妬？」

「そう。甘粕が特に目をつけていたのは、大杉が自分と同じ陸軍幼年学校出だったからだ。もっとも甘粕より六つ年上の大杉は途中退学しているが、とにかくいちどは幼年学校に籍をおきながら、当時国賊視された社会主義者となり、しかもそのほうの行動のみならず、恋愛沙汰でも奔放をきわめる大杉に——甘粕は特別に羨望を過ぎた嫉妬を禁じ得なかったのだ」

いま甘粕は、部下の憲兵に、一人は大杉を、もう一人は野枝のそれぞれの屍体をかつがせ、どこかへ運び去らせようとしている。

あとに残った六つの少年の屍骸を、彼はこの場になって恐怖の表情を浮かべ見下ろしていた

が、やがて思い切ったように自分が背負った。すべて粘つくスローモーションである。

「一方、甘粕自身は、酒も飲まず煙草も飲まず、三十を越えてなお独身という男だった。早死にした父に代わって、乏しい給料で七人の弟妹を養わなければならないという境遇だったのだ。この欲求不満は彼をして、自分とまったく相反する華やかな革命児を抹殺せずにはいられない嫉妬の悪鬼とした。——」

憲兵たちは、林の中の以前家があったらしい空地にはいり、その草の中に残っていた古井戸へ、大杉と野枝の屍骸を投げこんだ。

そのとき、部下の一人が奇声を発した。

「おや、子供はどうしました？」

「子供はおれが背負ってるよ」

と、甘粕大尉が答えた。なるほど彼の両手の手つきはそうなっている。

「はてな、子供なんて見えませんが」

「何を馬鹿げたことをいう。——そらっ」

と、甘粕大尉は背から何かを井戸へふり落とす動作をしたが、

「落ちんぞ。こいつ、背中にくっついておる！」

と、恐怖の叫びをあげた。

「見えません！　子供の姿なんて見えません！」

と、二人の憲兵は狐につままれたような表情で首をふった。

甘粕大尉は狂気のように飛んだりはねたりした。狂気のように——しかし、全身から水飴のようなものをしたたらせ、スローモーションで。

「この大罪悪を犯した甘粕は、わずか二年十ケ月の懲役ののち、満州へ渡った。——」

と、ダンテ師がいった。私は叫んだ。

「幼児をふくめて三人殺して、たった二年十ケ月！」

「いや、刑は一応十年だったが、国民的な支援もあってそれだけで釈放されたのだ」

「そのころから、日本そのものが発狂していたのだね」

と、ラ・ロシュフコー公爵が吐き出すようにつぶやいた。

「彼は満映理事長として、満州国における文化の黒幕的存在となったが、例の大敗戦で大日本帝国が滅亡するとともに毒杯をあおいで死んだ」

と、ダンテ師がつづけた。

「が、彼と同類の狂気の軍人ばかりがはびこり出した軍国日本で、ついに彼が公然と顔を出せなかったのは、この殺人の動機のやましさと、そして幼児を殺害したことにあったのだ。彼の背に最後までのしかかっていたのは大日本帝国ではなく、六歳の少年の見えない屍骸であったろう。……」

いま暗霧渦巻く中に、なお狂気のごとく飛びはねている憲兵大尉甘粕正彦を横目で見て、

「ゆくかね」

ダンテ師がいった。

「こんどはどこへ？」

「さあ。……」

松井須磨子と彼女をめぐる人々をのぞこうか」

と、ダンテ師は、ラ・ロシュフコー公爵をかえりみて、相談した。

「そこでは、首を吊った須磨子の屍体の下で、島村抱月夫人や芸術座の座員たちが、カチューシャ可愛や、別れのつらさ……と、黒煙を吐きながら歌っている。……」

こんどはこっちをむいて、

「彼女の縊死は、一座の指導者にして恋人たる抱月の死による絶望や、それまでの彼女の大スター意識に対する一座の反感によるものだが、その一座の総スカンの根底には、これまた須磨子への嫉妬があった」

「そうですか」

と、いったが、私は少々ゲンナリした気分であった。

「それにしても、みんな似ていますな、ムードやニュアンスが」

「三角関係は、どんな例も三角形だからね」

と、公爵が笑った。

「人間はみんな自分を特別製のように思っているが、同じ構図に置かれると、みんな同じ心情

を起こすしかけになっている」
「それに、何だか——革新とか革命とかの闘士ばかりが登場するようですが」
「下半身から発するトラブルは、革新と保守を問わないのだ」
「いや、彼らはヒマも金もないはずなのに、こういうトラブルを自分からひき起こしているのに感心しますよ」
「日本には、善人でも何とかする、まして悪人をやとか何とかいう箴言があるそうだね。金もヒマもある連中のこの種のトラブルはいうも愚かなりだから、わざと規模の小さいいまの人々のインヘルノへ御案内したのだが、それじゃもっと規模の大きい嫉妬のインヘルノへお連れしようか」
「もっと規模の大きいインヘルノ、というと——」
「左様。——」
ダンテ師がひきとって、帳面をパラパラめくって、
「派手なところで、将軍の後宮——江戸城大奥の代々の女性たちが黒煙とあぶら汗の中で暮らしているインヘルノがあるが」
「なるほど。……しかしそれはやはりいままでの登場人物に、おすべらかしをつけさせたり、裲襠をひきずらせたりしただけのものでしょう」
と、私は首をふった。
この嫉妬のインヘルノは、どうも気分がサッパリしない。何よりもこのどこにも満ちている

うす暗い霧、どこへいってもねばねばしている土や、水飴のようなものにまみれている樹々や建物や、太極拳をやっているような人々の動作や——さらに、外気から遮断されているはずの馬車の中にまで、いつのまにか忍びこんでいるスカトールの臭いのする湿気がたまらなかった。
「まことに僭越ですが、もしお許しいただけるなら、別のインヘルノへお連れ願いたいんですが」
「どこへいったって、インヘルノはインヘルノだよ」
と、公爵は苦笑したが、すぐにマイクで駅者に何か命じた。
幾時間を経たろうか。馬車はまだ海沿いを走っていた。
が、いつのまにか海の様相が変わって来ているのに私は気がついた。
以前から海は暗澹としていたが、いつしか夜の世界となっている。それが海だとわかるのは、そこがどよめき、またあちこち水しぶきがひかって見えるからであった。そして、それがひかって見えるのは、空にみだれ立つ雲のふちが蒼白な光を持っているからであった。
どよめいているのは、しかし波ではなかった。何千何万とも知れぬ人間であった。どよめきは彼らのあえぎと罵声と、そして無数の海猫の鳴き声のような奇怪な音響であった。
「彼らの放屁の音だ」
と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。
「一歩出れば、ここには物凄い悪臭がたちこめている」
「彼らの下半身を沈めているのは、海ではない。彼ら自身の流した嫉妬のあぶら汗と、放屁が

液化した糞汁の熱い沼だ」

と、ダンテ師がいった。

「沼は沼だが、海に近い。嫉妬のインヘルノに満ちている霧やぬかるみの水源地はここだ」

私はやっとあの不愉快な湿舌の発生場所を知った。

「いままで見た嫉妬の対象には、嫉妬されるだけの理由があったが、ここにうごめき、どよめいているのは、そんな理由を持たない——特定の対象すらない嫉妬者だ。彼らが嫉妬しているのは時々刻々、彼らの羨望の的となった対象で——あの雲を見よ」

蒼白にふちどられた雲が、怖ろしい迅さで動いているのが見えた。

「ここにいるのは日本人だけだが——」

その雲が大空に、巨大な人間の顔らしいものを生み出したのを私は見た。

「長島だ！」

と、私は叫んだ。下界の人間の海から黒煙が立ちのぼり、放屁のどよめきがあがった。

雲は動いて、その顔を溶かし、やがて女の顔を作った。

「美空ひばりだ！」

と、私は叫んだ。また黒煙と海猫に似た屁がどよもした。

雲は刻々と変化し、次から次へと巨大な顔を描き出してゆく。——雲の動きは、数分でも永劫の時を思わせる。だから何時間経過したかわからず、そこに描き出された顔をすべておぼえてはいないが、田中角栄氏や松下幸之助氏や、吉川英治や三島由紀夫や、大鵬氏や森進一氏や

タモリ氏や、原節子さんや吉永小百合さんや山口百恵さんなどの顔が浮かんでは消えたようだ。

「力や才能や美しさや富や幸福、それらを太陽の光のように享受した人間に捧げる讃歌のかげで、彼らは嫉妬の黒煙とスカトールを吐いている。そして何かの機会にその英雄が転落すると、また黒煙とスカトールを吐いて歓呼する」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「私の箴言にいう。——人間の持つ美質は、悪い素質よりも人々の憎しみを呼ぶと」

憤激の地獄

むかっぱらのインヘルノ

私たちは、

暗くけぶったネバネバ地獄から別のインヘルノに来た。情景は一変した。

ここもそんなに遠くない世界だったと思う。——が、陰湿きわまる前者とちがって、馬鹿に暑いところであった。町があった。野があった。河もあった。が、かんかん照りの下にすべてが乾き切った感じで、どこからも透明な炎のような——決して陽炎のような、とは形容できない——ものが、ゆらゆらと立ちのぼっている。

そして、そこを歩いているのは、場所によって、まるで時代が変わったかと思われるほど服装や家並がちがうけれど、いずれも顔を真っ赤にし、頭から湯気をたてている人々であった。

「ここは怒りん坊のインヘルノだ」

と、ダンテ師が教えた。

「逆上的な憤怒、あるいは怒りっぽい性質のため、甚だしきは命を失う羽目になったり、そこまでゆかなくても、絶体絶命の危機や致命的な不幸におちいったりした人々の——」

「それが、こんなにいるんですか」

「本気で、かつ自発的に怒ってそうなった人々のほかに、煽動組や雷同組もいるからね。むしろそのほうが多いんだが」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「煽動組や雷同組？」

「前者はよくいえば政略的、悪くいえば営業的に怒ってみせる人間で、後者はそれに吊られた連中ないしおっかなさのあまり共鳴してみせる連中さ」

「そんな連中まで、このインヘルノに放りこまれるんですか」

「数が多いだけに、そのほうが大変な結果をもたらす。——見るがいい」

と、公爵が指さした。

さて、ここへ来てからずっと見ている光景だが、眼前の往来にはおびただしい群衆が歩いていた。それが、場所によってあるいは現代風、あるいは明治風、あるいは江戸風、あるいはそれ以前風と、風俗が別々だ。ときにはそれらがまじり合っているところもある。ただ彼らが真っ赤にふくれあがり、眼をらんらんとかがやかせ、頭から湯気をたてているのは一様だ。そして、どういうわけか、みんな手に手にバケツをぶら下げていた。

そして、路傍にはあちこち台が作られて、その上で演説する男たちがあり、それをとりまいている聴衆のむれがあった。

いま公爵が指さしたのは、赤い大鳥居の前の広場におかれた台の上に立った男で、日の丸の鉢巻、白衣に白ばかま、白足袋をはいた男で、それだけ見るといつの時代かわからないが、前に集まっている数十人の群衆はカーキ色の国民服をつけてゲートルを巻いているところを見ると、太平洋戦争前か、戦争中の人々らしい。

演説者のうしろには、同様に白衣の男たちが十人ほどならんでいる。

さて、このとき改めて私が気がついたのは、そこにいる人間すべて、まるで焼けた鉄板の上

にいるように、みんな猛烈に足踏みしていることであった。なるほど大地から熱気の透明なゆらめきがたちのぼっているのだから、それも当然だろう。

台の上の男はおめいていた。

「無礼にもわが帝国に対し、明治以来獲得した植民地はすべて捨てよ、徳川時代の日本に帰れと恐喝するアメリカは何をしたか。先住民族インディアンを騎兵隊で滅亡させ、アフリカから黒人をさらい、牛馬のごとく奴隷としておるではないか！」

足踏みどころか、これは踊り狂っているような状態で、

「かつまたその相棒たるイギリスは何をしたか。非道な阿片戦争をしかけて香港を掠奪したのはまだ罪の軽いほうで、インド、ビルマ、マレー、シンガポールその他七つの海にまたがって大植民地としておるではないか！」

群衆は足踏みしながら、共鳴のうなりをあげた。

「そうだ、そうだ！」

「わが隠忍自重にもほどがある！」

「横暴米英を粉砕せよ！」

演説者は悲憤の形相凄まじく、

「いまやアジア十億の民は、彼ら白人鬼を駆逐し、かしこくもわが大御稜威のみひかりの及ばんことを、草のごとく伏しなびいて翹望しておるのだ！　大日本は神国なり、皇威八紘にあまねく、紀元は二千六百年、進め一億火の玉だ！」

と、のども破れんばかりの声をはりあげた。

その彼へ、うしろから白衣の二、三人が、手のバケツをふって、ざあっと水をあびせかけた。すると、ぱあっと猛烈な蒸気が立ちのぼった。

「水が蒸気に変わったのだ」

と、公爵がいった。

「やあ、あれはどうしたのです。ミソギですか」

「脳溢血の予防だ」

と、ダンテ師がいった。

「このインヘルノのどこかに平清盛入道という人物がいるはずで、お望みならあとで連れてゆくが」

「へ、清盛が」

「その人物は、ひょっとした憐愍から頼朝という敵の遺児を助命してやったために、あとでその頼朝によって平家の滅亡のおそれが生じた。自分のミスに地団駄踏んだ清盛は、怒りのあまり全身高熱を発するに至った。――」

と、ノートをいそがしくめくり、読みあげはじめた。

「入道相国、病ひつき給ひし日よりして、水をだにのどへも入給はず。身の内の熱き事火をたくが如し。臥し給へる所四五間が内へ入ものは熱さたへがたし。たゞの給ふ事とては、熱、熱とばかりなり。……」

そのとき、そばで音楽が起こった。一瞬琵琶かと思ったが、それはラ・ロシュフコー公爵が手にとったマンドリンであった。

が、詩聖ダンテは日本の平家琵琶そっくりの節調で、

「比叡山より千手井の水をくみくだし、石の船にたゝへて、それに下りて冷へ給へば、水おびただしく沸きあがつて、程なく湯にぞなりにける。もしや助かり給ふと、筧の水をまかせたれば、石や鉄などの焼けたるやうに、水ほとばしつて寄りつかず、をのづからあたる水はほむらとなつて燃えければ、黒煙殿中にみちく〳〵て、炎うづまひてあがりけり。……」

と、語り終わって首をふり、

「ま、そこほどではないが、このあたりも相当な温度だ。この馬車の中は常温に保たれているが、外は、さあ、四、五十度はあるかね」

「そ、それは大変だ」

馬車はいつしか

その演説をうしろにしていた。

すると、百メートルばかりのところに、相当な焼け跡と見える空地にまた台があり、ここでも演説している人間があった。ただし白衣ではなく、ヨレヨレの国民服に戦闘帽、ゲートル姿で、うしろにならんでいる十人あまりの男たちも同様だが、ただみんな赤旗をおし立てて、これも足踏みしている。

前には、やはり数十人の群衆が集まっていた。

「この敗戦をもたらした軍閥、財閥、官僚どもの戦争責任を追及せよ！　大本営発表は嘘八百だった。日本軍は占領地のいたるところで大虐殺を行い、アジア十億の民の怨嗟のまととなった。そしていまやわれわれは、住むべき家も着るべき衣服も食うべき米もない惨状にあるのに、朕はタラフク食っておる！」

これはユデダコとはゆかない。それどころかスルメのように痩せこけているが、しかし憤激の形相はさっきの男にまさるとも劣らない。

「われわれは侵略の罪を土下座して謝し、偉大なるマッカーサー元帥の御指導のもとに、真の民主人民政府を打ち立てなければならない！」

群衆ははげしく足踏みしながら、同感のうなりをあげた。

「そうだ、そうだ！」

「封建主義、ファッシズムを打倒せよ！」

「それより先に、宮城へゆこう、宮城の台所へゆこう！」

やがて彼らは赤旗をおしたて、亡者の一揆のごとく――事実亡者だが――駈け出した。馬車とは反対の方角である。

「はてな」

そのときになって、私はふと首をひねった。

「どうも変な気がして来たんですがね」
「何が？」
と、公爵がふりむく。
「さっきの一億火の玉の先生と、いまの土下座の先生と――服装は全然ちがいますが、どうも同じ人間みたいな感じが――」
「同一人物だよ。うしろにならんでいた仲間の連中もね」
と、ダンテ師がうなずいた。
「へえ。……同一の空間に、同一の物体が二ケ所に存在するということがあるんですか」
「それが、あるのだ。このインヘルノではね。――もっともかつて日本では、物理的には同一の空間とはいえないかも知れないが、同一の人間が一夜にして別の人間に化した――あの連中がそうだが、なに、あの連中ばかりじゃない、日本人のほとんどすべてにそういう現象が起こったよ」
「あのアジテーターは何者です？」
「だから、日本人の大半が大なり小なりそうだったんだから、いちいちその名などこのノートには書いてない」
「ははあ」
「アジテーターというけれど、それはその通りにちがいないが、しかし彼らの憤激は、どっちの場合もほんものだった。雷同者もふくめてね。が、いっときのむかっぱらが、彼らに敗戦という地獄を呼んだのだ」

私は黙っていた。私がいま、あの群衆の中にいなかったのがふしぎだ。
「人間、怒ってトクすることはまずない」
と、公爵が笑った。
「憎悪や怨恨や嫉妬や不満など、人間の持つ悪性の感情は、あとになっても必ずしも悔いることはないが、怒ったことは後悔することが多い。――怒りは理性を失った状態だからね」
ダンテ師がいう。
「もっとも彼らは、特別製の悲憤慷慨型の人々だ。だからこのインヘルノへやって来たんだが――彼らは自分たちが逆上性の人間であることを知っている。で、ああいう風にバケツに水を用意して、自分の頭にかけたり、ひとにかけたりして予防はしているんだが――」
「脳溢血を防ぐためといいましたね」
「それもあるが、その前に彼らは猛烈な頭痛を起こして、ところきらわず自分から突進して頭を何かにぶっつけずにはいられない」
「ほほう」
「それでもおさまらないときは、相手かまわずおたがいの頭にかみつき合う」
「そりゃ凄い」
そのとき、背後でわーっという喚声が聞こえた。ふり返ると、炎天に砂けむりが立ちのぼっている。

「さっきの火の玉組と土下座組が衝突したのだ」
と、公爵がいった。
砂けむりの下から、かん高い叫びが流れて来た。
「アメリカはベトナムで大虐殺をやったではないか！」
「何をいうか、そのベトナムは何十万という難民を海へ追い出したではないか！」
公爵はうす笑いした。
「彼らはあのように、時々刻々に逆上して、永遠に争闘をくり返しておる」
ダンテ師がつぶやいた。
「大崩壊以来、インヘルノもめちゃめちゃになったが、争闘の仕方だけは私の神曲時代の原型を残しているようだね。私の神曲にも憤怒のインヘルノは存在して、そこでは怒りのために理性を失い、身を滅ぼした人々が、沼の中でおたがいの頭にかみつき合っているのだが――」
そのとき私は、奇怪なことに気がついた。
「いまの両派のリーダーたちは、同じ人間だといいましたね。すると――」
「左様」
と、ダンテ師は重々しくうなずいた。
「彼らはおたがいに自分の頭にかみついておる」
人間が、自分の頭にかみつくという状態を見たい、と思うより先に、私は、馬車の進むに従って外界にくりひろげられている光景に眼を奪われた。

さっきから見て来たのも、みんな殺気にみちて、みるからにけんのんな雰囲気を持った人々であったが、ここでは、バケツの水を頭からかぶり、だれかにひっかけ、湯気が渦まき、そして――なるほど、空中を横に飛ばんばかりに、建物や立ち木に頭をぶっつけ、あるいは相手の両肩をつかんで、前やうしろから頭にかみつくという、まさに修羅のチマタと化している。
騒然たる叫喚の中から、きれぎれに流れて来る声の断片を聞くと。――
「政府は税金しぼりあげばかりに血まなこになっておる！」
「あっちこっち、土下座外交はいいかげんにせえ！」
「人質国や誘拐国には、ビタ一文もやるな！」
「坊主にもカブにも税金をかけろ！」
「天皇陵をかくす宮内庁の役人は、何がわかったらこわいのか、彼らこそ国賊だ！」
「地震予知学者は廃業してみんな坊主になれえ！」
「ゴミ箱みたいな銀座なんて、何が銀座だ！」
「子供誘拐犯は一寸だめし五分だめしにしろ！」
「午後のテレビはありゃなんだ！」
「日本人をバカにしたのは、日本人をバカにしているバカテレビだ！」
「事件は毎日あるのに、新聞休刊日とは何だ！」
「枕みたいな電話帳は塵紙交換屋にゆくだけだ！」
「ノゾキ屋みたいな写真週刊誌が、言論の自由とはおへそが茶をわかすぞ！」

「純文芸が売れないのは、マンガのせいだ！」
「何やらせても、このごろは女のほうがエライわよ！」
いやもう、かんかんがくがく。けんけんごうごう。
そう怒号しながら、彼らは頭をぶっつけ、頭をかじり合っているのであった。
「もう少し静粛な場所にゆきますか」
と、ウンザリしたように、ラ・ロシュフコー公爵がいった。
ダンテ師がうなずくと、馬車は速度をました。
と、片側に高い鉄柵が見えるようになった。高いと同時にあまりに長いのでわかったのだが、あちこち赤錆びて、ところどころ棒のぬけた個所もある。それにもかかわらず、柵というより鉄格子みたいにがんじょうな印象であった。
馬車は曲がって、そこを音もなくつきぬけた。

それまでの

怒りの騒音にみちた世界と打って変わって、そこは馬鹿に静かな空間であった。
中央に噴水台があるところを見ると公園のようだが、樹々はあちこち数本あるだけで、あとは白い乾いた地面がひろがっているばかりだ。その噴水も水がチョロチョロ漏れる程度で、それをとりまく広い四角形の地面からは、例の熱い透明な炎が、一帯ゆらめきのぼっていた。

右には、ひびのはいったコンクリートの建物があり、左には、古めかしい赤煉瓦の建物があった。そしてゆくての正面には、大きな倉庫のようなものが見えた。
ただ、噴水のそばにひとつベンチがあって、そのはしっこに一人の老人が坐って、本を読んでいた。腰かけず、ベンチの上にきちんと正座している。
怖ろしいカンカン照りの広場のまんなかに、帽子もかぶらず、絽の羽織さえつけて、むしろ厳然として見える。そばに四、五冊、本が積みあげてあった。
「右は病院で、左は刑務所だ」
と、ダンテ師がいった。
「向こうの倉庫みたいなのは？」
「あれは映画会社のステージだ」
「そりゃまた妙な組み合わせですね」
「別におかしくないと思うが……げんにこの広場は、病院の患者と刑務所の囚人の散歩用、また映画の撮影用に使われてるんだがね」
「で、あの老人はだれです？」
「三田村鳶魚という江戸考証の大家だ」
「はあ？　あれが？」
「若いころは三多摩の壮士、その後、小新聞の記者などやったあと、独学で江戸の生き字引といわれるほどの学者となったが、性、狷介孤高――」

ダンテ師はノートをのぞいて、

「彼を知る人が、『翁の性格は人を容れなかった。出入りの者はあるいは御勘気をこうむり、あるいはみずから追ん出てしまって、近親者寥々たるに至った』と評している。浮世にも人生にも立腹ばかりしている老人だ」

三田村翁は、白い口ひげをはやした面長であったが、気骨はあるがそれだけ頑固らしい顔のコメカミがピクピク動き、何やら憤懣にたえないようだ。

「が、とにかく江戸の生き字引だから、映画のほうから考証を頼まれてやって来たんだが、来てみればカツドウ屋連中がまじめにとり合わないものだから、憮然としてあそこへ出て来ているのだ」

「ほほう。……」

そこへ、右の病院のほうから、二人の人間がもつれ合うように近づいて来た。一人はパジャマを着て患者らしく、一人は白衣を着た医者であった。

「おい、石川君、君は重態なんだぞ、その身体でどこへゆくんだ」

「ほうっといてくれ。僕は僕のやりかたで養生するんだ」

「養生ったって——そんな、血便をたらしながら」

二人はいい争っている。——そういわれて気がつくと、患者のパジャマのお尻のあたりは黄赤色の汚物にまみれて、それが地面にしたたり落ちている。

「あれは石川達三という作家で、医者は友人らしい」

石川達三は八十前後だろうか。元来はたくましい肉体だったようだが、いまは老い、やつれはて、眼のまわりにはくまどりが出来、足ももつれているが、口から出て来る言葉は頑冥無比のひびきをともなって、

「僕は、僕自身の健康に関するかぎり、僕自身の判断を信じる。医者は信じない」

「病気になって医者を信じなくってどうするんだ。君は明らかに胃潰瘍で、しかも重症だ」

「僕は若いころから、健康については実に用心深く暮らして来た。僕が胃潰瘍なんかになるはずがない」

彼はパジャマのポケットから、大きな紙袋をとり出して、

「薬がこれだけのめるか。こんなにたくさんのむ薬というものがあり得るか！」

と、紙袋のまま地面へ投げ出した。

「君はいちばんたちの悪い患者だ！」

医者はついに怒り出した。

「君はふだんから、医者や看護婦の神経を逆なでするような理屈ばかりいう。その理屈は一応通っているようで、よく考えると浅薄で、抜けたところがある。つまり、屁理屈というやつだ。君の小説と同じだ！」

明らかに医者としての理性を失った表情で、

「それじゃ、もうかまわない。好きなように死にたまえ」

「僕は、僕の好きなように死にたいと思ってるんだ」

石川達三はうなずいた。平然あるいは冷然とではなく、かんかんに怒っている顔だ。そして、散乱している薬を踏みつぶした。

「あの両人は前世でも同じ争いをやって、それであの医者は気の毒にこのインヘルノへ来ることになった」

と、ダンテ師は同情の色を浮かべて、

「相当に強情な人間でも、死病にかかって病院に来れば、別人のようにおとなしくなるものだが——しかし石川達三という小説家ほど、医者や看護婦を怒らせた患者はなかろう」

と、慨嘆して、また帳面に眼を落として、

「彼は日中戦争が始まって日本人がこぞって聖戦を大合唱しているときに、日本軍の残虐行為を書き、太平洋戦争の末期、針ほど当局にさからえば棒で殴り殺される時代に、あえて言論の自由を新聞で叫び、ポルノを書かなければ作家とはいえないような昭和末期に、そんな言論の自由なら言論の自由は要らない、といってのけた。このように彼は、しばしば世論を逆なでし、愚衆を軽蔑するような意見をふてぶてしく発表した。……あとになって、石川が無事であったのは、彼が叛骨に見えて実はもともと常識的あるいは通俗的な作家だったからだ、といわれたそうだがね」

「時勢が変わってからの批判の八割までは、臆病者の自己弁護です」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「こういう社会批判ばかりじゃなく、日常生活においても彼は徹頭徹尾一言居士だった。彼の政治的発言はしばしば前後矛盾して、自分でも昨日と今日は別の理屈をいうと自認したが、彼の文句屋ぶりは、思想から来たものというより、彼の怒りん坊の性格から発したものだった」

と、ダンテ師はノートを一応閉じていった。このノートには何でも書いてあると見える。

いまその石川達三は

血便をしたたらせながら医者を追い返し、涸れかかった噴水のところへヨロヨロとやって来て、ベンチへ腰を下ろそうとして、そこに老人が坐っているのにはじめて気がついたようだ。

が、老人が知らない顔で本を読んでいるので、彼はベンチのはしに崩れるように腰を落として、しばらく何もない広場に散大した眼を投げていたが、それでも老人が気になると見えて、チョイ、チョイふりむいて、そのほうを眺めた。

そして、自分との間に積んである四、五冊の本に眼がとまって動かなくなった。

「ふふん、老人もエロ小説を読む時勢になったか」

と、大軽蔑の調子でいった。

「だから僕は、日本が長寿国になったってことを歓迎出来ないんだ」

彼はここがインヘルノだという自覚はないらしい。

三田村鳶魚はじろっとこっちを見て、

「この本は活動の撮影所にあったものを、いいかげんに持って来たのよ。まだ見とらんが、ほ

う、これはエロ小説か」

と、そばの本に眼を落とし、

「わしの読んでいるのはエロ小説じゃないが」

と、手にしていた本をふって見せた。それには「宮本武蔵」とあった。

「デタラメの点は、同じようなものだ」

石川達三はその題名と作者の名を見て、ちょっとたじろいだ風であった。

「この小説のはじめのほうに、関ケ原のいくさのあと新免武蔵と本位田又八が、野武士の後家母娘の家にかくまわれるところが出て来る。この母娘は戦場の屍骸から物を奪って生活しているとあるが、関ケ原でいくさのあったのはそのときだけだ。生計をたてるといえば常時でなければならないが、そもそも、そんなものを盗んでどこのだれに売るというのか。いったい野武士の生活というものを知らないから、そんなデタラメを書くのだ」

「……」

「またその後家が、寝白粉をつけて夜這いに来るというのだが、この当時関ケ原に住んでいる女が、どこから白粉なんてものを手に入れることが出来ると思っているのか。またそれを武蔵が御免こうむると、しっ、野暮、と罵る。いったい慶長に粋だの野暮だのという言葉があるものか。そういうことは一切おかまいないらしい」

「……」

「またそのあとに、武蔵の故郷播州の何とやら村が出て来て『山また山の奥とはいえ、旅籠も

あれば呉服屋もあり、夜になると白い蝙蝠のような顔をした飯盛り女も軒下に見えたりする』とあるが、慶長元年の播州の山奥に、旅籠屋、呉服屋なんてものがあったか、ましてや江戸も後期の飯盛り女にいたっては沙汰のかぎりだ。さらにここに飛脚とか商家のおかみさんなんて言葉が出て来るが、いったいいつごろのどこの話を書いているのか。知らんことはいわないほうがいい」

吉川英治、さんざんである。

はじめ苦笑といった風の三田村老の表情が、だんだんけいれんがひどくなって来た。

のっけからまくしたてられて、石川達三も気をのまれたか黙って聞いている。

「時代というものを知らぬからといえばそれまでだが、時代を超越して解しかねる珍しい日本語があとからあとから出て来る。『大悟の眼』なんて、どこのだれがそんな眼を持っているのか。『下手茶でござるが』とあるが、茶道に下手茶なんて言葉はない。『滅茶くそ』なんていう言葉も出て来るが、それこそ滅茶くそな言葉だ。書いている当人がわからないのに、変な文句だけつらねておる」

あたまから湯気がたちのぼって来た。この老人は別に皮肉屋ではなく、徹頭徹尾大まじめな性質で、そのためしゃべっているうちにだんだん大立腹の度を増して来たらしい。

「内容も滅茶くそだ。千年杉に縛りあげられた武蔵が、縄を切られて下に落ちるが、『武蔵は立っていた。二丈もある樹のうえから落ちたのに、茫然と大地に立っている』とある。猫とまちがえておる。また武蔵が追っ手に対して『大きな岩を両手にさしあげ、輪になっている人間

の一角に向かって、どすんと抛りつけた』など書いてあるが、両手で岩をさしあげられるものか、デロレン祭文の岩見重太郎じゃぁあるまいし——馬鹿々々しいにもほどがある」

あまりの怒りように、石川達三は少なからず辟易した表情で、

「それは大衆小説だから……いちいち目くじらたててそんな風な読み方をされちゃ作者が気の毒だ。特にその小説は、大衆小説の最高傑作ということになってる作品だからね」

と、つぶやき、

「僕も小説家です。ただしそんな大衆小説は書かんから、これ以上あえて弁護はしてやらんがね」

「君は小説家か。だいたい小説家ってものは、形こそちがえ、みんな馬鹿々々しいうそ話を書くもんだ。この聖代に生まれて来て、いったいなんの意味があって、あんな無意味なものを書くのか。……」

三田村鳶魚はベンチの上を四つン這いになってポルノ本を乗り越え、石川に身体をよせて来た。

「私にそんなことを責めても困る。私の書く小説は大いに意味があるんだから」

といって、ベンチをはずそうとしたが、浮かせた腰の下から、そのときまた怪音たてて大量の血便があふれ出し、彼はまたべたりと尻をすえてしまった。

が、彼は心ここにあらずといった態で、

「あんたなどと小説の話をしてもしょうがないが」

と、はねつけるようにいったあとから、老人を見ず、炎天をふりあおいで叫んだ。

「いやしかし、いま考えると、夏目漱石、志賀直哉などの文豪も、結局何を書いたかというと、みな虚しかったようにも思われる！」

落ちくぼんだ眼窩の中の眼は、さっきまでうつろであったのに、いま赤い光をはなっている。一生怒りつづけた石川達三を最後にとらえたのは、虚無感の怒りらしかった。彼の頭からも湯気が立ちのぼった。

「そして、私もたくさんの仕事をしたようだが、要するにみな虚しかったような気がする！」

そううめくと、石川達三はいきなり老人の頭をかかえこみ、その頭にかみついた。……

見当ちがいの老人に詰めよる老人も面妖だが、さりとて石川達三にも怒る理由もないような気がするが、おそらく両人とも憤激にたえなかったのだろう。

あっけにとられた私の眼に、広場の向こうの一群の人影がうつった。

「あっちへいってみるかね」

と、ダンテ師がいった。

それは六、七人の

人影であった。

よく見ると、ダブダブの西洋式囚人服、昔の日本式の赤い獄衣を着た者、それにヨレヨレの

国民服を着た者、さらに軍人将官の制服を着た者、羽織袴の者と、服装はばらばらだが、それが煉瓦塀に沿って、咆哮しつつ歩いている。またおたがいに烈しく口論しつつ歩いている。

馬車はそっちへ動いていった。

「あれは刑務所だが」

と、ラ・ロシュフコー公爵が左の赤煉瓦の建物を指さして、

「いま、囚人の散歩時間でここへ出て来たのだ」

「囚人服を着てない者もあるようですが」

「面会に来た人もいる」

「へへえ、面会に来た人もいっしょに散歩出来るんですか」

「ここで面会ということになってるんだ」

まずまっさきに眼を引いたのは、肩ぐるましした二人の人物であった。かついでいるのは赤い獄衣を着た若いせいかんな男で、その肩にまたがっているのは、これも獄衣のハゲ頭の男であった。

そのハゲ頭が獅子吼している。

「なんじ人民飢えて死ね、などほざく天皇制政府は許さん。獄中十八年のこの徳田が許さん！」

ダンテ師がささやいた。

「いま彼がいったように、あれは戦前共産主義者として十八年投獄されてついに転向せず、日本の敗戦で釈放されると日本共産党のワンマンとなり、そして五年後、こんどはアメリカ占領軍に追われて中国へ潜行し、そこで高血圧による脳溢血で死んだが、その五年の活躍期にこれもワンマンの首相吉田茂と派手にやり合って、一歩もひかなかった徳田球一という男だ」

「そうですか。ああ、そうでしたね」

「彼は敗戦直後の米よこせ大会にも、デモ隊の陣頭に立ち肩ぐるまに乗って宮城へおしかけた。だから本来ならさっき街頭で見た連中といっしょにいてもいいのだが、怒りん坊の大物だから特にこっちに来ておる」

「ははあ」

「あんな風に、たえず火の玉みたいに激怒していたが、その怒号する顔がガキ大将のような愛嬌があって、トッキューと呼ばれ、人民大衆から愛されたというんだがね」

いま徳田球一は、ハゲ頭から沸騰的な湯気をたて、何か手に持ったものをはげしく空中に打ちふりながら、

「ただちに人民政府を樹立せよ！」

よく見ると、彼がふっているのは、大きなナタマメ煙管であった。彼の愛用品らしい。

「天皇、マッカーサー、国際派の宮本顕治、同じ反動のムジナどもを掃蕩せよ！」

そして、そのナタマメ煙管で、はげしく自分を肩ぐるまにしている囚人の頭を打ちたたいた。

ナタマメ煙管で頭をたたかれた若い囚人は、まるで電気仕掛けの人形にスイッチがはいったように叫びはじめた。

「何をっ、殺されてたまるか、死ぬものか。千万発撃つとも死せじ、断じて死せじ、死ぬものか、成仏するものか、悪鬼となっても初心を貫徹するのだ。ラセツとなって賊魁を滅尽するのだ！」

まさに悪鬼羅刹の形相であった。

「天皇陛下、陛下の側近は国民を苦しめる売国奴で一杯でありますぞ。お気づき遊ばさぬでは、日本が大変なことになりますぞ！　明治天皇も皇大神宮さまも何をしておられるのでありますか、日本の神々はみな寝ておられるのでありますか！」

「あれはだれですか？」

と、私は馬車の中でたじろぎながら訊いた。

「あれは二・二六事件の首謀者の一人、磯部浅一という陸軍一等主計だ」

と、ダンテ師が答えた。

「陛下、われわれ同志ほど国を思い、陛下のことを思う者は日本じゅうどこを探してもおりませんぞ。その忠義者をなぜ銃殺するのでありますか。こんなことをなさりますと、日本国民は陛下をお恨み申しますぞ！」

磯部は、のどもひっ裂けるような声で、

「天皇陛下、何という御失政でござりますか。なぜ君側の奸物どもを遠ざけて、われわれ忠烈無双の兵士をお召し下さりませぬか。八百万の神々、何をボンヤリしてござるのだ！」

「一九三六年二月二十六日、皇道派の青年将校らは、近衛連隊千四百人の兵士を狩りたてて大

叛乱を起こし、天皇の重臣たちを殺害した。首謀者磯部らは、真に天皇への忠節のために決起したつもりであり、それを天皇はよく御存知だと信じていたが、天皇は激怒し、彼らを逆賊ときめつけた。降伏した彼らは、やがて銃殺の判決を下された。――」

ダンテ師はノートを見つつ、

「それで彼は、いま天皇に対して大憤怒しているのだ」

「天皇陛下、このサンタンたる国家の現状をごらん遊ばせ、兵士たちの姉や妹は女郎に売られておるのでありますぞ。われわれは起ちました。しかるに陛下が、私どもの義挙を国賊のわざとお考え遊ばしていると聞いて、私どもは血涙をしぼりました。真に血涙をしぼったのであります。いまの私は、怒髪天をつく怒りに燃えたぎっております。天皇陛下、何というお裏切りでありますか、何というザマです、皇祖皇宗におあやまりなさいませ！」

「いやあ、凄いですな、日本人で天皇にこんなせりふをはいた人間は、ほかにありませんぜ」

と、私は身の毛もよだつ思いがしたが、一方腑に落ちないふしもあり、

「しかし、それが共産党の徳田球一を肩ぐるまにしているのはどういうわけなんです」

「いつか私が見に来たときには、トッキューが磯部を肩ぐるまにしてたがね」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「右左、両人とも、天皇に対する憤怒で、一体と化してしまったんだろう」

「おれは鬼になれるぞ。地獄の鬼になれるぞ。ザンニン猛烈、血も涙も一滴もない悪鬼になるぞ！」

磯部一等主計は咆哮しながら、徳田球一を肩ぐるまにしたまま走り出し、すぐ近くの煉瓦塀へ突進した。そして、つんのめると同時に、両人とも烈しく頭を塀に衝突させると、もつれ合ってころがった。そして、猛烈におたがいの頭にかみつき出した。……

そのとき、前方でも怒号の声があがった。

前方には

軍人らしい姿をまじえた一団が歩いていた。それが大口論しているのだ。

「東郷、きさまは、無礼にも文明が野蛮を裁くと称してアメリカが日本を裁いた東京裁判で、太平洋戦争開戦にあたり、海軍が無通告で真珠湾を奇襲することを自分に強制したと証言したそうだな」

どなっているのは、戦闘服をつけた海軍の将官であった。

「事実そうだったからそう証言した。それはいかん、それは日本の国際的名誉にかかわると私が強硬に主張して、やっと攻撃開始は宣戦布告三十分前ということにしたのだ」

と、いい返したのは、寒風が氷塊にかたまったような顔をした人物である。

「そんな日本海軍の恥を、わざわざ敵の法廷で曝露することがあるかっ。それは裁判で味方にイカの墨を吹きかけて、自分だけいい子になろうとした算段からだろう」

「下司のかんぐりはよさんか！　あれは日本の外務省の名誉にかけての証言だ」

氷塊のかたまりみたいな頭から湯気が立っている。

「太平洋戦争の開戦時と終戦時の外相東郷茂徳だ」

と、ダンテ師がいった。

「彼は、陸海軍の狂気のような降伏反対の嵐を、鉄人のごとくはね返して終戦に導いた人物だ」

「相手の軍人は？」

「海軍の宇垣纏という参謀長だ。山本五十六司令長官の搭乗機がブーゲンビル島で撃墜されたとき、それといっしょに飛んでいた彼の飛行機も撃墜されたが、海に落とされたので重傷ながら九死に一生を得た。それでも最後まで闘魂を失わず、日本降伏のあと、麾下十一機の彗星艦爆をひきいて沖縄へ特攻をかけた猛将だ」

宇垣参謀長は仁王のように顔を朱に染めて、

「帝国海軍がそんな卑劣なまねをするか！」

と、怒号して飛びかかろうとした。

「宇垣やめい！」

と、そばのもう一人の海軍の将官が叱りつけた。

「きさまのやったことは私兵特攻だ。終戦の大詔が下ったあと、勝手に部下を死出の道連れにするとは、わが海軍には許されぬ軍律違反だ！」

面長で知的な容貌の将官であったが、声は怒りにこがらしのようにしゃがれている。

「山本五十六とともに、最後まで開戦に反対した井上成美大将だ」
と、ダンテ師が教えた。
「冷徹無比の提督のくせに、彼も大変な怒りん坊だった。戦前戦中戦後、勝ち目のあるはずのない戦争にはやった陸海軍の馬鹿者どもを、動物と呼んで怒りつづけだった。――」
「しかし……さっき街頭でも見かけましたが、こんな喧嘩、ここでもまだやってるんですか」
と、私も少々ウンザリした。
「うん、とにかく日本をいちじ滅亡させた大戦争は、日本人の大憤激がもとだからね。日本歴史上、最大の悲劇的むかっぱらといっていいんだから」
と、ラ・ロシュフコー公爵が口を出した。
井上大将の叱咤はつづく。
「それに貴公は、特攻機の中から打電した。――本職は皇国武人の本領を発揮し、驕敵米艦に突入撃沈す。指揮下各部隊は、来るべきあらゆる苦難を克服し、精強なる国軍を再建し、皇国を万世無窮ならしめよ。海軍大将宇垣纏――とは何だ」
「何だとは何だ」
「海軍大将とは何だ。貴公は中将のはずだ。いつ海軍大将になった？」
「特攻で飛び立てば死ぬにきまっておるのだ。特攻で死ねば一階級特進だ。だから小官は自分で昇進させたのだ！」
「そんな大将狂が、日本を滅ぼしたのだ！　そもそも私の見るところ、日本海軍で一等大将の名に値するのは米内光政大将ただ一人だ。山本五十六大将は条件づきの二等大将、いつまでも日本海海戦が忘れられず、大艦巨砲教の神様に祭りあげられた東郷平八郎は三等大将、あとの大将は、私もふくめて、八等か九等の大将連だ！」
そして、ヒョイと煉瓦塀のほうを見ると、そこに選挙広報みたいにズラリと写真が貼ってあった。どれもりっぱな口ひげをはねあげ、満艦飾の勲章をぶら下げた歴代の海軍大将の写真であった。
「こいつらの出世主義が、日本海軍を誤ったのだ。こいつらの罪は万死に値する！」
井上大将はそううめくと、そばによって、その写真をかたっぱしからひき裂いた。その爪の先から血がしたたり、塀に赤い斑点を描いた。
そして、つかつかともとに戻ると、
「だいたい、こっちの東郷もいかん！」
と、怒鳴りつけた。
「なぜあなたは外相として開戦に抵抗しなかったのだ？」
「そういうが、あの時点においては、あんな高飛車なハル・ノートをつきつけられては、モナコ、ルクセンブルクのような小国でも、決然として起ったろう」
東郷外相は蒼白な顔で、しかしあきらかに憤怒の眼でにらんで、
「そもそも私は、日本海軍の実力や大将連の人間をもう少し上だと買いかぶっていたのだ！」
と、痛憤の語を吐いた。

と、さらに少し前方を、片手にバケツをぶら下げて歩いていた一人の老人が、足音荒くひき返して来て、

「君ら、大きな顔して何を口論しておるか！」

と、叫んだ。

ヨレヨレのゆかたにカンカン帽をかぶっているが、人間とも思われないほど痩せこけている。が、その骸骨の怒りの表情は、こちらの二人を圧倒するほど凄まじかった。

「君ら、ともかく戦争を始めたときの政府や軍の当事者だ。戦争前、わしがあれほど批判したのに耳もかさず――」

「君はだれですか」

と、東郷茂徳がおそるおそる尋ねた。

「わしは桐生悠々という新聞記者だが」

と、老人は答えた。烈しく咳きこんだが、すぐに首をふりあげて、

「すでに昭和八年、わしは信濃毎日新聞の社説に、『関東防空大演習を嗤ふ』という文章を書いて、軍部の度しがたい愚を笑った。そのおかげでわしは主筆の地位を追われた。筆を断たれるどころじゃない。あのころ軍部にさからうのは、まさにいのちがけだった」

桐生悠々はまた咳いた。血がまじっているのではないかと見える咳であった。

「しかしわしは屈しなかった。肺ガンにかかっても黙らなかった。洗うがごとき赤貧の中に『他山の石』という個人誌を出して、愚かなる軍国主義を批判しつづけた」

彼は眼をとじ、悲壮の極みといった声をはりあげて、

「蟋蟀は鳴きつづけたり嵐の夜」

と、吟詠し、

「発禁また発禁は相つぎ、ついに雑誌の発行停止命令を持って憲兵がやって来たのは、わしの葬式の日だった」

桐生悠々は怒りにたえかねるかのごとく、バケツの水をカンカン帽の上からかぶった。物凄い水蒸気がたちのぼった。

「わしはそれも予想して、最終号に廃刊の辞を書いて読者へ挨拶した。聞けよ、曰く『小生は寧ろ喜んでこの超畜生道に堕落しつつある地球の表面より消え失せることを歓迎致し居り候』――」

ここで彼は、また烈しい咳で上半身をのた打たせつつ、

「やがてわしの予言した通り国を滅ぼした、軍閥の馬鹿者どもがこのインヘルノに来たと知って、なんどもここへ来て面罵してやったが、いつまでたってもきゃつら、反省も謝罪もせん。悪いというなら、明治以来の日本の全歴史を裁け、あの戦争はアジアを白人から解放したではないかとほざき、戦後の日本人に立腹しておる。なるほど彼らがこの憤激の地獄に来ておるわけだ！」

桐生はハッタと二人をにらみつけて、

「君ら、あそこにはいっておるのか面会人か知らんが、こっちから見りゃ、当時の高官はみな

同罪だ。それがあとになってああだこうだと、まだ責任のなすり合いをしているとは何ごとかっ、頭を冷やせっ」

と、残りの水を、ざあっと東郷と井上にあびせかけた。

そのとき、絶叫が起こった。

「敵空母見ゆ、われ必中突入す。天皇陛下万歳！　ブルルルルル！」

宇垣参謀長は口で爆音の音響を発しつつ発進し、両腕をひろげて離陸し、身体を横にして向こうの煉瓦塀に頭を命中させ、墜落した。

「そんな暴勇で勝てると思っとるか！」

「まだ眼がさめんか、この馬鹿っ」

東郷外相も井上大将も飛びあがり、そこへ駈けよると、血まみれの宇垣参謀長の頭にかみつき、ついでおたがいの頭にかみつき出した。……

さすがの桐生悠々先生もあっけにとられた風で、口をあけてこれを見まもっている。

私も暗然として眼をそらしたが、そのときふと別の場所に異様な風景を見いだした。

たしか撮影所と聞いた

遠い正面の建物の前に、数十人の人間が動いている。さっきまでその鉄製の門はとじられて、そのあたりは無人であったはずだが、いつのまにか門はひらかれ、それらの人間が出現してい

る——いくつかのキャメラや反射板やメガホンを持っている姿が見えるところからすると、どうやら映画かテレビの撮影をやっているらしい。

しかも、ただの撮影ではなく、何かトラブルが起こっているような気配である。

そして、その中に、どこかで見たことのある——そうだ、あれは座頭市じゃないか！　たしかに座頭市らしい扮装の男を私は見いだした。

こっちの老人たちの悶着のなりゆきも心配であったが、それよりそっちの騒ぎに好奇心をかられ、

「あっちを見せて下さい、早く、早く」

と、私はあわてて督促した。

近づくと、なるほど撮影隊らしい人々が、ひらいた門の内外に大きな輪を作って、その中に相対してにらみ合っているのは、まぎれもなく尻っからげに白い手甲脚絆をつけ、わらじをはいた座頭市と、黒眼鏡をかけた監督であった。

あっ、あれは世界的な大監督黒沢明だ！

黒沢監督が、座頭市の映画をとっているとは面妖だが、それはまあインヘルノでの出来事だからいいとして、しかしこんな場所で映画になるのか知らん？

ただし、一帯は、これまた地上からめらめらと、何かがゆらめいている灼熱の世界の中ではあった。

「ええ、お言葉ではございますが、自分用のヴィデオ・カメラで撮るのァ、いままでのあっし

のやりかたなんで……」

と、座頭市は薄目の間からキラリと白い細い眼をむけて、低い声でいった。——どうやら映画のせりふではないようだ。

「何のためです」

と、黒沢監督はぶっきらぼうに訊いた。

「へへ、自分の演技をあとで研究するためでござんして」

「そんな必要はない。俳優はみんな、その場で監督のいうままに演技してりゃそれでいいんだ」

「俳優ったって……あっしはこれでも、天下の勝新といわれてる男で……」

「おれは黒沢天皇だ！」

と、黒眼鏡の大監督は叱咤した。

座頭市は二、三歩さがり、ついていた仕込み杖のつかに、もう一方の手がかかったが、

「えへへ」

と、笑い出し、ドスのきいた声で歌い出した。

「およしなさいよ、ムダなこと

いって聞かせて、そのあとに、

音と匂いの、流れ斬り……」

しかし、黒沢監督がそっぽをむいているのを見ると、

「ええ、それじゃああっしに、この映画やめろっておっしゃるんでございますかい？」

といい、こんどはかっと眼をむき出して、

「そうかい、それじゃあやめてやらあ！」

とわめくと、片手をあげて、ぐいとかつらをぬいでしまった。座頭とはいえ、短く切ったザンギリ頭であったが、やはりかつらであったらしい。

「もう、やめたあっと！」

勝新太郎氏はそう叫んだが、それでもむかっぱらがおさまらないらしく、すぐ前のひらいた鉄門の柵へ突進して、かつらをぬいだ頭を、があんとぶっつけてころがった。

まわりのスタッフは、これは大変なことになったという風にざわめいたが、黒沢明監督は厳然と立って身動きもしない。が、黒眼鏡をかけてはいるが、大立腹の状態にあることはあきらかだ。

だれか映画評論家が、「日本の映画監督の中で、撮影が意のままにならないとき激怒することでは、黒沢明は溝口健二とならび称されている」といったのを私は思い出した。

と、果たせるかな黒沢監督はワナワナと巨体をふるわせはじめ、これまた猛然とかけ出し、倒れた座頭市の上にのしかかり、その頭にかみついた。

と、スタッフの中から、

「ヨーイ！」

とヤケのヤンパチのように叫ぶ声がすると、カチンコの音が鳴って、

「スタート！」
同時にその格闘へむけて、キャメラの音がひびきはじめた。……
「両人とも大マイナスなのだが……しかし憤激はいつも損得を忘れさせる」
と、ラ・ロシュフコー公爵が暗然としてつぶやいた。やおら、いう。
「あっちでも撮影中だ。あっちを見るかね？」

馬車はそこを離れて、

いつのまにか、ゆくてのスタジオらしい大きな建物の中にはいっていった。
と、暗い中に一画、あかあかと照明の光がかがやき、殿中か何かのセットが浮かびあがっていた。
ライトの光のふち、なかばうす暗いところに十数人の人影が輪になっている。大部分は撮影スタッフの人々らしいが、侍の扮装をした姿や、女の姿も何人か見える。
しーんとして息づまるような静寂の中で、
「カメラいいですか、いいですね……ライトいいですか、いいですね——ヨーイ、ハイッ、スタート！」
というサビた声が聞こえた。
なるほどここも撮影中だ。鳥打帽に銀ぶち眼鏡をかけた監督の顔は紅潮して——いま、スタ

ート、といったのに、
「アサノ君、反射してますか？　キラ君、反射してますか？」
と、またいった。
「溝口健二監督ですね」
と、私は眼を見張った。
映画の本で、彼が撮影するとき俳優に「反射してるか」と妙な言葉をかけたことを知っていたからだ。自分の意図する芸術世界に没入しているか、という意味らしい。
「ハイッ、スタート！」
と、また手をふりかけて、彼は急にそっぽをむき、
「アサノ君、どうしたんです。僕は猿芝居を見に来たんじゃありませんからね」
と、鳥打帽を地面にたたきつけて、にくにくしげにいった。
なるほど、怒る監督として黒沢明と双璧といわれただけのことはある。
ライトの中に浮かびあがっているのは、あきらかに江戸城松の廊下で、相対しているのは、大紋烏帽子の浅野内匠頭と吉良上野介だ。溝口監督の作品に「元禄忠臣蔵」というのがあるが、はてここでもまた忠臣蔵を撮っているのだろうか。
「あの俳優はだれです？」
と、私は訊いた。ラ・ロシュフコー公爵が答えた。
「浅野内匠頭と吉良上野介さ」

「いや、演じている俳優の名ですよ」
「どっちも、ほんものだよ」
「えっ？」
「ほんもののムッシュー・アサノと、ムッシュー・キラさ」
私は唖然として、前方の松の廊下を眺めた。
その、ほんものの浅野内匠頭は、みるみる額に青筋をたてたが、やがて意を決した風で首をふりふり、泣くがごとき声を発した。
「貴公、かくまで拙者をイジめ、イジメの元祖という悪名を世に残して、それでひき合うと思ってるのか！」
「ひき合わん！　だからわしは怒るのじゃ！　もとはといえば、家来全員の失業など眼中にない、貴公の血迷うたカンシャクだ。それで殿中でわしに刃傷して切腹させられたとて、わしの知ったことではない！」
吉良は湯気をたてて、
「しかるに貴公の家来どもは失業して、ヤケのヤンパチ、わしをかたきとつけ狙う。その八つ当たりのなぐりこみを義士の討ち入りとは、これぞ世評なるもののアテにならぬ見本、わしこそ徹頭徹尾の被害者だ。これが怒らずにいられりょうか！」
何だかせりふに、歴史的時間の混乱があるようだが、脚本はこれでいいのか知らん。それはともかく、

「キラ君、君の怒りようは全然反射してませんね」
溝口監督は冷酷な口調で中断させ、つかつかと歩いていって、
「君はダメです」
と、きめつけると、片足をあげてはいていたスリッパを手にとり、吉良上野介の頭をピシャリとひっぱたいた。
「うわあ、スリッパでたたくとは、こりゃ暴力教師もやらんことですな」
と、私は嘆声を発した。ダンテ師はノートをのぞきこんでいう。
「あの監督は菅井一郎という名優もスリッパでなぐったそうだが、夢中であんな所業をして、あとになると全然記憶がないそうだが」
溝口監督は怒りの陶酔ともいうべき顔つきで、吉良に向かい、
「ほかの俳優に君の役をやってもらいなさい。それを見て、そのまねをしてやって見たまえ、そのほうが早道です」
「わしは芝居をしておるのではない！　わしは江戸城におるはずなのに、いつのまにかあんなギラギラしたものでとりかこみおって……」
「僕は『赤線地帯』を撮るとき、赤線の女三益愛子が、発狂して男の頭をひっぱたくシーンを四十回テストして、三益の手も相手俳優の頭も紫色になったことがあったが……」
溝口監督はなお夢中の顔つきで、ぐるりとまわりを見まわして、
「ああ、田中君」

と、呼びかけて、そのほうへ歩いていった。

すると、そこの太い柱のかげに、髪に手拭いをかけ、薦を巻いたものを小脇にかかえた女の影が立っているのが見えた。あきらかに江戸期の売春婦、いわゆる夜鷹の姿だが、はて、これが忠臣蔵と何か関係があるのか知らん。

「君は女優だが、国宝的大女優だ。どうかあの男たちに、怒りの演技とはどういうものか教えてやってくれたまえ」

夜鷹は頭の手拭いをとって、上眼づかいに溝口を見た。田中絹代であった。

「溝口先生。演技の件はともかく……近く田中が監督をやる話があることについて、先生は、田中のアタマでは監督はやれません、とおっしゃったそうでございますね」

溝口は意表をつかれた風で、

「いや、あれは、万一失敗すると君の名誉にかかわると心配しての老婆心からです」

「名誉？　私の名誉は、その田中のアタマ何とかで充分傷つけられましたわ。先生は、俳優はおろか一切の他人の名誉もプライドもまったくお認めにならない方ですわ」

はて、かつてこの二人は、おたがいに敬意を持った「恋愛関係」にあったとも聞いたことがあるが——いま田中絹代は、他人行儀以上の切り口上で、

「ところで、いまの怒りの演技の件でございますが」

と、いうと、いきなり手拭いを溝口の首にひっかけ、やや禿げあがった頭を下げさせると、

「待てばクルクル、パーゼンかつら！」

と、叫んでかみつこうとした。

「わっ」

溝口は文字通り仰天して、その場から逃げ出した。

以前彼は、嫉妬する女性に背中を斬られたことがあったそうだが、おそらくそのときにまさる恐怖の表情であった。

田中絹代はそれを追っかけた。

「このバカ監督めが！」

演技の上では、生涯可憐さを失わなかった大女優にしては、信じられない凄まじい形相であった。

「田中のアタマは脳腫瘍をわずらっていて、それがいま発症したのだ」

と、ダンテ師がノートをのぞいていった。

「以後、生涯けなげでつつましい日本女性を演じつづけて来た田中絹代とは見えない、映画界への怒りの罵詈雑言が、洪水のように彼女の唇からほとばしりつづけたそうだが」

そういっている間も、馬車はいそいで、二人のあとを追ってゆく。

が、このスタジオは宏大で、すぐにまわりは茫々たる闇に沈み、二人はどこへいったかその影も見えなくなった。

と、見るまに、馬車はふたたび外界へ出た。

馬車が扉をつきぬけたらしい。

一瞬、われわれは眼がくらみ、耳がこだました。

ただ闇から外光の中へ出たからではない。そこは焦熱の世界であった。むろんいまのスタジオにはいる以前の世界も四、五十度あるということであったが、ここはそれよりさらに十度か二十度くらい高いのではないかと思われた。

馬車の中は外気と断ち切られているそうだからまだいいが、駁者台にいる駁者の全身からは炎のようなものが立ちのぼっているのが見える。

耳がこだましたのは、何千何万とも知れぬ叫喚の海原がひろがっていたからであった。

ここは撮影所と聞き、げんにいまスタジオを出たばかりだが、眼下には低く大平原がひろがり、そこに無数の人間が戦いの雄たけびをあげている。

一望の下、あっちこっち集落が見えるが、それをのせた大地は大砂漠で、そこにもうもうと砂塵をあげながら、無数の大群が駈けまわっているのだ。

「これは……まさか映画の撮影じゃないでしょうね」

と、私は訊いた。

「いや、インヘルノの実景だが」

と、ダンテ師が答えた。

「地上で——ここは日本之部だが——憤怒が主たる原因で相戦った人々のインヘルノだ」

馬車はその修羅の地上を、ヘリコプターのごとく低く飛んだ。

「あっ……あれは赤穂浪士だ！」

と、私は叫んだ。

例の火事装束姿が数十人、相手の数十人と格闘しているからわかったのだ。もっとも剣や槍は見えない。彼らはおたがいの敵に頭突きをくわせ、その頭にかみついている。しかしそれはふりしきる雪の中ではなく、砂塵を巻く砂の上であった。

「さっき、松の廊下で浅野内匠頭と吉良上野介が口論してましたが、赤穂の連中、もうここで始めてるんですね」

「まったくむかっぱらから発した大チャンバラだね」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「しかし、相手は何者です。えらく人数が多いようですが」

「むろん吉良家の付人と、そのバックにある上杉家の侍たちさ。彼らは自分たちがあとで完全に敵役（かたき）にされたことを知って、そんな道理はないとだんだん腹をたてて来て、その怨念でこのインヘルノで反撃しているのだ」

また別の争闘集団を見た。

「あれは水戸天狗党と彦根藩士たちだろう」

と、ダンテ師がいった。

これは奇怪な争闘であった。数百人ずつの侍が戦っているのだが、一方はみんな首がなく、

その首を両手に持って相手の首にたたきつけている。首のある侍群のほうが、旗色が悪い。

よく見ると、首なし組のほうの背後にあって叱咤している人は、首がグニャリと真横に曲がっているがともかくも首そのものはある。一方、首あり組の背後にあって怒号している人は、これまた自分の首を両手でふりかざしている。

「首なし組が水戸天狗党だ。天狗党は井伊大老の首をとったが、のちに乱を起こして都へ長征し、敦賀で全員降伏した。三百五十余人の天狗党を斬首したのは、主として、主君の首をとられた彦根侍だった」

「すると、あの自分の首をふりかざして怒号しているのは井伊大老ですね」

「その通り」

「首なしの天狗党を叱咤しているのはだれです」

「安政の大地震で梁に打たれて首の骨が折れてしまったが、藤田東湖という人物さ」

みんな、ユデダコのような首だ。

「しかし、こちらで日本の歴史の本を読んで私は考えたんだが」

と、ラ・ロシュフコー公爵がいった。

「太平洋戦争は二・二六事件の狂熱を受けついで起こったものだが、二・二六事件をひき起こした青年将校の頭には、きっと桜田門外の変のことが浮かんでいたろう。そして、桜田門外の変をひき起こした水戸浪士の頭には、おそらく赤穂浪士の前例が浮かんでいたにちがいない。——思えば日本のむかっぱら史も凄いものだね、日本の歴史を変えちまったのだから」

私たちはまた別の死闘組を見た。

そこはちょうど砂丘になっていて、上は白鉢巻にたすきがけだが、下は巡査の制服姿だ。それが組んずほぐれつ、猛烈にかみつき合いながら斜面をころがり落ちている。

「あれは西南戦争の薩軍と、警視庁の抜刀隊だ。薩軍のほうは、音に聞こえた薩摩武士に刃向かうチョコザイな農民兵めと激怒し、抜刀隊のほうはもと奥羽の侍出身が多く、維新のときの屈辱に激怒して戦っておる。——もっとも、抜刀隊といっても刀じゃないが」

その他、一対一、二対三などの組み合わせでかみつき合い、頭突きし合っている光景は無数であった。

男同士どころか、男と女がかきむしり、張り飛ばしている組もおびただしかったが、これは前世の夫婦ゲンカの尾をひくものだろう。

刀こそなけれ、まさに屍山血河だ。考えてみると、この世の格闘の半分は、いわゆる怒り心頭に発したものが原因かも知れない。

そのうち、妙な二つの隊列を見た。

右手前から進んで来たのは、向こう鉢巻の町人やあにい連で、これが「天罰執行」「奸商誅伐」「盗吏一洗」など書いた旗をおしたてている。先頭に立って、巻羽織を着、十手をふるっているのは、青白いひたいにみみずのようなカンシャクの筋を浮かべた中年の武士だ。

それが、眼を三角にして叫んでいた。

「強盗やゆすりたかりがきょうの政治やっとる！　あいつら、なんぼしぼっても、くすねても、

百姓や町人は腹立てんとなめてけつかる。百姓や町人でも腹立てたら何するかわからんちゅうこと見せたれ！」

ダンテ師がいった。

「大塩平八郎だ」

左手前から進んで来たのは、竹槍をかかえ、むしろ旗をおしたてた農民の一隊で、先頭に立っているのは、裂けた菅笠をかぶり、手甲脚絆に首からズタ袋をかけた白髯の老人だ。

それが口を四角にして叫んでいた。

「日本の環境破壊ってえやつはひでえもんで、国が四つあっても五つあっても足りることじゃねえ。死なば死ね、殺さば殺せ、もうこの国は死んどるのじゃ。が、怨みの声だけは残せ、百姓の慟哭の声だけは世に残せ！」

ダンテ師がいった。

「田中正造翁だ」

「ほう？　明治以来の最大の義人田中正造翁もインヘルノに堕ちてるんですか？」

「あの人物は、怒りのために、生きておるうちからすでに地獄に堕ちていた」

暗然とダンテ師はつぶやいた。

両隊はななめに衝突した。双方殺気立っているから、ここでもかみ合いが始まるのかと見ていると、おたがいに旗やむしろ旗を見たらしく、リーダー同士が何やら話しはじめ、やがて握手した。

「怒れ、役人に対して怒れ！」

「怒れ、国に対して怒れ！」

大塩平八郎と田中正造が絶叫すると、両隊は獣のような叫喚をあげて走り出した。——が、いったいどこへゆくのか知らん？

と、ゆくえを見ると、地平線の果てに炎が見える。それが、ただごとでない大紅蓮だ。

われわれの馬車は、進軍中の大塩部隊や田中部隊の上を越えて、そのほうへ飛んだ。

やがて一つの町が現れた。

その中に無数の軍兵が手に手に松明を持って、叫喚しながらなお放火しているのが見えた。

突然私は髪も逆立つ思いがした。やあ、この町には記憶がある。あれは清水寺ではないか。あれは知恩院、八坂神社、あれは三十三間堂、平等院、あれは金閣、銀閣ではないか。——燃えているのは京都だ。京都の町が燃えているのだ！

馬車はその空をヘリコプターのごとく翔けた。

「心配はいらない。焼けてはいない」

と、公爵は声もなく笑った。

「炎は立ちのぼっている。しかし、建物が焼け落ちるということはない。ここは永遠に燃えている世界なのだ」

「へーっ？」

なるほど眼をこらすと、どの寺も、どの町も、焼け跡など見せてはいないが、しかし、炎は

炎にまちがいないらしく、その熱気と黒煙は、われわれの馬車を焼きただらすばかりであった。

「あれが本能寺だがね」

と、ダンテ師が指さした。

馬車は水平のまま降下して、境内に着陸した。

本能寺もまた紅蓮の炎の中にあった。

人の背丈ほどある回廊の欄干も燃え、向こうの杉戸も燃え、倒れている。そのかなたに、一人の武者をおさえつけておめいている武将があった。

身につけているのは、白綾の小袖に金襴の袴だが、いずれも朱で染めたように血まみれだ。そして、全身に孔雀の尾羽根みたいにつき刺さっているのは無数の矢であった。

「これほど怒って死んだ人間があるか、光秀っ、うぬはいっときの逆上で、とんでもないことをした！　ただ一主君に叛逆してこれを殺めただけではないぞ。うぬは日本の歴史に叛逆し、あり得べき偉大なる未来を殺害したのだっ」

彼はひざにおさえつけているキンカン頭にかみついた。信長と光秀だ！

「信長をただの一個人と思うておるか。信長は魔天から降臨した超天皇であるぞ！　信長死せば、すべてが死ぬ。――」

彼は魔神そのもののような顔をふりあげて、

「いや――死滅させよ、信長亡きあとの世界など意味はない！　すべてを焼きつくせ。光秀っ、麾下の兵に下知して、京はおろか、日本じゅう、いや三千大千世界ことごとく焼尽せよ！」

馬車がまた浮きあがり、欄干が下になった。

断熱されているはずの馬車の中が、これまた炎上するのではないかと思われるほど熱くなった。業火のとどろきが、マイクを伝わって来た。

ここは何處（ここはどこ）
ここは地獄（ここはインヘルノ）

「こら、ラスプーチン、
何をする。馬車を退げろ！」
と、公爵が少しあわててどなった。
ガラスを通して、このとき駁者台の上で、ウオツカらしい瓶を口にあてて飲むのが見えた。
馬車はなお進んだ。
「公爵」
と、駁者の声がマイクを伝わって来た。
「おれは、このインヘルノをぶちこわして、無くしてやりたくなったよ」
「なに？」
公爵は眼をパチクリさせて、
「な、なぜだ、ラスプーチン」
「ずっと前から考えてたんだが……人間が死んでもインヘルノがあるというのが気にくわない。それじゃ人間、死なないことになるじゃないか。……不死の僧正、といわれたおれだ。おれだけが死なない人間でありたいのだ」
彼はふりむいた。もともと赤茶けた髪とひげが炎に吹かれ、炎そのものが顔をふちどっているように見えた。
「何もかも消滅して、ただ時間と空間だけが存在する世界、闇黒の中に、冷たい星だけが永劫に回転している世界……その星の一つに、おれだけがひとり腰かけていたいのさ」

「ふふん。……それでこれから、どうするつもりだ？」
「お前さんたちが腰かけているもの——それは座席じゃないはずだ」
私は改めて、自分たちが腰かけているのは、細長い寝棺であることに気がついた。
いや、それははじめから気にかかっていたのだが、次から次へと経めぐるインヘルノに魂を奪われて、いままでそのことについて訊くのを忘れていたのである。
「その中にはいってるのは、リトル・ボーイというやつさ」
「？」
「アメリカ人がそう名づけた。一九四五年八月六日、アメリカの飛行機がヒロシマに落とした原爆だよ」
「ひゃっ」
私ははねあがった。
「あの原子爆弾が……爆発した原爆が、このインヘルノに来てるのか！」
「消滅した人間でさえ来てるんだから、爆弾も来てるさ。そいつが、あるインヘルノに転がってるのを、おれが拾って積みこんだのだよ。——この馬車をあの火の中へ乗りいれると、そいつはまた爆発するだろう」
私はふたたび飛びあがった。
「ラスプーチン」

と、ダンテ師は微動だもせず、落ち着きはらって声をかけた。
「お前がここでそんなことをいい出すのは知っていた。ちゃんとこのノートにある。やりたいことをやって見るがいい」
私はいつか、このインヘルノで死んだらどこへゆくか、と訊いたとき、ダンテ師が、「やがて君自身が身をもって知ることになるだろう」と答えたのを思い出した。
が、声も出ない私を、ダンテ師はじろっと見て、
「君、何が起こっても、そこはインヘルノの世界だから、心配することはないよ。——」
元妖僧ラスプーチンが笑った。
「あはははは！　わはははは！　それ！」
哄笑か狂笑か、雷鳴のごとくマイクが鳴ったとたん、一瞬、すべては白熱した。

——ふっと私は顔をあげた。

私は書斎の椅子に坐っていた。机の上には、ダンテの「神曲・地獄篇」があった。
眠って、夢を見ていたわけではない。ただ、その書物から眼を離して顔をあげるまでの間に、何か忘我の一瞬といった感覚があったようだ。
にもかかわらず、私の頭には、ダンテの神曲とは似て非なる滑稽ワイザツの地獄的風景の、数々の記憶が明滅していたのである。

机のそばの壁にカレンダーが貼ってある。一九××年二月のカレンダーだ。その下の小机に置かれた新聞を見ると二月三十日の日付であった。その横の置き時計に眼をやると、針は十二時になろうとしていた。
私はずっとこうしていたのだ。
あれは何だったろう？　と首をひねったとたん、耳もとに遠雷のような笑い声が聞こえた。
そして、
——君、何が起こっても、そこはインヘルノの世界だから、心配することはないよ。——
という声が耳の奥でこだました。
私は、はじめてぎょっとした。してみると——ここがインヘルノなのか。この静謐で平和な書斎もまたインヘルノだというのか？
凝然と宙に眼をすえて考えると、——この地上はいまもあちこち、果てしない戦争やテロや犯罪や妖病に覆われている。飢餓や過食や酒乱や不倫や嫉妬や怒りによる悶着は、身のまわりにも渦巻いている。そして——私自身の人生も、ふり返ると、二度と繰り返したくない記憶に充ち満ちているではないか？
私は大変なことに気がついた。
私は決してもとの地上に帰還したわけではない。ここがインヘルノではないのか。私のみならず、いま生きているかのごとく見える人々は、ことごとく過去に死んだ亡者ばかりではないのか。崩壊したインヘルノの一つ、ここはあの巨大な泡の世界なのではないか。しかもその泡

がまた崩壊して生み出された第何次かのインヘルノではないのか！

私は落ち着かない眼で窓外を見た。そこには春の泡雪がしずかに降っていた。

良寛の歌が頭に浮かんだ。

泡雪の中に立ちたる三千大千世界（みちおほち）　またその中に泡雪ぞ降る

泡雪の中に良寛が見た三千大千世界はどんな世界であったのか、しかし私が見たのは三千大地獄であった。正確にいえば三千大地獄の数切片（せっぺん）であった。

が、あの泡雪のひとつひとつにインヘルノがあるにしても——しかし、ここにいて窓の中から見ているかぎりはそれはやはり美しい。この世界は美しい。

たとえいまの一瞬にしても、この世界を美しいと見よう。私はそう考えることにして椅子を立った。

それから食事のために居間にゆこうとして歩き出したとき、突然私は意識を失った。

そして。……

気がつくと、私は闇黒の虚空を、無数の泡といっしょに飛んでいた。……

解　説

細谷正充（ほそやまさみつ）（文芸評論家）

世紀末である。

一寸先のことなど分からないのが世の習い。とはいえ、このまま行くとあと数年で二十一世紀を拝むことになってしまう。いやー、まさか自分が生きて二十一世紀を迎えるかもしれないとは、思いもよりませんでしたけどね。なぜなら私は永いこと〝ノストラダムス大予言〟を信じていたのだから。

ほら、あれですよ。一九九九年の夏に空から恐怖の大王が降ってきて人類が滅亡するというやつ。今なら爆笑して終わり。それに、まかり間違って予言が本物だとしても、人類が一斉に滅びるなら後腐れがなくて結構と、考えていたりもする。だけど、ひねくれた大人になった今ならともかく、子供の頃は本気で悩んだものだ。

当時は、テレビで特番を組んだり、雑誌で特集したり、さらには大予言関係のノストラ本が次々と出版されるといった具合で、かなりのブームであり、嫌でも情報が耳に入ってしまったのだ。いきなり目の前に現実的な死（本当はまったく非現実的だが）を突き付けられて、本気で絶望した。それから何年かは、折りにふれノストラダムスの大予言を思い出しては、暗澹た

る気持ちになったものだ。

まあ、今となってはどうでもいいが、ノストラ関係で私たち子供を恐怖のどん底に突き落として金儲けをした大人たちに一言。一九九九年に世界が滅びなかったら「ごめんなさい」ぐらいはいってくれよ。

という個人的な恨みごとはさておき、このノストラダムスの予言の数年（あるいは数カ月）前の一九××年二月三十日に、あっけなく世界が滅びてしまうところから『神曲崩壊』の物語は始まる。

その日、作者（特に名前は出てこないが、山田風太郎自身と断定して間違いない）は、気がつくと無数の泡のようなものが飛んでいる暗い虚空に浮かんでいた。自分を包む泡が破れ、投げ出された森を抜けた荒野で、やっと出会った人間は、なんとダンテ。

いまさらいうまでもないが、中世から近世の過渡期を生きたイタリアの詩人ダンテは、その主著『神曲』によって、現代でも多くの人にその名を知られている。

『神曲』は、地獄篇・煉獄篇・天国篇を合わせて百の歌で構成された詩作品だ。その内容を簡単にいえば、人生に絶望したダンテがウェルギリウスの案内で地獄と煉獄を巡り、初恋の人ベアトリーチェに導かれ天国を巡るといったものである。

そのダンテがいうには、くだらない理由から始まった戦争により、地球が崩壊・消滅し人類も滅亡。さらにその煽りをくらって、大冥界も崩壊し混乱を極めているというのだ。

自分が死んだことを知った作者を、ダンテは地獄巡りツアーへと誘う。作者が地獄の見物人

に選ばれた理由が、人類滅亡の瞬間に『神曲』を読んでいた、ただひとりの人間であったから、というのが笑える。そして見物のための乗り物が霊柩車に馬を繋いだ馬車であり、馭者がロシアを引っ掻き回した不死身の怪僧ラスプーチンと、辛辣な箴言集を残したフランスの貴族のラ・ロシュフコー公爵と、その人選にさっそく曲者ぶりを発揮。さらに、かつてダンテが眺めた地獄を崩壊させ、シッチャカメッチャカになった摩訶不思議な地獄を誕生させるなど、冒頭から奇想は止まるところを知らない。

馬車が行くのは、飢餓・飽食・酩酊・愛欲・嫉妬・憤激の六つの地獄。そこで作者が見たものを少し抜き出してみれば、臨終の床で、食べ物のことだけを口走る夏目漱石。酒の温泉で酔っ払い大喧嘩を始める種田山頭火と稲垣足穂。自分が生ませた子供全員の面倒をみなければならない、十一代将軍徳川家斉。幸徳秋水と菅野須賀子を殺そうとしながら叶わず、嫉妬の黒い放屁を吹き出させる荒畑寒村といった調子である。

作者は、歴史上の有名人がもっていた愚かな部分を、地獄という顕微鏡を通して拡大してみせる。名もなき庶民ではなく、それぞれの分野や立場で業績を残した人物が大挙登場するのは、その足跡が恥部も含めてよく知られており、人間の愚行に関する格好のテキストとなっているからであろう。桁外れのイマジネーションによって紡ぎだされた、有名人たちの愚行を通じて暴かれる人間の愚かさが、圧倒的なパワーで迫ってくるのである。

それと共に本書で楽しめるのは、作者の有名人評である。ここに登場するのは何らかの形で、作者が深い関心を寄せている人物ばかりだ。彼らに、やはり日本史に名を残すであろう巨人で

ある作者が、どのような評価を下しているのか。実に興味深い月旦となっているのだ。

もちろん愚行をクローズアップしての人物評だから、手放しで褒めるようなことはないが、たとえば酩酊地獄にちらりと出てくる『黒死館殺人事件』の作者・小栗虫太郎について、ダンテの口を借りて「敗戦直後、メチール・アルコールが殺した、最も惜しい日本の天才の一人だった。……」といっているように、好意的な評価をなされている人も何人かいる。これらの人物評だけでも、読む価値があると断言しておこう。

ところで作者は、どうしてこんな奇妙な小説を書いたのだろうか。昔から、他の作品と比べると八方破れに思えるユーモア小説（この作品をユーモア小説と呼ぶには、あまりにもシニカルであるが）はポツリポツリと書かれており、そうした嗜好があることは間違いないだろう。忍法帖にしろ明治物にしろ、登場人物の悲惨な状態や状況が笑いを誘う場面は少なくない。どのような悲劇の中にも笑いを発見する作者は、天性のユーモリストでもあるのだ。ただ、この作品に関しては、直接の執筆の動機が『人間臨終図巻』にあるのではないかと感じる。

『人間臨終図巻』は、世界中の有名人を死亡した年齢ごとに分け、その臨終の様相を纏めた奇書である。その本の冒頭には

「この門を入る者一切の望みを捨てよ」

という『神曲・地獄篇』の一節が引用されている。また、各所に挟みこまれた作者独自のアフォリズムの中に

「どんな臨終でも、生きながらそれは、多少ともすでに神曲地獄篇の相を帯びている」

というものもあり、死に直面した人々と、それを見つめ続ける自分という存在を『神曲』に擬していることが感じられるだろう。だが、現実の死を扱うからには、臨終は死（＝地獄）への入口に止まり、地獄そのものを書けるわけではない。ノンフィクションである以上、しかたのないことである。だが作者は、さらに先を求める。そこでフィクションの出番となるのだ。本書は、物語のスタイルを借りた、まさに『人間臨終後図巻』といえよう。

ちなみに、本書が「週刊朝日」に連載されたのが昭和六十一年十月から六十二年の五月にかけてである。「問題小説」で昭和五十三年九月号から延々と連載された『人間臨終図巻』が終了したのが、昭和六十二年二月号であり、時期的なことからも、この作品が『人間臨終図巻』の流れから派生したことが窺えるだろう。

最後に余談めくが、本書に登場する馬車について言及しておきたい。馬車といって思い出すのが、明治物の『幻燈辻馬車』だ。これは明治の東京で辻馬車を走らせる干潟干兵衛を主人公に、彼が出会うさまざまな事件を通じて近代日本の暗部を抉った傑作である。元会津藩士であり、自身、維新の激動の中で理不尽にも時代の敗者となった彼が走らせる馬車の轍は、この地上に出現した地獄の数々を、巡り眺めた軌跡となっているのだ。

そして、馬車は再び走った。かつて自分の創った主人公に、この世の地獄巡りをさせた作者が今度は馬車に乗り、あの世の地獄巡りをしてのけたのである。だが、干兵衛の地獄はこの世のことであり、究極的には決別する方法がある。事実『幻燈辻馬車』のラストは、干兵衛の死を予感させて終わる。では最初から死者として登場した作者は、地獄巡りの果てにどこへいく

のか。その答えは本書のラストで作者が抱く

「あの泡雪のひとつひとつにインフェルノがあるにしても——しかし、ここにいて窓の中から見ているかぎりはそれはやはり美しい。この世界は美しい」

という感慨にある。

戦中派でありながら、戦争に参加しなかったことから、常に自分を時代の部外者の位置に据える作者だが、ここではついに有史以来の歴史と人類の部外者となってしまったのだ。そして恐らくは、永遠に繰り返されるであろう無限の人間の愚行を見つめながら、あえて〝この世界は美しい〟といっているのである。

当然ながら、この台詞は単純な人間肯定などではない。本書を読めば明らかなように、人間の本質を見つめる作者の視線は残酷なまでに冷徹だ。しかしそれでも、地獄巡りの果てに、愚かしい人間の営みに美しさを見いだしてくれたのだ。

ある意味、作者の作品群は、人間の愚行の記録といえる。そして、五十年の記録の末にたどり着いたのが、この泡雪の美しさなのだ。だから本書は、愚かで美しい人間そのものを描いた、いとおしむべき物語なのである。

本作品は、朝日新聞社版（昭和六十二年九月刊）を底本としました。

〔お断り〕
本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいたします。（編集部）

神曲崩壊

ミステリー・ハートフルス

著　者　山田風太郎
発行者　櫻井道弘
発行所　廣済堂出版
〒105-8548
東京都港区芝3丁目4番12号
電話　03(5445)1202(営業)
03(5445)1204(編集)
振替　00180-0-164137
印刷所　廣済堂印刷株式会社
〈編集担当〉伊藤秋夫

©1998　山田風太郎　Printed in Japan

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-331-60662-7 C0193